

北方の白き少女 Heart  
of the admiral

ハーバーの懐刀

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある海のと真ん中に小さい純白が現れた  
それは何処へ行き、何をすべきなのか  
知っているのは小さな勇氣・・・

別サイトでの小説投稿の経験はありますが、二次創作作品はこれが初めてです。  
しかも本家がまだしたことがない初心者？で「艦隊これくしょん」  
すぐさま資料を購入し、wikiで調査するなどして始めてみました。

菊月（偽）さんの活躍でこんなに影響受けるとは思いませんでした。  
更新は不定期になりますが、更新状況は活動報告で知らせます。







# 本編

## No. 01 メザメテマツシロ

身体全体で感じ取った揺れる感覚。

まるでプールの水面で浮かんでいるような心地良さに、ある意識が目を覚ました。

(……ん……?)

その意識が目を覚ますと、視界に日が落ちて夕闇の星空が目に入った。

それは仰向け状態のまま、五感で自身の状況を確認する。顔や胸の辺り以外、身体のも全てが冷たさのある水に浸かっていること。その水が波立つことで自身が揺らさされていること。そして、その水から潮の香りが漂っていることに気付いた。

(………海……?)

徐々に覚醒された思考が身の回りの状況を確認して、それに対する動作へと身体に指示する。

星空を眺める顔を持ち上げて、頭を右往左往に動かし、そこから見える周辺を見回した。

(何にも……ない………海、だけ……)

今度は身体全体を動かし、体勢を整えられるか試みた。

(!?)

すると、それは海面辺りで不思議な現象を体験することになる。

(な、何これ……)

通常、水の上には人間は立てない。それはその常識を知っていた。

けれども、何気なく立ち上がるような仕草をしたことで、それは海面の上に立ったのだ。

何も履いていない素足が海水に少し浸かっている。その事実だけは認めるしかなかった。

唐突な不思議現象に、それは目をパチパチとさせる。

(ん?)

それは揺れる海面に目を向けたことで、ようやく自分自身の姿を目にした。

「……………んウ？」

疑問の声を上げると同時に、その声の違和感にも気付いた。

それは自身の知る地声ではなく、可愛らしい幼子のような女声。

そして……海面に映る自分の姿は、驚くほど真つ白な身体をした姿。

身に着けたワンピースとミトンの手袋も白く、所々に黒い装飾が付いている。



純白の長髪で頭には鬼?のような三角形をした角が二つあり、瞳は赤く光っていた。

「……エツ?……コレツテ……」

「ナンデ……」

（“北方棲姫”<sup>ほっぼうせいぎ</sup>になつてるの?）

（何故、自分はこんな姿になつたんだろう……）

海面に映る自分の姿を見つめ続ける白き少女。彼女は夜が更けても、満月の光で照らされた海のど真ん中にずっと佇んでいた。

（どう見ても……北方棲姫<sup>ほっぼうせいぎ</sup>……だよね?）

まるで自分の姿が別物へ変化したことに小さく驚いていた。

その理由は……。

(なんで、男の自分が女の子に?)

その本当の姿。人間であり、20代の男性だった。普段は会社勤めの普通の社会人だが、パソコンで趣味のネットゲームをしている。

『これ? アイドルゲームか何か?』

ある日、彼は友人に勧められたブラウザゲームを始めることになった。

それが『艦隊これくしょん』通称：艦これ

始めたばかりでまだそんなに詳しくはなかったが、ゲームの流れや有名なものはある程度知識として取り入れた。提督となり、艦娘を率いて、人類の敵である深海棲艦と戦うシミュレーションゲーム。

そんな彼の目の前に、その実物たるものが目に入って来る。

『北方棲姫』通称：ほっぽちゃん

元はイベントで出現した敵側の深海棲艦の姫級と言われる存在。

幼く可愛い姿で凄まじい強敵というギャップにより人気の高いキャラとなる。

(確かに・・・傍から見ても・・・可愛い・・・)

彼自身それ程やり込んでいなかったたので、その存在は情報だけ知っていた。

その結果、今の自分自身がそのキャラクターの容姿になっっているのだと瞬時に理解できた。

それでも彼にとつて、唯一理解できないことがあった。

何故自分が艦これのキャラクターになったのか？

神様のイタズラか、気まぐれか？

転生か、憑依か？

そもそも自分は生きていたのか、死んでしまったのか？

その答えを教えてくれる者は、周りに誰もいなかった。

「・・・・・・・・ウーーン・・・・・・・・」

唸るように悩む子供の声を出して、彼？はこれからすべきことを模索し始める。

(こういう場合、何かと物語に巻き込まれる主人公が多いんだけど・・・)

頭脳は大人、身体は幼子という何処かの少年探偵ではないが、彼？は慌てても仕方ない自分自身に言い聞かせた。

「・・・ドコへ、イコウ？」

幸い、深海棲艦としての特徴が生かされているため、海上を立つて移動するのは歩くことと同じくらい簡単だった。

(ほっぽとして・・・行ってみるしかない)

特に方向も決めず、「白き少女」となった彼は海の上を歩き始める。

## No. 02 デアットドカン

「・・・フウ・・・」

時間にして数十分程度。

少女は通常の歩行だけでなく、滑る、駆け足などで移動するが、特に変わらない移動だと知る。

(・・・深海棲艦というだけあって、艦娘と同じように航行できるだけ?)

次に、彼女は立ち止まってから四つん這いになり、顔だけ海中に潜り込ませた。

「オオー!?・・・ミエル!」

人間だった時に水中メガネ無しで見えなかった海中が鮮明に見えたのだ。夜間に活動する魚たちの姿に言葉が出なくなる。さらにそこで知ったのは呼吸が問題なく続いていること。深海棲艦と言えるだけあって、息継ぎ無しで潜れるらしい。これは彼女にとつて嬉しいことでもあった。

(暇が出来たら・・・海中散歩とかやってみようかな・・・)

次々と少女は人間にはできない能力に目覚めていく。

そのとき、彼女の顔に赤白い小振りのイカがペタッと足から張り付いてきた。

「ンプツ!？」

慌てた彼女は海中から顔を出し、両手で張り付いたイカを引き剥がす。

「~~~~~!!」

少しイラついたらしく、彼女はそのイカを斜め上に向けて投げ飛ばした。

投擲されたイカ弾は放物線を描かず、そのまま空の彼方へと飛んで行ってしまふ。

(ちよつとびつくりした・・・)

張り付かれた肌の部分を摩りながら、再び当てもなく海上を歩き出した。

「.....オツ?」

さらに数十分経った頃、少女にとって初めての出会いが訪れる。

少女が向かう方向に少し黒っぽいものがあるのがいくつか見えたのだ。真つ暗な夜にも関わらず、それは近付くにつれて、形がはつきりと見えるようになる。

一つは、少女と同じ白い肌を持つ女性の姿。ショートヘアに青白く光る眼で、服装は

露出度が高いビキニ姿。両手には口付きの砲身がある黒い機械なものを持っている。

その周りに黒く細長い魚雷のような物体が4体。先程のビキニ姿の女性を四方囲むように泳いでいた。

「クチクイキュウ、ト・・・リキュウ?」

少女の知識から引き出された名称「駆逐イ級」と「重巡り級」

どちらも定番でかなり名の知れた深海棲艦である。

人型のり級と周りのイ級たちによる5隻だけの艦隊。

何処かに向かっているらしく、少女から見て左側の方へゆつくりと航行し続けた。

そんな艦隊にどう接触するべきか。少女は立ち止まってから考えた。

(同じ深海棲艦だし・・・こちらは姫級という上だから、友好的かな?)

そう判断した彼女は、り級たちの艦隊へと徐々に接近していった。

「ッ!」

艦隊と少女の間の距離があと100m近くになったとき、突然、艦隊が航行を停めた。人型のり級が左側へ顔を向け、白き少女の姿を目視する。見られた少女もびつくりして再度立ち止まった。

「・・・」

「・・・エ、エツト・・・」

どう声をかけるか混乱する少女。

なんとか考えた末に、ひよいひよいと右手を振ってみせた。

「コ、コンニチハ？」

「・・・」

「・・・」

「・・・ニイイ♪」

「ツ!？」

少女の身体に戦慄が走る。それは今まで経験したことのない感覚。

少女に対して、微笑んだり級の顔はどうみても「歪んだ笑顔」

まるで、捕食者が獲物を見つけた喜びの顔だったからだ。

「ヒツ!？」

少女は本能に従って、右側へと転がり滑る。その瞬間、彼女の居た海面が爆音とともに水柱が吹き上がった。

(な、なんで・・・撃ってきたの!?)

それは先程のり級が左腕の砲身で少女を撃ったからである。

り級の周りに居た駆逐イ級も海面から顔を出し、口から砲身を出して少女へ照準を合



わせた。

「ヒイイ!？」

リ級を含めた駆逐イ級たちの砲撃が始まる。狙いは正確ではなかったが、広範囲で激しいものだった。

少女は右往左往と移動して回避する。頭の中はすでに混乱状態だが、『逃げろ!』という本能の指示に従っていた。

そんな逃走すら読んでいたのか、リ級の指示で駆逐イ級たちが左右に移動し始める。あつという間に周りを取り囲まれ、少女は逃げ場を失ってしまう。

(か、囲まれた!?)

キョロキョロと見回す少女に、一体の駆逐イ級が突っ込んでいった。それは少女の手前で飛び上がり、砲身を引っ込めた巨大な口で噛み付こうとする。

「アッ……」

(こ、こ)で……死ぬの?)

少女は初めて味わう絶望に涙を流す。走馬灯のような感覚で今までの記憶を鮮明に思い浮かべた。

(こんな……女の子になってまで……)

(しかも……同じ深海棲艦に……)

(・・・・・・・・・・)

(・・・・・・・・・・)

(・・・イヤ)

(提督になって・・・戦いたかったのに・・・)

(ここで・・・終わるなんて・・・)

「ソナナノ・・・イヤダツ!!」

少女の怒った目が光り、強く握り締めた右手で駆逐イ級の鼻先を殴った。

「グオ!?!」

殴られた駆逐イ級の装甲にひびが入り、数百メートル先まで吹き飛ぶ。殴り飛ばされた駆逐イ級は目の光を失い、そのまま物言わぬ遺骸となった。

「!?!」

思わぬ反撃で仲間を失ったり級たちは再び砲撃を開始する。吹き上がる水しぶきで少女の怒りがさらにヒートアップした。

「チヨウシニ・・・ノルナツ!」

その言葉を発した直後、少女のスカート後ろの中から赤黒い機械のような蛇が出現した。

それは左側に小さ目の口からクレーンが出て、右側の大きめの頭には口だけでなく、

目の部分に二門の砲塔、左側に取っ手、右側に飛行甲板が付いていた。

少女は右手で砲塔の頭の取っ手を持ち、駆逐イ級の一隻へ向けて発砲した。

「ガ……」

叫ぶ暇もなく、それは爆音とともに木端微塵に吹き飛んだ。

少女の放った砲撃は、明らかにリ級たちの砲撃とは段違いの轟音だった。

「ッ!!」

リ級が驚いている隙に、残る二隻の駆逐イ級も砲撃される。気付けばあれだけいた艦隊が壊滅状態となっていた。追い込んだはずの獲物によって、逆に手痛いしっぺ返しを受けたことに彼女は歯軋りを立てる。

少女と同じように怒ったり級は無謀な特攻をかけた。

しかし、少女の怒りの方がさらに格上だった。

「エイッ!」

少女は左側の頭クレーンを伸ばし投げる。リ級の右腕の砲身にクレーンのフックが引つかかり、その身体ごと海上から釣り上げられた。

「ッ!?!」

体勢が整えられず引き寄せられるリ級に、少女は取っ手を離れた右手に力を溜める。

砲身で狙うことすらできないリ級は、左腕で身を庇うことしかできなかった。

「カエ、レッツ!!」

少女のストレートパンチがり級の左腕を砕き、鳩尾まで衝撃を与える。渾身の一撃をまともに受けたり級が青い血を吐き、駆逐イ級より遙か遠くまで殴り飛ばされた。

「ハア、ハア、ハア、ハアアア……」

戦いを終えた少女が荒ぶる息を整える。

初めて経験した戦い。命が刈り取られる感覚に恐怖し、理不尽な死に怒りを覚えた。少女……そして、彼にとっても困惑するほどの体験をしてしまう。

(これが……戦い……)

少女はお尻辺りから出現した武装に目を向ける。右側の砲塔と左側のクレーン。これと自分自身の異常な力がなければ死んでいたであろう。何故か、少女はそれに向かって感謝した。

「アリガトウ……」

少女の言葉が伝わったのか、それらは鎮く仕草をして、縮むかのように消失した。また一人となった彼女は海の向こうへと歩みを進める。

(あれは……仲間じゃない……これからは不用意に近付かないようにしよう)

## No. 03 トバシテタスケル

初めて深海棲艦との交戦を終えてからおおよそ一時間が経過。

「……ンー」

少女は未だに当てのない海を彷徨っていた。

そんな彼女に新たな問題が発生する。

「……オナカ……チョット、ヘッタ」

どうやら少女の身体には生き物と同じように食欲があるようだ。

ここで彼女はあることに疑問を持ち始める。

(艦娘は燃料で腹を満たしたのかな? ……じゃあ深海棲艦は、何を食べる?)

少し前に投げ飛ばしたイカなど、海鮮類を食すか。それとも艦娘と同じように燃料補給するのか。少女は新たな疑問を作り出してしまふ。

「ナマ……ナマハ、コワイ……ン?」

その時、少女の耳にある音が入ってきた。

大気を揺るがす砲撃した際の音。リ級との戦いで聞き覚えたあの砲撃音がどこからともなく聞こえてきたのだ。

「ドツチ?・・・アツチ?」

少女はミトン手袋の両手を耳の横に当てて、音のする方角を探し始める。すると、正面の斜め右側から砲撃音が響いていることに気付いた。

(誰か戦っているんだよね?・・・もしかしたら・・・)

少女はすぐに音のする方向へ走り出す。

「カムスニ・・・アエル?」

月明かりで照らされたある海域にて、6人の艦娘が深海棲艦との戦闘を行っていた。しかし、旗艦である軽空母が大破し、それを庇いながらの不利な戦闘。

止む無く撤退することになったが、相手の深海棲艦たちが追撃してきたのだ。彼女たちは必死で敵の追手から逃れようとしていた。

「これはちよつち、ピンチすぎや・・・」

「龍驤! そんな弱気になつちや駄目よお!」

「響！ 電！ そつちにイ級が2隻行つたわ！」

「了解」

「魚雷装填です！」

「ここまで追い詰められるとはね……」

旗艦である龍驤の左側から肩を貸す雷。

その周りを暁、響、電、時雨の駆逐艦たちが向かつてくる敵を迎撃する。

本来、彼女らは遠征の帰還途中であり、いきなり後方からの魚雷による不意打ちをされた。

それをまともに受けた龍驤は大破し、自力での航行が不能となる。

魚雷を放った潜水力級は、響による爆雷投下で速やかに撃沈されたが、さらなる追手がやってくる。

「まずいね……後ろから3隻も来てる」

時雨が後方に目を向けていると、さらに3隻の影が見えてくる。

「くっ、ごめん。ウチが油断したせいで……」

「あなたのせいじゃないわ！ ほら、しっかり捕まって！」

自らの失態だと言う龍驤に励ましの言葉を放つ雷。

「雷の言うとおりよ。さあ、全員生きて帰るわよ！」

暁がそう言い放つも、彼女らの後方にいる3隻の内、ある1隻が絶望を吐き出し始める。

あれから白き少女は小腹が空いたこともあり、航行速度が落ちていた。それでも音のある方向へ足を動かし続ける。

「カラムス、アエル♪ アエル♪」

以前の姿だった時と違い、彼女は目の前で本物の艦娘と会えることに嬉しくなっていた。

「カラムス、アエタラ．．．．．アエタラ？」

そこで少女はあることに気付く。

（今、私は．．．深海棲艦．．．しかも格上の姫級．．．もし艦娘と対面したら．．．）

『し、深海棲艦!?!』

『敵よ！ 撃って!』



『撃滅!』

『サーチアンドデストロイなのです!』

彼女の脳裏に最悪の結末が浮かび上がり、あれだけ心が弾んでいた歩みを止めてしま  
う。

ついさつきは、同族なはずの深海棲艦たちに攻撃されたばかり。

できれば、憧れの艦娘たちにまで敵対されたくなかった。

「ウーーン」

彼女は、何とか自分の姿が見つからずに艦娘と会える方法を考えた。

(何かないか……うん?)

そのとき、少女は自身が纏うワンピースのポケットの存在に気付いた。ふとももより  
上辺りにある左右のポケット。何も入ってなさそうに見えるが、彼女は右側ポケットに  
手を入れてみた。

(……ん!?)

そのポケットは入れた瞬間から不自然だった。まず、肌との間はそんなに無いはず  
が、奥深く入れても自身の肌に届かなかった。そして、弄っているうちに、自身の手よ  
りも大きい謎の物体を掴んでしまう。

(これ、なに?)

少女は躊躇なくその物体を引っ張り出す。

出てきたのは手のひらより大きい黒い球体のようなもの。猫耳みたいなとんがりがある二つあり、少し大きめの歯が剥き出しの口もあった。

「ミャー？」

「フエツ!!」

少女はその物体がネコのような鳴き声を出したことで、驚きの余りにそれから手を離してしまふ。ところがそれは真下へ落下することなく、少女の目の前で浮遊し始めた。謎の球体に彼女は啞然とする。

「ミャー！」

「・・・・・・エツ？」

その言葉は解らないが、まるで『任せろ!』みたいな仕草を見せてくる。ここで彼女はあることを思い出す。

北方棲姫の姿を調べたときに見つけたもの。彼女の周りで浮遊する黒い球体らしきもの。それはネコヤキさんなどと言われ、艦娘の扱う艦載機と同じように運用されているらしい。

「モシカシテ・・・ミテキテ、クレルノ？」

「ミャー！」

自分の代わりに見てきてくれるのは嬉しかったが、それだと少女自身が視ることができない。彼女は少し残念そうに目を瞑ると、いきなり自分自身の姿が目映った。

「エエッ!」

「ミヤ?」

少女が慌てて目を開けると、黒い球体が居る視界に戻る。

(これって、もしかして……)

彼女はあることに気付き、目を瞑ってから目の前にいる黒い球体に意識を集中させた。

すると、また同じように自身の視界に自分の姿が映ったのだ。

(視界を共有できる?)

さらに右と左へ向いてくれるか思い浮かべると、対面に映る自分の姿の右側から左側へと視界が移動する。

「コレデ、ミルノ?」

「ミヤ!」

これによって、問題の一つが解決した少女は目を開けて、黒い球体を両手で支え持った。

「ジャア!……エート……」

「ミヤア?」

「イツテキテ! タマア!」

「ミヤアアア!!」

即席で黒い球体に名付けるとともに、少女はそれを斜め上に向けて投げ飛ばす。彼女は黒い球体が飛んで行ったのを確認し、目を瞑ってから視界を共有し始めた。

(すごい・・・)

それはまるで鳥の視界を見ているかのような、海よりも高く飛行する光景。

しばらくその光景に見惚れる彼女に、ある海上の一瞬だけ灯った光が目に入った。

(あつ・・・あれかな?)

『モウスコシ、ミエルトコロマデ、イツテ!』

「ミヤア!」

少女の指示でタマアが返事し、光が見えた場所まで飛んでいく。

『アレハ・・・』

少女が目撃したその光景に、期待した艦娘の姿が映っていた。

見通しの悪い夜間に、後方から迫ってくる深海棲艦たちと戦う6人の艦娘たち。

(確か、電と・・・ボロボロな状態なのは龍驤だっけ?)

彼女の記憶した知識では、残念ながら二人しか名前が思い浮かばなかった。他の艦娘の名前を思い出そうとしていると、事態が急変することに気付く。

艦娘たちを追いかける3隻の深海棲艦。

その内の一番後ろにいる1隻が巨大な口から何かを飛ばし始める。

(まさか・・・空母ヲ級? でも女の人じゃない。別のタイプ?)

彼女が知らない艦種。

それは軽母ヲ級と言われる艦載機を飛ばして航空攻撃を行う深海棲艦。前に居る2隻は馴染みの駆逐イ級たちだった。

口から飛ばされた6機の艦載機が艦娘の上空へと向かっていく。

その様子を見ていた少女はすぐにタマへある指示を飛ばした。

『タマ! アレ、オトシテ!!』

「ミャ!!」

「対空電探に感あり!?!」

時雨の言葉に、暁たちが青ざめる。彼女らの唯一の対空手段は龍驤の艦載機しかな

かったからだ。しかし、彼女が大破してしまった以上、敵の艦載機への対抗手段は限られてしまう。

「時雨！ 本当なの!?!」

嘘であつてほしいと願う暁に、時雨は無情な答えを出す。

「数は六。もうすぐ僕たちの上空にやってくるよ」

「そんな・・・」

電が不安の言葉を漏らす中、暁と響が上空へ砲身を向けた。

「こうなつたら何が何でも撃ち落としてやるわ!」

「暁、手伝うよ」

「あ、あかん！ 皆逃げるんや！ ウチが囷に・・・」

「だから駄目つて言つてるでしょうが！ 何が何でも連れて帰るわ!」

雷が龍驤の提案を否定し、彼女の腕を強く握り締める。

時雨と電も敵機のある真つ暗な空へ主砲を構えた。

「来るよ!」

時雨がそう言った瞬間、彼女の電探にさらなる反応が出現する。

それはたつた一機の艦載機らしきもの。けれども、追手とは違う右側の方向からやつ

てきた。

「なっ!? 一時の方向から艦載機!?!」

「ちよつと、まだ来るの!?!」

暁の質問に彼女は答えられなかった。

(数は1・・・いや、これは・・・)

何故なら、それは自分たちを攻撃しようとする複数の敵機に向かっていたからだ。

『タマ、キジユウハツシャ!』

「ミャー!」

タマの口の中から銃弾が連続で発射され、菱形に近い黒い艦載機たちが次々と撃ち落とされていく。たった数秒で全機がタマの容赦ない射撃で爆散した。

「嘘・・・敵機が全滅した?」

「な、何が、どうなってるのよ!?!」

「ガアアア!?!」

時雨や暁だけでなく、出した全てを落とされた軽母又級ですら驚きの声を上げる。

再度、新たな艦載機を発艦させようとするが、いち早く気付いた少女に先手を取られてしまう。

『ツギハ、バクダンオトス!』

「ミャー!」

又級たちの上空へ向かうタマの口から真つ黒な爆弾が出現する。彼らの手前辺りでそれはバラバラと撒き吐かれ、軽母又級に降り注がれた。

次々と落ちてきた爆弾が炸裂し、又級の頭が粉々に吹き飛ばされてしまう。

駆逐イ級たちもいくつかの爆弾の被害に遭い、煙を上げながら逃げ去った。

「……………」

目の前で起きた光景に、艦娘たちは言葉を失う。

突如現れた謎の艦載機が敵の航空機を全滅させ、さらに追手である空母たちに大打撃を与えたからだ。

(助けてくれたの? ……そ、それより、これは好機だね)

静かになった海で佇むも、いつ敵が来るか分からない状態のまま居るわけにはいかなかった。

「今の内だよ。早くこの海域から離脱しよう」

いち早く行動を開始した時雨が電探で索敵しながら、まだ動かない艦娘たちに離脱準備を促す。

「そ、そうね。雷、龍驤、動ける?」



「問題ないわ、暁」

「ちよつち疲れたけど、まだいけるわ．．．」

「電も手伝うのです」

電が雷とは反対側である龍驤の右手を持って肩を貸した。暁を先頭に、龍驤を支える二人と、その後方に響、殿が時雨となる。

「．．．」

「．．．時雨、どうしたの？」

「何でもないよ」

響に呼ばれた時雨はずっと後方を気にしていた。

あの謎の艦載機が敵を強襲した後、しばらく遠くの方で留まり、それからすぐに消え去ったこと。

そのことは唯一彼女だけが知っていた。

「．．．アレガ．．．カムス．．．」

タマの視界を見終えた少女は目を輝かせていた。

「カムス．．．ホンモノ．．．スゴイ！」

自分自身がやったことの凄さに気付かず、彼女は海上でピョンピョンと跳ねて喜んで  
いた。

(本当に、私……ゲームの世界へ来ちゃったんだ……)

少女が以前の姿で見てきた記憶の中には、物語に現実として入り込んだ主人公の話が  
あった。架空のものばかりで、現実にかき起こることはまずありえないはずである。

ところが、先程の艦娘の姿を見たことで、少女は別世界へやって来たことに確信した。  
興奮が冷めないまま、新たに会う艦娘に期待する少女。

「モット、チガウバシヨニ、イケバ……タクサン、アエルカナ？」

戻ってきたタマを右ポケットに仕舞い込んでから、再び夜の海を歩き出す。

## No. 04 シマデキョテン

月の光で照らされる夜の海上。

そこへ真つ白い素足がゆつくりと現れ、踏まれた場所から荒い波紋が発生する。

「……ツカレタ……」

今まで元気だったはずの少女に疲労の色が見えてくる。

あれから彼女はずっと歩き続けた後、またも深海棲艦から襲われた。

少女から見て、それは駆逐イ級の一つ目バージョンの深海棲艦だと思われた。

実際は駆逐の一つでハ級と呼ばれる深海棲艦。

数は6隻と多くなり、それらは砲撃だけでなく、魚雷まで放ってきた。

「コノ……カエレッ！」

少女はリ級たちとの戦闘で使った艦装を取り出し、砲塔付きの頭で砲撃し始める。

そんな戦闘中に彼女はある問題に直面した。

「ティツ！……アレ？」

逃げ去る最後の6隻目を狙い、撃つたつもりがいつまで経っても砲身から弾が発射さ

れなかった。少女が砲塔の頭に目を向けると、それは息切れのような仕草をしていた。  
「ホウダン、ナクナツタ？」

彼女の問いに砲塔の頭が頷く。

仕方なく最後の敵を見逃し、再び夜の航行を続ける。

それから数時間経った頃、少女にとって一番の問題が発生した。

「・・・・・・・・オナカ、ヘツタ・・・・・・・・」

その空腹感は彼女の身体に影響が出ていた。

彼女の航行速度がみるみる落ちていく。

初めは最高速度の走りから最低速度の歩きまで自在に移動可能だった。

それが今では最低速度の歩きしかできない状態に陥っている。

(何処か・・・・休める場所とかないかな?)

「………ンウ？」

しばらく重い足取りで進んでいた少女の目に小さな島影が映る。

彼女は右手で両目を擦り、夜の闇に浮かぶ幻でないことを確認した。

「イツテミヨウ……」

そのまま島影に向かって少女はゆっくりと進んだ。

やがて、はつきりと島全体が見えてくる。

砂浜に囲まれ、背の高い木々が生い茂り、前方から見ると島全体が平べったい饅頭の形に見えた。

（やつと……陸地を見つけた……あつ！）

砂浜へ足を付けた少女の目にあるものが釘付けとなる。

それは南国などに自生する植物の一種で、その実は食料として扱われていた。

「ヤシノミ!!」

少女は駆け足でヤシの木に近付く。その手前で立ち止まり、右ポケットからタマを取り出した。

「タマ、アレ、ウチオトシテ」

「ミャー！」

少女の背丈では届かないため、艦載機のタマで採取しようとする。

実の根本辺りに来たタマは、口から銃弾を一発放った。

狙い通りに実の支えが失い、それは少女の元へと落ちていく。

「ヤッター!・・・アイタツ!」

受け止めようと両手を差し出すが、実は少女の額に直撃した。それ程痛くはなかったらしく、左手で額を摩りながらヤシの実を拾う。

「ムウウウ・・・」

「ミャ?」

心配そうに見つめるタマを余所に、少女はヤシの実をどう割ろうか考えた。

「ウーーン・・・」

「・・・」

「タマ、カジレル?」

「ミャ!」

結局、もう一度タマに頼ることになり、その大きな口でヤシの実を齧り切る。

実の上部分が噛み切られて、果肉と果汁がたっぷり入った中身が見えるようになった。

少女は口を付けて、果汁を飲み始める。

「ン・・・ンクツ、ンクツ、ンクツ、ンクツ・・・プフウ〜♪」

数時間振りの喉の潤い。それと同時に少女の疲労が少し治まり、空腹も少量緩和された。

「タマ、モットオトシテキテ」

「ミヤー！」

そうお願いされたタマは近場のヤシの木に向かい、実を次々と撃ち落としていく。実がいくつか落とされる間、少女は砂浜へあるものを探しに向かった。

「・・・アッタ」

少女が見つけたもの。それは砂浜に打ち上げられた貝殻だった。彼女はそれを海水で十分に洗った後、その貝殻をスプーン代わりにして、ヤシの実の果肉を食べ始める。

「ウ〜ン、ナタデココアジ・・・」

その言葉の原材料である果肉を食べていると、実を落とすに行ったタマが戻ってきた。

「ミヤー！」

「ン・・・タベテカラ」

少女は食べた実を砂浜に埋めて、落とされたヤシの実を拾いに向かう。

数分後、一か所に集められたヤシの実が山積みになっていた。

(ちよつと多いかな?)

少女は先程の一個で心身の疲れが落ち着き、続けて食すつもりはなかった。

だが、これだけ拾い集めた実をこのまま放っておくこともできなかった。

「アツ・・・ソウダ」

ふと彼女はあることを思い出す。

異次元のような右ポケットに入っていたタマのこと。

もしかしたらと思い、左側のポケットに左手を突っ込んで弄ってみた。

(あれ?・・・)

それは右側と同じようになかなか奥深く手が入るも、タマのように何かが入っていないかった。

空っぽであること確認し、少女はヤシの実を一個手に取る。

(タマと同じくらいなら・・・入るかな?)

彼女は左ポケットにヤシの実を恐る恐る近付けた。

すると、スポツとまるで消失するかのよう実に実がポケットの中に入ってしまった。

「オオー・・・」

試しに少女がもう一個入るかやってみると、同じように吸い込まれていく。



そんなギミックに面白くなったのか、次々と実をポケットに入れていった。気付けば少女の前にあつた山積みの実が全て消えていた。

(じゃあ、これも……)

最後にスプーン代わりの貝殻を入れてみる。

やはり異次元なポケットらしく、少女の身体にそれほど重量が感じられなかった。

(取り出しは……?)

今度を入れたものを取り出せるか確認し始める。

(えっと……ヤシの実……あつた!)

少女は一個のヤシの実を取り出し、右手で持ちながら空いている左手で左ポケットを探る。

(今度は貝殻……おっ?)

最後に入れた貝殻を思い浮かべた瞬間、それはすぐに手元に現れ、即座に取り出すことが出来た。

出来た。

(思い浮かべたら取り出せる?)

某ドラ猫ロボットのポケットより便利に思えてしまうほど、謎すぎる機能である。

「チョット、ミテマワロウカナ?」

少女は取り出したものとタマをポケットに仕舞い込んでから、島の周りにある海岸を歩き始めた。

「・・・・・・・・オオー」

少女が島を反時計回りに歩いていると、島の中心へと流れる入り江の入口を発見した。

海水でできた道は曲がりくねっているため、その先を見ることができなかった。

「ナニカ、アルノ？」

彼女は島の内部へ流れるその海面を歩き始める。

数分もしない内に、少女は島の中心らしき場所へとやって来た。

そこはまるで島のシークレットビーチのような静かな場所だった。

そんな場所に不釣り合いの“モノ”がそこにはあった。

「・・・フネ?」

それはただの船ではなく、大量の物資を輸送できる貨物船だった。

かなりの大型船らしく、少女が見上げててもその全体を見ることができない。

それはまるで砂浜に打ち上げられたかのように、船の先頭から島の奥深くへと乗り上げている。

「タマ、ウエカラミテ」

「ミャー!」

再び取り出したタマを投擲発艦させて、上空からその様子を確認する。

少女の居るビーチからは船の後ろが見えていた。しかし、その他の船体は高い木々によって隠されている。真上や島の周りからも見えない状態だった。

戻ってきたタマとともに、少女はその船に近付いて行った。

船の下部はある程度埋まっていたが、それでも甲板へは上がれない高さである。

「タマ」

「ミャ?」

「ワタシヲ、モチアゲラレル?」

「ミャ!?!・・・ミャ!」

彼女の願いに、タマは一瞬戸惑うが了承した。

両手でタマの左右を挟み込むように掴み、少女の身体が地面から離れた。

「ガンバレ、タマ」

「ミヤアアア！」

タマの必死の頑張りで少女は船の船橋の真後ろへとやって来る。

「ヨット・・・ナカニ、ハイレルカナ？」

彼女は近場にあつた鉄の扉を開けて、船の内部へと入つていった。

入つてすぐに船室や調理室、備品だらけの部屋があつた。

ある程度埃が溜まっているため、誰もいないことは明白である。

次に、下へと向かう階段を下りていくと、「貨物室」と書かれた少し大きめの引き戸があつた。

鉄製で重そうな扉だったが、少女の持つ怪力で簡単に開けられた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ウワーーーーーー!?!」

そこは少女にとつて、目を輝かせるほどの光景だつた。

「コレゼンブ・・・シザイ!?!」

この船が運んでいた物資の保管されていた場所。

そこにあつたのは、少女の以前の記憶に覚えのある形のものばかりだつた。

燃料と書かれた緑色のドラム缶。

銀色に輝く鉄の延べ棒が入った木箱。

重そうな黄銅色の砲弾が収納された赤茶色の弾薬箱。

木箱から零れ落ちている赤灰色の鉱石。

『復修』と書かれた蓋の付いた黄緑色のバケツ。

どれも艦娘にとって大事なものであり、大半が建造、開発、補給、修理に使われている資源物。

「コンナニ、イッパイ……」

少女は中央の通路に沿って歩き、置かれた資材を見て回る。

奥の方にも同じような巨大な扉があったが、その先も同じように資材がずらりと並んでいた。

(貨物船なら……この先も同じような構造になつてゐるよね?)

少女はさらに奥へと向かうことを止め、扉の近くにあつた木箱を開けてみる。

その中には赤灰色の鉱石が沢山入つていた。

右手で鉱石の一個を手に取り、まじまじと見つめる。

「エート、ボー……ナンダツケ?」

少女は鉱石の名称を思い出そうとするも、なかなか記憶の中から思い出せなかつた。

「ウーン……イイヤ。アカギノエサニシヨウ」

結局、解らず仕舞いとなり、適当な名をつけてしまう。

同時刻、どこかの鎮守府の営倉。

「はっ！ 誰かが私にご飯をくれるような気が・・・」

「明日まで何も食べさせない予定ですよ、赤城さん」

「そんな〜！」

営倉内にぐるぐる巻きで正座している赤城へ、通り掛かった加賀が無表情で告げる。彼女の罪状は、遠征の戦利品である3箱のボーキサイトを無断で全て食したこと。

「オイシイ、ノカナ？」

少女は空母の艦娘たちがこの鉱石を食べるイメージを思い出す。

自分自身も艦載機を扱う深海棲艦。なら食べられると予想し、不用心のまま口にした。

「アム・・・ッ!?!?・・・モグモグ・・・」

ここでも自身の不思議に直面した。石ころ並みに硬い鉱石が歯で噛み砕けたのであ

る。

鉱石は徐々に細かくなっていき、最終的に少女の口の中で溶けるように消失した。

「……………シヨツパイ」

彼女が味わった食感。例えるならば、塩の塊を食べたようなものである。

注意：ボーキサイトには塵肺という肺疾患になる人体に有害な粉塵があります。

決して食べてはいけません。

(これが美味しいのだろうか……ん?)

少女の右ポケットがもぞもぞと蠢きだす。タマが出たがっているのだろうかと思い、ポケットに手を入れようとした。

すると、入れる直前でポケットからタマと別の黒い球体が二つ飛び出してくる。

「エエツ!」

「ミャー!」

「ミャフ!」

「ミッ、ャー!」

「……フ、フエタ?」

その二つはタマと同じ姿だが、若干鳴き声が違っていた。

どうやら先程食べた鉱石のおかげで、扱える艦載機が増えたらしい。

取りあえず、少女はタマ以外の球体に名前を付ける。

「コツチガ、ミケ」

「ミヤフ！」

「コツチハ、クロ」

「ミ、ヤ！」

なんとなく名付けてから、彼女は3機まとめて右ポケットに仕舞い込む。

次に、少女は弾薬と書かれた赤茶色の鉄箱の蓋を開けた。

中に入っている砲弾は消火器と同じくらいの大きさである。

「ソウダツ」

少女は砲弾の一つを取り出し、お尻辺りから砲塔の頭を出現させた。

駆逐ハ級たちとの戦闘で弾切れになったことを思い出したからだ。

彼女は砲塔の頭にある口の中へ砲弾を放り込む。

「・・・モットホシイ？」

彼女がそう言うと、砲塔の頭が頷いた。箱から二個目の砲弾を取り、砲塔の頭に食べさせてから、さらに続けて三個目の砲弾も食べさせた。

そこでようやく砲塔の頭が満足そうにゲップを吐き出す。

「ゲプッ」



「ダンヤク、ホキユウデキタ？」

頷く砲塔の頭に少女は笑みをこぼす。

一撫でしてからその艤装を消失させ、反対側に陳列されているドラム缶に向かった。

「クンクン……」

近付いてから分かる油独特の匂い。

少女は自分より一回り大きいドラム缶の一つを両手で掴んだ。

少し傾けて、ドラム缶の上にある注入口の蓋を開ける。

「……アツ、アレガナイ」

少女はもう一度蓋を閉めて、ドラム缶を置いてからある場所へと走り去った。

数分後、少女は右手に金属製のコップを持って戻ってきた。

「ココニオイテ……ヨイシヨ」

床にコップを置き、先程のドラム缶の蓋を開けて、再び持ち上げる。

彼女は見た目100kg以上の重さのドラム缶を苦も無く、ゆつくりとコップの方へ傾けた。

黒いドロリとした液体が垂れ落ち、すぐにコップの中がいっぱいになる。

少女は傾けていたドラム缶をすぐに戻し、注がれたコップを手を取った。

「・・・イツキデー！」

躊躇うことなく少女はその液体をゴクゴクと飲み干していく。

「ケプツ・・・ゲンキハツラツ！」

飲み終えた少女は身体が火照るほどの満足感を得ていた。

海の上を歩き続けた際の疲労が回復し、もうしばらく動き回れるようになる。

（やっぱり、燃料飲めた。少し目が冴える・・・）

その他の鉄の延べ棒やバケツも見えて回り、数十分後に少女は貨物室を後にした。

続いてやってきた場所は船の操舵室。

少女はそこから船の正面になる窓ガラスの外を見る。

「・・・ダメダツタ」

船体が見られると期待していたらしいが、木々に覆われていて全体が見えない状態だった。

仕方なく目ぼしいものがないか、少女が探し回っていると、ある雑音のようなものが聞こえてきた。

「ンウ？」

音の発生源に向かつてみると、部屋の端の柵に置かれた物から音が発生していた。

そのの全体はビデオレコーダーのような長方形の立方体で、正面に摘みやスイッチなどがあり、左端に螺旋コードで繋がれたスイッチ付きのマイクがある。

どうやら船などで使われる「無線機」らしい。

「ナニカ・・・キコエル?」

『ザザ・・・』という音に紛れて、何やら人の声らしきものが聞こえてくる。

微かな音なため、何を言っているのか分かりづらかった。

(此処じゃ電波が遮られて繋がりにくい?)

少女はその無線機を抱えて、電波が届きやすい場所を探しに向かう。

「ン?・・・ココカナ?」

無線機の音に変化があり、やって来た場所は沢山ある船室の一つ。

そこは6畳間ぐらいの広さがあり、床は畳張りになっている。ドアのある入口とは反対の壁に大きめの窓が張ってあつたらしく、何故か綺麗に無くなつていた。

少女がその窓の外を覗くと、そこから船の後ろにあつたビーチが見下ろせた。

「スゴイバシヨ・・・オット・・・」

彼女はその光景より無線機を優先し、部屋の右端に置いて操作する。

とは言っても、彼女はおろか以前の記憶でも無線機を扱った経験は皆無。摘みやスイッチをでたために操作することしかできなかった。

「ンーーー……」

『……ザザ……』

「ンーーー……」

『ザザ……』

「ン？」

『……ちら……艦隊……』

途切れ途切れに聞こえるが、音量が小さいらしく、再度摘みを弄ってみる。

『……ース！　ワタ……の敵ではないネー！』

「オオツ!？」

ようやくある程度聞こえるようになると、そこには聞き覚えのある女性の口調が耳に入ってきた。

外人口調が特徴の艦娘。高速戦艦の“金剛”の声である。

『これでは……うの Finish!……さあ、かえ……レース!』

「スゴイ、エイゴシヤベル」

『金剛姉さ……すがです!　はる……激です!』

『・・・たしが一番に決まってる・・・ない！　ねえ？！』

彼女の声以外にも別の艦娘たちの声が聞こえてくる。

そんな彼女たちの声に少女は居ても経っても居られず、無線機に付いているマイクに手を伸ばした。

「アノ・・・ゼ、ゼ・・・」

緊張でなかなか声が出ないが、なんとか勇気を振り絞って叫ぶ。

「ゼロ、オイテケ！」

少女が叫ぶと同時に、手に力が入ったせいでマイクの線が根本からブチッと切れてしまふ。

「アツ・・・」

思わず冷や汗を流す少女。そうしている間に艦娘たちの声はしなくなり、部屋に静寂が訪れる。

「・・・」

窓から見える星空の満月に少女は目を向けた。

「ツキガ・・・キレイ・・・」

今日目覚めてからずっと驚きの連続ばかり。

静けさと艦娘たちと話せない落胆に、自然と眠気が襲ってくる。

「・・・ネヨウ」

外れたマイクを無線機の近くに置いて、部屋を中心へと移動した。  
その場で横になり、白き少女は安らぎの眠りについた。

「スウ・・・」

『・・・か・・・』

少女が深い眠りに落ちた頃、無線機に新たな女性の声が響いてきた。

『・・・れか、聞こえま・・・か？』

『こちら・・・と。・・・型せ・・・艦、や・・・です。誰か、応答を・・・』

## No. 05 シズンジャダメ!!

太陽が昇り始め、日の光を浴び始める南国のような島。

そこには軍の施設がいくつもあり、空には哨戒機が旋回していた。

ここは『トラック鎮守府』と言われる対深海棲艦の前線基地の一つ。

司令部の執務室で白い軍服を着た女性が書類整理をしていた。

軍帽を被り、長い髪を一束にしたポニーテール。長袖の軍服にミニスカートと黒いニーソックスという身なりの女性だ。

彼女は簡易な木造の机の椅子に座り、足を組みながら置かれた書類に目を通していく。

「またあいつから・・・許可しないに決まってるでしょう」

不機嫌な顔で手にした書類をくしゃくしゃにして、机の横にあるゴミ箱へ投げ入れた。

再び別の書類に目を向けていると、執務室のドアからノックがされる。

「許可するわ。入って」

彼女の返事で一人の艦娘がドアを開けて入ってきた。

「失礼する。山岸提督<sup>やまぎし</sup>」

入ってきたのは黒い長髪の大人びた艦娘。戦艦「長門」

彼女は秘書艦及び第1艦隊の旗艦として、この鎮守府の主力の一人でもあった。

そんな彼女はお盆に乗せた冷たい麦茶のコップを持って、軍服の女性の机へと歩き寄る。

「里子<sup>さとこ</sup>でも構わないって、許可したでしょ？」

「むっ、そ、それは……まだ慣れないのだが……」

「他の娘たちも何人かはそう呼んでくれているのよ。あなたからもそう呼ばれたいわ」

「む、むう……」

少し顔を赤らめる長門は、ぎこちない動きで麦茶を机の上に置いた。

軍服の女性の名は「山岸 里子」階級は中佐。

このトラック鎮守府で艦娘たちを指揮する女性提督である。

彼女はテーブルに置かれた麦茶を手にし、一口飲んでからコップを置いた。

「龍驤の具合はどう？」

「かなり疲弊していたが、艦装も含めれば、本日の12:00（ひとふたまるまる）までには復帰できるそうだ」



「そう……大事に至らないでよかったわ」

先日の夜、遠征に出したはずの第3艦隊の旗艦「龍驤」が敵の不意打ちにより、大破。それを聞いた山岸提督は一瞬青ざめるも、時雨や暁たちのおかげで無事帰還したことに胸を撫で下ろした。

「しかし……謎の艦載機か……」

「それについて調査しているけど、まだ詳細が分からないわ」

長門が言った謎の艦載機。それは時雨の報告で知った謎の深海棲艦らしきもの。

彼女が言うには、それは何故か敵の艦載機を全滅させ、さらに敵の軽空母を撃沈させたという。

「いずれにしても、その艦載機の持ち主にはお礼がしたいわね」

「敵かもしれないのだから？」

「あら、危機に瀕した第3艦隊を助けてくれたのよ？ それに敵の深海棲艦を撃沈までしてくれて……礼をしない理由がないわ」

「それもそうだが……」

イマイチ納得のいかない長門に、山岸提督は気にせず書類に目を向けた。

彼女は資料関係の書類に目を通しながら、長門に今日の予定を尋ねる。

「本日の艦隊への指示は？」

「今回も編成し直して、第1、第2艦隊ともに哨戒任務に行ってもらった」

「助かるわ。第3はしばらく待機ね。あとは・・・」

「むっ？ 通信だ」

長門が右手を耳に当てて、通信内容を聞き取り始めた。

「・・・すぐに全艦隊を帰還させなさい」

「なっ!? 山岸提督！ それだと・・・」

「落ち着きなさい、長門」

山岸は自分の出した指示に異議を申し立てようとする長門を宥めた。

「山城と蒼龍、飛龍が中破した状態で搜索するのは自殺行為よ。許可しないわ」

「むっ・・・」

「幸いにも負傷した第2艦隊の近くに第1艦隊がいる。彼女らに運んでもらった方が帰還速度も速くなるわ」

「しかし・・・いや、迷っている時間も惜しいな」

「そういうことよ」

長門はすぐに無線で出撃した艦に撤退命令を下す。

一方の山岸は後ろにあった放送端末のスイッチを入れた。

「第六駆逐隊、執務室に緊急集合せよ」

放送端末のマイクにそう告げたあと、長門にこれから行うことを指示する。

「第1、第2が戻り次第、補給及び修理を。無傷の第1ならすぐに出港できる」

「第3はどうする?」

「龍驤が復帰したら、暁たちと一緒に行かせるわ。長門は帰還する艦隊を迎えに行つて」

「了解だ」

長門が退室した後、山岸は椅子に座つて腕を組んだ。

「……………確実に救うにはこれしかないわ。鬼級に嵐……………リスクが多過ぎるこの状況で……………」

「無事でいて……………大和……………」

「ウーン……………」

日の光が窓から侵入し、寝ていた白き少女を照らし出す。

彼女は思わず暑いと言いついそうになるも、気怠さのせいで言えなかった。

「……………アサ？」

まだ寝惚けている状態で上半身を起こす。

時計がないため、少女には今の時間帯が分からなかった。

実際の時刻は12：00手前である。

「フア〜ア……………ゴハン……………」

少女はおもむろに左ポケットからヤシの実を取り出し、さらに取り出したタマで実の中身が見られるぐらい齧り取ってもらった。

「ンキュ、ンキュ、ンキュ……………プハア〜」

続いて取り出した貝殻で実の果肉を食べ始める。

「ハムツ……………モキュ、モキュ……………オイシイ……………」

少女が果肉を半分近く食べているときに、無線機から『ザザ……………』という音が鳴り響く。

「ツ!？」

音に気付いた彼女は俊敏な這い這いでトタタタツと無線機の傍へ向かった。

無線機の摘みを弄り、聞こえる音量を操作する。

『・・・ら、加賀。そっちの方・・・うですか？ 島風』

『みんな、おっ・・・い！ 先行っつい・・・』

『シマカゼ？ バニコスノ？』

少女自身も知る有名な最速の艦娘 “島風”

『駄目で・・・級もいるはずなので、単独での行動は・・・です』

『キュウ？ ヒメキュウガ、イル？』

加賀の途切れた言葉から、少女は自分の存在がばれたのかと一瞬だけ思った。

『でも、か・・・さん。本当に・・・がここに・・・るのでしようか？』

『最・・・に確認された場所。あなたの妹、山城・・・こだと教えてくれ・・・』

『ナニカ、サガシテル？』

いくつかの言葉が聞こえないが、それでもなんとなく分かるぐらいの会話から少女は話の内容を予想する。

『Bad・・・れから・・・時間は経ってるネー！ 本当に・・・デース？』

『加賀さん。偵さ・・・からは何も見当たらな・・・です』

『つ・・・けて搜索して頂戴、赤城さ・・・』

『ねえ、本・・・に “大和” がいたの？』

『ッ!?!』

少女は島風の言葉に耳を疑った。

“大和”

それは現実にも存在した世界最大の戦艦。

無論、艦娘として最高クラスの戦闘力を誇る戦艦の一人でもある。

数多くの提督たちが彼女を入手しようと頑張っているとも聞いていた。

(あの大和が……いるの?)

提督たちの憧れである戦艦の存在に、少女は無線の声を集めて聞き取る。

『私の山城と……う龍さん、飛龍さんを助け……めにお一人で……』

『仕方……です。相手は南……き。加えて嵐にもま……』

『加賀さんの言うあ……って、あの……にある暗い雲ですか?』

『ええ、赤……さん。偵察機……けますか?』

『Wait! 対空……探に感あり! て……ネー!』

『榛名!……ります! 金……さま、三式弾を……』

そこから先は艦娘たちが戦闘を開始したためか、無線機から何も聞こえなくなつた。

少女は聞こえた内容を頭の中で整理し始める。

(つまり、山城っていう艦娘たちを救うために、大和が自ら囿になつた?)

(……嵐とかも言つてたから……そこでまだ戦つてる?)

彼女はそう予想した後、ゆっくりと立ち上がった。

「・・・ヤマト・・・タスケル!!」

少女は部屋から飛び出し、貨物室へと走り出した。

資材の宝庫へやって来た少女は、左ポケットに燃料のドラム缶6個、弾薬である砲弾を10個、黄緑色のバケツを5個入れ込んだ。

「ンシヨー!」

そして、近くにあったドラム缶を持ち上げて、その中身を豪快に飲み始める。

「ングツ、ングツ、ングツ・・・ケハアー!!」

少女の体内で凄まじい熱量が湧き上がり、ある程度残ったドラム缶がゴトンと置かれた。

「ホッポ! シュツゲキ!!」

彼女は貨物室を後にし、船の甲板へ出てからビーチへ高々とジャンプする。

海面へ一直線に着地後、凄まじい速度で航行し始めた。

(目指すは・・・加賀の言っていた嵐!)

島から出た少女は成り行きに任せて、青い海の上を走り続けた。

島が見えなくなるほど走り続けた少女は、その場で立ち止まり、タマ達を取り出した。

「ミャー！」

「ミャフ！」

「ミッ、ヤー！」

「イツテキテ」

彼女はタマ達を前方から三方向へ投擲発艦させる。

空高く飛んで行った艦載機の視界を交換しながら、目的の嵐を探し始めた。

「ウーン……………」

数分後、少女が中々見つけれないと思ったその時、ある視界に黒い雲が映り込んだ。

「アッタ！」

『ミッ、ヤー！』

見つけたのは前方から右斜めに飛ばしたクロ。

少女は他の艦載機に戻るよう指示し、クロの居る方向へ走り出した。



「はあ、はあ、はあ……」

「フフフフ……」

日が遮られる暗闇、激しい雨、荒れ狂う波。

そんな悪天候な海上に二つの人影が立っていた。

一つは赤いセーラー服を着たポニーテールの女性。

腰回りに付いた艀装は巨大な三連装砲とそれより小さ目の副砲が装備されている。

強力そうな彼女の装備だが、右側の主砲以外が使用不可能なほど傷付いていた。

もう一つは全身が白い肌で長い白髪をツインテールにしている女性。

こちらは手が鉤爪で二門の砲身があり、両ふとももの外側には口から出ている巨大な三連装砲と副砲の艀装が付いていた。

「ダイブ、ガンバツタワネ……ダガ……」

「っ!?!」

白髪の女性が巨大な三連装砲による砲撃を開始した。

狙われた赤いセーラー服の女性が右へ回避しながら、左側の艀装で防御する。

すでに砲身が折れ曲がった副砲がさらに歪み、その装甲に容赦ない砲撃が直撃した。  
「ぐっ！」

彼女は苦し紛れにまだ無事な右側の主砲で一発の砲弾を発射した。

放たれた砲弾が白髪の女性へと真っ直ぐ向かっていく。

命中した砲弾の爆炎が彼女を包み込んだ。

「・・・っ!？」

「フッフッフッフ・・・」

攻撃をまともに受けた白髪の女性は不適に笑っていた。

彼女が受けた損害は右腕の鉤爪の砲塔。だが、何事もなかったかのように左腕の砲身を構える。そこから放たれた砲弾は彼女自身を狙った相手の主砲に命中した。

「あうっ!!」

赤いセーラー服の女性が破壊された砲塔の爆発で右肩の肌を負ってしまふ。

彼女は前屈みになり、左手で血が流れる右肩を押さえた。

「フッフッフ・・・ワカッテイルワヨ」

「な、何がです?」

「アナタハ、ステニダンヤクガ、ツキテイル」

「・・・」

「タマガ、ナケレバ、タダノテツクスヨ」

「それはどうでしょうか!？」

負傷した女性が白髪の女性に向かって突進する。

接近する彼女に対し、迎え撃つ方は余裕の表情で砲塔を向けずに待っていた。

「はああああつ!!」

接近した女性の左パンチが白髪女性の右腕の鉤爪で受け止められる。

彼女はすかさず反対の右腕による拳を放つも、同じように相手の左腕で阻止された。

微笑む白髪の女性がその左手の鉤爪に力を入れる。

「ぐっ!?! あつ、あああああつ!?!」

負傷した女性の右腕に激痛が走り、悲痛な叫びが海上に木魂する。

「ワルアガキハ、ココマデ。ソレジャア・・・サヨウナラ」

白髪の太ももの砲塔が赤いセーラー服の女性に向けて一斉に砲撃した。

煙を上げながら吹き飛ばされた彼女は、そのまま荒れる海の中へと沈んでいく。

その様子を見ていた白髪の女性は恍惚な笑顔を浮かべていた。

「カンゲイスルワネ・・・アナタモ・・・ワタシタチト・・・」

そう彼女が呟いていた瞬間、遠くの方から轟音が響き、彼女の左腕が吹き飛ばされた。

「グッ、ギャアアアアアアアアッ!?!」

手痛い攻撃をされた白髪の女性は、襲撃者の姿を確認しようとする。

彼女が轟音のした方向へ目を向けると、目の前に緑色のドラム缶が迫っていた。

「ナッ!?! ガアアッ!?!」

それは顔面に直撃し、仰け反った状態の彼女の真上に浮かんでいた。

その直後、またも轟音が響き、ドラム缶が大爆発する。

間近にいた白髪の女性の全身が火達磨になった。

「アッ、アッ、アッ、アッ!! アッ、アッ!! アッ、アッ、アッ、アッ!!」

炎に包まれて目すら開けられない状態に陥る女性。もがき苦しむ彼女に白い影が接

近し、右腕に持つ赤黒い砲塔から轟音が鳴り響いた。

「ティッ!!」

燃え盛るそれはさらなる爆風で吹っ飛び、嵐の果てまで飛んでいく。

白髪の女性を吹き飛ばした白き少女は砲塔の艤装を消失させ、沈んでいった女性の場

所へ飛び込んだ。

「ヤマトオオオ!!」

少女は必死なバタ足で水底へ沈んでいく女性を探す。

彼女自身、海中へと沈んでいくことに妙な懐かしさを感じていた。

(また・・・逝くのね・・・)

彼女にとってそれは二度目の体験だが、後悔のない結末だと思っていた。

気付くと彼女は艦娘として、夜の海に出現していた。

無線で仲間がいるか呼び掛けたが、誰も応答しなかった。

夜が明け、最低限の航行で移動し、他の艦娘たちを探しに向かった。

運良く出会えたものの、嵐の中で南方棲鬼の艦隊に苦戦する艦娘たち。

すでに大破したものが半数以上いたため、自身が困となり、彼女たちを撤退させた。

(きつと・・・あの娘たちは無事・・・なら・・・悔いは・・・)

敵の大半を相手に孤軍奮闘するも、弾薬や燃料は限界に近かった。

そんな状態で鬼級の深海棲艦と無理に戦ったのだ。

やるべきことは果たしたと、彼女はそう結論付けた。

(後は、頼みます・・・・・・えっ?)

すでに彼女の視界はぼやけた状態だったが、その視界に白い何かが映っていた。

それはこちらに向かってきて、何かを叫んでいるようにも見える。

『・・・・・・・・!!』

(いま、なん・・・て・・・)

彼女はその言葉を聞き取ることができず、意識を失った。

『ミツケタ!!』

白き少女が深い闇の海底へと落ちていく女性を発見する。

彼女こそが他の艦娘たちが搜索する目的の艦娘“大和”だ。

轟沈していく彼女の元へ、少女は一直線に潜り進む。

『ッ!?!』

もう少して辿り着きそうになったとき、大和の周りに無数の黒い手のようなものが現れた。

それはまるで彼女を海の底へ引きずり込もうとする。

『サセナイ!!』

少女は潜る速度を上げて、両手で彼女の右手を掴んだ。

『ヤマトハ!! ワタサナイ!!』

彼女は掴んだ大和の右手を引き、左腕で彼女の身体を抱き寄せる。

引き剥がされて名残惜しそうに伸ばす黒い手を気にせず、少女はそのまま海面に向かって泳ぎ始めた。

「プハアア！ ヤマト！ ヤマト!!」

「・・・」

海面へ浮上した少女は、救い出した女性の名を呼ぶ。

傷だらけの彼女は意識が無く、艀装のほとんどが大破していた。

少女は右手でタマ達を取り出して、それぞれに指示を与える。

「タマ、シママデ、ユウドウシテ」

「ミヤー！」

「ミケ、テキガコナイカ、ミマワツテ」

「ミヤフ！」

「クロ、ヤマトハコブノ、テツダツテ」

「ミヤー！」

タマとミケは空へと飛び立ち、クロは大和の艀装の下から支えた。

少女は彼女を背負うように持ち上げて、荒れる海から脱出する。

あれから数十分掛けて、少女は超弩級な艦娘を自身の拠点である島まで運んだ。入り江の入口から少し離れた砂浜へ傷付いた彼女の身体を下ろす。

「ヨイシヨ・・・フウ・・・」

艦装にもたれかかるように仰向けで下された大和。

息はしているようだが、意識が目覚める様子はなかった。

「エート・・・ソウダツ」

少女は左ポケットから黄緑色のバケツを取り出す。

『復修』と漢字で書かれているが、これは右側から読むようになってる。

“高速修復材”

艦娘の修理に使われる修理用資材で、これだけで数時間分の修理を一瞬で終わらせることができる。

少女はバケツの蓋を取り外して、中身の輝く緑色の液体を見る。

(これを・・・身体とか砲塔に掛けるのかな?)

彼女は恐る恐る大和の艦装にバケツの液体を掛けていった。



「オオツ!?!」

その光景に少女は目を丸くしてしまふ。

歪んでいた副砲の砲身に液体が掛かると、砲身が輝き、瞬く間に歪みが直された。

装甲のデコボコになった部分も綺麗になり、まるで新品のように艶のある装甲へと変わる。

(身体の方は?)

少女は大和の負傷した右肩にもゆつくりと液体を掛けた。

こちらと同じように血が洗い流されて、傷口が全くない状態となる。

「アツ、ナクナツタ・・・」

ここでバケツの中身が無くなり、彼女は新しいバケツを取り出した。

「・・・オワツタ」

結局、高速修復材は持っていた5個全て使い切ってしまった。

ボロボロだった戦艦の艦装は新品のように煌き、傷だらけだった女性の身体も痕が全くない清らかな状態に戻った。

それでも一向に目を覚まさない彼女に、少女が不思議そうに見つめる。

(治ったのに・・・何か足りないのかな?)

彼女がどうしようか考えていると、大和から腹の音が聞こえた。

「……ゴハン？」

少女と同じように腹が空いているらしく、そのことに気付いた彼女はドラム缶を引つ張り出す。

昨日使った金属製のコップも取り出し、ドラム缶の燃料を垂らすように注いだ。

「ヨイシヨット……オットト！」

零れそうになるくらい入れた燃料入りコップ。入れ過ぎたと思い、少女は一口飲んで少し量を減らす。

そして、まだ目の覚めない女性の口元へコップを近付けた。

（飲んでくれるかな？）

彼女の口にコップが咥えられる。中身の燃料が唇に接触すると、口の中へ勢いよく飲み込まれていった。

どうやら無意識に燃料補給しているようだ。

そうして十秒も経たずにコップの中身が空っぽになる。

（まだ必要になるかな？）

少女はコップを仕舞い込んでから、残りのドラム缶4個を取り出す。

またコップに注ぐようとポケットに手を伸ばしたとき、ある場所へと彼女の視線が飛ん

でしまう。

「・・・」

バケツを使用していた時は気にもしていなかった所。  
負傷した際に破れた服の裂け目から曝け出された所。

“大和の胸元”

(ま、まる見えだった・・・)

自分自身が女性ではなかった頃感覚が辛うじて残っていたのか。

少女の白い肌の顔がみるみるうちに赤く染まっていた。

「・・・・・・・・っ・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

「ツ!?!」

意識を失っていたはずの艦娘から僅かな声が漏れる。

その声に飛び上がるほど驚いた少女は、その場から密林に向かって走り出した。

(・・・・・・・・あたたかい?)

冷たい海の底へと沈んだはずの自身の肌に暖かさが伝わってくる。  
彼女はその心地良さで次第に目を覚ます。

「……」

意識を取り戻した戦艦の女性。

その目に映ったものは、輝く太陽に照らされる穏やかな海辺の波打ち際である。

「どうして……海に沈められたはずじゃ……」

信じ難い光景に彼女は辺りを見回す。

左側に燃料であるドラム缶が5個も置かれているだけで、その他は砂浜と密林以外何も見当たらなかった。

「あつ……これは……」

そこで彼女は自身のさらなる異常に気付く。

深海棲艦の攻撃で傷付きまくった艦装が全て無傷の状態になっていたのだ。

あれだけ無残に壊された主砲ですら、真っ直ぐな砲身で一つも折れ曲がっていない。

また、艦装だけでなく、自分の身体に受けた傷も治っていた。

「どうなって……」

そこで彼女はあるものを発見する。

修復と書かれた黄緑バケツ。それがドラム缶の近くに5つも転がっていた。

その中身はすでに無く、空っぽのまま捨て去られている。

（誰かが・・・私を助けてくれた？）

周りの状況から、彼女はそう判断せざるを得なかった。

「だ、誰か！ 誰かいるのですか!？」

恩人であるその者が近くにいるか、大声で呼び掛ける。

しかし、彼女の呼び掛けに答えるものは居なかった。

（居ない・・・のでしょうか？）

再び訪れた静寂の中、彼女は空腹を満たすために、傍にあつたドラム缶に手を伸ばす。

（とにかく、いつでも航行できるようにしておかないと・・・）

戦艦の女性はその燃料を飲み終えた後、波打ち際へと向かっていった。

浅瀬から航行し始めた瞬間、彼女は素早い動きで後方へ振り向く。

「・・・？」

何かに感付いたらしく、その正体を見つけようとするが、島の密林に怪しいものは見えなかった。

（視線みたいなものでしたが・・・気のせいでしょうか？）

仕方なく航行速度を上げて、無線通信を試みながら進んでいく。

島が見えなくなるぐらいの距離で、ようやく他の艦娘との無線が繋がった。

『・・・和さーん、返事してくださいー!』

「こちら大和、聞こえますか?」

『はわわ!?! や、大和さん! ご無事なのですか!?!』

聞こえてきたのは駆逐艦の電の声。

通信状況も良好らしく、彼女の口調もはつきり聞こえた。

「なんとか・・・ですが、弾薬が底をついているので戦闘が困難な状況です」

『少し待ってください! すぐにそちらへ皆で迎えに行くのです!』

「お待ちしております」

戦艦の女性は航行を停止し、迎えが来ることに安堵する。

「イタタタタタ・・・」

一方の密林内では、白き少女が仰向けで倒れていた。

少女は少し高めの木に登って、遠目から大和の様子を見ていた。

彼女が島から出ていくのを見ていると、いきなり少女のいるこちら側へ振り向いてきた。

気付かれたと思った少女は焦って木から落ちてしまう。

(びっくりした……背中が……)

彼女は打ち付けた背中を摩りながら、拠点である貨物船へと戻って行った。

## No. 06 ツイテコナイデ

『ザザ．．．』

時刻は朝を過ぎた辺り。

突如、部屋中に響き渡る無線機の雑音。

その発生源に向かって、白き少女が俊敏な這い這いで近寄った。

「ヨイシヨ．．．」

彼女は音量の摘みを弄り、無線機から流れる声を聞き取る。

『．．．ちら、護衛．．．隊の朝潮．．．近にいる艦隊に救援を．．．』

『あらあ．．．潮ちゃん。こんな少量の敵．．．援要請しちゃうの?』

『数が少なくても相．．．軽巡3隻。こちら．．．駆逐の私達二人のみ。分が悪す．．．す』

『．．．うは言つても私より．．．よいくせに、随分と控えめね。そ．．．ころは大好き』

『馬鹿な．．．と言わないでくだ．．．増援が．．．らどうする．．．もりですか?』

「アサシオ? ハジメテキイタ」



以前の記憶には入っていない名の艦娘たちの救援要請。  
ある程度話を聞いた後、少女は出発準備をし始める。

「ングツ、ングツ、ングツ．．．ツ!? ケホッ! ケホッ!」

貨物室で少女が燃料を飲んでいる最中、気管に入ったせいでむせてしまう。

「エート．．．コレト、コレト．．．」

次に燃料や修復材、弾薬などを服の左ポケットに入れていく。

大和救出時に殆どの資材を使用した経験で、彼女は余分に持つていこうと二桁をも越える量押し込んでいった。

また、いずれ必要になると思い、ボーキサイトの木箱や鋼材まで入れていった。

「トウツ!」

船の甲板から勢いよく跳躍した少女は、曲がりくねる海面の道を航行していく。

彼女自身、それは秘密基地から出撃するヒーローみただと楽しんでいた。

「ホッポ! シュツゲキ!!」

今回も位置が不明なため、少女はタマ達を発艦させる。

「ミヤアアア！」

「ミヤフウウウ！」

「ミ、ヤアアア！」

3機は空高く飛ばされた後、目的の場所を搜索し始める。

少女が視界を共有してから数分後、ようやく2隻の輸送船を護衛する艦娘とその真横から強襲する深海棲艦を発見する。

今回の発見者はミケ。

「ワツ・・・タイホウイツパイ」

襲っている敵は、タンスのような細長い箱の上部に6つ、左右に二門の砲塔が付いている。いた。

軽巡ホ級と言われる艦種らしく、それら3隻全てがでたらめに砲撃していた。

一方の迎え撃つ艦娘二人は輸送船の右側を防衛するため、深海棲艦の前に立ちほだかるように応戦していた。

「ソレジャア、ウシロカラ・・・ンウ？」

少女がミケに指示を飛ばそうとした時、航行する輸送船の後方から何かが迫っていることに気付く。

それは白い仮面を被った女性で砲身化した左腕、右腕には大盾のような口付きの艦装、下半身には航行のための艦装が付いていた。

雷巡千級と言われる人型に近いタイプだ。

(さっきの3隻が囹で・・・本命はこっち?)

艦娘も気付いていない陽動に、いち早く気付いた少女は攻撃目標を千級に変更する。

「ミケ！ アツチガサキ！」

『ミヤフ！』

指示されたミケは輸送船の後方から接近する深海棲艦に向かって急降下した。

「!?」

『ミヤフウウー！』

思わぬ乱入者に千級が声の出ない驚き顔になる。

ミケはその隙に機銃を発射し、敵に銃弾を浴びせた。

「ツ!!」

すれ違いざまに銃撃したミケはそのまま千級の横を通り過ぎた。

邪魔された彼女は後方へ振り向いて、怒りのあまり左腕の砲身を発砲する。

その砲撃音は輸送船の横で迎撃する艦娘たちの耳にも届いた。

「なっ!? 新手!?!」

「あらあら。本当に来ちゃったわね」

「喜んでいる場合ですか!?! 荒潮、そっちを!」

「仕方ないわね」

艦娘たちが後方の敵に気付き、迎撃するために二手に分かれる。

その間に旋回したミケが海上ギリギリで飛行し、再びチ級に向かっていく。

「ライゲキカイシ!」

『ミヤフ!』

ミケの口から少し長めの魚雷が吐き出される。

それは真つ直ぐチ級に向かって、海面に軌跡を残しながら進んでいった。

「!?!」

魚雷に気付いた彼女は左手の砲撃だけでなく、右腕の大盾の口から魚雷を発射して迎撃しようとする。

しかし、一発だけの魚雷にはなかなか当てられず、遂に彼女の大盾の下部に直撃した。『ミヤツ、フフフ!』

被弾したチ級は大盾の半分下が失われた上に、下半身の艦装にも亀裂が入ってしまった。

その様子にミケはご機嫌な声を漏らす。

「あらあら。これはこれは……」

「!?」

不意に聞こえた声に、チ級は後ろを振り向く。

そこには茶色の長髪の少女が右手に持つ二門の砲塔を構えていた。

「手負いを撃つのは好きじゃないけど……後ろから狙ってきたんだし……」

言葉を言い終える前に、彼女は手に持った砲塔を発砲した。

砲弾はチ級の頭部に命中し、立て続けに砲撃される。

4発目を撃ち終えた頃にはその上半身が綺麗に無くなっていた。

「うふふふ……さて……」

敵を倒した彼女は上空で飛び続ける黒い球体に目を向ける。

「あれは何なのかしら?」

チ級を撃破した艦娘に、少女は何とも言えない悪寒が走る。

「ヨ、ヨウシヤナイ……」

しばらく様子見でミケに上空から観察させた。

数分後、軽巡ホ級たちの後方から無数の砲撃が飛んでくる。

恐らく朝潮という艦娘の呼び掛けで、救援に駆け付けた艦隊の砲撃であろう。

これ以上の手助けは必要ないと判断した彼女は、ミケに帰還するよう命じた。

「ミケ、カエルヨ」

『ミヤフー!』

まだ太陽が照り付ける島へ帰還した少女は、波打ち際から貨物船の後ろへと歩き出す。

彼女が向かう場所には二本のロープが垂れ下がっていた。

一本のロープには何も付いてなく、もう一本の方は先が4本に分かれて、木の板で出来た四角形の床が付いていた。

大和救出後、帰還した少女は再度タマに掴まって貨物船へと戻る。

彼女はタマの負担も減らそうと考えた末、簡易的な手動式のエレベーターを作り上げた。

まず、何故かあった滑車付きの鉄骨を使い、船の後部から斜めに飛び出るように括り付け設置する。

続いて、滑車部分に丈夫で長いロープをタマ達に通してもらった。

次に木の板で四角形の床を作り、垂れ下がるロープの片方に付ける作業を行う。

ロープの先に鉄の輪を結び付けて、それに二本のロープを垂れ下げる。

垂れ下がった二本のロープを交差させ、垂れ下がる四本のロープの先端に床の四隅の穴へ結びつけた。

これで床に乗り、もう片方のロープを引っ張っていけば昇りだけができる手動式エレベーターの完成である。

「ンシヨ、ンシヨ、ンシヨ……」

持ち前の怪力で少女は軽々とロープを引っ張っていく。

甲板の手摺り辺りまで上がった後、彼女は甲板へジャンプすると同時にロープを手放す。

落ちた床は砂の上に叩きつけられる。

「タダイマ♪」

出迎えてくれる者が居ないにも拘らず、帰ってきた少女はそう呟いた。

部屋へ戻ってきた少女は、取り出したヤシの実で食事を始める。

(あさしお? ……とちよつと怖いあの娘。姉妹みたいだった)

今日目撃した出来事を思い返ししながら、少女は次の日まで部屋に籠っていた。  
(明日も違う艦娘が見られるかな?)

次の日の朝。

特に無線機から声が聞こえなかったため、少女は備品だらけの倉庫から掃除道具を探しに向かう。

元々、彼女は以前の生活で綺麗好きだったため、船内の散らかりようが気にかかって  
いた。

やることがない以上、せめて自分が住んでいる場所くらい掃除しようと考えたらしい。

念のため、無線機の近くにタマを置き、何か聞こえたら知らせるよう指示した。

「フンフンフフ♪ フン♪ フン♪ フウン♪ フンッ♪ フンッ♪ フンッ♪」



(抜錨〜♪)

少女は以前の世界で気に入っていた曲を鼻歌で歌う。

彼女の頭には白い三角巾が被さり、素足だった足には少し大きく黒い長靴が履かれていた。

ミトン手袋で手にした箒を使って、寢床の船室から廊下まで埃を掃いていく。

時刻は昼過ぎ。

調理室辺りまで掃除していると、少女の元へタマがやって来た。

「ミャー！ ミャー！」

「アツ、キタ!？」

彼女は箒をその場に置いてから無線機のもとへ走り出す。

「・・・アタツ!!」

途中、少女はぶかぶかな長靴により盛大にこけた。

立ち上がりながらそれも脱ぎ捨てる。

『・・・の攻撃により、・・・城とともに中破し・・・』

『不幸だわ。でも・・・さまと一緒・・・』

『あたしが一番先に・・・撃されましたよ!』

『白露・・・あなたは姉さまとちが・・・小破しただけでしょう!』

話の内容からすると、どうやら2人が大破で1人が小破したらしい。

『偵・・・機より入電。軽・・・ホ級2隻が接近・・・』

『・・・桑さん、ここは・・・と飛龍に任せてください・・・』

『やるよ、蒼龍・・・戦、第一次攻撃・・・発艦っ!』

『イソガナキヤ!』

先日と同じく艦載機に搜索させると、件の艦隊はすぐに見つけられた。

今回の発見者もミケ。

艦隊は無事らしいが、2人ほど服と艀装がボロボロな姿だった。

(上下共に酷い状態・・・)

少女は頬を赤くしながら思わず右手で鼻を押さえる。

損傷した二人以外に、弓道で使う和弓を持つ女性が二人と、黒いセーラー服にオレンジのヘアバンドをした少女が動き回っていた。

「ンウ?」

和弓を持つ女性たちが二の腕の外側に付いた飛行甲板へ数機の艦載機を着陸させる。どうやら先程の無線で言っていた敵の迎撃に成功したようだ。

(これなら・・・何も必要な・・・あつ！)

少女は思いついたように左ポケットから黄緑バケツを取り出す。

(帰るまで心配だから、これを届けよう)

傷付いた2人の艦娘のために、少女は2つのバケツを用意する。

バケツ本体には付属品で置かれていたアタッチメントの取っ手が付けられていた。

彼女はさらに取り出した紐で2つのバケツの取っ手を縛る。

「タマ」

「ミヤ」

戻って来たタマに二つのバケツが吊るされた紐を啜えさせた。

少女はタマにある方向へ右手を指し示す。

「アツチニイル、カンムスニ、ワタシテキテ」

「ミヤー！」

バケツをぶら下げるタマは少女の示した方向へ真つ直ぐと飛んで行った。

「ミケハ、モドツテキテ」

『ミヤフ』

「不幸だわ・・・」

「山城、元気出して・・・あなたのせいじゃないわ」

黒い長髪の女性が黒い短髪の女性に声を掛ける。

どちらも巫女服に近い服装が原型を留めないくらいボロボロになっていた。

艦装である後方の巨大な砲塔も砲身が折れ曲がるほど酷い状態である。

二人は扶桑型戦艦の姉妹。

姉の扶桑が落ち込む妹の山城の肩を叩く。

その後ろから緑色の着物を纏う蒼龍と、橙色の着物を纏う飛龍が航行していた。

「あそこで敵機直上は予想外だったからね」

「そうね。このままじゃ多聞丸に怒られるな・・・」

「あたしは里子提督に一番で怒られるのだ！」

「それ喜ぶこと？」

正規空母たちに突っ込まれるのは、彼女らの周りで動き回る黒いセーラー服の駆逐艦

“白露”

少し前の戦闘で彼女は戦艦の護衛に回っていたが、何故か爆撃される直前でその爆風

へ当たりに行く行動を開始した。

結果、扶桑や山城がともに攻撃されてしまい、白露は紙一重に当たった程度の損傷を受ける。

彼女曰く、何でもかんでも一番でないと気が済まないらしい。

「ふっふー……えっ？ 何あれ!？」

「!?!?!」

白露がふと目にしたもの。

それは黒い球体が何かをぶら下げながらこちらにやって来る姿。

そんな謎の物体に彼女はトリガー付きの砲塔を構える。

「まさか……」

「ふ、不幸が続くわ……」

「て、敵機?! こんな近くじゃ攻撃隊が……」

「蒼龍! 落ち着いて! ここは白露に任せましょう!」

他の4人も警戒するが、まともに攻撃できる距離ではないため、駆逐艦の白露に頼らざるを得なかった。

数秒も経たずに、それは彼女たちの目の前までやってくる。

「ミャー!」



「ミヤ、ミヤ、ミヤ〜♪」

一方、配達を終えたタマはご機嫌な様子で海上を飛行していた。

「・・・ミヤ？」

そんなタマの後方から何かが接近してくる。

「ミヤアツ!?!」

何気に振り向いたタマはその正体に驚きの声を上げた。

それは艦娘が使用する “二式艦上偵察機” と言われる艦載機である。

「ミヤ、ミヤアアアアア!!」

突如追ってきた偵察機に、タマの飛行速度が上がった。

「マ、マズイ!」

ポケットにミケを入れていた少女の方もタマの視界で非常事態に気付く。

このままでは自身の存在すらバレる可能性も出てしまうからだ。

彼女はクロを投擲発艦させて、タマと共にある指示を伝える。

「よしっ! 追いついた!」

飛龍は飛ばした偵察機と視界を共有して、謎の黒い球体を追い掛ける。蒼龍によると、数日前から目撃されている謎の艦載機がアレなのでは、と推測されたからだ。

また、山岸提督からもその正体について出来れば解明して欲しいと言われていた。

「この先に艦載機の主がいるのね？」

偶然出会ったチャンスを逃さないよう、彼女は黒い球体に張り付くように追跡する。

「ん？ 上に？」

不意に黒い球体が上空へと昇っていき、いくつかある雲の1つへ向かった。

飛龍にとつて、その行動は恐らく雲を利用して逃げ切るつもりだと予測する。

案の定、それは少し大きめの雲に入り込んだ。

「この程度……二航戦を舐めないでね！」

彼女はそれが入っている雲周辺に偵察機を迂回させた。

痺れを切らして出てきたところを再度追うためである。

「さあ、出てき……えっ？ 何っ？」

それは偵察機に乗る妖精からの連絡だった。

妖精は『11時の方向に艦載機らしきものを発見』と伝えてきた。

「敵……って、あれっ!? いつの間に!？」



飛龍の目に映ったもの。

それは先程雲の中へ入ったはずの黒い球体が遙か先の上空を飛んでいたからである。遠くにいるそれはゆらゆら上下に揺れた後、後方へ振り向いて逃走を開始した。

「やられたっ！ 早く追わないとっ！」

彼女は距離的に最早追いつけないと諦めかけるが、僅かな望みを頼みにその方向へ偵察機を飛ばす。

「………ミヤア？」

偵察機が去った後、雲の中へ逃げ込んだタマが飛び出す。

少女がタマとクロに指示したこと。

まず、タマが偵察機を誘導し、素早く雲の中へ入って留まる。

次に遠く離れた距離からクロが発見されやすいように出現する。

これで相手はタマが瞬間移動したかのように錯覚すると少女は考え付いたのだ。結果、単純な策ではあったが、予想通りに偵察機はクロの方へと飛んで行った。あれだけ距離を引き離せば、あとはクロも簡単に逃げ切るだけで完了である。

「ミヤアアア！ ミヤアアア！」

「オカエリ、タマ」

まるでベそをかく子供のようには鳴くタマが少女の元へ帰還した。

彼女が右手でタマを撫でていると、別方向からクロも戻ってくる。

「ジャア、カエロウカ」

少女が2機をポケットに仕舞い、拠点の島へ向かつて航行を開始する。

その時、彼女の耳に微かなプロペラ音が入ってきた。

「ッ!？」

その音を聞いた瞬間、少女はすぐに海中へと潜り込む。

先程撒いたはずの艦載機が偶然こちらに来たからだ。

(危なかった・・・もうしばらく、この・・・ま・・・ま・・・)

潜っていた少女の思考がいきなり止まり出した。

彼女が何も考えられなくなった理由は、目の前にゆらりと現れた2 m以上の物体である。

人だったときに常識的に知っていた海の危険生物。

ある映画でも有名になった海の人食い魚。

“ホオジロザメ”

「ジヨ、ジヨオオオオオオオオズツ!!」

少女は持てる限りの力でその場から逃げ泳ぐ。

間近に巨大な人食い鮫が現れば、普通の人なら誰であろうと冷静で居られるはずがない。

彼女は喰われる恐怖のあまりに、艀装すら出さずに逃げてしまう。

「・・・?」

残されたサメはまるで興味がなさそうに泳ぎ続けた。

「ハア、ハア、ハア・・・」

全速力で海中を泳いできた少女は島の砂浜で仰向けに倒れていた。

彼女は必死なバタ足による高速潜水で逃げ切ったが、肩で息をするほど疲れ果てる。

「コ、コワカッタ・・・」

いくら外見は怪力持ちの幼子でも、人間だった感覚はまだ健在である。

途中、彼女の肩に黒いモヤモヤのような物体がぶつかると、それを気にするほど余裕がなかった。

「・・・チヨット、ミズアビシタイ」

夕暮れで赤く照らされるトラック鎮守府。

司令部の会議室。

その室内には多数の艦娘たちが集まっていた。

入口のドアから反対の壁には左側に地図、右側にいくつかある内容が書かれたホワイトボードが取り付けられている。

ホワイトボード付近の右端には、椅子と机が置かれ、そこにはこの鎮守府の提督である山岸 里子が座っていた。

山岸提督から見て、手前には第六駆逐隊の4人や白露、時雨、島風の駆逐艦たち。

その後方には戦艦である扶桑姉妹、金剛、榛名、大和の主力となる戦艦たち。

そして、右側に蒼龍、赤城、龍驤と、左側に加賀、飛龍の空母たちが立っていた。

「全員集まったようだな・・・」

特に整列もせず集まった艦娘たちと対面するように、秘書艦である長門が腕を組みながらそう呟いた。

「山岸提督」

「許可するわ」

「では、本題に入ろう・・・」

山岸から許しを受けて、長門は地図のある場所を指差す。

「ここ数日、この付近の海域で謎の黒い球体をした艦載機が目撃されるようになった。目標は我々に対して支援するような行動をしている」

「ウチらを手助けしてくれてるんなら、問題あらへんのでは？」

「それが無視できないから、こうやって会議をしているのだ」

長門は楽観的な龍驤に鋭い視線を飛ばした。

軽空母の彼女は慌てて視線を横に飛ばしながら口笛を吹き始める。

続けるように金剛が山岸にあることを尋ねた。

「HEY、里子おー！ 確か輸送船を護衛していたパラオチームも目撃したのネー？」

「その通りよ。まあ、話がややこしくなるから、あいつには知らせないよう口止めしてるわ」

「Wow！ それはGoodネー！」

高速戦艦の娘は何か嬉しかったのか、ダンスするように身体を左右へ揺らす。そんな彼女に呆れながら長門は話を進めた。

「それでだ。今回は提督の頼みもあって、本格的にこの艦載機の正体……恐らくそれを利用する主の発見をすることが決まった」

「はわわ!! 本当なのですか?」

「やったじゃないの!」

長門の決定事案に電や雷だけでなく、他の艦娘たちも驚きの声を上げる。

「明日からその任務を開始させる。これに行ってもらうのは……第1艦隊だ」

この鎮守府の主力である、第1艦隊のメンバー。

以前の旗艦は長門だが、現在は新加入したばかりの大和が旗艦として、艦隊をまとめる存在になっていた。

メンバーは、制空を得意とする一航戦の加賀と赤城に、スピードに秀でた高速戦艦の金剛や榛名と最速の駆逐艦である島風だ。

「二航戦として、二航戦の屈辱……晴らして見せます」

「うう、頼みます。加賀さん」

偵察機を撒かれてしまった飛龍のために、加賀が自信満々にそう意気込んだ。

蒼龍も面目なさそうに赤城へ頼みかける。

「赤城さん、私からもお願いします」

「任せてください！」

空母たちがバトンタッチする間、高速の艦娘たちの話にも気合が入った。

「HEY、榛名、島風！ 誰が先に見つけるか勝負ネー！」

「了解です、金剛姉さま。榛名！ 全力で参ります！」

「一番速い私が見つけるのー！」

帰国子女の戦艦に勝負を挑まれ、その妹は素直に答え、駆逐の少女は両手で抱える顔付きの連装砲を振り回した。

「・・・」

「どうした、大和。元気がないな？」

「あ、いえ・・・そういうわけでは・・・」

長門が何かを思い詰める大和の表情に気付いて声を掛けた。

「第1の旗艦でもあるのだ。お前がすっかりしてくれないと困るぞ」

「で、でも・・・頻繁に私が出撃して・・・問題ないのでしょうか？」

彼女は自身の燃費について把握済みなため、この鎮守府の財政を心配してくれていたのだ。

そんな彼女に山岸が優しく答える。

「大和、この鎮守府なら大丈夫よ」

「えっ？」

「このトラック鎮守府は最前線にあるの。そのために長門を含めた主力となる戦艦が多い」

「た、確かに……」

「そんな彼女らのため、他の鎮守府より多めに資材を供給している。あなたを維持するぐらい問題ないわ」

「山岸提督……」

「里子でも構わないって、許可したでしょう？」

そう微笑む山岸に、超弩級の戦艦は元気を取り戻す。

「は、はい。里子提督……」

「ふふっ♪」

長門がその姿を確認した後、力強い声で彼女らに任務を言い渡した。

「では、大和を旗艦とする第1艦隊は、明日の朝07:00（まるなまるまる）に目標である艦載機の主の搜索任務を開始せよ！」

「「「「了解っ！」」」」」

大和、赤城、加賀、金剛、榛名、島風が長門の指令を受けて敬礼する。



「次に、扶桑を旗艦とする第2艦隊は、第1艦隊の任務支援のため、同時刻に周囲の深海棲艦の掃討任務に当たれ！」

「了解っ！」

同じく指令を受けた、扶桑、山城、蒼龍、飛龍、白露が敬礼した。

「残る第3艦隊は待機！ だが、目撃情報によると鬼級の存在が確認されている。艦隊の支援のため、いつでも出撃できるよう準備しておけ！」

「了解（や）（なのです）っ！」

待機指令の内容に、龍驤、時雨、暁、響、雷、電が納得の敬礼で返す。

「最後に！ もし目標を発見した場合、何があっても絶対に攻撃はするな！ 本日はこれにて解散！ 明石と相談してから艤装チェックを済まし、明日に備えよ！」

長門の終礼で艦娘たちは会議室から次々と退室していく。

彼女らが出て行った後、山岸が長門にあることを伝えた。

「長門、万が一も考えて、第3が出ることになったら一緒に出撃しなさい！」

「なっ!? しかし……」

「島の防衛は別で手配済み。それよりも大和たちの話が本当なら……あの鬼級はまだいる可能性があるわ」

「そうだな……こちらの艦隊も世話になったのだから、この手で返してやらんと気が済

まない」

「手加減しないでね？」

「当然だ」

廊下を歩く第1艦隊の艦娘たちは搜索方法を話し合っていた。

そんな中、加賀があることを思いつく。

「そういえば、パラオの護衛艦隊が救援要請をした時にも現れたのね？」

「YES！ 龍驤たちが駆け付けたときには、もう逃げた後デース」

「なら・・・この方法なら見つけられるかもしれません」

「どうするのよ？」

島風がその案の詳しい内容を尋ねると、加賀は立ち止まって右手の人差し指を立てた。

「エサで釣り上げます」

一方、夜が訪れた島のある小さな滝壺では・・・。

「ヘップシッ！」

白き少女が身体に小さ目の白いシーツを纏っていた。

彼女は島にある唯一の湧き水の場所で身体と、着ていたワンピースと手袋、大人パンツな黒下着を洗濯する。

しかし、貨物船には彼女のサイズに合う服がなく、代わりに破けて小さくなったベッドのシーツをバスタオルのように身体へ巻いていた。

少女の肌がシーツと同じくらい白いため、遠目から見ると裸にも見えた。

(昼寝して、休憩したら遅くなっちゃった・・・帰ろう)

少女は乾いた衣服を持って、貨物船へと戻っていった。

## No. 07 ワナデオイカケツコ

島の入り江を照らし出す朝日。

その光が貨物船の船室の一つに差し込んだ。

「……ンウ……ンー！」

幼子の声が部屋から発せられる。

破けたシーツだけを纏う白い肌の少女。

「フウ……アツ……」

纏っていたシーツがはだけてしまい、白髪で大事な部分は隠れているが、少女の上半身がむき出しになる。

少女は慌ててズレ落ちたシーツで胸辺りを隠した。

（早く着替えよう……）

彼女は顔を赤らめながら身近に畳み置いていた服を着用する。

着替えと朝食（ヤシの実）を終えた少女は部屋の真ん中で寝転がっていた。

（そーいや……忘れかけていたけど……なんでこうなったのかな？）

少女は今までの出来事を思い返す。

何もない海で目覚めてから、元の自分とは異なる身体となり……。

何も分からず攻撃され、己の持てる限りの能力で戦って……。

そして、以前の記憶に覚えのある存在“艦娘”を目撃し……。

少女は彼女たちを手助けし始める。

（私は……こんなことをして……いいのだろうか？）

少女の疑問は次第に得体のしれない不安へと変わっていく。

誰も教えてくれないその答えを必死で探し出そうとする。

『ザザ……』

「ハッ!？」

そんな不安を募らせる彼女の耳に無線機の音が入ってきた。

それにより、少女は先程の考えが頭から消えてしまう。

「ウ~~~~ン♪」

彼女は寝たままの体勢から、左側へ寝転がるように回転していった。

いつものように起き上がり、ミトン手袋の右手で音量の摘みを弄り出す。

『こちら・・・艦隊の榛名で・・・』

「ハルナ？」

『しよう・・・任務中、敵の襲撃に・・・名が中破し・・・た。至急救援を！』

「オオー!? タイヘンダーー!」

そこまで聞いた少女は部屋から飛び出していった。

残された無線機からまだ声が響いていることを知らずに・・・。

『これで・・・つたので・・・姉さま?』

『Goodネ・・・る名ー! これで・・・てくるはずネー!』

『二人とも無線・・・切つて! 目標に聞こ・・・で控えてください!』

『Oh! しまつ・・・ネー! 加賀。早く切・・・』

島を離れた少女は海上で留まり、飛ばした艦載機たちの視界を見ていた。

(今日はどうなるかな?)

少女は持つてきた資料を確認し、艦隊の位置を搜索する。

「……ンツ……ミツケタツ」

本日の発見者はクロ。

海上に3人の艦娘たちが立っているのが見えた。

「アツ……」

それは少女の記憶に見覚えのある姿だった。

2人は弓胴着に飛行甲板と和弓を持つ正規空母の艦娘。

青い袴で頭の左側の髪を結っている女性。

一航戦で名高いベテランの空母 “加賀”

もう一人は赤い袴で長髪の女性。

大食いのイメージが強い、同じ一航戦の “赤城”

最後の3人目は少女が数日前に助け出した艦娘 “大和” である。

「ヤマト……カガ……アカギ?」

そこで彼女はある不自然さに気付く。

まず、艦娘たちはどこも損傷しておらず、無傷で元気な姿だった。

それと無線では、“ハルナ” という艦娘が救援要請をしていた。

クロの視界には空母2人と戦艦1人しかいない。その彼女の姿がどこにも見当たらないのである。

「バシヨ、チガッタ?」

少女は件の艦隊ではないと思い込む。

『ミ、ヤアアアツ!?!』

「ツ!?!」

そんな彼女の耳にクロの叫び声が響いた。

何事かと思つて少女がクロの視界を覗くと、一機の艦載機が通り過ぎる光景が見えた。

「エツ? マサカ・・・」

少女はそこであることを予想した。

あの無線連絡は呼び寄せるための囀。そして、今通り過ぎた艦載機は何かを探している。

考えられるのはただ一つ。

(私・・・罨に嵌った!?)

「見つけました」



サイドテールの女性がそう呟き、飛ばしている偵察機「彩雲」の視界を共有し始める。

発見した黒い球体が慌てる姿に、彼女は思わず笑みを浮かべた。

「追い込みます。赤城さん」

「了解です！」

彼女の隣に居た長髪の女性も、艦載機の一つである「零式艦戦52型」で追跡を開始する。

2機の艦載機に追われる黒い球体はやって来た後方へ逃げ出した。

『ミ、ヤアアア！』

「猫の鳴き声みたいですね」

「アレは三味線にもできません」

「つまり中身も食べられないのですか……」

冷静に追いかける加賀と少し涎を零す赤城。

後方で待機する大和はそんな二人を見て心配になっていた。

「大丈夫でしょうか……」

「ド、ドウシヨウ!? ドウスル!？」

少女はクロの視界を見ながら逃走する方法を考える。相手は昨日見た空母たちより、有名で手強い一航戦。生半可なやり方では見抜かれる可能性もある。

(そうだ！ アレを……)

彼女はある思いついた作戦を実行することにした。

まず、視界を戻して、左ポケットから木箱を取り出す。

その木箱に紐を括り付けながら、飛行する3機にある指示を伝えた。

2機の艦載機が逃げる黒い球体を追い掛ける。

それは上空から降下し、海上が見える高度で飛行し続けていた。

「雲を使わないようですね」

「二航戦と同じ手は通用しません」

飛龍の話聞いた2人は雲で撒かれないよう、2機の艦載機で追跡することを決めた。

「このまま主のところまで行ってくれ……えっ?」

「赤城さん? どうし……」

いきなり赤城の言葉が止まった。

そのことに加賀が不審に思っていると、黒い球体の向かう先にあるものが彼女の目に入った。

追いつける黒い球体と全くそっくりの球体がそこにも居たのだ。

しかもそれは紐を啜えて何かを引っ張っていた。

その紐の先には海面に浮く木箱があり、蓋がないので中身が丸見えである。

木箱の中には赤灰色の石ころが大量に入っていた。

「ぼ、ぼ……」

「赤城さん？」

「ボオオオオオキイイイイイイイイイイイイイイイイ!!」

突如、赤城が叫びながら走り出した。

まるで何かを見つけたかのようににはしゃぐ赤い空母。

加賀と大和は飛び出していった彼女に呆気にとられる。

「赤城さん!? ど、どうしたのですしょうか!」

「……やられました」

加賀は相手のとった方法をすぐに予測した。

追手である2機を撒くために、相手は空母の好物であるボーキサイト（エサ）を用意

したのだ。

結果、少し空腹気味の赤城が食らいつくこととなる。

(相手を釣るつもりが、まさか向こうも同じ釣りをしてくるとは……)

彼女は予想外の出来事に下唇を噛みそうになるが、その高ぶる気持ちを抑えた。

「ですが……まだ甘いですね」

追手の艦載機が1機減り、残った1機がクロを追い続ける。

少女はその光景を見ながら安堵した。

(なんとか赤城が釣れた……後はタマとミケを合流させれば……)

彼女は3機揃えば残り1機をなんとか撒くことができると思っていた。

「タマ、ミケ、クロ、シマニイクマデ、ニゲキツテ」

『ミャー!』

『ミャフ!』

『ミャー!』

大食いの赤城ならば食いつくであろう“アカギノエサ”による囮作戦。

それでなんとか数を減らすことに成功する。

「アトハ、ワタ・・・ッ!？」

少女は目を開けた直後、遠くからやって来たものに驚愕した。

「見〜つ〜け〜た〜!」

まるで水平線の彼方から一瞬でやって来た艦娘。

うさ耳リボンに露出度の高いセーラー服と超ミニスカート。

背中にはリュックのような魚雷発射管を背負い、後頭部・左脇・左手に顔が描かれた砲塔を所持している。

(島風!?)

「ヒイイツ!？」

少女は素早く回れ右して、駆け足で逃げ出す。

「駆けつこしたいんですか? 負けませんよ?」

駆逐の艦娘が逃げる白き少女を追い掛けていく。

これも加賀の考えた策の一つ。

艦載機で索敵すると同時に、高速での航行が得意な島風・金剛、榛名をそれぞれ別な方向へ向かわせた。

白き少女は知らずに、空と海上の大規模な搜索範囲の中へと入り込んでいたのだ。

「コ、コナイデー!!」

「待ちなさい!!」

無我夢中で走り逃げる少女。

それでも相手は最高速度40ノット（およそ時速72km）を誇る最速駆逐艦。徐々にお互いの距離が縮まっていく。

「おっそーい!」

（速すぎる!? これじゃあ、逃げ切れない! こうなったら・・・）

「トウツ!!」

「おうっ!?!」

不意に白き少女が海面へと飛び込んだ。

そのまま海中へ潜り込み、白い姿が段々と見えなくなっていく。

（此処まで追って来られないはず・・・）

幸いにも潜水艦の艦娘は見当たらず、海中まで追って来る駆逐艦も居ないだろうと少女は思っていた。

「私と同じ黒パン・・・じゃなくてっ! ザーるーいー!!」

海上に残された島風は、少女が海中へ潜ったことに腹を立てた。

あと少しで捕まえられたはずの目標に逃げられたから当然である。

「ハッ!」

駆逐の少女が前屈みになり、背中の魚雷発射管を逃げられた方向へ向けた。

「五連装酸素魚雷！行っちゃってー！」

先端が黒い魚雷が5本発射され、それらは全て海中の中へと進んでいった。

（んう？ 何の音？）

白き少女が謎の音に気付き、頭だけ後方へ振り向く。

「ブクウ!!? ギョライ!!?»

彼女のすぐ後ろから5本の魚雷が接近してきたのだ。

それらはまるで横一列のように並んで迫ってくる。

「ヤバイー！」

今から回避しようにも、近過ぎる上に広範囲な爆風を受ければただではすまない。

焦る少女はすぐさま左ポケットから燃料入りドラム缶を取り出し、自身の後方へ放り

捨てた。

一発の魚雷がドラム缶に命中し、他の魚雷を巻き込む程の大爆発を起こした。

爆発の中心に近かった少女が爆風による急な海流に流される。

「ドヒャアアアッ!!?»

「おおおうっ!？」

海上にいる島風もその大爆発による巨大な水柱を目撃した。

その衝撃は周辺一帯にまで響き渡る。

『なっ、何事!? 各艦、状況報告を!』

『私の方は何も無いネー! 加賀ー!』

『は、榛名は、何も無いです!』

『もぐもぐもぐ・・・こじゆま、はがぎ・・・』

『赤城さん。早く戻って来てください』

『島風さん、そちらは?』

様々な通信が飛び交う中、島風の通信機に大和の質問が入った。

駆逐の少女は気まずそうな顔で返答する。

「えっと・・・その・・・目標を見つけたんだけど・・・」

『・・・それで、その目標は何処に?』

加賀の問いに彼女はさらに委縮しながら答えた。

「走って追っかけたら・・・逃げちゃって・・・」

『あなた、まさか・・・目標に攻撃したの!?!』

「だ、だっつゝ! 追い掛けっこしてたのに、海の中へ逃げたんだもーんっ!」



最速の艦娘は相手がズルをしたと主張した。

そんな彼女の言葉に、加賀が呆れながらも説教する。

『指令内容の目標への攻撃は禁ずると、あなたは聞いていなかったのですか?』

「うっ……」

『命令無視な上に言い訳をしますか……帰投後、里子提督に貴方を懲罰するように申しておきます』

加賀の冷やかな言葉を聞いた島風が青ざめた。

「ひっ!? い、いやっ!! ちょ、懲罰は……アレ」だけはやめてええっ!!」

『もう遅いです。帰ったら覚悟なさい』

「そ、そんな……」

涙目になる彼女はその場で崩れるようにしやがみ込む。

その隣で浮かぶ顔つきの連装砲が悲しげな表情で寄り添った。

通信を終わらせた加賀がため息を吐く。

仲間の空母が餌に釣られ、目標を見つけるも最速の駆逐艦がそれを攻撃。

折角の彼女の策がほとんど台無しである。

「ふあがはん、はげしいまー」

「・・・お帰りなさい」

赤城が木箱を片手に何かを頬張りながら帰ってきた。

そんな空母の彼女らの元へ、飛ばした艦載機が戻ってくる。

それぞれ飛行甲板に着陸後、彼女らにある報告がされた。

「結局、撒かれたようですね」

「みひゃいでしゅね」

「早く食べ切ってください」

加賀が冷静な態度で大和の方へ目を向ける。

戦艦の彼女は何故か自信に満ちた表情であることを口にした。

「加賀さんの予測通りにいきました」

島の入り江に白い姿が海中から現れた。

それはまるで元気がなく、とぼとぼと貨物船に向かってゆつくりと歩いていく。

「ヒドイメニアッタ・・・」

あの大爆発後、白き少女はすぐに島へと泳ぎ帰った。

タマ達も逃げ切ったらしく、少女の後から遅れて無事に帰還する。

彼女は拠点である貨物船の船室に戻り、部屋の中心で寝転がった。

(撃たれた……)

少女は疲労よりも、艦娘から攻撃されたことに衝撃を受けていた。

彼女は身体が深海棲艦である以上、敵と認識されることは想像済みであった。

しかし、いざそれを体験してみると、少女の心は哀しみで一杯になる。

(これから先……どちらからも狙われるのかな……)

何とも言えない気持ちで少女の心が段々と苦しくなっていく。

『ザザ……』

「フエツ!？」

突如鳴る無線機の音に少女が飛び起きる。

あたふたと近寄って、いつも通りに音量の摘みを弄り出した。

『……がそうでしょうか?』

『間違いあ……せん。私が……た島です』

「エツ?」

聞こえてきたのは加賀と大和の声。

少女が気になったのは彼女らが話した内容である。

『各艦、島をほう……て! 絶……逃がさないように……』

「マサカツ!」

島の入り江への入口付近に、3人の艦娘たちが到着していた。

加賀と赤城は大和がこの島に見覚えがあることを聞かされる。

「色々と調査する必要がありそうですね」

「食べ物気配もします!」

「ま、まだ食べ足りないですか?」

赤城は木箱の中身を平らげた後、「デザートが欲しい」などと呟いていた。

「2人とも気を引き締めて。来る途中、潜水力級の残骸がありました。敵がいるかもしれません」

「そうですね。大和さん、あの球体はこの島の何処へ逃げ込んだのですか?」

「えっと、中央の座礁した船の後部辺りだと言っています」

「船がある? そこに居る可能性があるのね」

加賀がまるで勝利したかのような笑みを浮かべる。

これが加賀の考えた策の最後の一手。

最初の2機で追い詰めるのと同時に、実はもう1機「零式水上観測機」という偵察機が飛ばされていた。

飛ばしていたのは大和で、追跡が始まった時から遥か上空でその様子を見続けたのだ。

「こちら加賀。3人とも、準備はいいですか？」

『YES！ 問題ないネー！』

『榛名も大丈夫です！』

『・・・』

「島風、返事は？」

『・・・はい』

駆逐の艦娘から元気のない声が通信機に響く。

島の周りでは、右側に金剛、左側に榛名、向こう側に島風が海上で待機していた。

そして、島の正面である入り江の入口へと3人が向かう。

「目標は・・・どうしているのでしょうか？」

「ご飯を食べているのでは？」

「それは赤城さんだけです。きっと慌てているかもしれません」

一方の白き少女は・・・。

「ドウシヨー!? ドウシヨー!」

加賀の予想通りに部屋中を右往左往に走り回っていた。

3人が入り江の入口へ入ろうとした時だった。

彼女らの通信機に緊急の無線連絡が入る。

『第1艦隊! 聞こえるか!』

「長門さん!? どうかされましたか!」

大和が左手を耳に当てて、長門に話し掛けた。

『第2艦隊が奇襲を受けた! 敵は鬼級を含めた艦隊らしい!』

「鬼級……」

その言葉に彼女は右手の拳を握り締める。

『場所は例の嵐があった海域だ! 私と第3も向かう! お前たちもすぐに行け!』

長門からの通信が切れた直後、大和が島付近の艦娘たちに指示を下した。

「皆さん! 任務を変更します! 第2艦隊の救援へ!」

『What!? 目標はどうするデース!』

「仲間の救援が優先です! 全艦集結せよ!」

「聞こえましたか？ 榛名と島風も急いでください」

『了解です！ 加賀さん！』

『りよ、了解……』

彼女らは旗艦のいる場所へ集結後、全速力で島から離れていった。

「……タスカッター？」

少女は部屋の中で艦娘たちの話を大まかに聞いていた。

またも深海棲艦に襲われた艦隊。その彼女らの救援に大和たちも向かうことになる。

しばらくの間は島へやって来ないだろうと、少女は思った。

「……」

本当ならば彼女は助けに行きたいと思っていた。

けれども、少女は彼女らに攻撃されたことで、また撃たれるのではと恐れてしまう。

ここは大和もいる艦隊に救援は任せて、自分は待機しようと考えてる。

「フウ……」

静かになった部屋の中に、白き少女は座った状態で佇んでいた。

「……」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・デモ・・・・・・・・」

「ソレデモ、タスケタイ！」

数分経つてから、少女は生前にやってきたことを思い出す。

艦娘たちを指揮する提督。

たとえ極短い間とはいえ、人のために戦ってくれる少女たちと共に過ごした日々は忘れられなかった。

元人間であるならば、彼女らを手助けしたい。

そんな思いが不安で落ち込んだ少女の心に火を付けた。

「ンシヨー！」

少女は左ポケットからいつもの如く、燃料入りドラム缶を取り出して飲み始める。

「ンキュ、ンキュ、ンキュ、ンキュ・・・・・・・・」

いつもより多めに飲み込み、身体が火照りそうなほど体温が上昇した。

「クウ〜！・・・・マツテテー！」

彼女はドラム缶を仕舞い込み、部屋の窓から飛び降りる。

海上へ着地後、島風ほどではないが、疾風のような速さで航行し出した。



「イッテキマス!!」

白き少女は島の外へと飛び出していった。

誰も居なくなつたはずの島の木陰に、黒い右手のようなものがひらひらと手を振る仕草をする。

## No. 08 タスケタアトシマツ

少し分厚い雲に覆われた空。

太陽が殆ど遮られてしまい、水中が全く見えないほどの暗い海となる。

そんな海上で多数の砲撃音が鳴り響いていた。

「山城ー！」

「はいー！ 姉さまー！」

扶桑姉妹が主砲を発射し、2隻のリ級に砲弾を直撃させた。

水柱と共にリ級の腕艤装の破片が飛び散る。

「見つけたよ。姉さんー！」

「了解！ ーっけえー！」

白露と時雨は扶桑姉妹の護衛として、接近してくる潜水艦の迎撃に回っていた。

彼女らの左右ふとももに装着された魚雷発射管から四連続で魚雷が飛び出す。

発射された魚雷が一定の距離まで進むと、そこに潜んでいた潜水力級たちに着弾した。

「飛龍ー！ 雷撃よー！」

「面舵、一杯！回避!!」

雷巡千級から放たれた多数の魚雷が正規空母の2人へ向かっていく。

蒼龍がいち早く気づき、飛龍に回避するように促した。

攻撃を避けられた千級が左腕の砲身を構えるが、緑色の艦載機の機銃で邪魔される。

「そうは行かせんでー！爆撃開始やー！」

「ッ!？」

関西弁で喋る軽空母の少女が千級を指差す。

その直後に千級の上空から「彗星」と言われる艦上爆撃機が爆弾を投下した。

爆炎に包まれた深海棲艦は跡形もなく吹き飛ぶ。

「第六駆逐隊！単縦陣！」

「行くわよー!!」

「了解！」

「はいー!!」

「なのです！」

先頭を航行する長門に続いて、駆逐艦の4人が縦に並ぶよう陣形を整えた。

「全主砲、斉射！て——っ!!」

「やあ！」

「ウラーー！」

「つてー！」

「なのでーすー！」

5人の艦娘たちはそれぞれが持つ砲塔で、右側へ向かつて一斉に砲撃する。

その砲弾が向かう先には、巨大な影を守るかのように留まる深海棲艦たちが居た。

多数の駆逐イ級や駆逐ハ級だけでなく、何故か砲撃しない戦艦ル級たちも防衛に回っている。

放たれた砲弾により、敵の駆逐艦は数隻が沈み、敵戦艦の方はいくつかの砲塔が損傷した。

(・・・何故撃つて来ない?)

長門は遊撃する敵ではなく、防衛に回る深海棲艦の艦隊に目を向ける。

その中心に居るのは、どの深海棲艦よりも大きい存在。

鬼級と言われる強大な力を持つ深海棲艦のボスでもある。

それは人を丸呑みできそうな巨大な口からは赤い光が漏れ、左右に白い腕も付いている。

その腕の上部辺りに、巨大な三連装砲と副砲サイズの三連装砲を装備。

さらに巨大な口の真上には、白い人の姿をしたツインテールの女性が生えていた。

(・・・チガウ・・・コレデハナイ・・・)

白肌の彼女は鉤爪の腕を組みながら何かを待つ仕草をし続ける。

「・・・ツギダ」

鬼級の女性がそう呟くと、彼女を防衛する艦隊の付近に、更なる深海棲艦たちが浮上した。

その数は20隻。

駆逐艦だけでなく、軽巡ホ級や雷巡チ級、重巡リ級などである。

それらは防衛をせず、戦闘を行う艦娘たちに襲い掛かった。

「新手だど!? 全艦迎撃態勢!!」

「皆さん! 一度下がって!」

長門と扶桑が艦隊に指示を与える。

その時、彼女らの頭上を多数の艦載機が通り過ぎた。

それらは向かってくる敵艦隊に大量の爆弾を投下していった。

次々と爆破されていく敵の姿に、長門は通信機に向かつておもむろに叫ぶ。

「第1艦隊!? 来てくれたか!」

『遅くなって申し訳ありません』

彼女の通信機から大和の声が響いてきた。

長門たちの艦隊の後方から、6人の艦娘たちがやって来る。

前方に弓を構えた加賀と赤城を中心に、先頭に金剛、左右に榛名と島風、殿に大和という輪刑陣を組んでいた。

「状況は!?!」

「駆逐艦と巡洋艦は攻撃してくるが、鬼級とその取り巻きは静観したままだ!　こちら  
の損害は軽微!」

長門と話す大和が鬼級の深海棲艦に目を向ける。

「!?!」

そこで偶然にも彼女と白い女性が視線を交わした。

(あれは……あの時の!?)

(ナ、ナゼ……ナゼアイツガ!　シズンデイナイ!?)

互いの目が合ったことで状況が変わり始める。

「全艦!　アレの砲撃に注意せよ!」

大和はいつでも主砲が放てるよう身構えて、他の艦娘たちに注意を促した。

「シブトク、イキテイタカ……ナラ、コンドコソ……」

白き女性が組んでいた腕を広げて、深海棲艦専用の電気通信にある暗号を送った。

受け取った取り巻きの深海棲艦たちが攻撃体勢に入る。

「いかん！ 全艦退避せよ!!」

いち早く動いた長門が回避するよう指示した。

艦娘たちは2, 3人程度で固まりながら、敵の砲撃から逃れられるようその場から散開する。

雨のように撃たれた敵の砲弾が彼女たちの居た海上に着弾していった。

「マズハ・・・アレネ・・・」

白い女性が右側へ目を向ける。

そこには黒い戦闘帽を被った駆逐艦の2人が航行していた。

その内の紺色の長髪をした少女の後方で、海中から黒い三連装砲がゆつくりと出現する。

「っ!? 暁ちゃん！ 後ろ!!」

「へっ?」

艦載機で戦場を上空から見ていた赤城が暁を狙う存在に気付く。

彼女が声を掛けると同時に、その存在に気付いたもう一人が暁の元へ向かった。

2人が合わさった瞬間、暁の目の前で砲撃による爆発が発生する。

「あゝ ああああっ!!」

「ひ、響いいい!!」

その砲撃で直撃を食らったのは、暁と同じ容姿で白髪の少女。

爆発の衝撃で倒れそうになった少女を、姉の暁が慌てて後ろから受け止める。

「響！　なんで……」

「ぐっ……う……」

白髪の少女は服の大半が破れてしまい、身体のうちこちには傷ができていた。

艦装である背中の砲塔や腰回りの魚雷発射管も使い物にならないほど破損している。

「もう……」

「えっ?」

「もう……目の前で……沈まれるのは、見たくないから……」

「響……あなた……」

暁が傷付いた妹を抱き締めていると、撃ってきた場所から巨大なものが浮上してきた。

「そんな……」

「こ、こんなの、不幸すぎるわ……」

扶桑と山城がその正体に嘆きの言葉を漏らす。

そこに出現したのは、あの鬼級と全く同じ姿をした深海棲艦。

響を撃ったのもそいつの副砲によるものだった。



「Shit! 榛名! 伏せるアース!!」

「はいっ!」

暁たちとは反対側に退避した金剛も隠れ潜む敵に気付く。

榛名も同じように三連装砲で砲撃されるが、事前に察知した金剛の指示で直撃を免れた。

襲つてきたその相手も先程と同じ鬼級の深海棲艦だった。

「山城の言う通り、不幸になりそうだね」

「ちよ、ちよ、ちよつと! 何で3隻も鬼級が居るのよ!」

時雨の隣に居た白露が現れた深海棲艦たちへ交互に指差した。

それを聞いた取り巻きの居る白い女性はその質問に答える。

「スコシイタイケド、ワタシノ、カラダノイチブヲ、ヒキチギツテツクツタ」

「引き千切つて・・・作つた?」

大和たちがその信じ難い言葉に目を見張った。

しかし、目の前にいる3隻の鬼級は事実である。

「・・・」

「ハンノウハ、ニブイケド・・・チュウジツニ、ウゴイテクレルワ」

白い女性が艦娘たちへ右手を向けると、虚ろな目をした鬼級たちが砲身を構えた。

「ホントウハ、ワタシヲウツタヤツニ、ツカイタカッタケド・・・」

「撃った奴？」

「シズンデイナカツタ、オマエヲ・・・コンドコソ！ シズメテクレル!!」

彼女は大和に向かってそう宣言し、他の深海棲艦たちと共に砲撃を開始する。艦娘たちも回避しながら敵艦隊へ反撃を行った。

「くっ！ 金剛さん！ 榛名さん！」

「了解ネー！ 大和ー！」

「了解！ 全力で参ります！」

3人は敵艦隊を統率する白い女性へ砲身を向ける。

彼女らは装填が完了した後、一斉に砲撃を開始した。

「第一、第二主砲。斉射、始め！」

「撃ちます！ Fire〜！」

「主砲！ 砲撃開始!!」

放たれた砲弾が真つ直ぐ目標の敵に向かっていく。

そのまま命中するかと思われたが、いきなり現れた戦艦ル級たちに阻まれた。

「!!?!!」

「ヨソミシテイテ、イイノカシラ？」

そう言った彼女の見る先には、大破した響を抱える暁の姿があった。

長門は2人が狙われていることに気付き、大声で彼女らへ向かって叫んだ。

「暁！ 響を連れて離脱しろ!! 雷！ 電！ お前たちもだ!!」

「当然よ！ 響！ 行くわよ！」

「もちろんよ！」

「暁ちゃん達を守るのです！」

2人を守るように、姉妹の駆逐艦たちが援護に回る。

「蒼龍！ 飛龍！ 4人を援護しろ!!」

「了解！ あの娘たちには手出しはさせない！」

「よしっ！ 零式艦戦！ 行って！」

指示された空母たちが矢を放ち、緑色の艦載機を上空へ飛ばした。

「フハハハ！ アマイワ！」

白い女性が笑い声を上げると、彼女の後方から菱形で赤く光る艦載機が多数飛来してくる。

それらは蒼龍たちの艦載機を次々と落としていった。

「なっ!!?」

「そんな・・・何処から!?!」

白い女性の大きな下半身の後方から、赤い目をした四つん這いの深海棲艦が姿を現す。

「軽母又級?! 後ろに隠れていたのか!」

長門が歯を噛みしめている間に、駆逐艦たちの制空権が危うくなっていく。

加賀や赤城、龍驤も艦載機を飛ばそうとするが、虚ろな鬼級の砲撃によつて邪魔されてしまう。

「マズハ・・・オマエノ、タイセツナナカマガ、サキダ!!」

「だめええ!! 暁ちゃん! 響ちゃん!」

大和が叫ぶも、1隻の虚ろな鬼級が2人に向けて無慈悲に砲弾を発射しようとする。

雷と電がそれを止めようと撃つが止まらなかった。

「暁いい! 響いい!」

「暁ちゃん! 響ちゃん!」

「くっ!」

「っ!」

暁は襲い掛かる砲撃から響を守るため、彼女を庇うように抱きつく。

敵の砲撃の音が鳴り響いた瞬間、彼女らの後方から白い影が飛んできた。

「……えっ?」

「……っ?」

目を閉じた2人は、敵の砲弾がいつまで経つても来ないことに疑問の声を上げる。着弾した音すらその耳で聞いたのに、彼女らの身体にその衝撃はなかった。

恐る恐る彼女らが目を開けると、そこには信じられないものが目に入る。

「!?!」

「フウ……ケホツ、ケホツ、イタイ……」

そこに居たのは、白い姿をした赤い瞳を持つ少女。

両手を交差して、2人を守るかのように目の前で立っていたのだ。

そんな光景に艦娘だけでなく、深海棲艦の鬼級まで唾然とする。

「あ、あれは……」

そんな中、大和だけは彼女の姿に見覚えがあった。

敵に轟沈させられた際に、沈みゆく自身の目の前に現れた白い影。

それと似ていた存在が暁たちの前に現れたのだ。

「ナツ・・・ナゼオナジ、シンカイセイカンガ!」

一同が驚き過ぎて動きが止まっている間、白き少女だけが動き始める。

彼女はスカートの中の後ろ辺りから、赤黒い艀装を出現させた。

右側にある砲塔を右手に取り、暁たちを狙った虚ろな鬼級に向けて砲弾を放つ。

「・・・!」

轟音と共に鬼級が大爆発を起こした。

気付けばその鬼級は人型のあつた部分が抉れるように吹き飛ばされていた。

残つた下半身は制御を失つたかのように沈んでいく。

「なっ!? い、一撃で・・・鬼級を!」

「What!? どういう威力なのネー!」

「あ、あれは一体・・・」

長門、金剛、扶桑たちも驚きの声を上げた。

そうこうしている内に、少女は左手を白い女性たちがいる艦隊へ指し伸ばした。

「バクダントウカ!!」

彼女がそう叫ぶと、敵艦隊の真上から爆弾がいくつも落ちてくる。

何も出来ずに撃破される深海棲艦たちに、大和が我を取り戻した。

「はっ!! 今です!! 長門さん! もう一隻の鬼級へ集中砲火を!!」

「よ、よし！ 艦隊、この長門に続け！」

長門を含めた戦艦の艦娘たちが虚ろな鬼級へ一斉に砲撃する。

対処しようとするそれは動作が鈍いためか、反撃することができずに叩きのめされた。

「チツ！ イマイマシイ!!」

白い女性が左右の砲塔を構え、大和に向けて砲弾を放つ。

それに気付いた白き少女が高速で移動し、大和を庇うようにその砲撃を受け止めた。

「あっ!？」

「ムウ〜イタイ〜」

（痺れるほど痛いけど・・・我慢できるー）

彼女はお返しと言わんばかりに右手に持つ艦装で砲撃する。

白い女性は左側の副砲を破壊されながらも、現れた白き少女の存在を理解できずにいた。

「グウウツ！」

（コノオトダ！ コノハウゲキニ、ワタシハ・・・ダガ、ナゼコイツガ!?!）

焦る彼女は後方で更なる爆発音を聞き取る。

何事かと思つて、その方向へ目を向けると、赤い目の軽母又級が大破していた。

「あなたも余所見してましたね」

「私達のことをお忘れですか？」

「隙ありやで！」

加賀たちによる空母の艦載機が、白い女性の取り巻きたちを落とす始めたのだ。すでに深海棲艦側の艦載機は全て撃墜され、制空権は奪取されていた。

最早、鬼級である彼女は不利な状況に陥っていた。

「ティツ！」

「ギャアアアアアッ!!」

白き少女の砲撃で白い女性の右側の砲塔が全て失われた。

その爆発で右腕すら吹き飛び、凄まじい痛みで苦しみ出す。

「とどめだ！ 全艦、主砲斉射!!」

長門の号令で戦艦及び駆逐艦による砲撃がされた。

残った取り巻きの艦隊もその砲撃で全て撃沈し、白い女性も多数の砲弾が直撃する。

「グガッ！ ガアア!?! ア、ア、ア、ッ!!」

彼女の下半身にもダメージが入ったため、海面に浸りそうなくらい前のめりになる。

最後の抵抗もできず、彼女は憎々しく白き少女へ睨みつけた。

「ッ!?!」



そこで鬼級の女性は何かに気付き、残った左腕で少女の姿を掴み取ろうとする。

「マサ……カ……オマ……ハ……ナ……タ、ハ……イ……」  
「カエレ——ッ!!」

轟音と共にそれは巨大な爆炎に包まれた。

煙が晴れた後、そこには深海棲艦の残骸のみが漂っていた。

「……フウ……アツ」

戦闘が終わり、白き少女が冷静さを取り戻す。

彼女が後ろへ振り向くと、多数の艦娘たちが彼女自身にくぎ付けとなっていた。

「……」

（そ、そういうば……この後のこと何も考えてなかった……）

どうしようか迷っていると、彼女の頭上からタマたちが戻ってくる。

「ミャー！」

「ミャフー！」

「ミャー！」

「……オカエリ」

少女がタマたちを右ポケットへ入れる最中、遠くに居た島風が声を上げた。

「あ——っ！ 私が追っかけた目標!!」

「ヒッ!?!」

最速の艦娘の大声で少女は居ても経っても居られず、その場から後方へ逃げ去ろうとする。

「赤城さん！ その娘を止めて!」

「は、はいっ!」

大和の指示で少女から一番近かった赤い空母が動き出す。

すぐに追いついた彼女は、左手で白き少女の右手を掴み取った。

「捕まえました!」

「アッ!?!」

（やば・・・そ、そうだ!）

少女は自由な左手でポケットから木箱を取り出す。

「コレアゲルカラ、ハナシテ」

「離しました!」

「!!!」  
「離すなバカタレ〜!!!」  
「!!!」

一同の怒りの言葉を聞かずに、少女より木箱（エサ）を優先する大食空母。

少女は再び逃走しようと走り始めた。

「待って！」

「アウツ!？」

またも少女の右腕が掴まれる。

次に彼女の腕を掴んだのは、いつの間にか来ていた戦艦「大和」だった。

「ハ、ハナシテ……」

「お願いです。話を聞いてくれませんか？」

「ヤア……カ、カエル……」

少し涙目になる少女の懇願で、大和は思わず手を離しそうになる。

それでも彼女は助けてくれた少女と話がしたいがため、逃さないようその手を握った。

一方の少女は……。

(お、怒られる！ 胸元見たことを！)

混乱しているために、見当違いな考えで必死になっていた。

「大丈夫だから、落ち着いてっ」

「カエル——!!」

南方棲戦鬼が率いる艦隊の殲滅に成功し、白き少女と艦娘が出会った日から二日後。朝日が照らすトラック鎮守府。

その司令部の執務室では、ポニーテールの女性提督が机に座り、目の前に立つ秘書艦の長門と話していた。

「それにしても・・・あんな小さな娘が艦隊を支援していたなんて・・・」

「我々も驚いたものだ。しかも・・・」

長門はある一枚の書類を手に取り、それに書かれている内容と写真を見つめる。

「姫級・・・深海棲艦の中で最も危険だと言われている存在・・・」

「写真はぼやけているけど、間違いないでしょ？」

「ああ、間違いない」

そこに書かれているのは、ある深海棲艦についての詳細である。

『北方棲姫』

“ほっほっせいぎ”と命名されたそれは、小さいながらも凄まじい火力と航空攻撃を

所有していた。

過去に目撃されたのは、日本列島より北方方面のアリューシャン列島付近である。

ある横須賀出身の艦隊がAL作戦で北方方面へ向かった際、初めてその存在が確認された。

しかし、何者をも寄せ付けない手強さと天候の悪さにより、撃破にまでは至らず。

結局、存在だけが確認された後、それからの目撃情報は一切入ってこなかった。

「一度しか確認されていない存在ねえ」

「どうして、こんな南下した場所でそんな存在が……」

「さあね。大本営から取り寄せた資料はそれしかなかったわ」

山岸提督がお手上げの仕草で首を振る。

長門はその資料を机に置き、更にある話を進めた。

「それと山岸提督」

「里子よ」

「ぐっ……さ、里子提督。あの少女の居た島なのだが……」

「そつちも厄介だわね」

先日、山岸提督が自ら艦娘を引き連れて、北方棲姫の居る島へと訪問した。

彼女は少女が支援してくれたことに、どうしてもお礼がしたかったのだ。

そんな理由により、訪れた島で彼女らは更なる驚きに直面する。

それは北方棲姫が拠点として扱っている貨物船のことである。

「まさか、1カ月前に消えた幽霊船があつたなんて……」

「正しくは密輸船だが……」

貨物船の名は『はまぐり』積載量は250,000トン以上もある超大型の船。

この船は、ある少将の所有物で横領された資材を溜め込んでいたと言われていた。

ある日、その少将がある事件を起こしたことにより、その所有物である貨物船も証拠として捜索された。

船はすでに出港し、その行方は探されていたが、何故か捜索が打ち切られてしまう。

後に船の救命ボートが発見されるも、乗組員も船自体も行方不明扱いとなる。

提督と艦娘たちは白き少女に案内されて、貯蔵されていた資材の膨大さに声を失う。

「どれくらいあつたと思う?」

「……少なくとも……この鎮守府の倉庫では足りないかもしれない」

「凄いわね。大和を出撃させても1年は持つかもね」

「それほど保つかどうかは……」

ちなみに少女から土産として、いくつかの資材を手渡された。

山岸は彼女からおまけで渡されたヤシの実が気に入っていた。

「さて、今後どうするかよねえ．．．あの娘と船．．．」

「．．．このことを大本営に伝えるのか？」

長門の質問に山岸が目を閉じ、再び見開いてから答える。

「まだ伝えるべきではないわ」

その答えに長門が安堵の息を漏らした。

「今日はある程度の報告書を書かないといけないわ」

「．．．」

「．．．．．．．．．長門、何処へ行くの？」

さり気無く去ろうとした秘書艦を山岸が呼び止める。

彼女はまるで金縛りになったかのように、動いていた身体が硬直した。

「．．．あなた、今日はここで仕事するはずよ？」

「い、いや．．．私は．．．．．．．．．そうだ！ 哨戒任務を誘われて．．．」

「それは第2艦隊の扶桑たちに行かせたわ．．．」

「そ、それなら第3の遠征で．．．」

「そつちは、大和が旗艦で例の島へ行くと行っていたわよ？」

あたふたとしやべる長門に、ポニーテールの提督が鋭い答えを出す。  
そこで山岸はある確信を口にした。

「あなた・・・あの娘に会いに行きたいのね？」

「あつ・・・いや、その・・・」

「許可しないわ」

彼女は島へ行きたいという長門へ慈悲の無い決定を下す。

思わず俯く秘書艦が涙目で机にしがみ付いた。

「酷いぞ！ 里子！ あんな可愛い娘を私に会わせないなんて!!」

「昨日会ったばかりでしょう・・・」

「もっと愛でたいのに!!」

「それやり過ぎて、大和から止められたでしょう・・・」

「島風の言っていた黒パンツも確認できていな・・・」

「それは絶対に許可しないわ!!! あなた何を言っているのよ!？」

「うわああああん!! 愛でたい!! あのホッポを愛でたいく!!」

「どこでこんな症状を患ったのかしら・・・」

その日、執務室から悲痛な泣き声が長時間響くこととなる。



同じ頃、トラック鎮守府の営倉にて。

「んう〜!!」

営倉の一室にて、一人の艦娘が唸り声を上げていた。

その部屋は広々として、余計な家具は置かれてなく、ドアの覗き窓と外が見られる大きな窓には強固な鉄枠が付いている。

その部屋の中心に、金髪でウサ耳リボンを付けた少女が四つん這いになって何かを並べていた。

右手に持つ黒い長方形の立方体。

それはドミノと言われるもので、彼女はそれをぶるぶると痙攣する右手で並び置こうとする。

(もう少し・・・あともうちょっとで・・・)

少女はどうかその一つを置くことに成功する。

「あと、あと30個置けば・・・えっ!?!」

彼女がそう呟いた時だった。

突如、外の方でゴトゴトと鳴るトロツコが通り掛かる。

その振動は島風のある部屋全体へ伝わった。

「ああっ!？」

そんな軽い振動によって、彼女が今まで並べたドミノが殆ど倒れてしまう。その光景に彼女はがっくりと項垂れた。

「あとちよつと・・・あとちよつとで出られたのにつ!!」

これが島風専用の懲罰『賽の河原』

速いが取り柄の彼女にとって、窮屈な上にこの地味な作業は苦痛であった。

一定期間、彼女はこの限られた空間で過ごさなければならぬ。

ただし、ドミノ「1万個」を並べることができれば懲罰免除することができる。

なお、部屋のすぐ隣にある外には、倉庫から工廠へと繋がる線路が敷かれていた。

少女は昨日の深夜から徹夜して、9千近くのドミノを並べ終えたところだった。

すでにその目はクマができ、寝ていないために身も心も困憊しきっていた。

「なーんぞーよー!」

間に合わなかったようですね。先程、明石さんが本日の作業を始めましたから」

通り掛かった加賀が彼女へ冷ややかな事実を告げた。

「もう嫌・・・また崩されるじゃない!!」

「命令無視した罪からは簡単に逃れられませんよ」

「いや————!!」

別の部屋では赤城が正座のまま眠りこけていた。

同時刻、例の島では・・・。

「タマちゃん、こつちなのです〜」

「ミヤ！ ミヤ！」

「ちよつと！ ミケ！ 止まりなさい！」

「ミヤフウウウ！」

入り江の砂浜で艦載機と戯れる雷と電。

「いっぱい採れたね」

「ミヤ！」

響はクロと共に付近に自生していたヤシの実を集めていた。

「このレディーを虜にするヤシの実ジュース・・・もう一杯よ！」

暁は用意されたヤシの実を次々と飲み始める。

「暁ちゃん、そんなに飲むとトイレが近くなっちゃいますよ」

「お漏らししても知らへんでー」

「し、失礼ねっ!!」

近くで同じようにヤシの実ジュースを飲む大和と龍驤が注意した。

「アカツキ」

「な、何よ？」

「トイレ、ココナイ」

「………嘘でしょう!?!」

大和の隣に居た北方棲姫が衝撃の事実を言った。

貨物船に一応トイレはあったが、野外であるこの島ではトイレは存在しない。

「じゃ、じゃあ何処ですればいいのよ？」

「クサムラ」

「レディーがそんなこと出来るわけじゃないでしょうが!」

大声を出す彼女の身体に早速異変が訪れる。

「うっ!?! や、やばい……本当に来た……」

戻って来た響が姉の悶える姿で察した。

「暁、付いて行ってあげるよ」

「ひ、一人で行けるわよ！」

「アカツキ」

「今度は何よ!？」

「コノヘン、ヘビ、イルカラアブナ……」

「やっぱり付いてきて響いい!!」

駆逐の姉は次女の手を引つ張つて、草むらの方へと走り出す。

その様子を見ていた大和と龍驤が笑い出した。

「なんや言うてもお子様やなー」

「そこが可愛らしいです」

(見栄を張る子どもって、あんな感じなのかな?)

北方棲姫は先程の様子を呆れるように見ていた。

そんな彼女の元へ大和が近付き、その小さな身体を抱き寄せる。

「フエツ!？」

「ふふふ♪」

突然抱き寄せられたことに、白き少女は戸惑いを隠せなかった。

「色々と感じたい気持ちでいっぱいです。ホッポちゃん」

「ヤ、ヤマト……」

「私だけでなく、あの娘たちを助けてくれて・・・本当にありがとう・・・」  
白き少女は超弩級の戦艦からの感謝より、超弩級な胸が頭に当たっていることに意識が向いてしまう。

それによって、彼女の白い顔が紅潮していく。

(凄い重量が・・・)

それを見ていた龍驤は大和の胸を羨ましそうに見つめる。

## No. 09 ダレカウワサシタ?

07:00 (まるななまるまる)

トラック鎮守府にある工廠前の広場。

山岸提督の前に、大和を中心に時雨、白露、扶桑姉妹、二航戦の2人、第六駆逐隊の4人が整列していた。

そんな彼女らの元へ、工廠の出入り口から桃色の長髪をした女性が走ってくる。

彼女は艦艇の修理や艀装の改装を担当する工作艦「明石」

艦娘たちの命とも言える艀装を支えるこの鎮守府で欠かせない存在だ。

「遅れました！ 申し訳ありません!!」

「5分前集合だけど、ちようど時間だから問題ないわ」

山岸は持っていた懐中時計を上服に付いている右側の横腹ポケットに入れる。

彼女の左隣へ明石が慌てて並び立った。

「では、本日の予定を伝えるわ」

山岸は集まった艦娘たちを再度見回して、今日の予定を彼女らに言い渡す。

「大和を旗艦とした第2艦隊は、輸送担当の第3艦隊を護衛せよ」

「「「「了解っ！」「」」」」

大和、扶桑、山城、蒼龍、飛龍、白露がその場で敬礼した。

「残る第3艦隊となる時雨と暁たちは、明石を旗艦にし、彼女の物資を例の島まで輸送せよ」

「「「「了解（なのです）っ！」「」」」」

時雨、暁、響、雷、電がしつかりと敬礼した。

彼女らに指示を与えた山岸は、左側に居る明石の方へ振り向く。

「明石、頼んだわよ」

「お任せください！」

工作艦は元気よく敬礼し、すぐにその場から工廠へと戻っていった。

08:00（まるはちまるまる）

島の貨物船内部にある船室にて。

「スウウウピー……」

『ザザ……』

「フワッ!?」



寝息を立てる白き少女の傍にあつた無線機が鳴り出した。

その音ですぐに覚醒した彼女は、仰向けのまま足で蹴つて移動する。

「ンシヨ、ンシヨ、ン、アイタツ」

少女は頭から進んでいたため、無線機に衝突してしまふ。

彼女は頭の当てた部分を摩り、起き上がつてから無線機を操作した。

『……ツポちゃん!……ますか?』

「ヤマト?」

『もうすぐ……まに到着し……』

「モウ、ソナナジカン!」

白き少女は急いで立ち上がり、部屋の窓から飛び出る。

「トウツ!!」

彼女が入り江に向かつて飛び込んだ瞬間、その着地する海上にはすでに艦娘たちが到着していた。

そして、少女が着地する地点には………駆逐艦“電”が立っていた。

「はわわわっ!」

「イナツマツ! ドイ……」

「フギヤアアツ!!」

ダイナミックに激突した2人はその衝撃で気絶してしまふ。

仰け反るように倒れる少女たちは、海面で仰向け状態のまま浮かんでいた。

「ホ、ホッポちゃん！ 電ちゃん！」

「ちよつと、何やってるのよ!？」

「ハラショー」

「まさに雷の如く……って、私じゃない!!」

大和と暁が倒れた2人の元へ駆け寄り、響と雷を含めた他の艦娘たちは呆然と見ていた。

砂浜の日陰で座る北方棲姫と電の額にバツテンの絆創膏が張られる。

周りには傘を持つ大和と残りの駆逐艦たちが集まっていた。

扶桑姉妹と二航戦の4人は島の周辺を見回っている。

「ゴメン、イナツマ」

「いえ……電が避けなかったのも悪いのです」

互いに謝罪し合っていると、明石がある物を抱えてやって来た。

彼女が手に持つそれは白い靴だった。

「初めまして、ホツポちゃん。明石と申します」

「アカシ? ハ、ハジメマシテ」

「提督から話は聞きました。まずは、これを履いてみて」

明石は手にした白い靴を少女の前に差し出す。

彼女はその靴を手に取り、自身の素足に履かせた。

「オオー!?!」

「どうかしら?」

「ピツタリ! ハキゴゴチイ!!」

白き少女はその場で立ち上がり、2、3回足踏みをする。

「ご満足いただけただけでしょうね。元は第六駆逐隊の予備でもある艦装の靴だけど、少し改良してから白く塗装したもののよ」

「電たちとお揃いなのです!?!」

「オソロイダツ!」

「海上を航行するだけでなく、海中に潜っても問題ないわ」

「タメシテミル!」

彼女はそう言って、入り江の浅瀬へと走り向かう。

その海上を優雅に航行し、潜れる場所の海面へ勢いよくダイブした。

少女は今までの移動に支障がなく、海中へ潜っても水が入らない靴に驚く。

(もう痛い思いをしなくて済む……)

再び海上へ浮かび上がってから、大声で明石に向かって叫んだ。

「アカシー！ アリガトウー!!」

「どういたしましてー!!」

お礼を言われた工作艦は嬉しそうに手を振る。

「さて！ 早速作業を始めるとしますか！」

明石を含めた艦隊が島へ来た目的。

それは山岸提督が北方棲姫にお礼として、何か欲しいものがないか聞いたことが始まりだった。

まず一つ目は、彼女はずっと素足だったことで、少々痛い思いをした経験があった。

そのため、海を走り、潜っても問題のない靴を欲しがった。

これは鎮守府に居た明石の技術ですぐに開発できた。

次に求めたものが、貨物船への出入りが楽にならないか、である。

提督たちも少女の手作りエレベーターに驚いたが、不安定さと一人ずつという問題が明らかとなった。

そのことを明石に相談してみると、島へ昇降機を持っていく提案を出してきたのだ。結果、明石たちは組み立て式の昇降機を島まで輸送することになった。

彼女の徹夜してまで作ったそれは鎮守府の資材が使われている。

大和と北方棲姫が見守る中、貨物船の右側で明石と駆逐艦たちが作業を開始した。

一方、トラック鎮守府内の執務室では・・・。

「助かるわ。金剛」

「YES！ 里子おー！ これぐらいノープロブレムデース！」

高速戦艦の金剛が山岸の書類整理を手伝っていた。

「それにしても、長門はどうしたのネー？」

「あの娘は昨日から寝込んでいるわ・・・」

「ほ、Why? ど、どういふことデース？」

彼女の質問に山岸はため息を吐くかのように答える。

「いつもの病気よ・・・」

「あ、I see (なるほど)・・・」

秘書艦 “長門” は先日の出来事から立ち直れず、仕事を終えてから不貞寝し続けた。

時節、唸るような泣き声が部屋から聞こえてきたと、隣部屋の扶桑姉妹が文句を呟いていた。

「そ、それより、里子おー！ さっきNew faceが登場したと連絡があつたデース！」

「そうだった！・・・それに彼女らもやって来る頃だわ」

山岸は慌てて机に散らばつた書類を片付け始める。

「金剛、冷たい麦茶を3つ用意して！」

「了解デース！」

「里子提督、新しい艦をお連れしました」

数分後、執務室に榛名が3人の艦娘たちを引き連れてやって来た。

1人目は、黒髪の長いポニーテールをし、白手袋に白のセーラー服と赤いスカートを纏う長身の女性。

2人目は、黒髪のショートヘアで左目に眼帯と頭部左右に龍角のような艤装が付いている。

服装は黒服に短いスカートと黒いニーソックスを履いた姉御な女性。

3人目は、紫がかった黒のセミロングヘアで、頭上に天使の輪のような艤装が浮いていた。

服も2人目と似た黒服だが、胸元辺りのみ白く装飾され、手元は黒い手袋、足は靴以外何も履いていない。

彼女らは机に座る山岸提督に敬礼をした。

「軽巡矢矧、着任したわ。提督、最後まで頑張ってくださいましょう！」

「横須賀から来たぜ。オレの名は天龍。フッフ、怖いか？」

「天龍ちゃんと同じく横須賀鎮守府から転属されました。龍田だよ」

3人がそう自己紹介をすると、山岸も立ち上がって挨拶する。

「ようこそ、トラック鎮守府へ。この最前線で指揮する山岸 里子よ。階級は中佐。里子と呼んでもらっても構わないわ」

お互いの挨拶が終わった後、金剛がお盆に乗せた麦茶を持ってやって来た。

「どうぞー、よくひえく．．．じゃなかった。冷えてるデース」

「ありがたいわ」

「おう！ もらつとくぜ」

「あらゝありがとう♪」

3人は受け取った麦茶を飲み始める。

その間に、彼女らは山岸からこの鎮守府での主な活動や規律の説明を受けた。

麦茶を飲み終える頃に、山岸からの説明が終了する。

金剛が空になったコップを受け取り、執務室のドアから退室していった。

「大体の説明はこれで終わり。では、早速だけどあなた達には出撃してもらおうわ」

「おおっ！ そう来なくっちゃな！」

「了解！ 軽巡矢矧、いつでも出撃します！」

「あらゝお早い出撃ですね」

士気が高まる軽巡洋艦の3人。



山岸は左側で立っていた榛名に目を向ける。

「榛名、龍驤と彼女らを連れて例の島へ。旗艦はあなたでいいわ」

「はい！ 榛名！ いぎ、出撃します！」

「例の島、とは？」

矢矧が山岸の言葉に疑問の声を上げた。

他の2人も同じ気持ちらしく、そんな彼女らに山岸が答える。

「この鎮守府の重要な機密よ。着任したあなた達にも共有してもらおう必要がある」

「重要……」

「機密……？」

天龍と龍田が真剣な表情で山岸の言った言葉を連呼する。

「無論、これは他の鎮守府や大本営などに口外しないように……すればこの鎮守府が危機に晒されるわ」

「……」

「そんなに身構えなくても大丈夫よ。ただそこにあるものを見てくるだけでいいわ」

「……あるもの？」

「さ、さあ、御三方！ こちらへ付いて来てください！」

未だに理解できない3人を榛名が少々強引に引き連れていった。

例の島では……。

「よし！できたー！」

明石が満足げな表情で貨物船の右隣に設置したものを見つめる。

そこには菱形で収縮する機構「パンタグラフ式」の昇降機が出来上がっていた。

全体が緑色の錆止めペンキで塗装され、上部の昇降台には開閉できる箇所がある手摺りが付いている。

土台である下部には燃料で動く発電機と操作パネルが設置され、上がる床の方にも操作パネルが付けられていた。

「オオー!?!」

「流石、明石さん」

木陰に座っていた北方棲姫と大和が出来上がった昇降機を見に来る。

白露、時雨、第六駆逐隊の四姉妹は作業終了後に休憩を取り寛いでいた。

「ふっふー、あたしの一番のおかげだよね！」

「そ、そうだね。姉さん」

「ちよ……レディーもちゃんと手伝ったわよ！」

「私も手伝った」

「私もいるじゃない！」

「電も手伝ったのです！」

抗議の声を上げる暁姉妹を余所に、白き少女と戦艦の艦娘が昇降機の横に付けられた梯子で昇降台へと上がる。

明石が操作パネルに手を置き、昇降台に乗った2人に声を掛けた。

「船の半分の高さまで上げるから、その後はそっちの方で操作を試してみてください」

「分かったわ」

「リョーカイ！」

明石が操作パネルの電源稼働ボタンを押し、昇降機の稼働音を響かせる。

そのまま彼女は横にある▲ボタンを押し、2人が乗る昇降台を上げていった。

「アガッタ、アガッタ」

「飛び跳ねると危ないですよ」

明石は昇降台を貨物船の半分辺りまで上げてから停止させる。

停まったことを確認した少女が操作パネルの▲ボタンをゆつくりと押した。

「ヤマト、カンパンノイチ、オシエテ」

「もう少しよ……そこで止めて！」

「ハイッ！」

2人の掛け合いにより、昇降台が甲板のある位置からちようどいい高さで停まった。白き少女が手摺りから乗り上げて、下にいる明石たちを覗き見る。

「ツイタヨー！」

「ホッポちゃん！ 危な・・・」

「アッ・・・」

バランスを崩した少女が手摺りを乗り越えて、白髪の中から落ちてしまう。

「！！」「ホッポちゃん！！」「！！」

「テイッ！」

大和たちが叫ぶ中、白き少女は咄嗟に艀装を展開させて、左側のクレーンを昇降台の手摺りに引つ掛ける。

「ウグッ!!」

少女の身体は後ろ腰から吊り下がるように地面から1m位の高さで止まった。

彼女が無事だったことに、その場に居た艦娘たちが胸を撫で下ろす。

「フウ・・・・・・ンウ？」

白き少女は艦娘たちが頬を赤らめていることに感付く。

彼女がその理由を聞こうとしたとき、上に居た大和から声が届いた。

「ホ、ホッポちゃん！ お尻！ お尻が!!」

「オシリ？ オシ・・・リツ!？」

少女はそこで今まで気付かなかった事実を知ることとなる。

艦装を出す際、お尻辺りから現れることは感覚で知っていた。

しかし、実際はお尻と腰の間辺りからで、服の中から出現していたのだ。

そのため、彼女のスカート後ろが捲れ上がり、黒のヒモパンツが「丸見え」となる。

「あたしより、大人なパンツだと・・・?」

「いい下着だね。僕も履いてみたいよ」

「レ、レディーより、一人前の下着を・・・」

「ハラシヨー♪」

「アダルトだわ!」

「い、電も本気を出せば・・・」

「ほうほう、興味深いパン・・・もとい艦装ですね」

下にいた艦娘だけでなく、上から見下ろす大和も顔を隠すように両手を当てていた。

「ミ、ミルナ————ッ!!」

白き少女は左ポケットから空のヤシの実を取り出して、見続ける艦娘たちに投げ付けた。

榛名たちの出撃後、執務室では山岸と金剛がゆったりと紅茶を飲んでいた。紅茶は金剛が用意したものだ。

「仕事の後の Tea Time は最高デース！」

「そうね。ようやく軽巡の艦娘も来てくれたことだし・・・」

「横須賀の天龍と龍田は期限付きだと聞いたネー」

「しばらくの間よ。前の鬼級を倒した報酬でもあるわ。あとは・・・」

和やかに話す金剛の通信から緊急の連絡が入った。

『金剛姉さま！ 聞こえますか!?!』

「榛名？ どうしたデース？」

『先程、パラオ所属の連絡船とすれ違いました!』

「パラオの連絡船!?! Sh i t!?!」

「!?!」

金剛の言葉に、山岸提督が険しい表情で後方にあつた放送端末を操作する。

「全艦に告ぐ。ISを発動」

彼女はその言葉を放送し、金剛の方へ振り向いた。

「里子お……」

「さて……あの引き籠りが動いたか。どういう風の吹き回しかしら？」

トラック鎮守府の執務室に異様な空気が漂う。

山岸は腕を組んで机に座り、その左隣に金剛が無表情で立っていた。

彼女らと対面するように立っている人物。

白い軍服姿で帽子も被っている若い男性。

その顔は見ただけでイラつく程のにやけた顔をしている。

左頬には白いガーゼが張られていた。

彼の右隣には、秘書艦であろう艦娘が一人いた。

桃色のセミロングにゴムでポニーテールをした髪型の少女。

白い手袋と白のカッターシャツに黒いブレザーベストが羽織られ、黒のスカートと鼠色なソックスという容姿。

彼女は陽炎型2番艦の駆逐艦 “不知火” である。

「久々だね。里子提督……」

「山岸よ……下の名前を許可した覚えはないわ」

「これは失敬……いつもの如く手厳しいな」

山岸は彼に対して、トゲのある言葉を飛ばす。

「それで……この鎮守府へは、何しに来たのかしら？ パラオ鎮守府の “久留井 壮太

”（くるい そうた）少佐？」

彼女がそう質問すると、男性提督は帽子のつばを右手で持ち上げた。

「以前に君の艦隊が、我が艦隊の護衛任務に助力していただいたことがあったね」

「助力ではなく、救援に駆け付けただけよ」

「まあ、そうとも言うね。それで我が艦である朝潮があることを呟いていたのを聞いて

ね」

「ある……？」

「黒い球体が浮いていた……というのをね」



それを聞いた里子は何も動じずに、首を傾げる仕草をする。

「何よそれ？ あなたまた危ない薬でも手を出したの？」

「なっ、何を言う！ い・・・い、いや、俺は薬物になぞ手は出してない」

何やら焦る久留井の身振りに、彼女は気にせず話を続けた。

「ふくん・・・っで？ あなたの見た幻覚がどうしたの？」

「だから幻覚じゃなくてっ！ 朝潮が見た敵らしきものだ！」

「それがどうしたのよ？」

「そいつについて、何か情報は知らないかね？」

山岸は彼の質問の内容に疑問を抱き始める。

まるで本音は別にあるかのような問い掛けに思えたからだ。

「知らないわよ。調べたければ、大本営にでも行きなさい」

「俺はそちらへ行けない立場なのでね」

「一応事情は知っているわよ。引き籠りさん♪」

「・・・」

痛いところを突かれたのか、ぐうの音も出なくなる久留井。

そんな彼が別の話を切り出してくる。

「そういえば最近、君のところでは資材の備蓄が増えたかね？」

「スケベ」

「なっ、なんでそうなる!？」

「人の職場を覗こうとしたからでしょう? 後で憲兵隊に報告するわ」

「ま、ま、ま、待て! 話を聞け!」

右手を出して止めようとする彼が話を続けた。

「君の所にはあの大和すらいるのだ。そんな艦娘が何度も出撃すれば、資材も赤字になるはず・・・なのに供給先での資材の確保量は今までと同じだ」

「だから?」

「別の収入源を・・・君は見つけたんじゃないのか?」

「・・・」

その質問に、彼女はため息を吐いて、組んだ両手を机に置く。

「おこぼれが欲しいのなら、上に言いなさいな。前に貰った手紙もそうだけど、私に言っても分け与えるつもりは一切無いわよ」

「そうじゃない。その収入源を・・・」

「ここはあなたの居る場所と違って、過酷な最前線。引き籠りのお坊ちやまと相手する余裕はないのよ?」

「アレを見つけたんじゃないのか!？」

彼の怒りの言葉に一瞬だけ室内が静まり返る。

しばらくして、山岸が机に置いていた手を膝へ戻した。

「アレって言われても分からないわ」

「松尾少将が所有していた貨物船だ！あの行方不明だった船を見つけたんだらう!？」

「元少将の横領物なんて、腐ってるから間違っても探したくないわ」

「資材を積んだ船だぞ！腐ってる訳が・・・」

「とにかく、知らないものを聞かれても意味がない。用事が済んだらお帰り願うわ」

「くっ・・・」

久留井は一度歯を噛みしめた後、ドアのある右側へ振り向く。

「戦艦の多い鎮守府は羨ましいね」

「そっちも2人居るじゃない」

「もう少し欲しいところだ」

「悪いけど、うちの金剛にセクハラした罪がある以上、あなたの元へ行きたいと言う艦娘

は誰一人いないわ」

山岸がそう告げたことで、隣に居た金剛が鋭い視線で久留井を睨みつけた。

「Don't touch me (私に触るな)・・・Forever (永遠に)」

「やれやれ・・・」

提督である男は、金剛に英語で嫌悪の言葉を吐きつけられてしまう。

その様子にほくそ笑む山岸があることを尋ねる。

「ところで、あなた……その頬どうしたのよ？」

「ふんつ、これか？……いつだったか、一週間くらい前に夜釣りをしていたら、顔にイカがぶつかって来たんだよ」

「やっぱり頭がおか……」

「違うわ！ そのイカのせいで獲物を逃がすわ！ 頬を岩に打ち付けて二針縫うことになるわけで、散々な目にあつたんだぞ！」

「それはお気の毒で……」

「……ちつ、では失礼するよ。行くぞ、不知火」

「了解」

2人は執務室のドアへと向かう。

彼らが退室した部屋の扉付近に、茶髪のショートヘアで金剛とは違った巫女服を着た女性が立っていた。

「……」

彼女は久留井提督と不知火が歩いていく姿を見て、その後を遅れて追うように歩き始める。

3人があるT字路になった廊下を曲がり通った。

最後尾である茶髪の女性が遅れて曲がった時、不意にある声が囁くように響いてくる。

「陸奥は元気にしてるか？」

「・・・ああ」

いつの間にか彼女の後方に戦艦の長門が仁王立ちしていた。

声を掛けられた巫女服の女性はそう短く答えて、何事もなかったかのように歩き去る。

例の島の入り江では、ある出来事が起きていた。

「オツキイ・・・」

「ひ、響、これ・・・」

「デカいね・・・」

「デカ過ぎるわ！」

「大きいのです・・・」

北方棲姫と暁たちは、貨物船の付近にある草むらの手前であるものを発見した。

それは数日前に埋めた空のヤシの実を掘り返して、果肉の残りカスを食べる巨大なヤシガニ”である。

彼女らはそこらに落ちていた木の枝でヤシガニを突つつこうとする。

「オオツ!？」

「ホッポちゃん、危ないのです!」

突かれて怒ったヤシガニは白き少女が持つ木の枝をハサミで挟み折った。

その行動に5人は驚きながらも再度突つつこうとする。

そんな光景を見ている大和たち以外に、別の見物客が入り江の海面で立っていた。

「おい、チビどもと一緒に居るアレって……」

「し、深海棲艦?」

「あらく可愛らしい娘じゃない♪」

天龍、矢矧、龍田は初めて間近で見える無邪気な深海棲艦の姿に見惚れる。

その後ろでは、彼女らを引き連れた榛名と龍驤が少女の存在について説明し始めた。

「何日か前にな、ウチらの艦隊を手助けしてくれた娘や。敵意も全くないで」

「三日前によく姿を現してくれました。少々、臆病なので優しく接するようお願い

いたします」

「お、おう……」

「りよ、了解」

「了解♪」

天龍と矢矧は戸惑いながらも返事をし、龍田だけはにこやかな笑顔で答えた。

「あとな、矢矧はんを建造する際に使った資材は、あの娘から貰ったもんや」

「えっ? じゃあ、私は……」

「あの娘のおかげつちゆうことやな。あとでお礼でもしといたらええよ」

「わ、分かったわ……」

龍驤から言われたことで、更に混乱する矢矧は聞き返すこともできずに返事をした。

## No. 10 ヘンタイハキライ!

トラック鎮守府にある一つの建物。

それは島唯一の憩いの場である食堂。

時刻はすでに08:00（まるはちまるまる）を過ぎていた。

食堂内には、複数の長テーブルが並び置かれてあり、奥にあるカウンターからは調理場が見える。

外に繋がる扉から、一人の女性がゆっくりと入って来た。

ポニーテールと赤いセーラー服の艦娘“大和”である。

彼女は誰も居ないテーブルを横切り、奥のカウンターへと歩いていった。

カウンターから見える調理場では、黒髪のショートヘアで青いセーラー服に割烹着を纏う女性がキャベツを刻んでいた。

「のどかさん、おはようございます」

大和が挨拶すると、彼女は目元が前髪で隠れた顔を向けて、静かに頷いた。



彼女の名は、宮島 のどか（みやじま のどか）

トラック鎮守府に所属する唯一の料理人で、あの給糧艦「間宮」の元で半年も修行した経験がある。

性格は物静かでしゃべることは全くしない娘だが、彼女が作る料理は誰もが美味しいと言えるほど絶品だった。

「いつもの味噌カツ丼をお願いします」

大和から注文を受けた宮島は、すぐさま刻んでいたキャベツを白飯の入った大きな丼ぶりへ乗せる。

次に、仕込みで揚げたばっかりの豚カツをキャベツの上に乗せ、玉杓子で掬い取った胡麻味噌ソースをたっぷりと掛けた。

出来上がったそれを長方形の黒いお盆に乗せて、箸も一緒に入れてから大和へ手渡す。

「ありがとうございます」

大和が受け取った丼ぶりの大きさは特大で、中身は3人分を超える量が入っていた。彼女はそれを持って、近くのテーブルへ歩き寄る。

テーブル台に味噌カツ丼が乗るお盆を置き、自身も座ってから手を合わせた。

「いただきます♪」

数分後、あの山盛りなカツ丼は綺麗に完食された。

ちようどその時、食堂の入口から扶桑と山城がやって来る。

「大和さん、おはようございます」

「お二人とも、おはようございます」

「朝から凄く食べますね」

「まだ『おかわり』があります♪」

「わ、私もあれだけ食べれば・・・幸福に・・・」

大和は空の丼ぶりをお盆ごと持って行き、再びカウンターで味噌カツ丼を頼んだ。

2人もカウンターで定食セットを頼み、大和の対面側で席に着く。

「本日もあの島へ？」

「そうしたいのですが、第3艦隊が朝早く出港したので・・・」

「ああ、確か・・・横須賀へ？」

「ええ。提督からお使いへ行くよう言われたらしいです」

残念そうにする大和の姿に、扶桑が微笑みを浮かべた。

「それ程あの娘が気に入ったのですね」

「そ、そんな……」

まるで言い当てられたかのように、超弩級の女性の顔が赤くなっていく。  
(そう言えば……何故あんなにあの娘のことを気になるのでしょうか?)

大和は扶桑に言われたことを疑問に思い、先日のやり取りを思い出す。

それは明石たちが昇降機を作る間、北方棲姫と2人で話し合ったことだ。

『あの……ホッポちゃん?』

『ナニ?』

『どうして……あの時、私を助けに来てくれたのですか?』

『エツト……シズメラレタ、トキノ?』

『そうです』

『ヒトリハ、サビシイデシヨ?』

『寂しい?』

『ソウ。ワタシモ、メガサメタラ、ダレモイナイウミデ、ヒトリボツチダツタシ……』

『えっ、ホッポちゃんも?』

『ヤマトモ、ヒトリダケデ、テキトタカカッテ……サビシカッタ?』

『え、ええ……』

『オナジカンノ、ムサシニアエナイノハ、イヤジャナイ?』

『確かに・・・できれば会いたいですね』

『ウン。ダカラ、シズンデイルヤマトヲ、タスケタ。ホカノ、カンムスタチモ、アイタガツ  
テタシ・・・』

『ホツポちゃん・・・』

『ミンナイツシヨガ、イチバンダヨ!』

少女から聞かされたことを思い出す戦艦の艦娘。

「ふふっ♪・・・・・・・・・・・・・・・・んっ?」

「ひゃあああっ!?!」

彼女の漏らした声と同時に、目の前で食事をしていた山城が悲鳴を上げた。

「む、虫いいいい!」

ハエよりも大きく、スズメバチのような柄の色を持つアブの一種“シオヤアブ”  
人を刺すことは殆どなく、スズメバチやオニヤンマなどを背後から襲う虫の暗殺者とも  
言われている。

そんな虫が山城の目の前を通り過ぎたのだ。

彼女は驚きのあまり手にした味噌汁の器を落とし、その汁でスカートを汚してしま

う。

「ああ・・・不幸だわ」

「山城、ちよつと待つてて。布巾を持って来るから・・・」

扶桑が席から立とうとすると、宮島がすぐに布巾を持ち運んできた。

「助かります、のどかさん」

「いやあああつ！ また来たあああ!!」

再度、アブの襲撃に遭う山城。

宮島は持つてきた布巾を扶桑に手渡し、アブが飛び交う山城の元へ向かう。

彼女は右腰から長い菜箸を取り出して、飛び回るアブを難なく摘み捕った。

「・・・えっ?」

「おお——っ!!」

料理人の華麗な業に、大和と扶桑が思わず拍手をする。

宮島はそのまま窓の方へ行き、捕まえたアブを外へ逃がした。

「凄いです。のどかさん」

「流石、料理人・・・」

「私はなんで虫に・・・」

褒められた彼女は照れ臭そうにお辞儀をする。

「自室に帰ったら着替えないとね」

扶桑は山城の濡れたスカートを布巾で拭いていった。

姉の献身的な行為に、妹の顔が少しにやけてしまう。

「不幸中の幸いとはこのこと・・・姉さま♪」

その光景を見た大和は、まだ見ぬ姉妹艦である武蔵の安否を気遣う。

『第1艦隊の艦娘は至急、出撃ドックへ急行せよ』

「！」

突如、館内放送で山岸からの指令が下った。

大和は僅かに残ったご飯を頬張り、その場から急いで走り去る。

艦娘専用の出撃ドック。

強固な外壁の建物内は、艦娘たちを安全に出港させるための設備が整えられていた。

正面扉はかなりの大型で両開きとなり、その半分の高さまで海に浸かっている。

海面より少し高めにある待機エリアに、大和が小型の昇降機で降りてきた。

「お待たせしました！」

「待っていたぞ。これで全員揃った」

そこには、長門を含め、加賀・赤城・金剛・榛名が待つていた。

大和は第1艦隊である最速の駆逐艦が居ないことを尋ねる。

「あの・・・島風ちゃんは？」

「まだあの娘の懲罰は終わっていません」

「そ、そんなに厳しくしなくても・・・」

「里子提督からの許可が下りていないので・・・当分の間、あの娘の出撃は無いです」

加賀が凄然たる態度で島風の処遇を告げた。

先日、島風が営倉から脱走を図ったことが原因である。

そのすぐ後に、偶然居合わせた長門によつて、脱走者は捕縛（サバ折り抱擁）された。

「島風の代わりに、この長門が第1艦隊に入ることとなった！」

「そ、そうですか・・・」

大和は若干疑問に思うも納得の声を出してしまふ。

「それで・・・今回は一体・・・」

「それなのだが・・・」

『私から説明するわ』

長門が質問に答えようとした時、ドック内に設置された館内放送用のスピーカーから山岸の声が響いてくる。

『パラオの艦隊が提督のクルーザーと一緒に北方棲姫の島へ向かっているわ』  
「「!？」」

その内容に、大和、金剛、榛名の3人が反応した。

『大和を旗艦とし、第1艦隊はパラオの艦隊による進行を阻止せよ』

「了解！ 第1艦隊、出撃です！」

「ちようど、鬱憤を晴らしたかったところデース。あの変態に全弾撃ち込むネー!!」  
「勝手は・・・榛名が許しません!! 絶対に!!」

意気込む3人は艀装を展開させて、正面扉へ繋がっている海上に着水する。

「ホッポちゃんに会え・・・いや、パラオめ・・・許さんぞ!!」

「そうです！ あのボーキは私のもの!!」

「・・・お二人とも島の防衛任務を優先してください」

少々ずれた目的を言う長門と赤城に、加賀が呆れながら本来の目的を伝えた。

「取り敢えず、これで時間稼ぎはできるわ」

執務室では、艦隊に指令を与えた山岸が放送端末を操作していた。

「あとは・・・あの娘たちが戻ってくれば・・・っ！」



彼女は放送端末のあるランプの光に気付く。

不規則に点滅するそれを見続ける提督がにんまりとした。

「いい感じね♪」

彼女はそう言つて、執務室から急いで出ていった。

「トラック泊地からやや東北東の方角で・・・一時間程度の距離にある・・・か」

小型クルーザーを操縦するパラオ鎮守府の久留井少佐。

自身が掴んだ情報により、護衛の艦隊と共に目的のものがある海域へと向かつていた。

クルーザーの先頭には秘書艦の不知火。

右側には朝潮と、左側には荒潮が航行していた。

「あれか・・・むっ?」

順調に進む彼らの目の前に、砂浜がある島が見えてくる。

その手前の海上には、6人の艦娘たちが立ちはだかつていた。

「……ほう、そうきたか。全艦、停止せよ」

久留井の命令で、彼女達から少し離れた海上でクルーザーと艦隊が航行を停める。

彼は操縦席に備え付けられた無線機のマイクを手に取った。

「これはこれは……かの有名な戦艦大和を含めた艦隊がお出迎えとは……」

無線機から発せられたパラオの提督の声に、大和たちは顔をしかめながら警告を告げる。

「久留井少佐、及びパラオ艦隊に告ぐ。ここは我がトラック鎮守府の担当海域となります。即刻、当海域から退去していただきたい」

大和からの警告を聞いた久留井は、いつものにやけ顔で笑い答える。

「はっはっは……こちらはある情報で探し物が見つかったのですね。その島に用があるのだ。この際、担当海域だのなんだの関係ない。そこを退いてもらおうか?」

「では……軍規違反を犯したものとして、あなた方を拘束させていただきます」

「俺からも……警告なしに撃ってきた裏切り者として、報告させていただきますよ!」

久留井の言葉に、第1艦隊が戦闘態勢に入った。

「やっぱりあのキチガイはDestroy (破壊) するべきデース!!」

「金剛姉さまを辱めた罰、ここで受けてもらいます!!」

金剛と榛名は相手の提督から受けた許されぬ行為を根に持っていた。

「事故と処理するから沈めても構わん。お前ら全力で相手しろ!」

「了解」

久留井は不知火たちに指令を下し、自らは左側へ迂回していく。

「相手は3人デース! ならワタシと榛名、長門だけでも十分ネー!」

「大和さんは待機。赤城さんと加賀さんは久留井少佐を・・・」

「待て! 全艦! 散開しろ!!」

金剛たちが突撃しようとした時、長門がいきなりの散開を指示した。

長門の言葉で全員がすぐさまその場から散らばる。

その数秒後、遠くの空から数発の砲弾が飛来し、艦隊の居た位置に弾着した。

「長距離からの砲撃? 皆さんご無事ですか!」

「榛名は大丈夫です! 大和さん!」

「What!? 何処から撃ってきたネー!」

「加賀さん! 無事ですか!」

「このぐらい平気です。赤城さんは?」

「問題ないです! 掠りもしていません!」

困惑する彼女らの中で、長門だけはその状況を把握していた。

「陸奥の砲撃……それにあの瑞雲……日向か！」

「流石は連合艦隊旗艦……この程度の不意打ちは通用しないか」

「姉さんはそんな甘くないわよ。全弾ハズレ？」

「まあ、そうなるな」

不知火たちより、さらに後方で待機していた2人の艦娘。

長門と同じ艀装と服装をした茶髪ショートトの女性。

長門型戦艦の2番艦 “陸奥”

彼女の右隣には、巫女服姿のショートヘアーの女性。

巨大な35・6cm連装砲が左右に2つつ装備された艀装を持ち、左腕には飛行甲

板が付けられていた。

彼女は伊勢型戦艦2番艦で航空戦艦の “日向”

2人もパラオ艦隊所属の艦娘である。

(あの一瞬で瑞雲の存在に気付いたか……)

久留井と大和の艦隊が話し合いを終えた辺りで、彼女は上空に飛ばした水上爆撃機 //

瑞雲”で弾着する位置を確認したのだ。

位置を予測した後、陸奥とともに砲撃を開始したが、いち早く気付いた長門に見破られてしまう。

「どうする?」

首を傾けて尋ねる陸奥に対し、横目で見る日向は飛行甲板から瑞雲を離陸させようとする。

「まあ・・・不知火たちに当たらないよう支援するさ」

「そこを退くデース!!」

「金剛姉さまの邪魔は! 許しません!!」

「新鮮な駆ち・・・っ・・・敵艦隊もなかなかやるな!」

金剛、榛名、長門は高速で動き回る駆逐艦の3人と交戦していた。

「この程度、つまらないわね」

「よし、朝潮! 突撃する!」

「久々に動き回れるわね。暴れまくるわよ〜!」

不知火、朝潮、荒潮は駆逐艦自慢の速力で相手の砲撃を回避していく。

時折、自分たちの持つ小口径主砲で正確に相手を狙い撃った。

戦艦である彼女らに少しずつだが、ダメージが蓄積されていく。

「Shit! ちよつと痛いネー!」

「ま、まだやれます!」

「フツ、ビッグ7の装甲を侮るなよ!」

大和と一航戦の2人は、長距離から来る砲撃と水上爆撃機による攻撃を受けていた。

「これじゃ艦載機が飛ばせない!」

「くつ、頭にきますね」

「任せてください! 三式弾装填! 仰角最大!」

彼女の46cm三連装砲が上空へ砲身を向ける。

その先には数機の爆撃機が編隊を組んでいた。

「全主砲、薙ぎ払え!!」

巨大な3つの主砲から合計で9発の砲弾が同時発射された。

それらは一定の上空で炸裂し、円錐状に無数の弾子がばら撒かれる。

範囲内にいた複数の爆撃機は回避できずに爆散した。

「今です! 残りをお願いします!」

「お見事です」

「第一次攻撃隊、発艦してください！」

攻撃に隙間が出来たことで、正規空母たちが反撃に艦載機の矢を放つ。

同時刻、貨物船の食堂内

「ズズズズウ……モグモグ……」

白き少女はテーブルに乗せた丼ぶりのラーメンを食べていた。

先日、倉庫内の探索でカセットコンロと保存食であるインスタントラーメンを発見。久々に味わうラーメンを美味しくいただいていた。

「ズズウ……ミヤァ！」

「ズズウ……ミヤァ！」

「ズズズウ……ミヤァ！」

右隣では同じように1つの丼ぶりのラーメンを啜るタマ達が居た。

「ムウウウ……モヤシカ、タマゴホシイナァ……」

少し物足りなさを感じる少女の耳に、数発の砲撃音が入ってくる。

「ンウ?……ダレダロウ?」

「ミヤァ?」

「ミヤフ?」

「ミ、ヤ?」

彼女は島付近で誰かが戦っていると思い、残ったラーメンを啜ってからタマ達と一緒に出掛けた。

貨物船から飛び降りた少女は、島の外側まで行き、右側の砂浜へ足を付ける。

「エート、ヨイシヨ!」

彼女はタマ達を右ポケットに入れ、反対側のポケットから双眼鏡を取り出す。

それを使って、遠目で小さく見える艦娘たちの姿を見ようとした。

「オオッ! ヤマト! ソレニ……アッ、ナ、ナガト……」

少女は長門の存在を確認したことで身体に悪寒が走った。

以前の提督たちとの顔合わせで、長門から熱い抱擁をされたのが原因である。

「ヤ、ヤマトガ、イルカラ、ダイジヨウブ……」

少女はそう言つて、彼女らの戦闘を観察し続けた。

相手は初めて見た艦娘の朝潮や、見覚えのない桃色の髪をした少女である。

同じ艦娘同士での戦いに、彼女はあることを口にした。

「コレガ、"エンシユウ" ナノカナ?」



一方の久留井は、小型クルーザーを島の砂浜へ無理に寄せ付けた。

乗り上げた船の船首から飛び降り、右側の砂浜を歩き続ける。

「暑苦しい！・・・なんで俺自身が！・・・んんっ!」

変な悪態をつく彼の歩く先に見慣れぬ存在が目に入った。

頭の天辺から足の爪先まで真っ白な幼い少女の姿。

それはどう見ても人間ではない証拠である。

彼女は双眼鏡を手にして、艦娘たちの戦いを見物していた。

(まさか・・・深海棲艦か?・・・だが、あんなものは見たことが無いぞ)

彼は右手で懐から十四年式拳銃を取り出し、少女の背後へゆっくりと忍び寄った。

「くっ!」

「大和さん!」

「大丈夫! 副砲がやられただけです!」

爆撃機の投下した爆弾が大和の艤装の左舷にある副砲へ直撃した。

赤城の呼ぶ声に、大和は無事であることを伝えた。

「長門さんの言っていた航空戦艦・・・侮れません」

「相手の艦もやりますね」

「っ!?! 2人とも! 砲撃さらに来ます!」

加賀が視界を共有していた偵察機によって、放たれた砲弾の存在に気付く。

彼女の警告で2人はすぐに回避を行った。

「むんっ!」

「うっ!?!」

戦艦の長門と一騎打ちで戦う駆逐艦の不知火。

危うく直撃を食らいそうになるが、自前の速さのおかげで寸前に回避した。

彼女はすぐに反撃しようと魚雷発射管を構える。

「しず・・・」

『不知火! 応答しろ!』

「!?!」

不意に不知火の無線機から久留井の呼び掛けが響いた。

彼女は絶好の攻撃タイミングを邪魔され、その声に若干苛立ちながら返事をする。

「なんででしょうか?」



やって来た。

「久留井少佐!!」

「貴様っ!! その汚い手を離さんか!!」

拘束された少女の姿を見て、大和と長門が声を上げる。

久留井は彼女らの態度に笑みを浮かべた。

「まさか、こういう理由だったとはな・・・思わぬ収穫が手に入ったよ」

「・・・どういふつもりですか?」

彼は大和の質問に素直な答えを出す。

「トラック鎮守府の艦隊と里子提督は、深海棲艦を匿う軍の裏切り者として扱えるからね。それにこの未確認はいい素体になるだろうし・・・」

「!?!」

その言葉を聞いた少女がびくつとした。

彼女は敵として解剖や人体実験をされると思ったからである。

怯える少女の姿に、大和らは怒りで砲撃準備を整えた。

「おっと、撃つなよ。最もいい状態は生け捕りだが、遺骸にしても構わないだろ?」

「あなたって人はっ!!」

「とことん性根が腐った提督ネー!!」

「……許しません!!」

大和だけでなく、金剛や榛名ですら激昂していた。

「そう怒るなよ。心配せんでもトラック鎮守府の解体後、戦艦の艦娘は我がパラオで引き取つてやる。悪いようにはしないさ」

「Noooooo, thank youネー!!」

金剛の怒りがさらにヒートアップするのを余所に、久留井は秘書艦である不知火に指示を飛ばす。

「不知火! さっさとこいつを縛るのを手伝え!!」

「……」

命令された彼女は何もせず、上の空のように海上で突っ立っていた。

無視されたと思った久留井が再度呼び掛ける。

「不知火!! 何をしている!! 聞いているのか!?!」

二度目の指示で彼女はようやく彼の方へ目を向けた。

「長期任務の遂行が完了。これより、不知火を含め、朝潮、荒潮の3名はパラオ鎮守府から、横須賀鎮守府の指揮下に戻ります」

「……はっ?」

「よつて、パラオ鎮守府の『元少佐』である久留井 壮太の命令は無効となります」

「ど……どういことだ?」

当惑する彼の左側から女性の声が届いてくる。

「誰もあなたの言うことは聞かないってことよ?」

「なっ!? 何故お前が!」

「私の大事な仲間を引き取る? そんなもの許可する訳ないじゃない」

声の主はトラック鎮守府の山岸提督だった。

彼女の後方には、濃い緑色の軍服を着た十人の男性たちが整列していた。

彼らの左腕には『憲兵』と書かれた腕章が付けられている。

「さて、不知火。長かった任務ご苦労様」

「いえ、こちらこそ不知火たちの任務を手伝っていただきありがとうございます」

2人が話す中、久留井は訳が分からず彼女らに問い掛けた。

「どういうことだ!? 不知火たちが、横須賀鎮守府の指揮下だ!?」

「そうよ。彼女らは横須賀出身の艦娘で間違いないわ」

「馬鹿な!! 3人はパラオの工廠で建造されたはず!!」

「それはパラオの工廠にいる妖精たちの協力で、建造されたかのように偽装したからよ」

「なんだと……」

手の込んだ偽装工作に、久留井はその理由を聞こうとする。

「どうして・・・だ？」

「松尾 純次 “元少将” の汚職事件に関わるあなたが一向に動かないから、大本營の指示で艦娘を潜入させてたのよ」

「潜入!？」

「それでもなかなか尻尾を見せないのは見事だった。けれども、あなたが捕まえている娘のおかげで証拠は揃ったわ」

山岸はそう言つて、服のポケットから白い錠剤の入った透明袋を取り出す。

「そ、それは!」

「通称 “船酔い” 艦娘にとつて強力な麻薬であり、人間にも軽い中毒を与える危険薬物。駄目でしょう? 軍学校でも教わつた違法に手を出しちやつて・・・」

「お、俺のであるという証拠は・・・」

「あきつ丸」

「了解であります」

山岸の真後ろから、黒い軍帽と軍服にスカートとサイハイソックスを纏う女性が現れる。

彼女は横須賀に配属されている陸軍の特殊船丙型で揚陸艦の艦娘 “あきつ丸”

山岸の隣へ来た彼女が左手に持つ一枚の紙を掲げ見せた。

「あなたと松尾のサインが入った書類よ。以前に検挙された麻薬組織の名前付きでね」  
「ぐっ……」

久留井はその紙を見て、人には見せられないぐらい醜く顔を歪める。

彼が貨物船を探していた最大の理由は、自身の首が危うくなる重要書類と薬物の回収だったのだ。

「残念ね。ある程度できる男だとは思っていたけど……そこまで落ちぶれた以上、同情の余地もないわ」

「お、俺に手を出せ……」

「威光は無駄よ。あなたの義父である松尾は三日前に亡くなったわ」

「なんだと!? 親父が亡くなった!?!」

「薬を使ったせいよ。だから禁止されていることすら忘れたの?」

久留井は里子の言った衝撃事実を目を丸くさせる。

あきつ丸が書類を上服のポケットに入れて、右手で別の紙を掲げながら口を開いた。

「久留井 壮太。本日より、貴官は階級及び軍人としての権限を全て剥奪。罪状は横領に加担し、艦娘への不当な扱いと無断解体」

「いくら戦艦が欲しいからって、他人のものを使ったら怒られるでしょ?」

「よって、この逮捕状を元にあなたを拘束するであります」



あきつ丸と山岸がそう言い終えると、島の密林から第六駆逐隊の4人と天龍と龍田が兵装を構えながら現れた。

「覚悟はできてんだらうなあ？」

「駄目よ、天龍ちゃん。一撃で終わらせたなら、楽しみが無くなるわよ♪」

「さつさと観念しなさい!!」

「了解、響、突撃する」

「諦めるなら今のうちだよ？」

「早くホッポちゃんを離すのです!!」

久留井は震える身体で周りを見渡した。

前方は、大和の艦隊だけでなく、自分に忠実だった不知火、朝潮、荒潮が砲身を構えていた。

彼女らの後ろに居る日向と陸奥は静観したままである。

左側の砂浜には、山岸が連れてきたあきつ丸と憲兵が十人もいる。

そして、後方には刀身を構えた天龍を筆頭に、薙刀を持つ龍田、砲台を構える暁と響、大きな錨を持つ雷と電。

蛇に睨まれた蛙の如く、彼の体中に冷や汗が滲み出てくる。

「そうそう。心配しなくてもパラオ鎮守府が解体されたら、日向と陸奥はこちらで預かるわ。粘りに粘って建造できた戦艦たちでしょ？　あなたより大切に扱うわ♪」

「っ!?!」

「まあ、パラオは良い鎮守府だったと言えないが・・・そちらの方が良さそうだな」  
「姉さんが居るのなら大丈夫そうね」

山岸からトドメの宣言に、久留井は下唇を強く噛み締めた。

「近寄るなあああ!!　こいつの、こいつの命が欲しければ俺の要求に従え!!」

最後の抵抗と言わんばかりに、彼は捕らえていた白き少女の身体を抱き寄せた。

足掻く彼の行動は思わぬ引き金を引くこととなる。

「イツ!?!」

抱き寄せられた少女の後頭部に、布越して何やら堅い感触が当たったのだ。

それは少女の以前の記憶に該当するもの。

女の子になる前の自分にもあった身体の一部。

同性だろうが、異性だろうが、無理に押し当てられたら嫌であろう。男性の象徴。

それに気付いた白き少女は、激しい嫌悪感に襲われ、その原因である相手に怒りが込み上がった。

「コノ……」

「んっ?」

「キモチワルイッモノッ オシツケルナアアアア!!」

彼女は怒りに身を任せて、男の拘束を一瞬で振り払う。

突然の動きに対応しきれなかった彼の方へ振り向き、力を込めた右の拳で相手の股間を殴り付けた。

「んぐおおおお!!」 がっ……ひゅ……」

強烈な打撃音が辺り一帯に響き、久留井は手に持った拳銃を落とす。

彼は両手で股を押さえながらうずくまるように砂地へ倒れた。

「ヒィィ!! ウエー——ン!!」

少女は更に悲鳴を上げて、大和たちの居る浅瀬に向かう。

何もない海面で彼女は必死に両手を洗い始める。

「「「ホ、ホッポちゃん!」」」

大和と暁姉妹が少女の元へと走り寄った。

他の者たちは啞然としたままその光景を見続ける。

その中で一番早く正気を取り戻したのは山岸だった。

「・・・罪状に強制わいせつも追加しといてね」

「りよ、了解であります！　総員！　久留井を確保するであります!!」

「「「はっ!!」」」

あきつ丸の命令で憲兵たちが一齐に倒れた男の元へ駆け寄る。

彼らが対象を捕縛しに行っている間、山岸はほんの少しだけ彼に同情した。

「災難だったわね・・・壮太」

「自業自得だと思っております」

浅瀬では白き少女がまだ手を洗い続けていた。

「ウウ・・・カンシヨクガ・・・カンシヨクガ、トレナイ〜!」

傍から見れば異性のアレに触れて泣いている少女の姿に見える。

しかし、本当の理由は、同性として他人のものに触れた嫌悪感で泣いているだけであつた。

「もう大丈夫よ。ホッポちゃん、落ち着いて」

「そうよ！　レディーみたいにしやんとしなさい!」

「夜中に一人でトイレが行けないレディーになれど?」

「なんで今それを言うのよ、響いいい!!」

「私が、私がいるじゃない!」

「ホッポちゃん、電の身体を貸すのです! だから抱きついてもオツケーなのです!」

「ええっ?! い、電ちゃん!? 何を言っているのよ!」

大和が電の大胆発言に慌てふためく。

北方棲姫と暁たちの姿に興奮したのか、長門と陸奥がじりじりと接近しようとする。

「ホッポに、駆逐艦たち……胸が熱くなる!」

「これぐらいの火遊びなら……してもいいよね?」

「駄目に決まっているだろう」

静観していた日向が後方から2人の首根っこを掴み上げた。

「日向!? このビッグ7たる私の邪魔をするな!」

「い、いいじゃない! これぐらい罰も当たらないでしょう?」

「まあ、イマイチ説得力が無いがな」

彼女はもがく2人を逃さないようにし、艦娘たちが取り囲む白き少女を見続けた。

女性陣が騒いでいる中、久留井を拘束しに行つた憲兵たちも騒ぎ始める。

「待て、後ろじゃなくて前に手錠を掛ける!」

「なんでだよ？」

「いいから仰向けに寝かせろ！ それと大きい布持っている奴いるか!？」

「俺持つてる」

「それで担架を作れ！」

「仰向けにするぞ。いち、にの．．．さん!!」

「よいしょつと!．．．ええつ!？」

「ちよ、ち．．．血が．．．」

「早くしろ！」

「はいっ！」

「．．．」

「お前はなんで自分の股間を押しえているんだ？」

「なんとなく．．．」

「「「いいから手伝わんか!!」」」」

## No. 11 ホゴサレテイマス

白き少女が泣かせられた日から2日後の朝。

貨物船の一室内には、畳に敷かれた布団でぐっすりと眠る白き少女の姿があつた。

「スウウウ……スウウウ……」

そんな彼女の寝る部屋の扉が静かに開き、桃色のショートヘアの少女が入ってくる。

横須賀鎮守府の艦娘 “不知火” だ。

彼女は眠りについていている白き少女の傍へ座り、白い手袋を嵌めた左手で揺り起こす。

「ホッポさま、朝です。起きてください」

「ウツ……ウ……」

起こされた少女がゆつくりと起き上がり、眠たげに右手で目元を擦った。

「おはようございます」

「オハヨウ、シラヌイ」

「朝御飯が出来ましたので、食堂にいらしてください」

「ワカッタ」

白き少女は布団を折り畳み、不知火の後を付いていく。

食堂内のテーブルには、朝潮、荒潮、陸奥が椅子に座っていた。

その横で立っている日向がおにぎりを次々と作っている。

「オニギリ!?!」

白き少女は目を輝かせて、朝潮と荒潮の間へ座りに行く。

「ホ、ホッポちゃん? . . . こっちの椅子も空いてるわよ?」

「コワイカラ、イヤッ」

陸奥が少女に自分の隣の席を勧めるも、怖いと言われて拒否されてしまう。

少女の白肌とは違う真っ白な身体になった長門型戦艦2番艦。

「まあ、そうなるな」

「あらあら。素直じゃない♪」

「当然でしょうね . . .」

「不知火の席ですが . . . まあ、いいです」

席を取られた不知火がしぶと陸奥の隣へ座る。

彼女らが席に着くと、日向がボールの水で手を洗ってから席に着いた。

「それじゃあ、食べてもいいぞ」



「イタダキマス！」

白き少女がいち早く大皿に乗せられた山盛りのおにぎりへ手を付ける。

海苔が一枚撒かれたそれを頬張り、少女が嬉しそうに目を細めた。

(久しぶりのお米だ〜♪)

彼女は中に入っていた梅干しの欠片すら気にせず食べる。

日向が少女の喜ぶ姿を眺めながら尋ねた。

「美味しいか？」

「ウンツ！ オイシイ！」

「それはよかった」

「しくしくしく．．．」

「陸奥さん、さっさと食べてください」

日向と陸奥の間で食事をする不知火が命令するように言い放った。

長門型戦艦の妹は涙を流し続けて、1つのおにぎりを食べ始める。

「今日のおにぎりはしょっぱいわ．．．」

「陸奥、それほど塩は使っていないぞ」

同時刻。

トラック鎮守府の執務室では、椅子に座る山岸と、紫色の短めのポニーテールをしたセーラー服の女性がいた。

「横須賀鎮守府から来ました！ 青葉です！」

「遠い所からご苦労様。疲れたでしょう？」

「ども、恐縮です！」

彼女は青葉型一番艦の重巡洋艦『青葉』

敬礼した彼女が手にした茶色の封筒を山岸に手渡す。

「大本営からの報告書です。お確かめください」

「ありがとう」

山岸は封筒を開けて、中に入っていた数枚の書類に目を通していった。

彼女がある項目に目を入れた瞬間、その身体が震え出す。

「や、山岸提督？」

「……………くくつ……………」

「？」

「ぶはははははっ！」

突然、笑い出した山岸に青葉は戸惑いを隠せなくなる。

「どうされ、ましたか？」

「いや、これね・・・もう笑い話だわ」

山岸が重巡洋艦の艦娘に一枚の書類を手渡した。

青葉はそれに書かれた内容へ目を通すと、彼女も納得の頷きをしてしまう。

「あくなるほど・・・そりゃあ、そうですなえ」

「ほんつとうに、壮太。あなたは災難すぎるわねえ・・・」

そこに書かれていたのは、逮捕された久留井の処遇である。

現在、彼は病院での入院生活を余儀なくされた。

入院の理由は局部への殴打により、ショック死しかけたためである。

「でもよかったじゃない。一つだけ残って♪」

「男にとつて、それはどうなんでしょうか？」

「知らないわ。あんな変態の気持ちなんか・・・」

全治一カ月ではあるが、その後の彼には過酷な運命が用意されていた。

裁判で彼はロシアのマガダンに最近出来たばかりの収容所へ移送することが決定。

その所長からよくできた日本語で感謝の言葉が書類に書かれていた。

『生きのいいハラショーな男だ。此処は寒いが施設の暖は我々の肉体で完璧。盛大な歓

迎をしてあげよう。日本の憲兵にスパスイーバー！」

尚、所長本人と思われる写真には、青いツナギを来た体格のいいロシア人が写っていた。

「この話はこれで終わりにしましょう。それで？ 大本営からはなんて？」

「は、はあ・・・取り敢えず、昨日お渡しした書類の通りだと・・・」

「・・・あの大将は何を考えているのかしら？」

彼女がため息を吐くようにそう呟く。

今回の出来事により、トラック泊地付近で発見された北方棲姫の存在が明らかとなる。

敵の深海棲艦である以上、彼女は捕縛され、黙認していた提督や艦娘も処罰される可能性があつた。

山岸はそれを覚悟していたのだが、大本営から言い渡された指令は彼女の思いもよらぬものだった。

『対象である “北方棲姫” を保護せよ』

まさかの保護宣言である。

「どうなっているのよ……」

「いいじゃないですか。写真で見ると可愛らしいですし♪」

彼女の疑問はそれだけではなかった。

まず、密輸船である“はまぐり”に積まれた資材。

その所有権を持つ者は、逮捕又は失踪のために誰一人いない状態だった。

そんな中、第一発見者である北方棲姫が新たな所有者として決まったのである。

「羨ましい限りだわ」

「大型建造とか軽くてきちやうでしようね」

次に、保護対象となった北方棲姫に護衛が付くことになった。

それが横須賀出身の不知火・朝潮・荒潮と、元パラオ艦隊である日向と陸奥である。

彼女らは昨日の昼辺りに島へ訪れて、仮拠点を一時間も掛からない内に作り上げた。

今の所、貨物船という便利な拠点もあったため、テントに通信機や仮眠用ベッド、資

材保管庫、兵装整備の場所を作っただけである。

「とにかく、あの娘が酷い扱いをされずに済んでよかったわ」

「青葉もあんな娘が痛めつけられるのは見たくないですし……」

「過保護な上司がいたおかげかしら？」

「あの大将ですか？ 確かにありえますねえ．．．」

山岸は席から立ち上がり、執務室にある窓の外を眺める。

「あつ、それとですが．．．大和さんはいらつしやいますか？」

「大和？ 彼女に何か？」

「いえ、大したことではなくて．．．有名な戦艦のお話を聞こうかと．．．」

「残念だけど、今はいないわ」

「へっ!？」

青葉が素つ頓狂な声を上げてしまい、山岸がその反応を面白がった。

「彼女なら暁たちと明石を連れて出港したわ．．．あの『ハマグリ島』へね」

貨物船の食堂内。

「それっ!」

「プッ!!」

日向が白き少女を背中から抱きかかえて、握った両手で少女の腹部を圧迫させた。

その瞬間、少女の口から茶色っぽい種が吐き出される。

発射された種弾はテーブルのお皿へ着弾した。

「フウウウ、フウウウ……」

「ホッポさま、水を……」

「ング、ング、ング……」

左隣に居た不知火がコップの水を手渡し、少女がそれを一気に飲み干す。

「プハアアア……アリガトウ。ヒユウガ、シラヌイ」

「こちらは胆が冷えたぞ」

「たった2日目で任務失敗なんてさせないでください」

周りで見守っていた朝潮、荒潮、陸奥も安心の表情になる。

朝の食事中に、白き少女がおにぎりに入っていた梅干しを種ごと飲み込んだのが原因だった。

日向が不知火の指示でハイムリック法という応急処置を施し、何とか少女の喉に詰まった種を吐き出させることに成功する。

「……………どうやら到着したようです」

「ツー」

不知火が耳に付けた通信機からある連絡を聞き取る。

彼女のその言葉で、白き少女が食堂から飛び出していった。

「オフツ!?!」

「きゃっ!?!」

通路の曲がり角で少女は暈を押し倒すようにぶつかつた。

「ワワツ!? アカツキ! ゴメン!」

「レ、レディーでも受け止められないこの力……ガクツ」

「アカツキー!! シンダー!?!」

「死んでない(のです)」

やや呆れ顔で響、雷、電が声を揃えて突つ込む。

その後ろでは大和と明石も同じ顔をしていた。

島の入り江。

貨物船の右隣へ設置された巨大テント内。

端に寄せられた机には、複雑でテレビぐらいの大きさのある通信機が置かれていた。

中央の大きめのテーブルには地図が敷かれ、その上で明石がビデオレコーダーのよう



な機械を修理していた。

「もうちよい……よし！ できた！」

彼女はその機械の外装の蓋を閉めて、外側に付いているスイッチなどを操作する。

その数秒後、彼女が機械に繋がった螺旋コード付きのマイクを手を取った。

「あーっ、あーっ……こちら、ハマグリ島の明石です。どうぞ」

『聞こえるわ、明石。通信状況は良好よ』

機械のスピーカー部分から山岸の声が聞こえてくる。

「はい、ホッポちゃん。話してみて」

「ウン……サトコ、キコエル？」

『よく聞こえるわ。ホッポちゃんも元気そうね』

「エヘヘ♪ ゲンキダヨ」

白き少女が楽しげな笑顔で答えた。

今回の明石の目的は、トラック鎮守府からハマグリ島までの通信を繋げることである。

以前から、ハマグリ島へ向かう途中に、小さな孤島が発見されていた。

そこで明石は、昨日の昼に中継地点となるアンテナタワーをその孤島へ設置したの

だ。

本来は不知火たちの通信機のためだが、北方棲姫が使っていた壊れかけの無線機も繋がるよう改造された。

これにより、切れたマイクなども修理され、さらに艦娘からの無線連絡も聞き取りやすくなった。

『そうそう、ホッポちゃん。あなたにプレゼントがあるのよ』

「プレゼント？」

『大和、お願いね』

山岸がそう言うと、大和が何かを取り出し、白き少女の傍へ寄ってくる。

彼女は少女の黒い首輪の真正面にある突起の1つに、ある装飾を取り付けた。

それは大和の首輪にもある金色の桜花紋章と同じ装飾品。

「はい、これ見て」

「！」

明石が手鏡で少女自身に首輪の装飾を確認させた。

彼女は取り付けられた紋章に目を輝かせる。

「オオ——ッ！」

『気に入ってくれたかしら？』

「サトコ、アリガトウー!!」

「私とお揃いになりましたね」

「アツ、ジャア・・・ヤマトガタ3バンカンデー!」

「「「3番艦!」」」

少女が冗談で言った言葉に、その場に居た皆が噴き出してしまふ。

笑い堪える不知火が少女の手から無線機のマイクを取り上げた。

「えへんっ・・・こ、これで通信の方は、問題ないです」

『そうね。こつちの方は通常の通信として扱うわ。不知火、後は任せたわよ』

「了解」

不知火は無線機のマイクを置いて、トラック鎮守府との通信を終了させる。

白き少女がそれを見て、無線機の本体ごと持ち上げてから出て行こうとした。

「ホッポさま、何処へ?」

「ンウ? ヘヤニ、コレヲ・・・」

「それは陸奥にでもやらせますので・・・本日は貨物船内の資材を確認していきます」

「エッ!?」

「「「え、っ!?!」」」

彼女だけでなく、周りにいた艦娘たちも驚きの声を上げる。

(あんなに沢山あるのを・・・?)

不知火は皆の反応に動じず、すぐに指示を飛ばした。

「大和さん達も手伝ってください。大丈夫です。こちらも哨戒させている日向以外を動員させますので・・・」

12:00 (ひとふたまるまる)

やはり数が膨大過ぎたことで、昼になっても確認作業が終わらなかった。

これには流石の不知火も『不知火の落ち度でした』と呟く。

作業中に、白き少女がポケットにいくつかの資材を仕舞い込み、目撃した不知火が彼女に軽い手刀で制裁した。

「アタツ!?!」

「出しなさい!」

それから1時間くらい休憩した後、不知火は通信機で定期報告をしに向かい、残る少

女らは貨物船内部を探索することとなった。

暁四姉妹と朝潮、荒潮、明石はそれぞれ二手に分かれて、船の船首まで探索しに向かう。

陸奥は日向と交代して、島の外周を哨戒していた。

白き少女は大和とともに、空となった船室を見て回る。

いくつかの船室には、住んでいた証拠である日用品や衣服などが置かれていた。

ある程度見回った2人は甲板に出てから一休みする。

「ヤマト」

「何でしようか？」

「キョウハ、ホカノカンムス、オルスバン、シテルノ？」

甲板の床で座り込む少女が、船の手摺りに手を掛ける大和へ尋ねた。

「今日は里子提督の指示で、練度の上がった人達を改造しているらしいわ」

「カイゾウ・・・サラニ、ツヨイカンタイガ、デキルノ？」

「そうね。特に戦艦の方が優先されているみたい・・・」

「センカンガ、ユウセン・・・アツ、フソウタチモ？」

白き少女の口から扶桑の名前が出てくる。

大和が不思議に思いながらその質問へ答えた。

「え、ええ……扶桑さんや山城さんもそうよ」

「スゴイ……ヒュウガ、ミタイニ、ヒコウカンパンヲ、ツケルンダネ」

「飛行甲板？ あの娘たちは……航空戦艦になるのでしょうか？」

少女の口にした言葉で更に疑問が出てしまう戦艦の艦娘。

考え込む彼女に白き少女が問い掛ける。

「ヤマトハ、カイゾウ、デキナイノ？」

「えっ？ 私は……まだ、練度が足りてないらしいから……」

「ソツカ……ジャア、ガンバツテ、ツヨクナロウヨ！」

「……そうですね。もう沈まないためにも……仲間を沈ませないためにも……」

彼女は以前に苦戦した鬼級との戦いを思い出す。

自身の未熟さで守れなかった辛さは胸が締め付けられるようなものだった。

白き少女は彼女のそんな悩む表情を見て、元気づけようと話し続ける。

「ダイジョウブ！ モウミンナガイル！ カエルバシヨモ、アルカラ！」

「帰る場所……ですか？」

「ソウ！ ワタシハ、イマノトコロ、ココダヨ」

彼女が立ち上がり、大和を見ながら両手を拡げる。

「此処で・・・構わないのですか？」

「ウン。シザイガ、イツパイアルシ・・・セイカツシヤスイ♪」

「ふふっ♪ 確かに、あれだけの資材なら困りませんね」

超弩級である彼女の笑顔に、白き少女も喜びの笑顔で返した。

「ミャー！ ミャー！」

「アツ、タマ？」

「タマちゃん？」

突如、彼女らの真上からタマが慌てるように鳴く。

白き少女は何かに察して、タマの視界を覗き込んだ。

『ミャー！』

少女の視界共有を確認したそれは、開いている窓から船室へと入っていく。

そこでは修理されたあの無線機があり、そのスピーカーから女性の声が聞こえてきた。

『こちら、ラバウル鎮守府の摩耶だ！ 誰か居ないか!？』

『摩耶！ 左舷に、敵艦発見！ まずいわ！』

白き少女はタマを通じて、2人の艦娘の声を聞き取る。

艦娘の救援を確認し、彼女は視界を元に戻した。

「ラバウルノ、カラムスガ、アブナイ！ イツテキマス！」

「ちよつと!?! 待つて！ ホッポちや．．．」

大和の呼び掛けも間に合わず、少女は貨物船から飛び降りた。

彼女は入り江の海上を走り去っていく。

事態に気付いた不知火がテントから飛び出し、慌てて通信機で指示を飛ばした。

「日向さん！ ホッポさまを追ってください!!」

『了解だ』

「朝潮！ 荒潮！ すぐに出撃準備を！」

『『了解！』』

『私は？』

「陸奥さんは待機してください」

『なんでお姉さんだけ!?!』

焦るその姿を見ていた大和が苦笑を漏らす。

「仕方がない娘ですね．．．」



『ええっ!? こんな事あり得ない……!』

『鳥海、あれつて……鬼……いや、姫級か?……どうなっているんだ?』

『テイツ!』

『これは……全て不知火の落ち度になりそうです』

『まあ、そう落ち込むな』

この後、不知火はラバウルの艦隊へ北方棲姫の件を秘匿するように指令を出す羽目となった。

暗い雲に覆われた何処かの海上。

少し荒れている海面へ漂うように、1つの黒い女性らしき者が佇んでいた。

それはクラゲのような形で大きな口がある帽子を被り、そのの左右対称に白い触手、二連装砲、上部に黄色く光る眼が付いている。

手の部分と腰から下は黒く、それ以外は髪の毛すら真っ白な姿をしていた。

荒れ狂う波と風によって、大きめの黒マントが靡いている。

彼女は手にした黒い杖を両手で持ち、杖の先を海面に付けていた。

「・・・」

無言で立ち尽くす彼女の傍へ、別の女性が近付いてくる。

やって来たのは黒いシヨートヘアの黒ビキニ姿の女性。

両腕の艤装の内、“左腕の艤装の砲身”が変に折れ曲がっていた。

彼女は黄色く光る両眼で佇む女性を睨み、右手の艤装の歯で噛み掴んでいる残骸を差し出す。

「・・・」

睨まれた女性は気にもせず、差し出された残骸を帽子の触手で絡み取った。

それは主砲の上部に副砲が付いた三連装砲だった黒い艤装の残骸。

黒いマントの女性は帽子の口を開けて、その残骸を放り込んでから咀嚼し始める。

彼女の黄色く光る両眼にあるものが映し出された。

そこに映っていたものは・・・全身のほとんどが白く幼い少女の姿。

彼女はそれを見てから不気味な笑みを浮かべ、不規則な信号音を辺り一帯に響かせ

『  
・  
|  
・  
、  
・  
|  
・  
、  
|  
・  
|  
、  
|  
・  
』

た。

## No. 12 ナニカキタ・・・アツ！

朝が訪れたトラック鎮守府。

その工廠内では、多数の艦娘たちが艤装の整備点検をしていた。

彼女らの周りには、妖精と言われる小人のような少女たちが道具や資材を運搬している。

「いい感じで改造が完了しました」

「ご苦労様、明石。それに・・・あなた達もね」

山岸が明石とその周りにいる整備士の恰好をした妖精たちに労いの言葉を贈った。

彼女らは揃って敬礼をする。

昨日、明石がハマグリ島へ出掛けている間、彼女の指示通りに妖精たちが艦娘の改造を行った。

予定通りに改造が終わり、本日は近代化改修という艦娘の強化作業が進められる。

「やっと本当の私になれた気がシマース！ これでMVPを取りまくりネー！」

「力を感じます。これは・・・素敵です！」

金剛と榛名は、改装された艦装に見惚れていた。

どちらの艦装にも後部から左右に35・6cm連装砲が2つずつ出ている。

更にその外側には船の装甲らしき防盾が1つずつ付いていた。

「これは・・・いけるかしら?」

「大丈夫です、姉さま。これで欠陥戦艦とは言わせません!」

「うぬううう・・・ウチかて、負けてられへんで!」

扶桑と山城は新たな手持ち型の艦装を触って確認する。

それは盾のような平べったい形をし、艦装と同じ黒色の飛行甲板で、細長いカタパルトが二基付いていた。

龍驤の見た目は変わっていないように見えるが、赤い上服が明るくなり、飛行甲板である巻物が新品のように輝いていた。

「一番じゃないけど、カッコよくなった!」

「よかったね、姉さん。僕もすこし、強くなれたみたいだ」

時雨は自分と同じように、新たな艦装を付けてポーズする姉の白露を見つめる。

白露はスクリューが付いた船の機関部である艦装を背負い、手持ちの砲塔も手の甲に

嵌めるタイプとなった。

時雨は背中の子大きな二連装砲リユックの左右に、白露と同じ手持ちの砲塔が付けられていた。

また、2人の両脚の太ももへ付けられた魚雷発射管には、赤い弾頭の魚雷が装填されている。

改造の終わった艦娘たちを眺める山岸は、工廠内の設置された区画に目を向けた。

そこは内部が全く見えないよう鉄の壁で保護され、大きめのシャッターには『改修』という文字が書かれていた。

「そろそろ駆逐艦辺りが終わる頃かしら？」

「そうですね。ホップちゃんのくれた資材のおかげで、全員の近代化改修が出来たのはよかったです」

「これで、我が艦隊の戦力が大幅にアップするわ。鬼級相手でもいけそうね」  
2人が話している内に、改修のシャッターが開き始める。

その内部から現れたのは、顔が連装砲になっている小さい人型のロボットのようなの  
のが3体。

島風に懐く自律した艀装の『連装砲ちゃん』と言われる存在だ。

「あら？ あの子たちが一番？」

「流石、島風ちゃんの子たち。改修も早かったなんて・・・」

「「キュ？」」

ちなみに当の本人は、余りの寝不足で未だに就寝中である。

勿論、山岸の許可は貰っていた。

「じゃーん！ パワーアップしたわ！」

開いたシャツターから、ピカピカの艀装を付けた雷が飛び跳ねてくる。

彼女は山岸の前まで来ると、立ち止まってから敬礼した。

「里子！ 改良された私の魅力はどう？」

「綺麗に強化されたわね。任務での活躍を期待しているわ」

「はーい！ もーっと私に頼っていいのよ」

駆逐艦の少女がそう言い終えた時、シャツターの右横の壁から凄まじい衝突音が響く。

「今度は何？」

「な、なによ？」

「里子提督！ 今の音は!?!」

山岸と雷だけでなく、連装砲ちゃんと話す明石もその衝突音に驚いた。

「い、痛いのです〜」

開いたシャツターから艀装を付けた電がふらふらと歩いてくる。

その頭には大きめのたんこぶが出来ていた。

「・・・また、ぶつかったのね」

「いゝな〜づ〜ま〜!」

「電ちゃん!? ああつ・・・か、壁がへこんでる・・・」

山岸はふらつく電を抱き寄せて介抱する。

雷は妹の様子に呆れ、一方の明石は衝突された壁に嘆いていた。

同じ頃、ある孤島にて・・・。

明石によつて、この孤島に建設された通信の中継地点となるアンテナタワー。

その遙か上空から複数の黒い物体が飛来し、何かをばら撒き落とす。

それはアンテナタワーへと落ちていき、接触した瞬間に次々と爆発していった。



鉄が軋む音を立てて、タワーがゆっくりと崩れていく。

完全に崩れ倒れた後、それを遠くから見つめる海上の黒い影たちが去っていった。

真つ暗な空間に白き少女が1人だけで立っていた。

『ココ、ドコ?』

波打つ海面でもないしっかりとした床がある場所。

彼女は訳も分からず、その場から歩き出す。

(また、知らない場所に放り出された?)

しばらく歩き続けた少女は、不意に後ろの方へ振り向いた。

『ツ!』

そこには黒い霧のようなものが浮いていた。

その左右には腕らしきものがあり、右手だけでこちらを掴もうとする。

『ヒッ!』

得体のしれない恐怖感に、白き少女がすぐに走り出す。

その黒い霧も浮遊して、逃げた少女を追い掛ける。

『ハア！　ハア！　ハア！……』

『……メ………ツチ……』

黒い霧から何か声らしきものが聞こえたが、少女はそれを聞く余裕すらなかった。

『ハア！　ハア！　ハア！……アツ！』

白き少女が逃げる方向にあるものを目に入った。

遙か遠くにあるそれは、青い光の点のようなものに見える。

彼女はそれを目指して、全速力で走り出した。

『……！………ツテ……！』

黒い霧からの声がどんどんと大きくなる。

白き少女はその声よりも青い光へ向かうことを優先した。

『モウスコシ！』

『………ツテ！………ハ……アブナイッ！　イッテハ、ダメツ!!!』

『エツ?!』

突如、はつきりと女性の叫ぶ声が響き、少女はもう一度後ろへ振り向く。

そこには、黒い霧から黒い手袋を嵌めた白肌の細い右手が出ていた。

『ソコカラ、ニゲテツ!!』

『ツ!?!』

その声に警告されたことで、白き少女はある悪寒に気付き、走っていた方向をすばやく見返した。

そこには、あの青い光ではなく、白い歯が並んだ「巨大な口」が少女を飲み込もうと大口を開けていた。

「ハアツ?!?・・・ハア、ハア、ハア、ハア・・・」

貨物船の船室で寝ていた白き少女が飛び起きる。

まるで本当に走っていたかのように息を切らし、身体の至る所に冷や汗が出ていた。

「失礼しま・・・ホッポさま!?! どうされましたか!?!」

船室の扉から入ってきた不知火が少女の不安そうな様子に気付き、急いで彼女の元へ近寄る。

「シラヌイ・・・ナ、ナンデモナイヨ」

「本当ですか? それならいいのですが・・・無理はしないでくださいね」

「ウツ、ウン・・・」

少女はいつも通りの朝だと心に思い込ませた。  
(あれは、ただの………夢だよね……?)

ハマグリ島の外周付近に、飛行甲板を手にした戦艦の艦娘が海上を航行していた。

航空戦艦である日向は、水上爆撃機の瑞雲を飛ばし、自身も外周を回るように哨戒任務をこなしていた。

「本日も瑞雲日和だ」

呑気に航行し続ける彼女に、飛ばした艦載機から異変を知らせる報告が入る。

「むっ?…敵艦み…っ!」

敵を発見したという艦載機の報告中に、その艦載機との連絡が途切れてしまう。

これには冷静だった日向も表情が少し険しくなる。

「陸奥! 聞こえるか!」

『聞こえるわよ。どうしたの?』

「敵だ! 何隻かは不明だが、瑞雲がやられた! 皆に知らせろ!」

『了解よ!』

通信を終えた日向の見つめる先に、海上を航行する黒い影が数え切れないほど出現し

た。

「これは・・・中破は免れないか・・・まあい」

「朝潮と荒潮は、陸奥と日向の援護に！」

『了解！ 朝潮、出ます！』

『華麗に出げ・・・つて、朝潮ちゃん、待つて〜！』

貨物船内に居た不知火の指示で、テントで待機していた2人の駆逐艦が入り江から出港する。

「ホッポさま、あの無線機で山岸提督に救援を！」

「ワカッター！」

左隣に居た白き少女が船内の通路を走り出す。

残された不知火はテントの通信機に向かうため、船の甲板を屈指した。

船の外に繋がるドアが見えたところで、多数の砲撃音や爆撃音などが響いてくる。

「奇襲とは・・・いい度胸していますね」

島付近の海上では、砲弾の嵐が艦娘たちに襲い掛かっていた。

「ぐうっ！」

日向の右下の砲塔が敵の砲弾の直撃により、砲身が折れ曲がるほどの損傷を受けた。彼女は敵の砲撃を回避しながら、飛行甲板から次々と水上爆撃機を発艦させていく。

「これぐらいでー！」

航空戦艦の艦娘は、飛ばした艦載機に指示を与えて、前方にいる敵艦隊へ空爆を行った。

駆逐イ級や軽巡ホ級といった砲撃を行う敵艦が、瑞雲の爆撃で落とされていく。

『日向！ 右よ！』

「むっ!?!」

日向は陸奥から言われた方向に目を向ける。

そこには海上を航行する重巡リ級が4隻も現れた。

『援護するわ!』

陸奥が41cm連装砲による一斉射撃を行う。

放たれた砲弾は3隻のリ級を一撃で撃沈させた。

「流石、ビッグ7の砲撃だな」

残る1隻も日向の砲撃で沈んでいく。

「ふう……っ!?!」

一息ついたと思った彼女に、またも瑞雲からの連絡が途絶えた。

彼女が飛ばしていた空域を見ると、黄色く光る黒い菱形の艦載機が多数飛んでいるのを視認する。

「やはり、敵機・・・空母が・・・」

『日向さん！ 直上!!』

「っ!?!」

無線による朝潮の叫びで、日向はすぐに右へ回避行動を行った。彼女の居た場所に多数の爆弾が着弾する。

「危なかつ・・・っ!?!」

回避に成功したと思った彼女は、前方10時の方向から来る魚雷に気付いた。

すぐに回避する暇もなく、それは航空戦艦の足元へ命中する。

「ぐああああっ!!」

巨大な水柱に包まれた彼女は体勢を崩し、背中から海面へ倒れるように気絶した。

『日向!?! 日向あああ!!』

『不知火、日向さんが被弾！ 敵機も多数来ている!』

『これは・・・まずい状況じゃない?』

不知火は通信機から知らされる状況に歯噛みする。

彼女は長距離用の通信機を使い、応援要請をしようとしていた。

しかし、昨日は問題なく使えたはずの通信が、今では全く使えなかったのだ。

「なんてこと・・・」

彼女が右手で机を叩いていると、入り江の方から何かが海面に着地する音が聞こえた。

「まさか!？」

駆逐艦の少女が慌ててテントの入口から外へ出る。

そこには艦装を展開させた白き少女の走る姿があった。

「ホッポさま!! 駄目です! 行つては・・・」

不知火がそう叫ぼうとしたとき、彼女は後方から何者かの気配に感付く。

艦装を展開させて、主砲を構えようとした瞬間、彼女の頭部が黒い棒のようなもので

殴打された。

「ふぐつ!？」

「ツ!! シラヌイ!!」

テントのある方向から聞こえた打撃音で、白き少女もその存在に気付いた。

彼女はその相手に向けて、艦装の砲塔を狙い構える。

ゆつくりと歩くそれに、少女は砲塔を持つ右手を震わせてしまう。



「ッ!？」

島の入り江の出入り口がある方角から、更なる爆発音が響いてくる。

白き少女は島の外で戦う艦娘たちが気に掛かるも、目の前の敵を放置することができなかつた。

「コノ・・・コナイデ！」

入り江の海面に足をつけたそれに向かって、彼女は轟音と共に砲弾を撃ち放つた。

「・・・アタツタ？」

白き少女は爆発の煙で見えなくなった相手を探し始める。

そのせいで彼女は後ろへの警戒が薄れてしまった。

「・・・」

入り江の出入り口の海上からビキニ姿の深海棲艦が凄まじい速度で航行していた。

それは白き少女の後ろ姿を確認すると、不気味な笑みを浮かべて接近する。

「・・・ニイイ♪」

彼女は黄色く光る眼を輝かせて、右手の口付きの艀装で少女の後頭部を強く叩き付けた。

「アグウ!・・・」

思わぬ不意打ちで、白き少女は何も出来ずに海面へ前のめりに倒れる。

海面にうつ伏せで浮かぶ白き少女。

展開していた艦装は気絶と同時に消失していた。

気絶する少女の傍には、歪んだ表情で喜ぶ黄色の眼の重巡り級が立っていた。

左腕の艦装だけが折れ曲がっているため、彼女は右腕で白き少女を掴み取ろうとする。

「ッ!？」

その時、彼女の胸周りと両足に白い触手が巻き付かれた。

抵抗する彼女の身体がそのまま高々と持ち上げられる。

「ッ!!」

触手を操る本体は、白き少女に砲撃された黄色の眼の空母ヲ級。

彼女は微笑しながら、拘束するリ級を見上げる。

「ッ!!…ッ!!…ッ!!!」

重巡り級を絡み取る触手が更に力強く締め上げた。

強引に身体を引っ張られる彼女は、声にならない悲鳴を漏らす。

その後、島の入り江で何か水の中へ落ちる音が2回も響き渡った。

「ぐっ・・・ふうう・・・」

島から少し離れた海上で、被弾した日向が仰向けで浮かんでいた。

彼女の砲塔は全て損傷し、飛ばした水上爆撃機も全て撃ち落とされていた。

「・・・?」

彼女は首をゆっくりと持ち上げて、島の様子を観察する。

そこには、同じように仰向けで大破した陸奥、頭から血を流して砂浜の木にもたれ掛かる朝潮、浅瀬で波に打ち付けられる荒潮の姿があった。

「こんな無様なのは・・・長門には、見せたくないな・・・」

彼女がそう呟いていると、島の入り江の出入り口から何かが出てくる。

それは空母ヲ級が触手で白き少女を運び出す姿だった。

日向は島のあちこちに居た深海棲艦が居なくなつたかを確認する。

「・・・取って置いてよかった」

彼女は唯一無事だった艦装の飛行甲板に目を向けた。

左手に持つそれを水平にし、1機の水上爆撃機を発艦させようとする。  
「いけっ！」

その艦載機はある方向へ向かって飛ばされた。

それが空の彼方へ無事に飛んでいくのを見届けた後、彼女は傷付いた全身の力を抜く。

「頼んだぞ………なが………と………」

工廠の閉まっていた改修シャッターが再び開き始める。

そこから出てきたのは、超弩級の戦艦である大和だった。

彼女は普段とは違う感覚の艤装を確認していると、山岸が近寄って話し掛けてきた。

「どう？　調子は？」

「少し違和感がありますが、いい感じだと思います」

「じきに慣れると思うわ。焦らずに試してみなさい」

「はいっ!」

大和から元気のある返事を貰った山岸は、再び明石の居るところへ向かう。

残された戦艦の艦娘は艀装を仕舞い込み、まだ賑やかな工廠内を歩き回った。

「HEY、大和! やつと終了したのですネー!」

「はい、私で最後になりました」

「お疲れ様です、大和さん」

まだ、自身の艀装をチエックする金剛と榛名が大和に声を掛ける。

彼女らの周りには整備服の妖精たちが互いに話し合っていた。

大和は小さな整備士たちの様子を見て、2人に事情を尋ねる。

「あの、まだ何かあるのでしょうか?」

「ああ、それはネー・・・」

「実は榛名の連装砲にダズル迷彩という色を付けるはずだったのですが・・・」

「ペンキが切れてるから、入荷するまでおあずけデース」

話しによれば、妖精たちも思わぬ在庫不足に、何か代用品がないか相談していたらしいのだ。

「完全ではないですが、榛名はこれでも大丈夫です」

「困った妖精たちデー・・・ちよつと!? Wait! ジョークに決まってるネー!」

「ふふっ♪」

馬鹿にされたと思った妖精たちが整備道具を次々と金剛へ投げ付ける。

笑って見ている大和の元へ、扶桑姉妹が歩き寄って来た。

「大和さん、お疲れ様です」

「扶桑さん、山城さん、どう．．．も．．．」

大和が2人の姿を見た瞬間、彼女は目をぱちくりさせる。

「大和さん？」

「お二人とも．．．航空戦艦に？」

「あつ、はい。零式水上偵察機とは別に、伊勢型の瑞雲を発艦させられるようになりました」

「少し、重たいですが．．．」

2人の話を聞く大和は、昨日の北方棲姫と話したことを思い出す。

（あの娘の言う通りに．．．でも．．．何故、深海棲艦であるあの娘が？）

「あの．．．大和さん？」

「もしかして．．．私達、嫉妬されてる？ 不幸だわ．．．」

「あつ、なつ、なんでもないです！ ごめんなさい！」

気まづくなった大和がその場から早足で立ち去る。

「気を悪くさせたかしら・・・」

「お〜い! 大和!」

「えっ?」

工廠の入口辺りから、呼び声を出す天龍と付き添いの龍田が歩いてきた。彼女らは大和を呼び止めて、困った顔をしながら話し始める。

「大和、あのチビどもがハマグリ島に行きたいとか言いやがるんだ」

「頻繁に行つたら迷惑じゃない?と言つても聞かないのよ〜」

「暁ちゃん達が? そ、そうですね・・・」

自分のせいでもあるとは言えない超弩級の戦艦。

困っている3人の元に、件の4人が凄い勢いで走つて来た。

「一人前になつたレディーの姿を見せに行かないと!」

「タマ遊び・・・じゃない。タマ達を見に・・・」

「電が会いに行きたいっていうから・・・」

「ちよ、ちよ・・・雷ちゃん!」

口々に言う4姉妹に、大和は天龍たちの心中を察する。

見かねた山岸が彼女らの方へ行き、暁達を宥めるためにある提案をした。

「( )の通信機でホッポちゃんと話したらいいじゃない?」

「[[[[:]]]]」

「里子提督、よろしいのですか？」

「許可するわ。それでもしないと止まらないわよ、この娘たち」

彼女らは工廠の隅にある通信機へと集まり、他に興味を示す艦娘たちも近付いてくる。

山岸が通信機を操作し、ハマグリ島との連絡を取ろうとした。

「……ん？」

機器を弄る山岸が疑問の声を上げる。

近くに居た明石が彼女の操作を見ながら質問した。

「どうしました？」

「周波数は合っているはず……操作も間違えたなんてことは……明石」

「少々、お待ちを」

呼ばれた工作艦が山岸に代わって、通信機の操作を始める。

彼女は整備士の妖精に、通信機の中身も確認するよう指示した。

「おつかしいなあ……通信機は正常で、周波数も合っているはずなのに……」

それから約2分経過しても、ハマグリ島との通信は一向に繋がらなかった。

「別の原因かな？ どうしたものかね……」



「残念ね。今日は諦めるしかないわ」

「「そんなく（なのです）」」

明石と山岸の言葉で、暁達や大和だけでなく、他の艦娘たちもがっくりしてしまふ。

そんな彼女らに、工廠の入口から息を切らして入って来た長門が大声で叫んだ。

「里子提督!! 緊急事態だ!!」

「長門!? どうし・・・」

「島が! ハマグリ島が!!・・・」

多数の雲に覆われ、太陽の光が少ししかない海上をトラック鎮守府の艦娘たちが航行する。

その一番後方には、ステルス艦のような小型クルーザーが随伴していた。

特注で造船された提督専用の指揮艦は、平らなグレーの装甲で覆われ、その速度も異常なくらい早かった。

装甲で覆われた操縦席に居るのは山岸提督である。

艦隊の向かう先にハマグリ島が見え出した時、山岸が手元のマイクと取ってから指示を飛ばした

「各艦に告ぐ。周囲を警戒しながら、不知火たちを捜索せよ」

『『『『了解！』』』』』

命令を受けた艦娘たちが散らばるように、島へ向かって進んでいく。

大和が島の方へ真っ直ぐ進んでいると、海面に浮かぶ日向を発見した。

「日向さん!？」

彼女は急いでその傍へ駆け寄り、傷付いた航空戦艦を抱き起こした。

「しっかりしてください!」

「……う……き……てくれたか……」

日向が目覚めたのと同時に、長門が2人の傍へやって来る。

「日向! 何があった!?! 他の者は!?! 陸奥は!?!」

「……つちだ……」

航空戦艦は途切れるような言葉を口にし、右手で島のある方向へ指差した。

そこには長門型戦艦の妹が漂っているのが見えた。

「陸奥ううううう!!」

その姿を確認した長門が高速で航行し、傷付いた姉妹艦の元へ向かう。

「ぐっ・・・」

「日向さん!? 痛いところは・・・」

大和が言葉が続けようとした時、無線からあらゆる声が響いてくる。

『陸奥うううう!! しつかりしろおお!!』

『こちら、加賀。索敵機を発艦させます』

『荒潮を見つけたデース!・・・Oh, No・・・艦装が粉々ネー・・・』

『こちら榛名です! 朝潮さんを・・・朝潮さん!? 動いては駄目です!!』

『天龍だ。敵影は全く見えねえな』

『こちら矢矧。入り江に敵の残骸が浮いているのを発見。生き残りがいるかもしれない』

ん

『暁、あれ!』

『えっ、何っ、ひび・・・し、不知火!』

『助けるわ! いなづ・・・電!』

『ホッポちゃんは!?! ホッポちゃんは何処なのです!?!』

それぞれが叫ぶ中、電の言葉を聞いた大和は一番やりたい衝動を抑えて、日向の身体

を支え持った。

「すまない……不甲斐無いばかりに……」

「一体、何があつたのですか？」

大和に肩を貸されて支えられる日向がその質問に答える。

「深海棲艦の、大群だ……空母も居た……」

「空母!？」

「flagship（フラグシップ）だ……あんな強敵が……いるとはな……」

「何故、ここへ……？」

「目的は……北方棲姫だ……」

「っ!？」

大和は日向の言ったことに驚きを隠せなかった。

「奴が……空母ヲ級が連れ去った……」

「そんな……」

彼女から告げられた事実にはショックを受けた超弩級の戦艦。

様々な状況が飛び交う中、山岸からの更なる指示が伝えられる。

『全艦、ハマグリ島の入り江に集結せよ。負傷した艦娘もそこに運びなさい』

テント内では、簡易ベッドに5人の負傷した艦娘が寝かせられていた。

彼女らの周りには、明石と彼女が連れて来た妖精たちが修復作業を行っている。

入り江の砂浜では、島の外側へクルーザーを置いてきた山岸と、トラック鎮守府の全ての艦娘が集まっていた。

「なるほど・・・」

大和から話を聞いた山岸は真剣な表情で考え込む。

落ち着きのない電が焦るように口を開いた。

「里子さん！ 早くホツポちゃんを助けて・・・」

「落ち着いて、電ちゃん」

「せや、焦ったらアカン」

飛龍と龍驤が涙目の駆逐艦を静かにさせる。

彼女の頼みに、山岸が優しく頭を撫でながら答えた。

「心配ないわ、電。すでに手は打ってある」

「えっ？」

彼女だけでなく、他の艦娘たちも驚きの顔になる。

「昨日、大和が渡した紋章にね。発信機が埋め込まれているの」

「えっ？ あれに、ですか!？」

「そうよ。万が一のことも考えて、明石と相談して作ったの。こんなすぐに使うことになるとは思わなかったけど・・・」

大和は思わぬ山岸の仕込みに驚くが、その内容にほっとする。

山岸は落ち着いた彼女を見て、今後の作戦行動を皆に言い渡した。

「私の指揮艦に発信機の位置が分かる装置が付いているわ。それでホッポちゃんの居場所を特定し、全艦隊で救出する」

「むっ？ そういえば此処へ来るまで気にしていなかったが、全員出撃したら鎮守府の守りはどうするのだ？」

「問題ないわ、長門。そっちはラバウルの艦隊にお願いしてある。それと、明石はこの島で待機してもらおう予定よ。陸奥たちを修復させるには、その方がいいでしょう？」

「あ、ああ・・・」

「それじゃあ、ホッポちゃんには悪いけど・・・各自、此処の燃料で補給し、すぐに出発するわよ」

大和を含めた戦艦たちは貨物船の昇降機に向かい、残る艦娘たちは艀装の確認を始める。

上昇する昇降機に乗っていた大和が見えてきた水平線の彼方を見つめていた。

(ホッポちゃん、無事でいて・・・)

暗い雲に覆われた海の上に、多数の黒い物体が集まっていた。

その中心では、黄色く光る眼を持つ空母ヲ級が触手で真つ白な存在を捕縛している。

幼い姿である少女の身体を巻き付くように絡ませて、自身と対面できる体勢で持ち上げている。

「・・・ン・・・ンウウ・・・」

気絶していた白き少女の意識が戻る。

衝撃を受けた後頭部に痛みを感じながら、彼女の視界が徐々に鮮明になっていく。

「・・・ッ!?!」

完全に目を覚ました白き少女は、自身の置かれた状況をすぐに理解した。

身体は目の前の空母ヲ級によって拘束され、周囲には多数の深海棲艦たちがこちらを見つめていた。

(ど、どうしよう・・・動けないし・・・逃げたとしても・・・)

白き少女がこの窮地からどう抜け出すか考えていると、彼女を捕らえている空母ヲ級が微笑みを浮かべる。

「ヒッ?!」

それは白き少女が以前に見たり級の不気味な笑顔とは違い、全く別の恐怖を感じさせる微笑だった。

「アッ・・・」

次の瞬間、白き少女の眼に映ったのは、白い歯が並ぶ巨大な口の真っ暗な内部だった。

「・・・全艦、停止せよ」

クルーザーの操縦席で俯く山岸が静かに命令を下した。

周りに居た艦娘たちが命令通りにその場で航行を停める。

「里子提督?!」



3分近く経っても次の指示が来ないことに、大和が不審に思つて山岸の名を呼んだ。彼女の声に反応し、山岸は目の前で起こったあることを皆に伝える。

「発信機の反応が消えたわ・・・」

「「「「?」」」」

それは攫われた白き少女の唯一の手掛かりを失つた事実だった。

全員が不安な表情となり、山岸が苦渋の決断を告げる。

「全艦、帰還するわよ」

「そんな!? 里子提・・・」

「断念せざるを得ないのよ、大和。もう此処はミッドウエーの海域に近い。つまり私達は敵の巣窟に足を踏み入れようとしている」

「・・・っ!」

「発信機が途絶えて、目印が無い以上・・・羅針盤を使つての搜索は危険すぎる。申し訳ないけど、許可しないわ」

山岸の出した決断に、大和は拳を強く握るぐらいしかできなかった。

他の艦娘たちも同じ思いで納得していく中、響の持つ探信儀に反応が現れる。

「探信儀に感あり! 12時の方向!」

彼女の言葉に全艦が艤装を構えて戦闘態勢に入った。

指揮艦に乗る山岸もいつでも動けるよう操縦桿を握る。

「反応は1つ・・・上がってくる」

「この艦隊の数に、たった1隻で来るということは・・・」

「まさか、鬼級か姫級?」

響の報告を聞いた加賀と赤城が相手の正体を予測した。

どちらの艦種も1隻だけで、艦隊と渡り合える強力な戦闘能力を誇る。

予想外の相手の出現により、全員に緊張が走った。

「来るー」

響がそう言った直後、先頭の艦隊から少し離れた位置の海中からそれは現れた。

一瞬で浮上し、海上へ姿を現したその正体。

白肌の身体に黒いセーラー服を纏わせ、頭には角のようなものがある帽子を被っていた。  
また、足の太ももから先は途切れて、その外側には口付きで砲塔と魚雷発射管がついた艦装が装備されている。

綺麗な白い腕の先は、

右手は黒い手袋、左手は二門の砲塔と同化していた。

白く光る髪の毛は、左側に腰に届くぐらい長いサイドテールが垂れている。

その姿を確認した山岸がその存在の正体を呟く。

「駆逐棲姫・・・」

ある作戦中に初めて確認された存在。

駆逐でありながら姫級という異常な強さで猛威を振るったが、ある艦隊のおかげでその撃沈に成功する。

その後、稀に確認される程度の存在となり、各鎮守府へ要注意の存在の1つとして知れ渡ることとなった。

(こんな時に!)

歯を食いしばる大和が砲塔を構えようとする。

それを見た長門が慌てて呼び止めた。

「待て! 大和! 此処はこちらに任せろ!」

「し、しかし・・・」

「無駄な交戦はするな。最小限の戦力であいつを叩く!」

長門は左手で金剛と榛名を指差して、艦隊の先頭へ出るよう促した。

3人が無言で出ようとした時、佇んでいた駆逐棲姫が動き出す。

「・・・」

彼女は赤みの帯びた光る眼で、艦隊を見つめながら右手を差し伸べた。

「・・・オネガイ」

「「「えっ!?!」」」

「アナタタチニ・・・オネガイヲ、キイテホシイノ・・・」

彼女の言葉の意味に、全員が不審に思いながら警戒する。

だが、次に言い放たれた言葉で彼女らは困惑してしまう。

「アノコヲ・・・ホツポウセイキ」ヲ・・・「スクツテ」ホシイ・・・」

太陽が全く見られない荒れ狂う海に稲妻がいくつも落ちていく。

黒い異形たちが集まるその中心では、1つの黒い女性の影が痙攣するように震えてい

た。

その頭部に乗る大きな物体が頭からズレ落ち、海面に落ちてから変化し始める。

落ちた物体は風船のように大きく膨れ上がり、やがて大きな歯をもった顎が出来上がった。

一方の女性も膨れ上がるように体格が元の倍ぐらいの大きさとなる。

持っていた杖は握り砕かれて、髪の毛も信じ難い長さまで伸びていった。

彼女の手足に生えた新たな装甲、黒い首筋。そして、海面に浮かぶ巨大な口を持つ物体。

それら全てに、赤い光を放つ亀裂が纏うように浮かび上がった。



No. 13 (1)はどい?

(・・・?)

それは身体に伝わってくる堅い床の感触を感じ取った。  
恐る恐る目を開けたその視界に白い天井が映り込む。

(・・・また・・・夢?・・・それとも・・・)

目を覚ましたそれは、仰向けの状態から起き上がる。

そこはどうかやら木造で出来た建物の廊下のような。

「・・・えっ?」

そこで己自身の異常なことに気付いて、驚きの声を漏らした。

まず、幼い少女へと変化したはずの身体が、元の性別である男の身体へと戻っていたのだ。

だが、以前よりも背が低く、声が若々しいという妙な感覚に襲われる。

「一体全体どうなってるの?」

どう聞いても子どもらしい声色だった。

「よいしょっと・・・」

立ち上がったから周りを見渡すその目は、大人の身長より高い全身鏡が壁に掛けられているのを発見する。

「……………おおっ!?!」

そこに映つたのは、自身のとんでもない姿だった。

身長は恐らく、あの暁姉妹と同じぐらい背が縮んでしまい、記憶にある元の年齢よりも若返っていた。

服装は、海軍の提督が着ている白い軍服で、ちゃんと身長に合わせたサイズのものだった。

「本物の提督の服?……………でも、子ども用にしか見えない……………」

彼は左手で帽子を取り外し、右手で頭を少し掻き始める。

「……………ん?」

再び帽子を被った彼は、鏡に映った自身の後ろで立っている黒い女性の存在に気付いた。

「ふわっ!?! ビックリした……………」

彼は慌てて振り向き、そこに立つ女性を注視する。

彼女は成人ぐらいの身長で、肌が全く見えないほどの黒い服を纏っていた。

ゴシックな服装で、スカートは膝くらいまであり、黒髪のロングストレートの上にあ



る黒い帽子から目元が殆ど見えない黒のヴェールで顔を隠している。

「・・・コチラへ」

「？」

彼女は黒い手袋を嵌める左手を彼に差し出す。

少年となった彼は特に警戒もせず、小さな右手をその手に乗せた。

「ゴアンナイシマスネ・・・」

優しく手を握る女性が彼を連れて歩き出す。

曇り空の海上を航行し続けるトラック鎮守府の艦娘とクルーザーに乗る山岸提督。

そんな彼女らの先頭にある深海棲艦が先導するように航行していた。

数分前に、遭遇したばかりの姫級“駆逐棲姫”である。

「かなり右へ大回りで移動していますか・・・」

「アノママ、ススムト、”ハクチセイキ”ノ、シユビタイガイマス。デモ、”オニ”ノカ

ノジヨラハ、ウゴカナイカラ、ソクメンノ、シエンカンタイヲ、トツパシタハウガイイ」  
大和の質問に駆逐の姫がそう答えた。

彼女が初対面で北方棲姫を救って欲しいと懇願した後、自分なら居場所が分かると告げてきた。

それは誰もが困惑し、何人かは罨ではないかと予測する。

そんな中、大和が藁にも縋る思いで、彼女の言うことに食いついた。

山岸も僅かな可能性を信じたいと思い、『許可するわ』と戦艦の彼女に呟く。

長門、扶桑姉妹、一航戦の計5人は、彼女のことをまだ完全に信用せず、罨だったときの対策を身構えていた。

無言で航行し続ける彼女らの中で、大和がある疑問を駆逐棲姫に尋ねる。

「教えてください」

「・・・」

「あの娘は・・・何なのですか？」

「・・・」

「何故、あの娘が同じ深海棲艦に・・・狙われるのですか？」

「・・・」

それは他の者たちも聞きたかったことだった。

静かに航行し続けていた駆逐の姫がゆっくりとそのことを語り始める。

「アノコハ・・・ヒトコトデ、イエバ・・・「イケニエ」」

「なっ!? い、生贄!」

「シンカイセイカン、ニトツテ・・・アノコハ、ノドカラテガデル、ホドノソンザイ。アノコヲ、トリコミ、キョウダイナ「チカラ」ヲ、テニスルタメニ・・・」

「力を・・・手にするために?」

「「オニ」ヤ「ヒメ」トイツタ、ソンザイハ、チカラヲ、タクワエテ、アラワレル。デモ、ソレヨリ、テツトリバヤイ、ホウホウガ、「ホツポウセイキ」ヲトリコムコト・・・」

その話を聞いた大和だけでなく、他の艦娘も驚きを隠せなくなる。

同じように聞いていた加賀があることを問い掛ける。

「聞きたいことがあります。あなたはその事実を何処で知ったのですか?」

「・・・」

航空母艦からそう言われた駆逐棲姫が俯き、すぐに顔を上げてから口を開いた。

「ワタシモ・・・ソノ「ホウホウ」デ「ヒメ」トナツタ」

それを聞いた何人かの艦娘が、その所業に手を染めた彼女へ砲身を向ける。

しかし、大和だけは冷静な態度で手を伸ばし、砲撃しようとする彼女らを抑えた。

「あなたも・・・力が目当てですか?」

「チガウ！ デキレバ、コンナチカラ、ホシクナカッタ！」

問われた駆逐棲姫がそのことを強く否定する。

彼女は一呼吸してから心を落ち着かせた。

「アノコハ、モトカラアンナ、スガタ、ジヤナカッタ」

「元から？ それは一体……」

大和がそのことについて聞こうとすると、駆逐の姫が続けて答えた。

「モトハ、ベツセカイノ、テイトク、ヲシテイタ、ニンゲン、ダツタ。ソレガ、ナニ

カニヨツテ、コノセカイへ、ヤツテキタノ……、ホツポウセイキ、トイウ、イケニエ

“トシテ……”

「なんだと!? あれが……あれが人……いや、提督の成れの果てだと言うのか!?!」

それまで黙っていた長門が声を上げた。

「タスケタカッタ！ デモ、アノヒ……イヤ、アノコトデアイ、ソシテ、シンカイセイ

カンノ、シユウダンニ、オワレツツケタ。ボロボロニナリ、サイゴノシユダンデ、アノ

コガ、ギセイトナッタ……」

「それは……別のホツポちゃんなのですか？」

両手を握った電が怯えるような声で尋ねる。

「ソウデス。シマニイタ、アノコ、トハ、ベツノソンザイデス。ホカノコニ、ツイテ

ハ・・・ワカリマセン」

「そんな馬鹿な話は・・・」

「ありえます」

長門が否定しようとするが、大和が真剣な表情でそれを遮った。

「あの娘は、普通の深海棲艦とは違う部分がありました」

「違う部分だと？」

彼女は長門から目を離し、その隣に居た扶桑姉妹の方へ指差す。

「昨日、あの娘と話したとき、扶桑さん達が航空戦艦になることを呟いた」

「えっ？ 私達のことを？」

「そう・・・まるで元からそれを知っていたかのように・・・」

大和は続けてあることも思い出し、皆にそのことを伝える。

「それに・・・あの娘は私の姉妹艦である『武蔵』も知っていた」

「[[[[[?!]]]]」

最早、驚きで言葉が出ない艦娘たち。

彼女は山岸にあることを聞く。

「里子提督、武蔵については・・・」

「あなたと同じ機密扱いになっている艦娘よ。でも、それは大本營の機密情報・・・」

「そんな武蔵を・・・深海棲艦であるあの娘は知っていた」

これには流石の山岸も絶句する。

彼女自身、提督着任の際に極秘事項『大和型戦艦は保護するまで情報隠蔽せよ』と伝えられていた。

1番艦の大和は、発見時で敵に知られてしまったが、2番艦の武蔵については未発見と同時に情報も隠されたままだ。

「『提督』については、正直信じ難いですが・・・あの娘が元は人間だったのは信じられません」

「大和・・・その根拠は？」

「あの娘に助けられたからです。それ以外に理由はありません」

「そう・・・」

山岸がその理由を疑うつもりは微塵もなかった。

大和だけでなく、自身の保有する艦娘たちを何度も助けてくれた存在。

それは確かにあの深海棲艦と思えない行動だったからだ。

「それで・・・Youはワタシたちに協力して欲しいのネー？」

「キツイタトキニハ、モウオソカッタ。ワタシヒトリデハ、タチムカエナイ。ダカラ、アナタタチニ、タクシタイ。モウ、アノコヲ、ギセイニ、サセナナイタメニ・・・」

金剛の質問に、彼女は頷いてからそう答えた。

哀しげな雰囲気を漂わせる彼女を見て、大和は今後の作戦内容を確認し始める。

「あの娘の居場所は・・・敵艦隊の中心で間違いないですね？」

「マチガイナイデス。ゼンポウノ、シユビタイトモ、キヨリガハナレマシタ。サユウニテンカイスル、シエンカンタイトノ、コウセンハ、サケラレナイデスガ・・・」

艦娘たちは駆逐棲姫が向かっている先へ目を向けた。

同じように見つめる山岸が操縦根を握り締めて、航行する艦隊に指示を飛ばす。

「皆、念のために出来る限り弾薬消費は抑えて・・・やむを得ない場合は許可するわ」

「「「了解！」」」」

彼女は返事をする艦娘たちを見送り、ある不審な点を黙考していた。

（あの駆逐棲姫の話が本当なら・・・他の北方棲姫が見つかっているはず・・・でも、最初の発見されたもの以外、全く情報はない・・・）

（それに・・・最初の発見した艦隊の証言もおかしかった・・・『我々が見つけたんだっけ？』って、何よそれ・・・見たのはあなた達なのに・・・）

山岸は何とも言えない疑問を感じながら、若干遅れ気味の島風に呼び掛ける。

「島風、艦隊から遅れているわよ。急ぎなさい」

『えっ？ あっ・・・うん・・・』

彼女の指示で島風が航行速度を徐々に上げていった。

「……私、なんで……こんな場所に居るんだっけ？」

暗い雲で太陽光が遮られた海上に、多数の人型をした存在が佇んでいた。

両手に砲身の艤装を持つビキニ姿の「重巡り級」

白い仮面と左腕が砲塔、右腕に大盾のような魚雷発射管のある「雷巡子級」

セーラー服に大きめの白マントの中から蛇のような砲塔を多数持つ「戦艦夕級」

り級より大型で砲身が5門もある大盾の艤装を両手に持つ「戦艦ル級」

どれも青白い目を光らせて、その場から動かないまま立っている。



「……」

「……」

「……？」

ある戦艦タ級の1隻が何かに気付く仕草をした。

彼女が左側へ振り向いた瞬間、その身体全体を包み込む程の爆炎が発生する。

「！！！！！！」

味方の艦の反応が消えたことで、佇んでいた全ての艦が一齐に動き出した。

「初弾命中！ 感激です！」

「Good過ぎるネー！ 榛名ー！」

「やるな！ この長門も負けていられんぞー！」

榛名たちの砲撃を見た長門が2隻の戦艦ル級たちの間へ突っ込んでいく。

突然の強襲に慌てるル級たち。その砲撃は狙いが定まらず、簡単に相手の接近を許してしまう。

「ふんっ！！」

ビッグ7を誇る戦艦が左右の手でル級たちの首を握り掴んだ。

首を掴まれた彼女たちが苦しげな表情で痙攣する。

その艦娘を見つけた他の敵戦艦が彼女に向けて砲撃した。

「フツ、甘いわ!」

長門は手に持った戦艦たちを盾にし、飛んできた砲弾を防いでいく。

味方の攻撃を背中から受けたル級たちが声を上げずに沈黙していった。

「返してやる!」

長門が砲撃してきた夕級とル級に向かって、手にした深海棲艦たちを投げ飛ばす。

投げ付けられたそれをまともに受けた2隻の深海棲艦が体勢を崩してしまう。

その隙を長門は見逃さなかった。

「そこだ!!」

彼女はすかさず艦装の下部にある2つの41cm連装砲だけで砲撃した。

放たれた砲弾は激突で動きを止める深海棲艦たちに命中する。

なんとも強引な戦法に、他の艦娘たちが冷や汗をかいていた。

「天龍。あれが・・・戦艦の主な戦い方なの?」

「いや、違うに決まっているだろう・・・弾薬を極力消耗しないようにって、里子提督が

言ってたし・・・」

「あはははっ♪ なら、私達も始めるね♪」

矢矧と天龍を余所に、笑顔の龍田が近接武装の薙刀を槍投げのように投げ飛ばす。

「ッ!」

それは砲撃をしていた重巡り級の腹に深々と突き刺さった。

投げ刺した本人は命中した相手の元へ素早く近寄り、刺さったままの薙刀を勢いよく引き抜く。

そのまま彼女は流れるように、痛みでよろめくり級を斬り捨てた。

「天龍ちゃん！ 次の獲物も取っちゃおうよ〜!」

「ご指名らしいわ。あなたのご自慢の腕、期待するわよ」

「たりめーだろ！ 横須賀で鍛えられた腕見せてやるぜ!!」

気合の入った眼帯の軽巡洋艦が走り出す。

彼女は右腰に掛けてある刀を抜き、左手に持つつ刃の凶器を光らせた。

龍田に気を取られた2隻のリ級が、高速で移動する軽巡の斬撃の餌食となる。

「よっしやあつ！ 次行くぞー!」

戦艦と軽巡洋艦によって、敵の支援艦隊が次々と撃沈していった。

最後のチ級が煙を上げて倒された時、艦娘たちの前方にさらなる敵艦隊が現れる。

反対側で展開していた別の敵艦隊が、殲滅された艦隊の異常に気付いたのだ。

「ココハ、マカセテクダサイ!」

駆逐棲姫が艦娘たちの中から飛び出し、深海棲艦の艦隊を睨み付ける。

「ギョライ、ゼンダンハッシャ!!」

彼女の太もも左右にある艀装の魚雷発射管から黒い魚雷が発射された。

1回発射されるだけでなく、2回、3回と連続で多数の魚雷が放たれ続ける。

たった1人で発射したとは思えない量のそれは、向かってくる深海棲艦たちを一撃で落として始めた。

「す、凄い……」

「流石、姫級ね……」

戦艦や重巡などが簡単に撃沈されていく光景に、蒼龍と飛龍が思わずそう呟く。

彼女の駆逐と付いた名を疑うほどの戦闘能力を見せ付けられたからだ。

「サイソウテンシマス。ノコリヲ……」

「よくやった、後は任せろ!」

「龍田! 行くぞ!」

「待って〜! 天龍ちゃん!」

長門、天龍、龍田が僅かに残った敵艦を倒しに向かう。

駆逐棲姫はその場で留まり、艀装の魚雷装填を行っていた。

兵装の再装填を行う彼女の元へ、白露と時雨が近寄ってくる。

彼女らは神妙な顔で駆逐の姫に声を掛けた。

「ねえねえ。ちよつと．．．聞いてもいい？」

「．．．」

「あ、あのね．．．気を悪くしないでね？ ちよつと気になつ．．．」

「姉さん、落ち着きがないよ。僕からも聞きたいことがあつてね．．．」

「ワタシニ．．．ナンノ、ゴヨウナノデスカ？」

表情を変えずに装填作業をする駆逐棲姫。

姉の白露を差し置いて、時雨があることを尋ねる。

「どこかで僕らと会つたことはないかい？」

「．．．．．ナイデス」

駆逐の姫は振り向きもせず answers、それを聞いた時雨も冷静な表情を変えなかった。

「そうか．．．残念だったね」

「で、でも！」

「行こう、姉さん」

「あつ、時雨！」

時雨は納得していない姉をその場から引き連れていく。

残された駆逐棲姫は装填作業に集中した。

(シツカリ．．．シナイト．．．イマハ、アノコガユウセン．．．)

数分も経たない内に、遭遇した深海棲艦たちは強制的に退場させられた。再び、駆逐棲姫を先頭に艦娘たちが航行を開始する。

山岸のクルーザーは戦闘海域から離れた位置で航行を停止していた。

「・・・トマツテ！」

突然、駆逐の姫が艦娘たちの航行停止を呼び掛ける。

止まった彼女らの目には、暗くて何も無い海域が映っていた。

辺りを見回す大和が先頭にいる彼女に問い詰めようとする。

「本当に此処なのですか？ 何もありませんが・・・」

「ココノハズデス。アノコノ、ハンノウモアル・・・デモ、ナンデ・・・」

「・・・？」

駆逐棲姫は戸惑うように辺りを見回した。

彼女自身も想定していなかったことが起きているようだ。

その時、響の探信儀に新たな反応が現れる。

「来る・・・なっ、何これ・・・!？」

「響？ どうし・・・」

「とても大きな音が……上がってくる!!」

暁の声を遮るように響が大声を上げた。

その瞬間、彼女らの前方に巨大な水柱が立ち上がる。

海上へ現れた2つの影。

ボートよりも、とてつもなく大きな黒い物体。

1本の歯の大きさが人の頭ほどある口をもつ巨大な顎の艦装。

左右には今にも割れそうな赤い飛行甲板があり、後方辺りから砲塔もいくつか付いている。

赤く光る口の中は炎がちらつき、黒い体の表面に赤い亀裂が走っていた。

その左隣にいるもう1体の人らしきもの。

その身体の大きさは顎の艦装と同じく、身長の高さは3メートルを軽く超えている。

白い肌を隠すセーラー服は所々がボロボロになり、辛うじて大事な箇所だけを覆って

いた。

手足の黒い装甲にも赤い亀裂が纏わりつき、黒い首筋にも刺青のような亀裂が浮かんでいる。

雪のように白い髪は足に届きそうなくらい長く、左耳の上辺りに短めのサイドテールが束ねられていた。

巨大な人型のそれは、赤く光る瞳で対面にいる艦娘たちを見つめる。

「ソ、ソyna……マサカ……」

その姿を見た駆逐棲姫が震える声を出す。

長門も同じように目を見開いて、その存在の正体を呟いた。

「空母……棲姫……」

巨大な深海棲艦が微笑みながら口を開く。

「マツテイタワ。サア……ハジメマシヨウカ……」

「スベテ……ヒノ、カタマリトナツテ……シズンデシマエエエエエエエ!!」



# No. 14 よんでいる？

曇り空で暗くなっている海上が多数の砲撃によって、さらに荒れた海へと変貌する。

右腕を失った赤い目の重巡り級が左腕の艦装砲身で応戦していた。

無表情で撃ち続ける彼女に一発の砲弾が命中し、爆炎と共にその姿が消える。

「よし、次っ!!」

矢矧が左右の艦装に付いたグリップを握り、新たな敵艦へ狙いを定めた。

「装填完了！ いっつけえ——！」

白露の太ももにある魚雷発射管から、8本の魚雷が列を成して発射される。

水中を航行するそれは、赤い目の雷巡り級へ向かっていった。

気付くのが遅れた彼女は、右腕の大きな魚雷発射管で防御するが、後続の魚雷の餌食となる。

「まるで心が無いみたいじゃないか。君たちには失望したよ！」

時雨は背中にある2門の砲塔を2つに分離させて、それぞれ左右の手に主砲を持たせた。

背中のパーツからアームで伸ばされた主砲と、側面に付けられた連装砲が火を噴き始める。

その砲撃の連続で、立ち止まって攻撃する赤いり級たちが次々と撃沈されていった。

艦娘たちと交戦する深海棲艦の群れ。

それらは赤い目をした人型ばかりで、無表情のまま砲雷撃を行っていた。

空母棲姫が叫んだ直後に、それらは前触れもなく、何もなかった海中から姿を現した。

一方、暗い曇り空には、大量の白い球体が飛んでいた。

ひび割れたように口を開き、片目の赤い目と鬼つぼい角を生やす飛行物体。

それらは全て空母棲姫から発艦した艦載機である。

「斉射、始め!!」

「全砲門! Fire!!」

「主砲! 砲撃開始!!」

大和の掛け声によって、金剛と榛名が彼女と共に上空へ向けて砲撃した。

放たれた砲弾が空中で炸裂し、花火のように光る無数の弾子をばら撒く。

広範囲で扇状に飛び散った弾子が多数の白い球体を爆散させていった。

「今です！」

『第一次攻撃隊の発艦を許可するわ！』

「「「了解！」」」

大和の合図で、山岸が全ての空母に発艦指示を与える。

正規空母である一航戦の赤城、加賀。二航戦の蒼龍、飛龍。

彼女ら4人は和弓を構えて、同時に1本の矢を放った。

放たれた矢が数機の艦載機へと変化し、一瞬で数十機の編隊が出現する。

「続いて、艦爆、艦攻隊を発艦！」

赤城がそう叫ぶと、彼女らは続けてもう1本の矢を放ち、先程とは違う兵装を装備し

た艦載機を出撃させた。

「待ってたで！ 攻撃隊、発進！！」

龍驤も正規空母たちが矢を放つと同時に、巻物に描かれた飛行甲板の絵を広げる。

その甲板から数十枚の白い紙が飛び立ち、それらは全て艦載機へと変化していった。

白い球体の群れに向かって、多数の緑色の艦載機が機銃を撃ちながら突っ込んでいく。

相手の白い艦載機たちも口から機銃を放つが、艦娘の艦載機は熟練した動きで躲かしていった。

「いよいよこれを使うときが……」

「山城、落ち着いてやりなさい。あなたならできるわ」

「はい！ 姉さま！」

扶桑と山城は、初めて使う飛行甲板の艦装を構えて、水上爆撃機「瑞雲」を発艦させる。

カタパルトで2機ずつ飛ばしていき、20機もの編隊を組ませた。

それらは、空母棲姫の周りに居る戦艦夕級や戦艦ル級の艦隊へ爆撃しに向かう。

「敵の戦艦を狙うわよ！ 主砲、副砲……」

「まって、姉さま！ よく狙って……」

「撃てえっ!!」

「てえーっ!!」

瑞雲の爆撃開始と同時に、扶桑姉妹も主砲による攻撃を行った。

多数の爆弾と砲弾で数隻の敵戦艦が撃沈されたが、命中したのが少ないためにその数は僅かだった。

それを見ていた長門が砲撃しながら、2人にそのことを指摘する。

「2人とも焦り過ぎだ！ 指で数える程度しか当たっていないぞ!!」

「はあ……空は……今日は、曇ってたわ」

「姉さまと一緒に怒られた．．．幸福だわ♪」

落ち込む姉と何故か喜ぶ妹。

そんな彼女らの撃ち漏らした敵が、赤城たちの艦載機による雷撃や爆撃で沈められていった。

「ソコダ．．．」

空母棲姫が巨大な手をかざし、複数の白い艦載機を空母の艦娘たちへ向かわせる。海上を低く飛ぶその口が大きく開いて、火花を放ちながら銃弾を連射してきた。

「そんな攻撃、当てさせないわよ！」

「させないのです！」

雷と電が無防備な空母の正面へ現れて、両手に持つ防盾で敵機の機銃を受け止める。その2人の後ろから、龍驤が腰の側面にある艤装の対空機銃ですれ違う敵機を狙い撃った。

飛び去る数十機の内の5機に命中し、その内の3機だけ海へと落下していく。

「あかん！ この機銃じゃあ威力が足りへん！」

軽空母がそう嘆いていると、撃ち漏らした敵の大半を巻き込む程の爆発が起きた。

「な、なんや!?!」

「どこから!?!」

「ふあっ!？」

驚く3人が後ろへ振り向き、左手の砲塔から煙を上げる駆逐棲姫の姿を見つける。

「ヤラセハシナイヨツ!」

彼女は左側へ移動し、迫ってくるリ級とチ級の群れに多数の魚雷を放った。

空母を狙おうとした敵艦隊が艦娘側の姫によつて駆逐されていく。

「島風! あの花ばかりに負担を掛けさせないで!」

「おうっ!? りよ、了解………なんで?」

「『キユー!』」

加賀に怒鳴られた島風が、若干腑に落ちない表情で移動し始めた。

その後から3匹の連装砲ちゃんが付いていき、時々飛び交う敵機に向けて発砲する。

「雷撃、行くわ!!」

「ウラー!!」

舵を右に一杯にきる暁と響が両脇の魚雷発射管から、同時に12発の魚雷を撃ち出す。

「!」

2隻の赤い戦艦ル級がそれに気付いて、迎撃のための砲撃準備をする。

しかし、その後ろから接近する2人の軽巡も見つけたことで、どう対応するか判断に

困っていた。

「さあ・・・魚雷か、斬撃。好きな方選びなっ!!」

「どつちにする〜?」

「ツ!?!・・・ツ?・・・ツ!・・・」

「時間切れだ(よ〜)」

天龍と龍田がそう告げた瞬間、ル級が迎撃しようとした魚雷が直撃する。被弾でふらつくその身体に、軽巡の鋭い斬撃が襲い掛かった。

2人は敵艦の撃破後、すぐに左右へ別れるように離れる。彼女らの居た場所へ新たな敵の砲撃が飛んできたからだ。

「こいつら、動きは通常個体と変わらないが・・・性能は普通じゃねえな」  
「でも、私たちの見たelite(エリート)より楽じゃない〜?」

彼女らがそう話す間にも、赤い目の深海棲艦が次々と海中から出現した。空と海を交互に攻撃する大和と金剛たちの不安が増していく。

「多過ぎる・・・」

「ちよつとmany(多い)デース!」

「でも、榛名は・・・まだ行けます!」

『そうね・・・でも、貴方たちが時間を稼いでくれたおかげで、到着が間に合ったわ』

「[[[[[?]]]]」

山岸の言葉に艦娘たちが疑問を感じていると、扶桑たちの艦載機ではない瑞雲が20機近く飛んできた。

それらが新たに現れた人型の深海棲艦たちを爆撃した後、遠くから数発の砲弾が音を立てて飛来してくる。

その砲弾は戦艦夕級と重巡り級に着弾し、展開していた敵の数が一気に減った。

「日向!?! 陸奥! お前もか!?!」

『長門、待たせたな』

『姉さん、無事?』

長門の通信機から2人の元気な声が響く。

彼女が後方へ目をやると、航行してくる不知火たちの艦隊が見えた。

大和は彼女らが来た方向に驚き、すぐに不知火へあることを尋ねる。

「不知火さん! そっちは守備隊の鬼級が居たはずじゃあ・・・」

「あれですか? 非常につまらなかつたので、速攻で沈ませました」

「お、鬼級を速攻で・・・」

大和が半ば呆れながらも彼女らの到着を喜んだ。

「痛いのは治りました。これなら戦えます!」



「あの『リ級』は何処かしら？ 私を沈めなかったこと・・・後悔させてやらないと気が済まないわ！」

朝潮と荒潮が両手に付けた艀装を構えて、やる気満々の意志を主張する。

3人の後方からやって来た日向と陸奥は、その後ろに紐で繋いだボートを曳航していた。

そのボートには燃料のドラムカンや弾薬箱とボーキサイトの木箱も乗っている。

「補給物資も持つて来た。弾薬が無いと困るだろう？」

「ホッポちゃんのおかげ、細かいことを気にする暇もないし・・・」

『助かるわ。大和、長門、金剛、榛名はすぐに後退しなさい！ 不知火、頼んだわよ』

「期待に込えてみせます」

後退する艦娘と入れ替わりに、不知火たちが前に出た。

大和たちは切り離されたボートの資材で、すぐさま補給を行う。

『前方の空母棲姫が旗艦らしいわ。それと駆逐棲姫は味方よ。彼女への攻撃は許可しないわ』

「空母棲姫ですか・・・資料で見たサイズと異なりますが・・・骨がありそうですね」

「く、駆逐棲姫が味方!! 攻撃してこないのなら分かりませんが・・・」

「色々ややこしくなってるわね。でも、面白そうじゃない♪」

「空母か。なら、航空戦艦の力を見せてやろう！」

「私の出番ね。いいわ、やってあげる！」

山岸から現状を伝えられた不知火たちが、巨大な空母棲姫と赤い深海棲艦たちに攻撃を始める。

不知火、朝潮、荒潮は駆逐艦の出す速力で航行し、向かってくる敵を1隻ずつ的確に撃沈させていった。

彼女らは戦艦級の相手に、砲塔でその頭部を狙いに向かう。  
相手を確実に落とすために手段を択ばないようだ。

日向は陸奥と一緒に砲撃し、水上爆撃機による爆撃と弾着地点の予測を行う。  
敵の艦載機が日向の瑞雲を強襲するが、赤城たちの艦載機によって防がれた。

日向は飛ばしている爆撃機をロールさせて、助けてくれた空母の艦載機たちに感謝の意志を見せる。

「エモノガフエタ・・・ナラ、コチラモ、フヤスマデー！」

空母棲姫の右隣にある巨大な艀装の飛行甲板から、さらに白い球体の艦載機が次々と

発艦されていった。

空に新たな白い球の魚群が出現し、不気味な口から爆弾を落とし始める。

「全艦！ 爆撃を回避せよ！！」

補給から戻った大和の指示で、全ての艦娘たちが回避行動をとった。

空母の姫は、爆弾の雨の中を避けるように移動する艦娘たちを見て、当てられない苛立ちを覚える。

「アレヲ、ツカウカ・・・」

彼女は右手を巨大な艦装の側面に当てた。

その手の赤い亀裂が光り出すと、艦装の後ろ辺りにある上部の砲塔が変化し始める。

金属が変形する際の衝撃音が響き渡り、2つあった単装砲が3連装砲へと変わっていった。

その巨大な3連装砲の上に、更なる副砲のような3連装砲が出来る。

その形はトラック鎮守府の艦娘たちに見覚えのある兵装だった。

「あれは!? 南方棲戦鬼の・・・」

「シズメエエエ!!」

大和がそう言った直後に、空母では有り得ない兵装が砲撃音を轟かせる。

その巨大な砲弾は金剛へと真っ直ぐ向かっていた。

「あああつ!!」

「金剛姉さま!?!」

高速戦艦の彼女は、咄嗟に左側の艀装にある防盾で防いだが、端にあつた砲塔ごと破壊されてしまう。

「し、Shit……大切な、装備が……」

「金剛姉さま! 後退してください!」

「ま……まだいけるデース!!」

榛名に氣遣われた金剛は、血が出る左肩を右手で抑えながら強がる。

そうしている間にも、空母棲姫からの巨大な砲撃と艦載機による攻撃が続く。

大和は再度、三式弾で空にいる白い艦載機を撃ち落とし、駆逐棲姫に声を掛けた。

「駆逐棲姫さん! あの娘は……ホッポちゃんは何処に!?!」

「マツテクダサイ!……ッ!」

駆逐の姫は頭に右手を当てて、何かに感付いた仕草で空母の姫を睨み付ける。

「アレノ、ギソウノ、ナカデス!!」

「位置は何処ですか!?!」

「ソレガ……ワカラナイ。ハンノウガ、オオキスギテ……セイカクナバシヨガ、

ドコナノカ……」

「・・・っ」

大和は唇を噛み締めて、空母棲姫の人型へ視線を飛ばした。

「本体に直接ダメージを与えるしか・・・ないのでしょいか？」

「ソレシカナイ。ヘタニギソウへ、コウゲキシタラ・・・アノコガ・・・」

「・・・全艦！ 空母棲姫に集中砲火！ 但し相手の艦装への攻撃は禁ずる！」

大和の指示を受けた艦娘たちが動き出す。

一部の者は疑問に思うも、何人かは状況を理解していた。

「これほど厄介ならば、敵の兵装破壊こそ有効なのだが・・・」

「仕方ないネー、長門。あの Princess (姫) を傷付けたら、大和が Get a n

gry (怒る) デース」

「ホッポちゃんがあの中にいるのです!? 助けるのです!」

「電、落ち着きなさい! 勝手に行くのはレディーが許さないわ!」

「考え無しに行ったら、無駄死にするだけや。止めとき」

「ホッポさまを攻撃したら、不知火たちの任務が失敗。それだけではできません」

それぞれが思い悩みながら攻撃する中で、大和と駆逐棲姫は囚われた白き少女の安否

を気遣う。

「どうか・・・助け出すことはできないでしょうか？」

「トリコマレタ、ジョウタイカラハ、ヤッタコトガナイデス・・デモ、ハンノウガアル。ナニカ、カノウセイガ・・。」

「・・・ホツポちゃん！」

「何処まで行くの？」

「モウスグデス・・。」

真つ黒な服装の女性に手を引かれる提督服の少年が、木の床で出来た廊下を歩き続けていた。

2人は廊下の突き当たりにある木製の両扉の手前で立ち止まる。

「ドウゾ・・。」

彼女はその扉の左側を押し開けて、手を離れた少年を中へ招き入れた。

彼は部屋の中へ入ると、見覚えのある内装に驚きの声を漏らす。

「おお・・・此処が提督の執務室・・。」

特に目立った外装は無く、木の板で出来た壁と床に、部屋の奥には提督が書類作業を行うための木製の机があった。

椅子は骨組みも木製で、座る部分と背もたれ部分に紅色のクッションが付いている。

「♪〜」

その椅子を見つけた少年が、鼻歌を歌いながらそこへ向かった。

初めて見る提督の私物に、好奇心が抑えられなかったのだ。

彼は椅子を引き、そこへ勢いよく座る。

「よいしょっ♪．．．．．んっ?」

少年は椅子へ座った瞬間に、その妙な違和感に気付いた。

それは椅子にあるクッションの弾力さではなく、まるで温もりのある柔らかさだった。

彼はゆっくりと座った椅子へ目を向けると、そこには自分と椅子との間にある存在が居たのだ。

「フフフ♪」

「えっ!?! い、何時の間に? っていうか、ゴメン! すぐに．．．」

少年が慌てて立ち上がろうとした時、先に座っていた黒い女性が両手で掴み抑えた。

彼女はそのまま彼を優しく抱き締めて、耳元で囁くように呟く。

「アヤマラナクテモ、イイデスヨ」

「でも・・・」

「ダイジョウブ・・・ナニモシナクテイイ」

「えっ?・・・あつ・・・」

不意に少年の身体が淡い青色の光に包まれてしまう。

その瞬間、彼は身体に力が入らなくなり、まるで眠りに誘われるように意識を失っていった。

「なんだ・・・ろう・・・こ・・・れ・・・う・・・み・・・  
?」

「ウアッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ ツ!!」

突如、駆逐棲姫が頭を抱えて、苦しげな唸り声を上げた。



彼女の異常に気付いた大和以外に、白露と時雨が心配な表情で傍に近寄る。

「駆逐棲姫さん!？」

「どうしたのー!?! な、なにっ? 頭痛でもしたの!？」

「姉さん! だから落ち着いて! 君、どうし・・・」

「ダメ・・・ヤメ・・・テツ!!」

苦しい表情で何かに耐える駆逐の姫が、空母棲姫の居る方向へ震える黒い右手を伸ばす。

「アノコヲ・・・アノコヲ、ケサナイデエエエエエエ!!」

攻撃を受けても平然とする空母棲姫に変化が訪れる。

手足の装甲、黒い首筋、艀装の全体。

それぞれに纏わりつく赤い亀裂が、まるで海色のような青い光を放ち始めた。

その瞬間、それに呼応するかのように、艦娘たちにも異変が訪れた。

「なんだ? なに・・・ぐっ!?! があああああ!!」

「姉さん!?! どうし・・・あぐっ!?! ああああああ!!」

長門の頭にモスキート音のようなノイズが響き、まるで悶えるように苦しみ始めた。傍に居た陸奥も声を掛ける暇もなく、姉と同じ症状に侵される。

近くに居た扶桑と山城が慌てて救援に向かった。

「長門！ 陸奥！」

「大丈夫ですか!？」

彼女らが傍へやって来ると、2人は何事も無かったかのように動きを止める。

「お二人とも怪我は!？」

「・・・扶桑？」

「よかった。ご無事なようで・・・」

「此処は、何処だ？ 何故、私は戦場に居る？」

「へっ?」

突然の長門の質問に、扶桑は呆気にとられた。

陸奥に話し掛ける山城も同じようなことになっていた。

「陸奥、大丈・・・」

「あ、あらあら？ 山城？ どうして此処にいるのかしら？」

「む、陸奥？」

「それに、姉さんも何故？ 別の鎮守府に居たはずでしょう・・・」

近接武器で戦う天龍と龍田にも同じノイズが走り、すぐに元の状態へと戻る。

「つう・・・た、龍田？ 此処は？」

「あらく? 天龍ちゃん。ここ横須賀じゃないみたい」

「天龍? 龍田? これは一体・・・ぐつ、あああああ!」

「痛つ、あああああつ!」

「姉さ、まああああつ!」

2人に声を掛けた矢矧も頭を抱えて苦しみ出す。

扶桑と山城も同じ症状が起き始めて、それを見ていた空母たちも次々と謎のノイズを聞かされた。

「あぐうううつ!」

「蒼龍! いつ、あああああつ!」

「蒼龍! 飛龍! なつ、何が起こつてん・・・いつ!? いたたたたつ!」

「龍驤! まさか・・・ぐつ、ううううつ!!」

「加賀さん!! 加賀さん!!」

赤城が加賀の元へ行く間に、今度は金剛と榛名も苦しみ出し、別の方では白露と時雨も同じ状態となる。

「つうう・・・わ、What? の、Noooooo! 私の大切な艦装が!」

「こ、金剛姉さま? これは一体・・・」

「あれ? ここ何処よ!」

「うっ．．．僕は一体．．．」

大和は皆の様子がおかしいことに戸惑ってしまう。

「何が、起きているの?」

瞬く間に艦娘たちへ謎の症状が広がっていく。

それは残つた者たちも蝕んでいった。

「か、加賀さん? あれ．．．私、お腹が．．．」

「これは? 不知火は極秘任務をしていたはず．．．」

「あ、荒潮? 此処は、何処か分かりますか?」

「あらあら大変。朝潮ちゃん、敵が一杯いるわ。倒さないとやばい?」

「むっ? 私はいつ瑞雲を発艦させたのだ?」

「えっ? ピヤーツ!! 敵が、空にも海にもいるじゃない!」

「ありのまま今起こったことを話すと．．．気が付いたら戦場に居た」

「何を言っているのよ!?! 響!!」

「そう、私も何を言っているのか分からない」

「皆何言ってるのよ? この島風を置いていくな!! 私も分からないけど．．．」

そんな中、電は雷へ突つかかかのように話していた。

「雷ちゃん! 電たちはホッポちゃんを助けにきたのです!」

「落ち着いて、電！ その・・・ホッポちゃんつて、何なのよ!？」

「ホッポちゃんは、ホッポちゃんなのです！ どうして『覚えていない』のですか!？」  
「っ!？」

偶然にもその言葉を聞いた大和は、今起きた事態の正体に気付く。

「まさか・・・」

『や、大和・・・』

「里子提督!？」

『此処は・・・何処なの？ 何故、全艦隊が出撃を・・・』

彼女が最悪の展開に気付いた時は、すでに手遅れだった。

現時点で殆どの艦娘たちは、白き少女と初めて会った時から現在までの記憶を消失していた。

混乱する艦隊の中で、残る2人にもそれが容赦なく襲い掛かる。

「は、はううううっ!？」

「電ちゃ・・・い、いやああああああああああつ!!」

大和と電の頭に不快なノイズが鳴り響く。

それは大切にしてきたものを無理やり消される感覚だった。

「タムケダ。クレテヤル・・・」

静観していた空母棲姫が無防備になった大和へ向けて、巨大な3連装砲を発射しようとする。

未だにノイズに悩まされる駆逐棲姫が、その卑劣な攻撃に感付いた。

「ヤメテエエエエエツ!!」

彼女は持てる限りの速度で移動し、未だに苦しむ大和を庇いに向かう。

駆逐の姫は両手を掲げて、空母棲姫の砲弾を全て受け止めた。

「くう……えっ!?!」

苦しみから解放された大和が、目の前で起きた爆発を目撃する。

何が起きたのか分からずにいると、そこには自分を庇うように立つ駆逐棲姫の姿が

あった。

「な、何故、姫級が……」

彼女は倒れそうになる駆逐の姫を、無意識で後ろから抱きつくように支え持った。

その身体はあちこちにヒビが入り、白い肌は所々に赤い血が付いていた。

「どうして……」

「……メ、ンナ……イ……」

「?」

大和は息も絶え絶えになる駆逐棲姫の小声を聞き取る。

「・・・ゴ、メンナサイ・・・テ・・・ト、ク・・・ヤク・・・ソクヲ・・・マモレ・・・  
ナク、テ・・・」

彼女はその聞き取った言葉から、頭痛と共に何かを思い出す。

「痛っ・・・何、これ・・・何が・・・」

彼女の脳裏にあるものが映り込んだ。

それは暗い海の中で自分に向かってくる物体。

知っているはずのその正体が思い出せなかった。

唯一、分かっているのは・・・真っ白に輝く程の白い姿。

「・・・」

「・・・」

「・・・てい、とくへ・・・」

「提督・・・提督うううううううううううううううううううう!!!」





## No. 15 タダイマ!!

「……はっ！」

提督服の少年は、椅子に座る黒服の女性の膝へ座った状態で意識を取り戻す。

その小さな身体を拘束していた黒い手は、何時の間にか苦しんでいる女性の頭を抱えていた。

彼は苦しむ彼女の膝から立ち上がり、ゆっくりと部屋のドアへ足を向ける。

「ダ、ダメ……イ……カナイデ……」

黒服の女性が座った状態で右手を指し伸ばした。

提督服の少年は無言のまま、両手で両扉のドアノブを掴む。

「マッテ……ココ、ニイテ……ドコニ、モ……イカナイデ!!」

必死に引き留めようとする女性が、這いつくばるように床へ倒れた。

それを聞いた少年が頭だけ振り向き、申し訳なきような顔で彼女にあることを告げる。

「ごめんね。知っている声と呼んでいる。行かないと……」

「ヤメテ！ ソコハ……」



「加賀さん！ 敵機が！」

「!?」

赤城が空を指差し、そこにある光景を見た加賀が目を疑った。

「……………墜ちていく?」

空母棲姫が発艦させた白い球体の艦載機。

曇り空を覆い尽くす程飛ばされたその機体が、まるで制御を失ったかのように次々と海面へ落下していく。

気付けば何もせずに、艦娘側が制空権を確保していた。

「い、一体……………何が……………」

「……………ウ、ソ?……………ソナ……………コ、トガ……………」

「?」

大和の両手で抱えられる駆逐棲姫が驚きの顔である方向を見つめる。

その先には、空母棲姫の右側にある巨大な艦装がプルプルと震えていた。

やがて、その大きな口が開いていき、下顎の歯の内側にある黒い部分から白い何かが生えてくる。

「あれは?」

それは白いミトン手袋を填めた小さな右手だった。

その手は肉のような黒い部分から這い出て、歯よりも外側へ手を伸ばそうとする。  
「「「！」」」

それを見ていた艦娘たちの中で、暁・響・雷・電たちの頭にガラスの砕け散った音が鳴り響いた。

自分にしか聞こえないその異変の音を聞いた彼女らの内、暁が深く息を吸い、大きな声で叫び出す。

「第六駆逐隊!! レディーに続けええええええええええええ!!」

彼女はそう叫んだ後、高速で空母棲姫の艦装へと向かった。

指示を受けた妹たちも、同じ速度で長女の後を追う。

「おい! チビども! . . . ちい! 龍田! 矢矧!」

「あらくしようがない娘たちね」

「援護するわ! 任せて!」

天龍が龍田と矢矧を連れて、飛び出した4姉妹の後を追った。

軽巡の3人は、駆逐の暁たちを狙おうとする子級やル級などを撃破していく。

「グウ、ウ、ウ、ツ!!」

空母棲姫が右手を艦装のある方向へかざした。

その行動によって、艦装の口内が蠢き出し、這い出た白い手を呑み込もうとする。

「間に合えええええ!!」

暁が背中中の機関部を激しく稼働させて、自身の航行速度を速めた。

白い手が完全に引き戻される直前で、彼女の右手がそれを握り掴む。

それに続いて、左側から来た響が左手で掴み、雷も次女の左隣から左手で掴み、電は長女の右側から右手で掴んだ。

「今よ! 引つ張れええええつ!!」

長女の掛け声で、その妹たちを含めた4人が白い手を引き出そうとする。

それに呼応するかのよう、空母棲姫が更に苦しみ始めた。

「ヤッ、ヤッ、メッ、ロッ、オオオオオオオオオオオ!!」

彼女は震える大きな右手で暁たちを掴み取ろうとするが、金剛と榛名の砲撃によつてその手が阻まれる。

「グウウウウツ!!」

「ワタシたちの仲間に手出しはさせないデース!!」

「あなたの勝手は、榛名が許しません!!」

空母の姫は苦痛の元となる暁姉妹を摘み取れず、戦艦たちによる砲撃で邪魔されてしまふ。

そうしている間に、4姉妹が持てる力の限りで白い小さな手を引つ張った。

「もう一回！　せくのつ！　やあああつ！！」

「ウラアアアア！！」

「でええええいつ！！」

「なのでええええすつ！！」

駆逐艦4人の力が合わさり、徐々にその白い手が腕の付け根辺りまで見えてくる。

次の瞬間、引つ張っていたそれが空高く弾き飛ばされたと同時に、暁たちが海面へ尻もちを付いた。

「！！！！！！！！」

艦娘たちは空中へ飛ばされたそれを見た直後に、頭の中でガラスが割れる音を聞いた。

真つ白な素肌と白い長髪。

黒い装飾が付いた白いミトン手袋とワンピースに、白い靴。

黒の首輪の真正面には、大和と同じ桜花紋章の装飾。

赤い瞳が輝きを放つ幼い顔立ち。

彼女らはその存在をすぐに思い出した。

そんな中で大和だけはまだ思い出せず、彼女に抱かれている駆逐棲姫がそのことに感付く。

彼女はすぐに膝だけで立つように浮かび、自分の右手で呆けている戦艦の左手を掴んだ。

「イツテ！ アノコヲ、ウケトメテ!!」

「えっ!?! ちょっと・・・」

駆逐棲姫は大和を左へ大きく振り回し、それが落ちてくる予測地点へ投げ飛ばす。

慌てる戦艦の艦娘が体勢を整えて、落ちてくる白いものを受け止めた。

「ぐっ!」

「オウフツ!」

逆さまの状態で受け止められた白き少女。

その幼い顔をまともに見た大和の頭にも、ガラスの碎け散る音が響き、失われた記憶が蘇った。

「ホ、ホッポちゃん!!・・・あつ」

「ヤマト?・・・アツ」

大和は白き少女が逆さまになっていることで、スカートの中の黒パンツが丸見えなことに顔を赤らめてしまう。





彼女は真剣な眼差しで空母棲姫を睨み、静かに主砲の再装填を行う。

「この娘はあなたのものでも．．．私のもので、誰のものでもない！」

超弩級の戦艦がそう宣言し、再び白き少女へ優しく話し掛けた。

「ホッポちや．．．いえ、提督〴〵指示をください」

「エツ？ ヤ、ヤマト？．．．ソレニ、テイトクツテ．．．ナンデソレヲ？」

少し混乱気味な少女を余所に、大和が通信機で山岸に尋ねる。

「里子提督」

『しょうがないわね。許可するわ』

「里子提督から承諾できました。さあ、〴〵指示を．．．」

そう言われた白き少女が周りを見渡すと、期待に満ちた表情で見つめる艦娘たちの姿があった。

一瞬だけ考え込んだ彼女はその場で回れ右をし、右手で司令官らしい号令の仕草をする。

「ゼンカン！ コウゲキカイシ!!」

「「「了解!!」」」

白き少女の掛け声で、全ての艦娘が攻撃体勢に入る。

「キ、サ、マ、ラ、!!．．．スベテ！ スベテ!! シズンデシマエエエエエエエ!!!」

対する空母棲姫も右目を手で抑えながら、周りにあらゆる艦種の赤い深海棲艦たちを出現させ、己自身も艤装の飛行甲板から艦載機を発艦させた。

「こんな損傷、No Problem（大丈夫）！ 私の実力、見せてあげるネー！」

「金剛姉さま、榛名も全力で参ります！」

「気分が高まった！ 胸が熱いいい！！」

「姉さん……せめて、鼻血だけは拭いてね」

金剛と榛名は三式弾での対空攻撃を行い、やる気の上がった長門と冷静な陸奥は敵の戦艦を狙い撃つ。

「行きましょう！ 第二次攻撃隊、全機発艦！」

「確保したばかりの制空権……ここは譲れません」

「飛龍！ やりましょう！」

「ええ……第二次攻撃隊、発艦始め！！」

赤城を含めた4人の正規空母が矢を連続で放ち、発艦させた艦載機で飛ばされた敵機を撃ち落としていく。

そんな彼女らの艦載機を狙いに向かう少数の白い艦載機が、遙か上空から急降下で襲い掛かった。

「サセナイ！！」

「甘いぞー!!」

白き少女と龍驤がそう叫ぶと、強襲する白い球体が一瞬で爆散した。

それらを撃墜させたのは、いつの間にか発艦していたタマたちと、彼らに付き添う龍驤の艦載機の編隊だった。

「さあ、お仕事お仕事ー! そつちも頑張りやー!!」

「ミャー!」

「ミャフー!」

「ミッ、ヤー!」

先頭を飛ぶタマ・ミケ・クロが龍驤の声援に返事をする。

3機は龍驤の艦載機と共に、赤い深海棲艦たちを銃撃しに向かった。

「2人とも瑞雲の使い方がなっていないぞ」

「私たちは今回初めて使ったのよ。いきなり上手く使える訳ないわ!」

「此処で私が活躍するのが姉さまに見せ付けられば・・・」

日向はまるで教官の如く、扶桑と山城に水上爆撃機の使い方を指導していた。

彼女らの爆撃機は編隊を組んで、ル級やタ級たちに爆撃を行う。

その中で山城の操作する機体の1機が、姉の機体とぶつかり落ちてしまう。

「ちよつと!?! 山城!?!」

「不幸だわ・・・」

(・・・敢えて言わないでおこう)

日向は航空戦艦の妹が一瞬だけ微笑んだことに見て見ぬ振りをした。

空母や航空戦艦を防衛する軽巡や駆逐艦たちも、近寄ってくる千級やリ級を迎撃していく。

「流石は横須賀で活躍された軽巡・・・侮れませんね」

「へっ！ なんならオレと後で演習でもするか？ 不知火」

「あら〜天龍ちゃん。浮気はダメよ〜？」

「龍田!! 浮気なんかしねえよ!! そもそもする理由がないだろう!!」

「姉妹同士は仲が良いのですが、欲求不満の艦娘にその可能性もあると青葉さんが・・・」

「うふふふ。私もそれを聞いたことあるわね、朝潮ちゃん」

「だ〜か〜ら! お前ら戦闘中に何訳が分からん話をしてんだよ!」

戦っている天龍をからかう龍田に、朝潮や荒潮まで加わってくる。

不知火は平常通りに敵を沈めていった。

「今度こそ・・・大和を、全てを護り切るから!」

「矢矧! 手伝うわ!」

「さて、やりますか」

「私達がいるじゃない!」

「ホッポちゃん! 周りは電たちに任せるのです!」

「ウン、ワカツタ!」

「しーまーかーぜーも忘れるなー!!」

大和と白き少女の周囲に、矢矧を中心とした暁たちが守りに入る。

更にその周りを周回するように、島風と連装砲ちゃんの3体も迎撃していく。

雷巡子級や駆逐イ級などが向かって来るが、どれも6人の艦娘たちの攻撃で撃沈されていった。

「大丈夫!?!」

「手を貸すよ! 動けるかい!?!」

「シンパイ・・・ナイデス! エンゴシマス!!」

白露と時雨が負傷した駆逐棲姫の元へ近寄ってくる。

彼女は差し伸ばされた時雨の手をゆっくりと払い除けて、唯一無事な左手の連装砲を構えた。

「無理しないでね?」

「そっだよ。僕たちと一緒に生きて帰ろう!」

「・・・ハイ」

2人は駆逐の姫を庇うように砲撃と雷撃を行う。  
守られる彼女も残る兵装で援護射撃を続けた。

「グウウウー！ グガツ！？ ガアアアアア！！！」

砲撃を直接受ける空母棲姫。

その周りにいた赤い深海棲艦たちは全て撃沈し、空に上げた白い球体の艦載機は1機残らず撃墜される。

右目がひび割れて赤い血を流す彼女は、再び白い艦載機を発艦させようとするが、轟音が鳴り響くと同時に艦装の飛行甲板が爆発した。

「アタツターー！」

「同時に直撃しましたね」

白き少女の艦装による砲撃と大和の主砲が空母棲姫の艦装へ直撃したのだ。

空母の姫は、艦装にある巨大な三連装砲を2人に向けて撃ち放った。

「ッ!？」

「ムウウウー！ スゴクイタイ〜！」

「ホッポちゃん!? 大丈夫!？」

「ダイジョウブ!!」

白き少女は大和の手前で庇うように立ちはだかり、空母棲姫の巨大な砲撃を受け止め



壊された。

彼女は右手でボロボロになった艦装を掴み、辛うじて浮かぶ状態を維持する。

「デ．．．ド、グ．．．．．ワ、ダ．．．シ．．．ダ、ケノ．．．デ．．．イ．．．」  
大破状態の姫が虚ろになった目で白き少女を見つめる。

「ヒエツ!？」

「ホツポちゃん! 落ち着いて! 私たちがいます!」

瀕死のそれを見た少女が少し怯えるが、後ろから聞こえた大和の声で元氣付けられる。

彼女は勇気を奮い立たせて、未だに見つめてくる空母棲姫へ砲塔を向けた。

「ゼンカン! シュホウ、セイシヤアアアア!!」

その絶望を断ち切るため、白き少女の砲撃と共に、戦艦たちの砲撃が一斉に放たれる。

大気を揺るがす轟音が鳴り響き、姫となった空母の左目に無数の砲弾が映り込んだ。

その直後に、断末魔すら聞こえない爆音が辺り一帯を轟かせた。

黒煙が晴れた後、そこには黒い残骸だけがいくつか浮かんでいた。

「フウ．．．ン?」



暗い雲が晴れて、青空に浮かぶ太陽で照らされる穏やかな海上。

戦闘を終えた白き少女が後ろへ振り返り、大和を含めた艦娘たちに目を向ける。

「エツト・・・エツト・・・タダイマ!!」

何を言うべきか迷った彼女は、思わずその言葉を口にしました。

大和は微笑みを浮かべてから少女に返事をする。

「おかえりなさい」

「「「「おかえりー!!」」」」

彼女に釣られて、周りの艦娘たちも一斉に返事をした。

超弩級の艦娘は白き少女の元へゆつくりと近付き、その小さな身体を両手で持ち上げる。

「エツ? エツ?」

「ずっと、あなたの側にいさせてください。提督・・・」

「ヤマト? ワタシ、テイトクジャ・・・ツ!」

白き少女が否定しようとした時、大和は彼女の身体を抱き寄せて、優しい口付けをした。

（えっ?・・・大和? これって・・・えええええっ!?!）

目を見開く少女は何が起きたかを認識できなかった。

お互いの口が離れた瞬間、彼女はようやく何をされたのか理解する。

「キユウウウウウ……」

元の男性だった頃の経験したことのない女性との接吻。

しかも憧れの艦娘からされたことによつて、少女の身体に眠っていた男の羞恥心が出てくる。

少女の白い顔がまるで茹でダコのように赤くなり、その頭にある意識すら失つてしまふ。

「ホ、ホツポちゃん!? ホツポちゃん! しっかりして!」

気絶した少女の唇を奪つた本人が慌てて呼び掛ける。

その光景を一部始終見ていた他の艦娘たちは、赤面しながら見惚れていた。

「Oh……なんてHotなKissネー」

「は、榛名も……したいです……」

「大和おおおおおつ!! この長門にもホツポとキスさせろおおおお!!」

「姉さん! 落ち着いて!! 暴れないで!! 日向! 抑えるのを手伝つてよ!!」

「まあ、面倒だな……」

「はわわわ!! きゆうく……」

「アカン。電まで気絶しよつたわ」

「ハラシヨー♪ 実に、ハラシヨー♪」

「あれ？ 加賀さん、鼻血、出してませんか？」

「気のせいです。赤城さん」

顔を赤らめる艦娘たちの中で、白露と時雨があることに気付いて周りを見回した。

「あれっ？ あの娘は!？」

「・・・何処に？」

「時雨！ 電探で・・・」

「ごめん、姉さん。反応が見当たらない・・・」

彼女らは居なくなつたその存在を心配し、焦る気持ちを抑えて探そうとする。

艦娘の艦隊から少し遠くの海上。

その海面から頭だけ出している駆逐棲姫の姿があつた。

彼女は白き少女と艦娘たちの再会を見届けた後、傷だらけの身体に残っていた力を抜

く。

少しずつ海の中へと沈み始めて、ひび割れた装甲から破片が剥がれ落ちていった。

「コレデ……モウ……ダイジョウ、ブ……」

彼女は沈んでいく最中に、ある出来事を思い出していた。

彼女がまだ「姫」になる前の記憶。

過去に出会った白き少女とのやり取り。

『……カコマレタネ』

『みたい……ですネ』

『……オネガイガアルノ』

『だ、駄目です！ こんな所で諦めたら……』

『デモ……アナタモ、ワタシモ……ダンヤクヤ、ネンリヨウガ……ナイ』

『それでも！ 諦めたくないです……』

『ゴメンネ……モウ……ヒダリウデガ……ウゴカナイ……』

海上に立つ彼女が横抱きで抱える白き少女。

抱えられるその左腕は彼女のお腹辺りに当たり、体温が全く無いとも言えるぐらい冷

たくなっていた。

『ハイソウモ．．．ツカエナイ．．．セメテ、アナタダケデモ．．．』

『それ以外に、方法は．．．ないのでですか?』

『．．．ワタシハ．．．アナタニ、デアエテヨカッタ』

『えっ?』

『マサカノ．．．ホンモノニ．．．デアエタ．．．ソレモ、ダイスキナ．．．アナタニ．．．』

『．．．』

『コウカイハ、シテイナイ．．．ダカラ、タスケタイ．．．』

白き少女の右手がゆっくりと動く。

ミトン手袋が無残に破けて、傷だらけの小さな手が抱えてもらっている彼女の左頬を触った。

『ヒトツ．．．ヤクソク、シテホシイ．．．』

『．．．何で、しょうか?』

『コノサキ、"ホツポウセイキ"ガ．．．アラワレタラ．．．タスケテアゲテ．．．』

『っ!?!』

『オナジ．．．テイトク、トシテ．．．カナシマセナイ、タメニ．．．』

『．．．』

『アナタ、ミタイニ．．．カナシムヒトヲ．．．フヤサナイ．．．タメニ．．．』

『・・・・・・・・・・』

『ダメ・・・カナ?』

『・・・・・・・・・・約束・・・します!』

彼女から返事を聞いた白き少女が微笑み、その顔を相手の女性の顔へと近付ける。

彼女は小さな唇から伝わる熱を自身の唇で感じ取った。

次第に白き少女の姿が青く輝き出し、その身体が薄らと消失し始める。

『ア・・・・・・・・リ・・・・・・・・ガ・・・・・・・・ト・・・・・・・・ウ・・・・・・・・』

白き少女が完全に消え失せた後、彼女は身体に湧き上がる力と共に、赤い瞳に溜まる涙を流した。

過去の白き少女との約束を胸の奥にしまい込み、姫となった彼女は今日まで生き延びてきた。

同じ存在を探し続けるも、ほとんどが接触する暇もなく、自身が味わう苦痛と共に消えていった。

そんな中でやっと見つけたのが、あの島で生活していた白き少女。

陰ながら支えようとするも、予想外の展開が起き、焦る気持ちで艦娘たちに協力を申し出た。

例の苦痛が始まった時、彼女は絶望で心が壊れそうになった。

しかし、何らかの奇跡が起きたことで、取り込まれた白き少女が救い出せた。

「コレナラ・・・アトヲ・・・マカセラ・・・レ・・・ル・・・」

深い所まで沈みきった彼女は目を瞑り、残る意識を閉ざしていく。

「シレ・・・カン・・・ヤク、ソ・・・ク・・・ハ、タ・・・シ・・・マ・・・シ・・・」

その眩きが途絶えた瞬間、彼女の身体が白い光に包まれる。

海の底から伸びてきた黒い手が彼女を掴もうとするが、その光で触れることすらできなかつた。

その後、彼女は一粒の白い光へと変化し、その場から消え去っていった。

## No. 16 チャクニンシマシタ！

“北方樓姫” 救出成功から1週間が過ぎた頃。

朝を迎えたトラック鎮守府の執務室では、ペンを持つ山岸が椅子に座り、その左隣で長門が立ちながら書類に目を通していた。

「騒がしい日々だったわね」

「ああ・・・ようやく落ち着いた感じがする」

「あなたも四六時中、胸が熱いとか言っていたし・・・」

「・・・」

長門は山岸が指摘してきたことに無言で頬を赤らめる。

それを見て微かに笑う山岸は、机に置いてある一枚の書類を手に持った。

「はあ・・・本当に・・・一体何を考えているのよ」

「大本営からの指令書か？」

「そう。あの大将からよ・・・悪いことじゃないけど・・・」

「あの島のことか・・・」



長門も彼女のため息の理由に呆れていた。

工場のような施設の屋内。

その部屋には、鉄壁で覆われた物置のような立方体がいくつも横に並んでいた。

左から2つは『建造』と書かれたシャッターがあり、その上のランプは何も灯っていない。  
ない。

その横にある2つの物置にはシャッターが無い状態で、中は空っぽの状態だった。

不意にブザーのような音が部屋全体へ鳴り響き、一番左端にある物置のランプが緑に  
光り出す。

点灯した物置のシャッターがゆっくりと開いていき、その中から女性らしき者が姿を  
現した。

その女性の青い長髪は、腰より長く伸び、その毛先辺りが銀色に輝いていた。

服装は、ノースリーブの白いセーラー服に、黒色のロング手袋と膝上までの長い黒タイツという容姿である。

彼女は開いたシャッターから歩き出て、自分がいる施設内を見回していた。しばらくすると、彼女から見て左側の奥にある通路から誰かが走ってくる。

それは黒い長髪の少女で、グレーの吊りスカートと白ブラウスに、黒ハイソックスと手首まである黒のアームカバーを身に纏っていた。

「お待たせしました！ 建造された艦娘の方ですね？」

「は、はい！ そうです！」

黒髪の少女が青髪の女性の前で立ち止まり、彼女へ規律ある敬礼をする。

「この鎮守府の艦隊所属、朝潮です。お迎えに上がりました」

「どうも、白露型6番艦の五月雨っています」

青髪の女性もその場で敬礼し、自分自身の名を告げた。

「では、早速・・・此処の司令官の所までご案内いたします。こちらへどうぞ」

「はい、お願いします」

施設内の長い通路を歩く五月雨が、先導する朝潮に色々と尋ねる。

「この鎮守府は……どちらの？」

「トラック鎮守府から少し遠い距離にある島です。つい最近稼働したばかりなので……」

「それじゃあ、私が……初めての建造艦？」

「そういうことになります」

「ふ、二人だけでしょうか？」

「いえ……横須賀から転属された艦娘と、トラック泊地から分遣隊として来られた御方もいます」

歩き続ける五月雨は通路の造りを観察し始めた。

彼女がよく見ると、まるで船内の通路とよく似ていることに気付いてしまう。

「この通路って……」

「お察しの通りです。通路だけでなく、施設内全てがある輸送船を利用し、この島の基地として建造されました」

「輸送船を基地に？」

「元は座礁していた船でしたが、トラック泊地の明石さんと妖精さんの機転で、船自体を利用すること……」

「す、凄いですね……」

2人はある木製の両扉の前までやって来た。

朝潮がその扉を開けて、五月雨と共にその部屋へと入っていく。

「大和さん、新しい艦をお連れしました」

「ご苦労様です、朝潮ちゃん」

「や、大和さん!? あの有名な大和型の!?!」

五月雨が目の前の超弩級の存在に声を上げた。

彼女から見て、部屋奥に置いてある机の右側に、ポニーテールで赤いセーラー服を着る戦艦の女性が立っていた。

「初めまして、此処の秘書艦を務める大和です」

「こ、こちらこそ、初めまして! 五月雨です!」

緊張した五月雨が慌てて敬礼してから、自身の名を告げた。

「初の建造された駆逐艦ですね。今後ともよろしくお願いします」

「は、はい!」

駆逐の少女はすぐに落ち着きを取り戻した後、周りをキョロキョロと見渡す。

不審に思った大和が彼女へ尋ねる。

「どうされましたか?」

「あ、あの・・・提督は・・・どちらに?」

「此処に居ますよ」

「えっ?」

その質問の答えに、五月雨が首を傾げてしまう。

部屋の中には、机の横にいる大和と自分の右隣にいる朝潮しか見当たらなかった。彼女が疑問に思っていると、不意に聞いたことのない幼子の声が響いてくる。

「ヤマト・・・ミエナイ・・・」

「やっぱり、特注の椅子を用意した方がいいですね」

「こちらからだ、司令官の姿が見えないです」

「?」

大和は机と壁の間へ歩いていき、両手で何かを持ち上げた。

それは髪の毛や肌の色、服の色すら真っ白な姿の少女。

後ろから両脇を抱えられるその頭には、提督の証でもある白い軍帽が被さっていた。

「!」

五月雨がその姿を見て、思わず息を吞んでしまう。

艦娘として、本能的に理解した敵の姿と一致していたからだ。

見間違いの無い敵である深海棲艦の白い姿。  
今それが彼女の目の前にいる。

「し、し、し……!」

「大丈夫です。司令官は味方ですよ?」

「へっ!? で、でも……」

「司令官がいなければ、朝潮たちは無事ではなかったです。これだけは事実として、記録に残っています」

「そ、そうなのですか?」

朝潮は取り乱す五月雨を宥めるように説明した。

まだ戦艦の艦娘に抱えられる白き少女が敬礼し、初の建造艦である駆逐の少女に話し掛ける。

「ハジメマシテ。ハマグリチンジュフ、テイトクノ、"ホツポウセイキ" デス」

「ほ、ほっぽうせいき? よ、よろしくお願いします……」

「ヨロシク♪」

本日より、ハマグリ島を拠点とした鎮守府を稼働。

そちらへ保護対象の「北方棲姫」を日本海軍所属の提督として着任させよ。尚、階級は少佐とする。

不知火・朝潮・荒潮の3名は護衛艦として、ハマグリ鎮守府へ配属が決定。トラツク鎮守府からの分遣は、山岸 里子 中佐の判断に任せる。

以上

そう書かれた書類を手に取る山岸がジト目で読んでいた。

その指令書を書いた「米満 正人（よねみつ まさと）大将」の署名を見た後、彼女は書類を机の上に置く。

「全く……あの叔父さんめ……」

彼女は、大本営にいる米満大将がピースと高笑いをしているだろうと予想していた。

次の書類に手に取り、それに目を通していた彼女の動きが止まる。

それは「転属願」の書類であり、署名には『長門』と書かれていた。

「……」

山岸は無言で本人に目を向けるが、彼女は期待に満ちた表情で待ち構えていた。

提督服の女性がその書類のいか所を両手で持ち、左右に分かれるように力を入れる。

「ふんっー」

「あああああつ!？」

書類が真つ二つに破り捨てられたことで、それを見ていた長門が悲鳴を上げた。戦艦の艦娘はあまりのショックに、その場で四つん這いに項垂れてしまう。

ため息を吐く山岸が椅子から立ち上がり、後方の通信機を操作し始める。

「榛名、執務室まで来てくれるかしら?」

『里子提督? どうかされましたか?』

「・・・秘書艦が大破したわ。使い物にならないから、代わりに来て頂戴」

『りよ、了解しました!』

まるで深海棲艦のように白く大破した艦娘を一瞥する山岸。

彼女は窓の方へと歩き、外の景色を眺め始める。

「そういえば・・・そろそろ建造が終わる頃ね」

トラック鎮守府の工廠内にある『建造』と書かれたシャッター。

その上にあるランプが緑色に灯り、その鉄のシャッターが開き始める。

「新造艦、たのしみですなえ!」

近くに居た明石は、左手に持つクリップボードの書類を見ながら、シャッターから出てきた艦娘を観察した。



桃色の髪で腰ぐらいまである左のサイドテール。

黒いセーラー服に黒の手袋を填めた少女。

艦種で言えば、駆逐艦サイズの艦娘だと思われる。

彼女が明石の所へ向かう最中に、反対の別方向から白露と時雨が歩いてきた。

「いつちばーん!・・・ん?」

「明石さん、僕の艦装について・・・」

2人が建造された艦娘の姿を見た瞬間、その娘へ向かって走り出した。

「春雨——っ!!」

「っ!?!」

いきなり駆逐艦の2人に抱きつかれた桃色の髪の少女。

突然のことで少し戸惑うが、すぐに現状で何が起きたかを理解する。

「白露姉さん、時雨姉さん・・・お久しぶりです」

「ふっふー! 流石、あたしの妹! くんかくんか・・・」

「やつと会えたね・・・春雨」

「2人とも、春雨ちゃんが困ってるじゃないですか。はい、離れて」

明石が駆逐の少女から2人を引き剥がした。

彼女は3人に向かって、規律正しい敬礼をする。

「初めまして、明石さん。白露型駆逐艦5番艦の春雨です。よろしくお願いします！」

「よろしくね、春雨ちゃん。それじゃあ、後はお姉さんたちに任せるわよ」

「はぁーい！ さあ、提督にあたしの妹を見せに行こう〜！」

「案内するよ、春雨」

「はい、お願いします」

春雨は2人の姉に両手を引かれて、明石のいる工廠を後にした。

連れて行かれる彼女が他人には聞こえない小声であることを呟く。

「まだ・・・約束を、続けられそうです・・・」

一方、ハマグリ島では・・・。

入り江の砂浜に五月雨を案内する大和の姿があつた。

「凄く綺麗な場所ですね・・・」

「私もこの場所は気に入っています」

和やかに話す彼女たちの目の前で、いきなり海面から何か大きな物体が浮上し始め

る。

「えっ? な、何ですか!」

「これは……」

大和にだけ見覚えのあるその物体。

それは基地内の出撃ドックから入り江へと繋がる可動式ゲートの1つだった。

ここ以外にもそのゲートは設置されていたが、このゲートだけは大和ともう1人の専用として扱われている。

平べったい円柱の形をしたトーチカのようなもので、出撃ドックからエレベーターのように上がることができらしい。

海面上上がったその平らな前方部分が屋根になるように開き、重々しい稼働音と金属音が鳴り響く。

「バツビョウ!!」

中から出てきたのは、この鎮守府の提督である白き少女“北方棲姫”だった。

それを目撃した五月雨が慌て始める。

「大和さん! て、提督が!! どうして!」

「うくん。これはひよつとして……」

「大和さん!」

「!」

何かを察する大和の後ろから、息を切らして走る不知火がやって来る。

「ホッポさまは!?!」

「先程、出撃されました」

「何故、止めなかつたのですか!?!」

「いきなりだつたもので・・・」

「・・・大和さんに期待した不知火が馬鹿でした」

駆逐の彼女は急いで艀装を展開し、入り江の浅瀬から出港した。

それに遅れて、朝潮・荒潮の2人も艀装を付けて走つてくる。

「お二人も出撃で?」

「はい! ブイン基地の艦隊が奇襲を受けたらしく、その救援要請がありました!」

「提督がそれを聞いて、すぐに出撃しちやつたのよお」

「やはり・・・」

予想通りの展開に大和が苦笑してしまう。

彼女らもすぐに出港し、それを見ていた五月雨が大和へ尋ねる。

「私たちも・・・出撃しますか?」

「いえ、此処は不知火さんたちに任せます。あの速力は彼女らでないといけません」

から、私たちは島の防衛として残りましょう」

「了解です」

「念のため、出撃準備をしておいてください。艦装のチェックも忘れずに……」

「お任せください!」

五月雨は森奥の基地へと走っていき、残された大和は白き少女が出撃した方向へ見つめた。

「本当に……困った御方です♪」

海上を航行する白き少女。

その周りに黒い球体の艦載機であるタマたちが飛行していた。

「ホッポさま! お待ちください!」

「司令官! せめて朝潮も護衛に付けてください!」

「ホッポちやくくん! 1人じゃ危ないよ〜!」

彼女の後方から不知火たちが追い付いてくる。

その声に返事をするかのように、白き少女が右手で手を振った。

「タマ、ミケ、クロ、イクヨ!」

「ミヤァ！」

「ミヤフ！」

「ミッ、ヤァ！」

彼女は3機の返事する声を聞き、救援要請のあつた場所へと航行していく。

提督の心を宿す少女。

海にも染まらないその白い姿で海上を走っていく。

助けを呼ぶ艦娘たちの元へ。

その小さな勇気を携えながら……。

番外編

No. 05.3 オーイ!

白き少女が轟沈する大和を救出した日から翌日。

彼女は簡易エレベーターを作り上げてから、昼間の太陽に照らされる島の内部を探索していた。

ちようどいい水場である滝壺を見つけ、水浴びをした帰り道に“それ”は発見された。

「・・・ンウ?」

「ミヤ?」

少女と彼女の右肩に乗つかる黒い球体(タマ)が見つめるもの。

草の生える地面に、座布団ぐらゐの大ききがある“謎の穴”が空いていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・マックラ」

暗視が可能な少女の目でも、穴の底すら見えない暗闇。不気味な感じのする穴に、彼女は興味を示してしまう。

「オーイ！」

『オーイ！ オーイ、オーイ……イ……』

少女の呼び掛けが木魂し、穴の中へと消えていった。

すぐに耳を澄ましてみるも、返事の声や跳ね返ってくる様子は全くない。

まるで異次元に繋がっているような穴である。

「ウーン……」

「ミヤ？」

考え込む少女とそれを見つめる黒い艦載機。

しばらく悩んだ末に、彼女は白いワンピースの左側ポケットから空っぽのヤシの実を

取り出す。

「エイッ」

少女はそれを躊躇なく穴の中へ投げ入れた。

コミカルな落下音がし、その音が途絶えた瞬間……なんと投げ入れた実が凄い勢い

で戻って来た。

空っぽの実を覗いていた少女の額に直撃する。



「アタツ!?!」

「ミヤツ!?!」

乾いた打撃音が鳴り響き、少女は当たった額を右手で摩った。

彼女は痛みや当てられたことより、何故戻って来たのかで頭が混乱していた。

もう一度覗いてみても、穴の中は何も見えないままである。

「エート……ンシヨ」

「ミヤ?」

少女が次に左ポケットから取り出したもの。

それは「アカギノエサ」と勝手に命名した赤灰色の石ころだった。

右手に持つそれを穴の中へと放り入れる。

「エイツ……ウワツ!?!」

またも入れたものが勢いよく戻って来たが、それは2つに増えていた。

少女は咄嗟に両手で1個ずつ掴み取り、それを交互に見ながら疑問の声を出す。

「エツ? エエツ!?! ナンデ?」

「ミヤ、ミヤア?」

不思議な現象に戸惑う白き少女。

彼女は何も考えずに戻って来たその2つを再び穴の中へ投げ入れた。

「ソレツ!.....ウワアツ!」

「ミヤア!」

今度は少女の頭と同じくらいの大きさをした赤灰色の塊が出てくる。

辛うじて両手で受け止めた彼女は、手で抱えるそれと穴を交互に見返した。

「ドオ〜ナツテルノ?」

「ミヤ、ミヤア.....?」

最早、謎過ぎるその穴の存在。

その時、白き少女はあることが頭の中で思い付いてしまう。

先程、投げ入れた「アカギノエサ」が徐々にその量を増やされたこと。

この出来事で彼女は『他の資材も増えるのでは?』と思いついたのだ。

早速、少女は大きくなった赤灰色の塊を左ポケットに仕舞い込み、代わりに金属製のコップと燃料入りドラム缶を取り出す。

「ヨイショ」

いつも通りに重いドラム缶を軽々と持ち上げて、コップに少量の黒い液体を注いだ。

彼女はドラム缶をポケットに入れて、右手に燃料入りのコップを持ち上げる。

「……ミヤ?」

右肩に乗る黒い艦載機のタマが見守る中で、少女がコップの中身を穴の中へ垂らし始めた。

彼女は最後の一滴まで垂らし、真つ暗な穴の中を覗き続ける。

「……?」

何も起きないと思われた瞬間、少女の顔に黒い液体が噴水のように噴き上がった。それは先程のコップ一杯分ではなく、まるでバケツを引つ繰り返した程の量である。

「……」

少女は無言のまま黒くなった顔を高速で左右に振った。

掛けられた燃料を飛ばし、元に戻ったその白い顔が怒りの表情になっていた。

「ムウウウウウ……!」

まるで忍耐のゲージが壊れるほど怒ったらしく、顔の所々に怒りの四つ角が出来ていった。

彼女は右肩に乗っていたタマを左手で掴み、その口の中へ右手を突っ込ませる。

「ミヤ!?! ブツ!?!」

艦載機の口の中から取り出したのは、爆撃に使う黒い爆弾だった。

彼女はそれを穴の中へ勢いよく投げ入れる。

「ティツ！」

3秒もしない内に穴の中から爆発音と衝撃波が響いてきた。

少女は黒煙が出る穴を一瞥し、その場から歩き去っていく。

「フンツ！」

「ミヤ、ミヤア……」

黒い艦載機も浮遊しながら少女の後に付いていった。

白き少女が去った後。

黒い煙の上がる穴から何かがゆっくりと出現する。

それは黒色でテカる丸っこい物体らしきもの。

その正面らしき場所には、白く丸い目が2つと白い四角の口が付いている。

絵にするとこんな感じである。↓(。□。)

そののあちこちには爆発で焦げた跡があり、少々煙が上がっていた。

顔を出したそれが穴の周りを見回すように、キヨロキヨロと頭を振り動かす。

「・・・キユ?」

やがて、両目を線のように細めてから、未だに煙の上がる穴の中へと引つ込んでいった。

## No. 05. 6 イタカツタヒ

謎の穴を発見した日から次の日。  
太陽が水平線から顔を出した頃。

白き少女は再び島の密林で探索をしていた。

彼女はヤシの実以外の食糧となるものを目標にし、特に道を決めずに歩き続ける。

「・・・・・・・・アツ」

数十分経つた時に、少女の下腹部からある生理現象が訪れた。

彼女は急いで草むらの多い地面へと向かう。

(紐。パンは不便・・・・)

少女がスカートとパンツを震える両手で押さえながら、催した余剰の水分を排出する。

「フウ・・・・・・・・ンウ？」

完全に用を足し終えた彼女の右足に、謎の小さな痛みが発生した。

まるで注射針で軽く刺されたような痛覚。

少女は痛みのある右足へ目を向ける。

「!?」

その正体を目にした少女が思わず息を呑んだ。

なんとそこには、右足のかかと辺りへ噛み付く茶色の蛇がいたのだ。

三角の頭にある牙を少女の足に深々と刺し込んでいる。

「へ、へビイイイイッ!」

彼女は思いつき足踏みして、噛み付いた蛇を地面へ何度も叩き付けた。

『ハブ』

別名：ホンハブと言われ、毒性は同じ毒蛇のママシより弱いが、大きな毒牙で大量の毒液を出す。

出血毒により、患部の壊死・機能障害を起こす程の激痛を与えてくる。

下手すれば心臓への負担も増え、アナフィラキシーショックなどの恐れもある。

「・・・キメタ。〃サンポ〃シヨウ!」

船室内の畳で寛ぐ白き少女がそう宣言する。

朝の探索を終えた後、彼女は無線機からの声を待ち続けていた。

日が高く昇った時間帯まで待ち続けるも、誰の声もスピーカーから響いてこなかった。

(足は・・・今のところは大丈夫)

蛇に噛まれた少女の足は少し腫れていたが、人外な身体能力のおかげで酷い傷にはなっていないかった。

歩く際の痛みも無いため、特に応急処置もせずにそのまま放置する。

「オッサンポ♪ オッサンポ♪」

島から少しだけ離れた海面に立つ白き少女。

その場から勢いよく海中へと飛び込んでいった。

「・・・オオオオオオ!?」

水中へ潜った少女の目に、色鮮やかなサンゴ礁が映り込む。

その海底には、サンゴ礁以外に歩けそうな砂地や岩場などがあつた。

また、そこに生息する魚の群れも多く、身体の光沢で鮮やかな色を放っている。



「キレイ……」

彼女はしばらく泳ぎながら綺麗なサンゴを眺めていった。

「……ン？ ナンダアレ？」

ふと目に入ったのは、サンゴの上を物凄くゆっくりと動く物体。

平べったい身体に十数本の脚を持ち、その全身に沢山の棘が付いている30cmのヒトデ。

「アブナイカモ……」

少女は妙な生き物に興味を示すが、その多数の棘に怖気付いてしまう。

結局、彼女はそのヒトデらしきものには手を出さずに泳ぎ去った。

『オニヒトデ』

成長の速いサンゴが好物の大型ヒトデ。

体表面の棘には毒物質が含まれ、刺されば激痛やアナフィラキシーショックの危険性もある。

「ヨットー！」

白き少女が海底の砂地へ足を付けた。

彼女は元の間人だった頃に体験できなかった海中散歩を始める。

(小魚が一杯……)

青や黄色、赤といった小魚たちが優雅に泳いでいる。

食卓の魚ぐらいしか知らない少女に、その小魚たちの詳細を知る術は無かった。

そんな彼女がサンゴの横にあるものを発見する。

「コレハ……ウニ?」

黒く丸っこい身体から、お箸ぐらいの長さがある鋭い棘を無数に持つ物体。

その棘がうねうねと動き、生き物であることがすぐに理解できた。

彼女はその生物へゆっくりと右手を伸ばす。

「……イタッ」

少女の右手に針の刺さる感覚が襲い掛かった。

よく見ると、ミトン手袋にその生物の棘が折れ刺さっている。

棘は手袋を貫通し、少女の中指まで突き刺さっていた。

「コレモ、アブナイ」

彼女は刺さる棘を引き抜いて、その場を後にする。

『ガンガゼ』

ウニの種類で刺さると酷い痛みを引き起こす毒性を持っている。

棘は鋭利で刺さりやすく、逆刺のせいで人の皮膚に残る可能性がある。

「ウン? コレハナニ?」

次に見つけたものは、丸っこい石ころのような大きさのもの。

周りにラツパ状の柔らかかそうなものがびっしりと付いている。

少女はまたも無警戒にそれを手に取った。

「コレモ、ウニカナ? . . . アッ!」

彼女はその物体に張り付く小さなカニを発見する。

そのカニを摘むために、物体を左手で持ち、右手の手袋を口で外した。

「んゝ . . . . . アレ?」

少女がカニを捕まえようとすると、物体に付いていたラツパ状のものが彼女の指先に引っつく。

慌てた彼女が物体を落とし、指に付いたものを剥がしていった。

「ナンダコレ?」

白き少女は右手に若干の痺れを感じ取るが、気にせず手袋を付けて歩き出す。

『ラツパウニ』

表面のラツパ状の部分にある叉棘（サキヨク）で噛み刺し、神経毒を注入する危険なウニ。

痺れ、息切れ、痙攣を引き起こす可能性がある。

『ゼブラガニ』という小型のカニが好んで潜んでいることもある。

「アツ、タコ」

白き少女があるサンゴのある岩場付近で、掌よりも小さいタコを発見した。

その身体には、青く光る丸い模様が浮かび上がっている。

彼女は珍しさと可愛さでそのタコを捕まえようとした。

「マテ」

必死で這い逃げるタコを追い掛ける少女。

しかし、岩場の隙間に逃げられたことで、仕方なく諦めることにした。

「ニゲラレタ・・・」

『ヒョウモンダコ』

小型のタコだが、フグ毒と同じテトロドトキシンを持っている。毒は噛み付いて注入。呼吸困難や酷い場合は心停止に至る。

そんな落胆する彼女の足元に、イモの形をした貝が転がっていた。

その貝の軟体部分から細長いホースが出現し、その先つちよが海底の砂で休憩する小魚に向けられる。

「アテコナ・・・イッ!?」

少女は右足に鋭いモノが刺される感触で飛び上がった。

先程のイモの貝が小魚へ向けて、ホースから銚のような針を射出する。

だが、危険を察知した小魚が逸早く回避したため、貝の針は少女の右足にあるくるぶしの辺りに突き刺さってしまう。

「イタイイタイ! イダイ〜!!」

『イモガイ』

獲物に毒銚を撃ち込んで狩りをする貝の一種。

コノトキシンという神経毒を持ち、その毒銚は人間だと30人分の致死量に相当すると言われる。

「ウゝイタイゝハナレロゝ!!」

少女は右足に突き刺さる貝の針を本体ごと振り放そうとした。

その足を激しく動かして、海底の砂地へ叩き付ける。

「オツ?」

少女の乱暴な振り解きによって、足に刺さった貝の銚がポロリと外れた。

彼女は右手で刺された右足を持ち上げる。

刺された所は少々赤くなっていたが、針などは残らず取れていた。

「フウ・・・」

まだ痛みがあるらしく、少女の足に少し痺れる感覚が疼いている。

彼女が構わず進もうと右足を踏み込んだ瞬間、その足の裏に鋭い何かが刺さった。

「アゝゝツ!」

少女はすぐに砂地から浮き上がり、海中に漂いながら右足を両手で抱える。

彼女が踏み込んだ辺りには、砂に埋もれた不細工な顔の魚が背ビレを立てていた。

『オニダルマオコゼ』

擬態能力が高い魚で、背ビレの十数本の棘は強力な神経毒と、サンダルですら貫通する程の丈夫さを持つ。

沖縄地方では、フグより美味しい高級魚らしい。

「ウウゝ．．．ジンジンスルゝ」

貝に刺されたものよりも段違いの痛さ。

白き少女は楽しんでいた海中散歩を止めて、上の海面が見える辺りまで浮上する。

「キョウハ、モウヤスム．．．．．ハッ!？」

少女の視界にある物体が映り込み、すぐにその場で停止した。

それは行灯（あんどん）のような傘を持ち、4本の触手を垂らすクラゲである。

彼女はその生物に見覚えがあったため、それに触れないよう迂回した。

「アブナカツ．．．ウワッ!？」

少女が迂回した直後に、今度は青い触手を垂らすクラゲが現れる。

傘の部分が風船のように膨らみ、海面上にプカプカと漂うクラゲの本体。

その触手は本体よりも長く垂れ下がっていた。

人だった頃の記憶には無い生物だったが、見た目がいかにも毒クラゲだと少女は瞬時に判断した。

「サツサト、カエ・・・ンギツ!？」

少女がその青いクラゲを避けて行こうとした瞬間、彼女の右足にとてつもない激痛が走った。

「ヒギヤアアアアアッ!？」

彼女の足辺りには、薄い青色の傘を持つクラゲが多数の触手を垂らして泳いでいた。

そのクラゲの触手が少女の右足に触れたのだ。

今までに経験したことのない痛みで、少女が激しく悶え始める。

『アンドンクラゲ』

小型のクラゲで、その毒性は激痛を引き起こす程の強さがある。

群れで海水浴場に現れることもある。

『カツオノエボシ』



通称：電気クラゲ

まるで電撃を受けた痛みを与える毒を持ち、二度目に刺されてアナフィラキシーショックで危険に晒されることもある。

『オーストラリアアウンバチクラゲ』

別名：キロネックスと言われ、地球上で最も強い毒を持つクラゲ。但し、ウミガメには何故か効かないため、食われる立場である。

「ウ〜ン・・・イタイ〜イタイヨ〜」

夜中の貨物船の船室内で呻き声を出す白き少女。

強烈な痛みを受けた後、タマ達によって船室内へ運ばれた。

畳の床へ寝転がると、まるで意識を失うかのように眠りにつく。

それでもミミズ腫れした右足の痛みが彼女を苦しませた。

「ミヤ……」

「ミヤフ……」

「ミ、ヤ……」

「『ジヨクシユ』ハ……イヤ……」

仰向けで寝る少女の呻き声を聞き、畳に転がる3機の艦載機たちが心配な声を漏らす。

「……ミヤ？」

突然、タマがある気配に気付き、船室の窓を見上げた。

「……」

「……ミヤツ!？」

そこには、見たこともない女性らしき存在が居た。

月の明かりしかない真つ暗な中で余り見えないその姿。

左手に二門の砲塔を付け、黒い角付きの帽子と足の横にある魚雷発射管。

太ももからの足が無く、謎の力で宙に浮いていた。

それは頭の左側に垂れるサイドテールを靡かせて、ゆっくりと白き少女の傍へ近付い

ていく。

「ミヤ！・ミヤ・・ミヤアツ!？」

「・・・ゴメンネ」

白き少女を守ろうとしたタマがその右手で優しく払い除けられた。

寝転がる彼女の足元の傍で、それは浮かせた身体を着地させる。

「ウ〜ン、ウ〜ン・・・」

「・・・」

それは黒い手袋の右手を動かして、少女のミミズ腫れした右足を持ち上げた。

「・・・ンウ・・・」

少女のくるぶし辺りに、その柔らかな唇がそつと触れる。

すると、少女と彼女の身体が青い光を帯び始めた。

その光とともに少女の腫れ上がる右足に変化が訪れる。

「ウ〜ン・・・ウツ・・・」

酷く腫れ上がった右足が元の綺麗な白い肌へと戻っていったのだ。

そして、苦しさを訴えていた少女の呻き声も止まる。

代わりに安らぎの証拠である寝息が聞こえ始めた。

「スウウウ・・・スウウウ・・・」

それは少女の可愛らしい寝顔を確認した後、身体を浮遊させてから窓の方へ向かう。

満月の夜空が映る窓へ行き、頭だけ振り向いて、寝入る白き少女を見つめた。

「オヤスミナサイ・・・シレ・・・イエ、ッテイトク」・・・ケホツ」  
彼女は咳き込みながら窓の外へと消えていった。

「ンンウウ・・・タコ・・・クツテヤル・・・スウウウ・・・スウウウ・・・」

No. 15. 5 ソレハデキナイ!

ある晴れた昼のトラック鎮守府内にて。

「イヤ————ッ!!」

司令部の廊下に響き渡る幼い少女の悲鳴。

その声の主である白き少女が、何も被っていない真っ白な長髪を靡かせ、肌と同じ白い靴を履いて走っていく。

「待ちなさ——い!!」

「どこへ逃げようというのかね?」

「響、何で直立したまま早足なの?」

「ホッポちゃ——ん! 待つので——す!!」

白き少女の後方からは、第六駆逐隊の4姉妹が同じように走っていた。

彼女らは白き少女を捕まえようと躍起になって追い掛ける。

「コナイデッテ、イツテルノ——!!」

逃げる白き少女は、広く長い廊下を真っ直ぐに突き進んでいた。

そこへ反対側から呑気に歩く天龍がやって来る。

彼女の存在に気付いた暁が呼び掛けた。

「天龍!!」

「あ? チビども、何を・・・」

「ホッポちゃんを捕まえて!!」

暁からの指示を理解した軽巡は、自分の方へ向かってくる白き少女を捕らえようとして手を広げる。

「おし! 任せ・・・」

「トウツ!!」

「へっ? ぶっ!?!」

白き少女が突然飛び上がり、捕縛しようとする天龍の頭部へ抱き付いた。

ジャンプの勢いで軽巡の身体が後方へ倒れ、少女の股に挟まれながら後頭部を強打する。

「ぐぶうっ!?!」

「イタッ!」

同じく両膝を打ち付けた少女は、すぐに立ち上がって逃走を続ける。

目を回して倒れる眼帯の女性の傍を素通りする駆逐艦たち。

「天龍の役立たず!!」

「ああ、右目が、右目が……」

「また逃げたわ!」

「天龍さん! 後で助けるのです!」

「ぢ、ぢぎしよ……」

走る白き少女はT字路に分かれた通路へ差し掛かる。

その手前辺りに、彼女から見て右側に蒼龍、その左側に飛龍が立ち、2人はその場で話をしていた。

「蒼龍さくん! 飛龍さくん! 捕まえて——!!」

「えっ? 何っ?」

「捕まえるって? そういうことね!」

蒼龍は戸惑いを隠せず、声の有った方向へ目を向ける。

対する飛龍は暁の言葉を瞬時に理解し、両手を拡げて向かってくる白き少女を待ち構えた。

「それっ! あらっ?」

「ヒアッ！」

「えっ？ きゃあっ!？」

橙色の二航戦が両手で挟み掴もうとするが、白き少女の素早いステップ&ジャンプで避けられてしまう。

ジャンプした少女の背中が隣に居た蒼龍の胸に当たり、その弾力で左右に分かれた通路の右側へと弾かれていった。

「ヒヤア〜!？」

走る白き少女が女性の豊満な胸の感触に顔を赤らめる。

同じように赤面する緑色の二航戦も、突然の出来事で触れられた胸を両手で押さえた。

「な、なんで甲板じゃなくて、こっちに……」

「多聞丸く……」

「なんて避け方なのよ！」

「その乳、後で揉ませたまえ」

「バネじゃないの！」

「羨ましいのです！」



曲がった先を更に走り続ける白き少女。

突如、その行く手に長身の女性が現れた。

「事情は分からんが、ホツポちゃんを捕まえればいいのだな!」

トラツク鎮守府の秘書艦である戦艦の長門。

その目は怪しい光を放ちながら、構えた両手をワキワキと動かしていた。

「さあ、この長門に大人し……ぐぼおっ!」

「カエレッツ!!」

白き少女によって、投げ飛ばされた緑色のドラム缶が戦艦の頭に直撃した。

そのまま通路の端まで吹き飛び、彼女の身体が木造の壁にめり込む。

ドラム缶を回収した少女が左側へ去り、そのすぐ後に第六駆逐隊が通り過ぎた。

「戦艦ですら一撃なの!」

「見て、戦艦がゴミのようだ」

「響、それはいくらなんでも言い過ぎよ!」

「長門さんは使えないのです!」

次に立ちはだかったのは、一航戦である赤城と加賀の2人。

すでに状況を把握していたらしく、赤城が先頭で待ち構え、その後ろに加賀が様子見

で立っていた。

「赤城さん、それなりに期待はしてます」

「任せてください！ 一航戦の誇り、今度こそ見せますよ！」

張り切る赤い一航戦と、それを後ろから見守る青い一航戦。

その姿を捕らえた白き少女が左ポケットから“あるもの”を取り出す。

それは何時の日だったか、ある出来事によって入手した大きな赤灰色の塊だった。

彼女はそれを右手に持ち、通路の右側にある開いた窓の方へ投げ飛ばした。

「トリニイッテ！」

「行つてきますー！」

「……」

赤い一航戦は、投げ飛ばされた“アカギノエサ”を取りに窓の外へと向かう。

その光景を呆然と見つめる加賀が少女の方へ鋭い視線を飛ばした。

「頭にきました。私にアレは通用しませんよ？」

白き少女が青い空母の目の前で立ち止まると、資材の木箱を2つ積み重ねる。

「甘いですね。赤城さんと一緒にし……」

「コレモ♪」

少女が積み重なった木箱の上に、黄銅色の紙で包装された長方形の物体を置いた。

その真上になる表紙には、『間宮羊羹』と黒文字で書かれている。

加賀の目がそれに釘付けとなり、口元からは一筋のよだれが垂れ始めた。

「マテ！」

「・・・」

「ソノママデイテ！」

青い一航戦はすぐ横を通る少女に目もくれず、置かれた和菓子を見つめ続ける。

少し疲れ気味でやって来た4姉妹すら無関心でいた。

「なんで『あんなもの』まで持つてるのよ!？」

「空母の食い気にはウンザリだ」

「あんだ達は犬かあゝ!!」

「加賀さん、後で少し分けてくださいなのです!!」

「・・・」

走る白き少女の向かう先に、直進と左側に分かれた通路が見えてくる。

彼女はその左の通路へ曲がろうと考えた。

「私が一番なことを見せてやるのに・・・何処にいるのよ?」

ちようどその時、その左の通路から愚痴を呟く島風が歩いてきた。

彼女は居候する白き少女の何かが気に食わず、勝負でもしようと鎮守府内を探し回っていたのだ。

その後ろからは、3体の連装砲ちゃん達が遅れて付いてくる。

「・・・おっ?」

「エッ!?!」

島風が右の角を曲がった瞬間、目的の存在がすぐ目の前に現れた。

慌てた白き少女が右へ回避し、最速の艦娘の傍を横切ろうとする。

「アッ!」

咄嗟の行動だったためか、少女の身体がバランスを崩しそうになった。

そこで彼女は島風の腰辺りへ左手を伸ばす。

「ひゃっ!?!」

白き少女が掴んだのは、島風の黒いパンツだった。

腰辺りからはみ出たヒモのようなパンツが引っ張られたことで伸び始める。

「ちよっ!?! ぱっ!! パンツ!!」

「ワッ!?! ワワッ!!」

白き少女はその伸びたパンツのおかげで、転ばずに左側の通路へ曲がり切れた。

彼女がすぐに左手で掴んだパンツを離すと、まるでゴムのように戻ったパンツが島風

に襲い掛かる。

「お、お、お、うっ!？」

「「「えっ!？」」」

その反動によつて、最速の駆逐艦が吹き飛んでしまう。

しかも彼女が飛ばされた方向には、走つてくる暁型4姉妹の姿があつた。

「「「みぎやあああああ!？」」」

5隻の駆逐艦たちが衝突し、それぞれが立ち上がれない程の衝撃を受ける。

その隙に白き少女はその場から走り去つていった。

「おのれ．．．．．ゆ、許さないんだから．．．」

「ふ、不死鳥は、滅びぬ．．．何度でも、よみがえるさ．．．」

「いったあゝい．．．痛過ぎるわ．．．」

「また、衝突、したの、です．．．」

「は、速き．．．こと、しま．．．かぜの、ごと．．．ガクツ」

4姉妹は小破程度で済んだが、島風は大破するぐらいの重症だった。

連装砲ちやん達心配そうな目をして、彼女らの傍へ近寄る。

約15分前。

鎮守府のある談話室では、ちよつとしたお茶会が開かれていた。

金剛と榛名が用意した紅茶セツトやお菓子テーブルに並べられ、第六駆逐隊の4人と戦艦大和、そして、北方棲姫ことホツポちゃんがテーブルパーティーを楽しんでいた。

全員が椅子に座り、テーブルの紅茶とお菓子を食している中で、ある艦娘が白き少女へあることを尋ねる。

「ホツポちゃんはお風呂に入らないのですか？」

電の何気ないその一言。

それを聞いた白き少女が口に含んだ紅茶を誰も居ない足元へ噴き出す。

他の戦艦3人や駆逐の姉妹たちも彼女の言葉に食い入る。

「そういえば、一度も見たことないわね？」  
「あの日」から行水でもしてるの？」

「入渠は嫌いですか?」

「響、変な口調になつてない?」

「どうなのですか?」

「ウツ・・・」

暁たちが若干引き気味の少女へ椅子ごと詰め寄っていく。

ちなみに暁の言つた「あの日」とは、4日前にホッポを救出した日のことだった。

オロオロする白き少女を余所に、金剛があることを口にする。

「Oh! そういえば、ホッポが里子のバスルームへ行くのを見たデース!」

「えつ、金剛姉さま、ご存じで?」

「チヨツ!」

高速戦艦が呟いたバスルームとは、艦娘の大浴場とは別に造られた提督専用の個室露

店風呂である。

彼女は偶然にも、提督の自室から右隣にある風呂部屋へ入る白き少女を目撃していた

のだ。

「マッテ、コンゴ・・・」

「何時なのですか!?!」

「一昨日デース。里子に夜食を届けに行ったときネー」

「レディーじゃあるまいし、なんで1人なのよ?」

「私がいるじゃない!!」

「時間切れ、答えを訊こう」

「エエツ・・・デモ・・・」

その情報で更に白き少女へ詰め寄る4姉妹。

困り果てる少女の赤い目が様子を見ていた大和の方へ向けられる。

彼女も困った表情で駆逐艦たちを落ち着かせようとした。

「きつと、ホツポちゃんも1人で入りたいお年頃なのよ」

「レディーより大人な訳!」

「戦艦は黙っていたまえ」

「響、さつきからおかしいわよ?」

そんな姉妹の中で電だけは強気な態度を示す。

「そんなことはないのです! ホツポちゃんも一緒に入りたがっているはずなのです  
!」

「電ちゃん? ほ、ほら・・・ちよつと、恥ずかしいとか・・・」

「電たちは恥ずかしくないのです!」

今度は姉妹たちが電を中心に大和へ視線を向ける。



電の気迫に押され気味な超弩級の戦艦が引いてしまう。

「そ、そうじゃなくて……」

「お風呂は皆で一緒に入るものなのです！　ねえ？　ホッポ……ちや……？」

彼女が再び白き少女へ目を向けると、そこには誰も座っていない椅子が置かれていた。

その時、談話室の扉が開く音が鳴り、彼女ら全員がその方向へ視線を向ける。

その両扉の左側が開き、こっそり退室しようとする白き少女の姿があった。

「……アツ」

彼女らとの視線が合った少女は、すぐに扉を閉めて走り出す。

その数秒後、少女の後方からドアが乱暴に開かれる音がして、飛び出してきた暁姉妹が追い掛けてくる。

「レディーの前で逃げちゃ駄目でしょう！」

「待ちたまえ。いい娘だから、さあ！」

「この雷様から逃げられるとでも思ってるのかしら!？」

「ホッポちゃん！　この電とお風呂に入ります!!　今すぐなのです!!」

「コッ、コッ!……コナイデ——ツ!!」

司令部の廊下から始まった鬼ごっこ。

暁型の4姉妹が気絶している間に、白き少女はトラック鎮守府内の屋外へと逃げてしまふ。

ようやく動けるようになった彼女らは手分けして、逃げた白き少女の行方を探し始めた。

鎮守府内のある波止場にて。

「何処に逃げたのよ……」

暁型の長女が波止場の先へと足を進める。

彼女はそこにあるイカダで佇む次女の姿を見つけた。

「響、ホッポちゃんは……見つかってなきそうね」

「……」

イカダの端にいる白髪の少女が無言で右足を海面に付ける。

姉はそんな行動を気にせず、その場から離れようとした。

「響、あなたは倉庫の方へ行つて、こっちは……」

「……」

「ちよつと! 響! 聞いてるの!?!」

「……」

「響?」

「……」

何時までも動かない次女に、暁が不思議に思いながら近寄っていく。

彼女が2, 3歩歩いた直後に、イカダに乗っていた少女が動き出した。

「見つけたよ」

「へ?」

白髪の少女が海面につけていた足を上げて、スカートの左ポケットへ左手を突っ込ませる。

ポケットの中から出てきたのは、薄い緑色に塗装された空き缶のような物。

その側面には『試作』と書かれている。

「響、何よそれ？」

「明石さんの発明品」

「そんなもの出して、どうするのよ？」

「ウラツ」

白髪の駆逐艦は躊躇いもなく、それをイカダから5メートル離れた海面へ放り投げた。

投げ込まれたそれは海中へ沈み、2人はその様子をじつと見つめ続ける。

しばらくして、海中から規模の小さい爆音が響いてきた。

「……」

「……？」

「……よし」

「……えっ!？」

海中の爆発から数秒後、海面に白い物体が浮かび上がってくる。

それは4姉妹たちが搜索していた白き少女だった。

彼女はうつ伏せ状態のまま気絶していた。

「見たか。不死鳥のいかずちを……」

「雷じゃないでしょう！　って、それより！　“アレ”は一体何なのよ!？」

「対潜用の試作型爆雷。対象の聴覚を麻痺させるために考えたものらしい」  
「なんでそんなものを・・・はっ！ そんなことより！ ホツポちゃんか！」  
自慢げに説明する響と気絶した少女を助けようとする暁。  
彼女らの上空を1羽のカモメが呑気に通り過ぎて行った。

「イヤ〜！ オフロイヤ〜!!」

仰向け状態のまま涙目でジタバタする白き少女。

彼女は縦1列になった暁姉妹に持ち上げられて、入渠ドックのある施設へと運ばれていく。

「お子様の世話はレディーに任せなさい！」

「君も女の子なら、聞き分けたまえ」

「雷が上から下までちゃんと洗ってあげる！」

「ホッポちゃん、電と裸のお付き合いです!」

「ヤアアアア!!」

白き少女が他の娘たちと共に風呂へ入らないのには理由があった。

彼女が「元の身体」で生活していたとき、異性である女性と一緒に風呂へ入る機会は殆ど無かった。

幼少期は流石に母親と入ることはあつたが、成人した状態での混浴はまず有り得なかつた。

また、道徳的な問題で幼子と入ることは犯罪であると認識済みである。

いくら身体が幼い娘子でも、その中身は羞恥心が一杯の健全な心。

(皆の裸を見たら捕まる! お巡りさんとかに捕まる!)

このように、彼女の頭の中は混乱しきつていた。

必死に暴れ回って、4姉妹との入浴を拒絶する。

「こゝらゝ暴れないの!」

「もうすぐ着くのです!」

「ヒッ!」

雷と電の言葉で少女の血の気が引く。

最早これまでと思われた瞬間、彼女の身体が何者かの両腕によつて高く持ち上げられ

た。

「「「えっ?」」」

白き少女の身体が持ち上げた者の腰にまたがるように抱えられる。

彼女を抱えるのは、戦艦の“大和”だった。

「や、大和さん?」

驚いた暁が彼女の名で呼び掛けた。

呼ばれた彼女はニツコリと笑ってから、4姉妹たちへあることを告げる。

「暁ちゃん達には悪いけど、ホッポちゃんとの入浴は私に任せて欲しいの」

「エッ?」

「「「えっ?」」」

その言葉に一番驚いたのは、大和に抱えられる白き少女だった。

一方の暁たちは、納得できずに抗議の声を出す。

「で、でも、レディーに向いている仕事だし・・・」

「むうう・・・そのむ、じゃなくて、砲弾で私と勝負するかね?」

「駄目よお! 私がやりたいのよお!!」

「電はホッポちゃんと入りたいのです!!」

大和がそんな彼女達に、自身の左手に持つ4枚の紙切れを見せ付けた。

「「「そ、それは!」」」

「間宮アイスの無料引換券。のどかさんに渡せば、その場で貰えます」

「「「う〜」」」

「今日のところはこれで勘弁してあげて。ホップちゃんとは、また今度・・・ね?」  
「暁型の4人は、しばらく考え込んでから差し出されている引換券を手に取る。」

「しようがないわね。今回はアイスに免じて諦めるわ!」

「720秒間待ってやる」

「次こそは絶対によ!」

「・・・電は諦めないのです!」

彼女らは手にしたそれを大事に持って、食堂のある建物へ一目散に向かった。

残された2人は困難を回避できたことで胸を撫で下ろす。

「フウ・・・ヤマト、アリガ・・・」

「じゃあ、行きましょうか」

「・・・ヘツ? ドコへ?」

「何処って、お風呂ですよ?」

「・・・エッ」

白き少女の危機だけは未だに回避できていなかった。



結局、彼女は入渠施設の脱衣所まで連れて行かれた。

逃げ出そうにも大和のしつかりとした抱擁により、その腕からの脱出は不可能だった。

しかし、降ろされた後の大和の行動で、少女は少し戸惑うことになる。

「服を脱いだら、このタオルを巻いて下さい」

「コ、コレ？」

「はい。私もタオルを巻きますから、安心して下さい」

「・・・ウン」

白き少女は履いていた靴を脱いで、手渡されたタオルを持ちながら柵の方へ歩いていった。

ワンピースの服と手袋、黒の下着を柵の籠へ入れていく。

彼女の後方にある反対側でも、戦艦の艦娘が脱衣を始めた。

お互い同じタイミングで素肌に白いタオルを巻き付ける。

何れ大多数の艦娘が利用すると予測され、大規模に建設された大浴場。

屋内として、右側の壁に20以上あるシャワー台が設置され、学校のプール並みに広い長方形の浴層が奥にあった。

左側には、入渠で修復するための艦娘専用の個室型浴槽が4つあり、すりガラスで仕切られた状態となっている。

本日は誰も居ないらしく、そのドア上部に設置されたタイマーが『00:00:00』のままだった。

「それじゃあ、そこに座って」

「ウ、ウン……」

大和が白き少女を1つのシャワー台の椅子に座らせ、石鹸のついた小さなタオルで彼女の小柄な背中を洗い始める。

「……」

初めて女性に背中を洗われたことで、少女の白い顔がみるみる赤くなっていった。

続けて雪のように白い長髪もシャンプーで揉み解すように洗われる。

「流しますよ」

「ニョワ!?……ン〜!」

頭から掛けられたシャワーの温度に少女の身体がビツクリしてしまう。

すぐに顔の水気を両手で拭い落とし、ブルツと全身を震わせた。

「次は私の背中も洗ってください♪」

「ウン・・・ウツ？ セナ、カ・・・ッ!？」

白き少女は泡付きのタオルを手渡されて、まさかの交替に目を丸くする。

2人の場所が入れ替わり、立っている少女の目の前には、大きな艦娘の背中がそびえ立っているように見えた。

「エツト・・・ンウウウ・・・」

少女がぐももった声を漏らし、上気した顔から湯気が出てくる。

彼女は手に持ったタオルを震わせながら、座っている大和の背中を擦り始めた。

「・・・んっ」

「ヒッ!・・・ダ、ダイジョウブ?」

「少し、くすぐりたいです。もう少し強くしてもいいですよ!」

「コ、コウ?」

「そうです。いい感じですよ」

少し怯える白き少女が戦艦の背中をせっせと洗っていく。

「少しずつで、いいです」

「エツ?」

「ホツポちゃん、元は人間だったことはある方に教えられました。だから、ですよね? 私達『艦娘』と、こんな風に触れ合うのが苦手なのは……」

「ウツ、ウン……」

「大丈夫です。皆、貴方を嫌がったり、蔑んだりしません」

「デ、デモ……ワタシ、カラダガ『シンカイセイカン』ダシ……ソレニ……モトハ、オ……」

「落ち着いて、ゆっくり慣れていってください。でないと、今日みたいなことがずっと続きますよ?」

「ウツ……ソレハ、イヤ……」

大和に助言されたことで、少女は少しずつ落ち着きを取り戻していった。

彼女自身もこの先ずっと艦娘との触れ合いはあるだろうと確信していた。

そのため、覚悟は必要だと思い、少し残っていた勇気を奮い立たせる。

「ソレジャア、シャワーヲ……」

白き少女がシャワーに手を掛けようとしたその瞬間、脱衣所のある方向の引き戸が勢いよく開いた。

「さあ、暁たち、水雷戦隊の出番よ!」

「時間だ。その身体を洗わせろ！」

「はい！ 雷、行つきますよ——！」

「電の本当の本気を見るのです！」

「エツ、エエツ!？」

やつて来たのはアイスを食べに行つたはずの4姉妹。

しかも彼女らはタオルを身体に巻かずに、左手で持つているだけの状態である。

まともに見てしまった少女の顔が再び真っ赤になつてしまふ。

「大和さん！ あのアイスだけでは満足できない！」

「最初は脇腹。次はうなじだ。ひざまづけ。命乞いはさせない。私にその柔肌を晒せ」

「も——つと私に頼つていいのよ？」

「もう電は我慢できないのです!!」

「ヒツ、ヒイイイ!!」

彼女たちのまるで飢えた獣のような視線。

それを目にした少女が持つていたタオルを落とし、そこから浴槽に向かつて走り出した。

「あつ、駄目よ！ ホッポちゃん！」

大和が静止の声を掛けるも、白き少女は大ジャンプして、浴槽の底へと潜り込む。

その数秒後、身体を赤くした少女が飛び上がるように浮き出た。

「アツツウウウウウウウウウツ!!」

風呂の温度は高めに設定されているため、普段は慣らした後でないといりにくいと言われている。

しかも、「深海棲艦」である彼女にとって、深海の冷たさは平気だが、その逆である熱湯の耐性は低かった。

まるで飛び魚のように、彼女は風呂の水面を飛び跳ねていく。

夕方、日が落ち始めた頃。

司令部の廊下ですつと立ったまま佇む空母の姿があった。

「.....」

彼女は口元の涎を垂らしながら、木箱の上に置かれた羊羹の包みを見続けていた。

「……」

「加賀さん、ただいま♪」

そこへ口元に餡子を付けた赤城がやってくる。

彼女は立ち尽くす加賀の姿を不思議そうに見つめた。

「加賀さん? どうし……」

「……」

「そ、それはっ!?!」

そこで赤い一航戦もその羊羹の存在に目を光らせる。

「まさか、こんなところに! いただき……へっ?」

「ふんっ!!!」

青い空母は、右手を伸ばす赤城の腕を掴み取り、そのまま右腕だけで彼女の身体を左側の壁へ投げ飛ばした。

赤い空母は頭から突っ込んでいき、建物の外壁に腰まで深々と突き刺さってしまった。

ピクピクと痙攣する彼女を気にせず、青い一航戦は羊羹から視線を離さない状態を維持する。

「……これは譲れません」

数時間後、通り掛かった山岸提督が彼女の事態に気付き、呼び出された白き少女の指  
示で加賀は解放された。

その時の加賀は羊羹を食しながら、『やりました』と言って、目を輝かせていたらしい。



# No. 17 ジュース?

闇夜が訪れたある鎮守府の食堂内。

「んむうううううううううつ!!」

少女らしき悶える声が、真つ暗な部屋全体に響き渡る。

調理場へ入るためのドア付近に、2つの影が床の方で蠢いていた。

1つは、小柄でセーラー服を着込み、茶色の長髪を後ろだけ上げるように束ねた少女。

もう1つは、彼女と同じくらいの体格で、白いワンピースと雪のように白い肌と長髪をした少女。

白い方はセーラー服の少女に覆い被さり、ミトン手袋の両手で彼女の顔を掴んでいた。

そして、お互いに顔をくっ付けて、何か吸い取られる音を立てる。

「チュウウウウウウウウ……」

「んんうううううっ!?!」

白い方の少女が相手の唇に吸い付いていたのだ。

しばらくそれが続いた後、白い方の彼女がゆらりと立ち上がる。

「ら、らめ……なの、れ……す……」

「ペロッ♪」

目の焦点が合わず、倒れて痙攣する少女がそう呟いた。

それを眺める上気した顔の白い少女が舌なめずりをする。

約30分前。

トミック鎮守府の司令部にある大広間。

「「「「ホッポちゃん、提督での着任おめでと〜!!」」」」

多数の艦娘たちの声と共に拍手が沸き起こる。

白い軍帽を被る白き少女が彼女たちにミトン手袋の右手で手を振った。

「アリガト〜♪」

ハマグリ鎮守府が稼働してから3日後に、トラック鎮守府内で白き少女のお祝いパーティーが開催された。

彼女以外に、秘書艦の大和と戦艦である陸奥、駆逐艦の五月雨が一緒にやって来る。

その他の不知火や日向たちはハマグリ島の防衛任務で残っていた。

司令部の大広間には、多数のテーブルの上に出立の料理が並べられている。

大量に作られた揚げ物である天ぷらや唐揚げ。

数十枚ある鉄板皿に乗るジューシーな牛肉や豚肉のステーキ。

純白に輝くお米の入った大型炊飯器。

濃厚なソースで味付けされた焼きそばやお好み焼き。

おおきなタライに入れられた山盛りのざる蕎麦。

各テーブルに用意されたグツグツと煮える鍋料理。

果物やアイス、甘味である饅頭、羊羹などに占領された大テーブル。

お茶やジュースだけでなく、日本酒などのアルコール類もテーブルに用意された。

「いくらなんでも多過ぎるわ・・・」

苦笑する山岸提督がそう呟いた。

この大量の料理の元手は、彼女の叔父である米満大将から送られたものである。

おかげで料理人の宮島だけでは手が足らず、明石や工廠の妖精たちまで手伝うこととなつた。

「まあ、今日はホツポちゃんのお祝いだし、皆で好きに食べることを許可するわ」

「一航戦『赤城』!! 食います!!」

山岸の言葉を聞いた赤い空母が我先にと食べに向かう。

それに釣られて、他の艦娘たちも取り皿を手に取り、料理のあるテーブルへと歩いていった。

「ホツポちゃん、私達も行きましょう」

「ウン♪」

白き少女も大和に連れられて、山岸や暁姉妹たちと一緒に食事を始める。

「ん〜! デリシヤスな羊羹デース!」

「金剛姉さま、先に甘味を食されては・・・」

「榛名、甘いネー。こういうスイーツなどは、先に食べないとすぐに無くなるデース！」

「えっ？ そうな．．．えっ!? 私の前にあったアイスが消えた!？」

驚く榛名の後ろにステーキ肉を頬張る赤城がアイスを器ごと持って行く。

「まずはこの鍋をいただきます」

「加賀さん、赤城さんは．．．」

「赤城さんには譲れません。私と二航戦の3人でいきます」

「は、はあ．．．」

「ほら！ 蒼龍、早くしないと無くなるわよ！」

お椀と箸を持つ3人の空母たちが鍋の1つを食べ始める。

その傍らには赤城が俊敏な速さで鍋の具を取り去っていった。

「さあ、山城。このざる蕎麦を食べましょう」

「は、はい、姉さま．．．あれ？」

「どうしたの？ 山城」

「麺つゆに入れた蕎麦が．．．あつ、あれ？ また．．．不幸だわ」

山城の持つ麺つゆの器に入れられた蕎麦は、全て赤城の素早い箸捌きで取られていく。

それに気付かない姉の扶桑は黙々と蕎麦を啜っていた。

「モグモグ・・・やっぱりご飯とこの匂いは一番だわ！」

「ね、姉さん。ご飯を食べながら匂いを嗅ぐのは・・・」

「時雨姉さん、春雨、助けて・・・」

「白露姉さん、五月雨が困ってますよ」

白露がお米を口に入れてから、妹たちの匂いを嗅ぎ回る。

4人がそうしている間に、赤城が2つの茶碗を合わせて、振り作る即席のおにぎりを生産していった。

「かあく！ やっぱりお好み焼きとビールは美味すぎやわー！」

「はい、天龍ちゃん♪ ビールのお代わり♪」

「おう！ 龍田、サンキュ！」

「この焼きそば、中々の味だわ・・・流石ね！」

龍驤を中心に、軽巡の天龍、龍田、矢矧がビールと料理を堪能する。

彼女らの隙をついて、赤城が調理器具のコテを取り出し、掬い飛ばしたお好み焼きを口に入れた。

「ぬっふっふっふ・・・遂にこの時が来た！」

「？」

「そこの白いちびっこ！ この島風と早食い勝負よ！」

「ヤダ」

「・・・はっ?」

島風の誘いを無視して、白き少女は暁姉妹たちと一緒に揚げ物を食べ始める。

呆ける彼女の取り皿に乗っていた天ぷらが赤城に全て奪われていった。

「響、これなんかいけるんじゃない?」

「スパシィーバ♪」

「この海老天、美味しいわ!」

「ホッポちゃん、これも食べるのです」

「イモテン? モグモグ・・・ンツ♪」

電から受け取った天ぷらを美味しそうに食べる白き少女。

彼女は食べて味わうことを楽しんでた。

大和と山岸も取り皿のかしわ天を食べながら、少女の楽しそうな顔を見ている。

「ハマグリ島の方も問題なさそうね?」

「はい。今のところは出撃、工廠、入渠、どれも通常通りに行えます」

「もし、何かあればこちらに連絡しなさい。必要なものも揃えるわ」

「ありがとうございます」

彼女らが食事を楽しんでいると、唐突に白き少女がドラム缶を取り出し、豪快なラッ

パ飲みを始めた。

慌てた大和がすぐにその行動を制止する。

「ホッポちゃん！ 燃料飲んじやダメ!!」

「ングツ?!」

「もう・・・また、勝手に資材を持ち出しちゃって・・・あっちの飲み物にしましょう?」

「アウ・・・」

白き少女は戦艦の艦娘に引つ張られて、飲み物が置かれたテーブルへとやってくる。

そこには、ヤカンに入った麦茶、『大和ラムネ』と書かれたガラス瓶、蜜柑や林檎といった果汁ジュースのガラス瓶が置いてあった。

大和がラムネの瓶を一本手に取り、開封したそれを少女に手渡す。

「はい、どうぞ♪」

「ハムツ・・・ンクツ、ンクツ・・・プフウ♪」

喉全体に広がる冷たくてシユワシユワする爽快感。

それを最後まで飲み干した後、彼女は隣に設置されたものへ目を向けた。

「ンウ?」

見慣れたドラム缶に椅子のような鉄製の4つ足と、正面の下部辺りに蛇口のようなものが設置されている。



それらは2つ置かれてあり、ドラム缶の色は黄緑と桃色に塗装されていた。

白き少女が目をばちくりさせて見ていると、工作艦である明石が話し掛けてくる。

「これは燃料にある味付けをしたものなの」

「アジツケ？」

「そう。緑色はメロン味で、こっちのピンクはイチゴ味よ。試しに飲んでみる？」

工作艦の彼女から紙コップに入るピンク色の飲み物が手渡された。

白き少女が恐る恐る口を付けると、イチゴの風味が漂ってくる。

彼女は迷わず飲み干すと、その味に目を輝かせた。

「オイシイ！」

「どうやらお気に召したようね」

「明石さん！ 私にも頂戴！」

「私も・・・」

「雷にも！」

「電にもくださいなのです！」

暁姉妹だけでなく、白露たちもその燃料を飲みを集まってくる。

艦娘たちは果物の風味がある2種類の燃料を味見した。

「凄いですね」

「そうでしょう。これが各鎮守府で普及できれば、艦娘の疲労がさらにグツと減ります！」

明石が自慢げに話している最中に、白き少女がイチゴ味のドラム缶をじつと見つめる。

しばらく見つめた後、彼女はそれに近付き、蛇口の先端を口に咥えた。

「ゴキュ、ゴキュ、ゴキュ、ゴキュ……」

「ちよっ!？」

「ホッポちゃん!! 何やってるの!？」

白き少女が咥えた状態で蛇口を捻り、イチゴ味の燃料を飲み始める。

大和が明石の驚きでそのことに気付き、急いで止めに入った。

彼女は蛇口の栓を閉めてから、少女の身体を持ち上げる。

「アツ……」

「そんなに飲むとお腹冷やしちやいますよ?」

「ムウウウ……モット〜」

「駄目です!」

戦艦の艦娘に抑えられる白き少女。

そんな彼女らを見て笑う艦娘たちの中で、ある人影がメロン味のドラム缶に向かっ

た。

「・・・はあ!？」

山岸の声でその存在が全員に注目される。

白き少女が唾えて飲んでいた蛇口に、一航戦の赤城が同じ行動をしていたからだ。

「(きゅ、(きゅ、(きゅ・・・)」

妙な体勢で飲み続ける赤い空母。

呆れる山岸が指を鳴らし、その音に反応した加賀が動き出す。

青い空母は素早い動きで蛇口の栓を閉め、後ろ腰辺りから取り出したハリセンで相方の頭を叩き落とした。

「へぶううっ!？」

叩かれた彼女は床へ顔をぶつける。

「いくらなんでもやり過ぎよ、赤城・・・って、そこっ!？」

「ビクッ!？」

山岸はこっそりと中腰で忍び歩く秘書艦「長門」を指差した。

指摘の声を聞いた戦艦が身体を震わせて静止する。

「何を、するつもりなの?？」

「その・・・か、かんせ・・・」

「許可しないわ」

「ぐはあっ!!」

提督の禁止命令により、ビッグ7である艦娘がその場で崩れ落ちた。

「陸奥、貴方もよ」

「あら。あらあら……」

妹の方も呼び止められ、姉と同様に同じ体勢で項垂れた。

見物する他の艦娘たちは、山岸のように呆れてしまい、笑いを堪えるものまで現れる。

「全く……秘書艦を変えようかしら?」

「相変わらずです……ん? ホツポちゃん、どうしたの?」

大和が白き少女に目をやると、股をくねらせるようにモジモジしていた。

彼女は小さな声であることを呟く。

「……オシッコ」

「ああ、やつぱり……」

かなりの水分を摂取したせいで、少女の身体が尿意を催してしまった。

彼女が大広間の出入り口である両扉へ向かうと、山岸があることを伝える。

「ホツポちゃん、今、司令部のトイレは水が止まっているから、近くの食堂にあるトイレを使ってね」

「ワカッタ」

「寂しいならレディーも付いていくわよ？」

「レディー……ぷっ」

「ちよつとお！ 響いい!!」

「私がいるじゃない！」

「ホッポちゃん、電が付いていつ……」

「ヒ、ヒトリデ、イケルカラ！」

白き少女は4姉妹から振り切るように、そそくさと大広間から出て行った。

トラック鎮守府の食堂内。

本日は宴会のため、テーブル席のある広間の電灯は消され、調理場と左奥にあるトイレのみ明かりが点いている。

水の流れる音がし、それと同時に白き少女がトイレの出入り口から出てきた。

「フウ……ヒモパンハ、ツライ……ン？」

彼女は調理場の方へ目を向ける。

本来は料理人の宮島が居るはずだが、出来上がった料理の運搬で居ないようだ。少女はゆっくりと厨房の中へと入っていく。

「ナニカ、ナイカナ?」

ついさつきまで燃料をがぶ飲みしていたにも拘らず、彼女は喉の渴きを癒す飲み物を探し始めた。

「ウ〜ン」

大型冷蔵庫などを開けて、冷えた物が無いか探るが、ほとんどの飲み物は運ばれた後だった。

「・・・オツ?」

そんな時、白き少女は勝手口の近くにあつた包みを見つける。縄紐で括られた茶色の包み。

彼女はそれを躊躇なく破り開けた。

その中身は四角い木箱に入ったビール瓶のようなものだった。

「ジュース?」

ラベルには『でらつくちゅじゅーちゅ』と書かれていた。

首を傾げる白き少女がその瓶の蓋をタマの歯で開ける。

続けて愛用する金属製コップを取り出し、瓶に入っていた透明な液体を注いでいっ

た。

「ン♪ ゴクツ……オイ……シ?……」

彼女がその液体を一口飲んだ直後に、持っていたコップが床に落ちる。

そして、少女の小さな身体がその場で崩れるように倒れ込んだ。

「ホッポちゃん、何処なのです〜?」

暗い食堂の扉を開けてやって来たのは、暁型4姉妹の末っ子である電である。

彼女は帰りの遅い北方棲姫を探しにやってきたのだ。

暗い食堂内を見渡しながら歩いていく。

「まだ、トイレなのですか?」

駆逐の少女がトイレに入ろうとした時、厨房の出入り口付近で落ちている物に目があった。

「あれは……」

彼女は早速でその場所へ向かい、落ちている物を右手で拾い上げる。

それは世の提督たちの象徴でもある“白い軍帽”だった。

しかも、それは見覚えのあるサイズの帽子である。

「ホッポちゃんのこと……どうして……っ!?!」

不意に、彼女の左腕が何者かに掴まれて、引き寄せられるように床へ倒れた。

「痛っ!……えっ?」

仰向きに倒れた駆逐の少女は、自身の左側で立っている存在を目にする。

「ホ、ホッポちゃん?」

探していた白き少女がそこに居た。

彼女は安堵する電の身体へゆっくりと覆い被さっていく。

「えっ、はわっ!?!……」

困惑する駆逐艦は白き少女の異常な様子に気付いた。

白く可愛らしい顔の頬が赤くなり、赤い目が蕩けた状態になっている。

そんな彼女の顔が電の顔へと近付いていった。

「はわわ!?! ホッポちゃん、待つの……んむっ!?!」

「ハムッ」

白き少女がその小さな口で駆逐艦の唇を啜えた。

余りの出来事に、駆逐の少女は目を見開く。



「んむううううううううううつ!!」

(は、はにやあーっ!? 電は、ホ、ホッポちゃんど．．．き、き、き．．．)

彼女がそう考えていると、密着している白き少女の口が動き出した。

「チュウウウウウウウ．．．」

「んんうううううううつ!!」

突如、全てを吸い取られそうな勢いのある吸引が始まった。

その吸い込みによって、駆逐艦の小柄な身体が激しく震え出す。

やがて、その震えが小さくなっていくと、白き少女がその場で立ち上がった。

20分後。

明かりの付けられた食堂内に、山岸を含めた艦娘たちが集まっていた。

彼女らは変わり果てた電の姿を発見したことで、今起きている事を確認し始める。

「さて、これは何なのかしら? 龍驤．．．」

「そ、それは……その……」

山岸はテーブルに置いた瓶を指差し、目を逸らす軽空母の少女に尋ねた。

「し、知り合いから、送ってもらったもんでな……その……」

「これ……お酒なのね？」

「は、はい……」

「度数は？」

「……（ぎ）……」

「五？」

「……50度や……」

彼女の答えを聞いた山岸は頭を抱えるようにため息をつく。

「つまり……ホッポちゃんはそのを飲んで……」

「酔っ払った状態になり、電を襲ったのね」

大和と山岸が現場で起きた出来事を想定した。

並べた椅子に寝かせた駆逐の少女はまだ放心したままである。

龍驤の話によると、今朝届いたものを厨房へ置きっ放しにしていたのだ。

中身はある艦娘からの贈り物で、本来は水で割ってから飲むものらしい。

「電……我が妹がこんなに変わり果てるなんて……」

「ハ、ハラショー………暁、このアへ顔やつてみて」

「やらないわよ!!」

「私がやるじゃない!!」

「あんたがやつたらもつと駄目でしょうがあああ!!」

末っ子が寝ている周りで騒ぐ3人の姉たち。

そんな彼女たちを余所に、山岸がその場に居る全員へ指示を与えた。

「取り敢えず、各自で鎮守府内を搜索するわ。大和は私と一緒に、それと空母全員はのどかちやんと一緒に後片付けをして頂戴」

「分かりました」

「了解!」

「了解や!」

「ひょうはい!」

「赤城、飲み込んでから返事しなさい」

「ごつくん……もぐもぐ、わはりました!」

「はあ……それと、龍驤……後で話があるから……」

「え、っ……そんなせつしようなく!」

軽空母の少女はその話の意味を理解し、その場で泣き崩れてしまう。

「曉たちは、電を宿舍へ運んでから搜索しなさい。それ以外は自由に．．．以上よ」

山岸がそう言い終えた後、ある戦艦の2人が食堂の扉へ走り出した。

「うおおおおおっ!! ホッポちゃんは何処だあああああつ!!」

「出ておいでえええつ!! お姉さんといいいことしましよおおおっ!!」

「……」

秘書艦とその妹が目の色を変えて、消えた白き少女の搜索に向かった。

残された艦娘たちもそれぞれ行動を開始する。

山岸と一緒に歩く大和は、白き少女の軍帽を抱き締めた。

「ホッポちゃん．．．」

薄暗い司令部内の廊下を3人の艦娘が歩き回っていた。

「この辺りは居ないのかしら?」

「一応は見て回ろうぜ」

「何処に居るのかしらね?」

軽巡組の矢矧、天龍、龍田が司令部の搜索を行っていた。

ある廊下の側面にある部屋のドア付近で、3人が分かれて行動しようとする。

「私はこの部屋を見るわ」

「じゃ、オレはこつちだな」

「私も天龍ちゃんど・・・」

「龍田はあつちだ!」

「やだ〜いけず〜♪」

「いいから行けよ!」

眼帯の軽巡がしつこい妹を反対側に行かせた後、自身は向かった先の部屋の引き戸を開けた。

中は教室のような場所で、多数の机と椅子が置かれている。

「居なさそうだな・・・」

彼女はそう呟いてから、矢矧の居る部屋の前へと戻っていった。

「矢矧、そつちはどうだ?」

天龍がそう問いかけるも、部屋に入った阿賀野型から返事はなかった。

彼女は開いた引き戸型の出入り口を覗いてみる。

「矢矧?・・・っ!?!」

ドアから少し離れた位置に、床へ倒れた軽巡の姿があった。

仰向けに倒れる彼女の顔は上気し、電のように放心した状態である。

「はあ、はあ……わ、たし、から……はなれ、て……」  
「マジかよ……」

彼女はもう1人の妹の安否を確かめるため、走り出そうと廊下の方へ振り返る。

その瞬間、彼女の目の前に真っ白な物体が飛び掛かって来た。

「ぐうっ!?!」

「カプツ♪」

「んんう!?!」

己の唇に柔らかいものが張り付いた感覚。

よく見れば、それは搜索されていた白き少女で、彼女に接吻をされていたのだ。

飛び付かれた反動でゆっくりと後ろへ倒れる。

「チュウウウウウウ……」

「んぐうううううっ!?!」

眼帯の女性は床へ叩きつけられる前に、その強烈な吸い付きで意識を失った。

「天龍ちゃん、そっちはどう〜?」

目的の部屋を見終えた天龍型の妹がやってくる。

ついさつき別れた場所へ戻ってくると、そこには姉のあられもない姿があった。

「は、はひっ!・・・あっ・・・う・・・」

「・・・こつちだったのね」

右目はいつもの凜々しさが無くなり、上向いたまま涙を流している。

口からは光る唾液が一筋だけ垂れていき、僅かな声だけが発せられた。

また、服はそれほど乱れてはいないが、黒いスカートの股辺りが少し湿り始める。

「あら〜。天龍ちゃん・・・こんなに出来上がっちゃって♪」

その姿を観察する妹が妖艶な表情で舌なめずりをする。

## No. 18 ウィ〜ヒツク!

夜のトラック鎮守府内にある宿舎付近。

「ひいひいひいっ!!」

「マ〜テ〜♪」

舗装された地面を暁と響が全速力で走っていた。

彼女らの後方からは、酔っ払った白き少女が同じ速度で追い掛けてくる。

「なんであんな娘になっちゃったのよ〜!?!」

「暁もウイスキーを飲めばなるかも・・・」

「そんなわけあるか!! って、ウイスキー? あんたまさか!?!」

「・・・」

「また、内緒で取り寄せたのね〜!?! 司令官に知られたらどうするつもりなのよ!?!」

「問題ないさ。私は酔わないし」

「そんな問題か〜!!」



約5分前。

駆逐艦専用の宿舎内。

放心状態の電を運ぶ彼女の姉たちが薄暗い廊下を歩いていく。

彼女らの自室手前で、長女である暁が引き戸を開けた。

その部屋の中へ末っ子を背負う三女の雷と次女の響が入っていく。

響が手際よく布団を敷いて、雷が背負っていた電を寝かせた。

「今日は騒がしい夜になりそうね!」

「暁、夜更かしは駄目だよ?」

「わ、分かっているわよ!」

部屋の外へ出た響が暁と話しながら歩き出す。

4, 5歩歩いたところで、彼女らはある異変に気付いた。

「あれ? 雷は?」

「すぐ後ろに……ん?」

2人が何気なく後ろへ振り向くと、そこには誰も居なかつた。

しかし、自分たちの部屋の扉付近で、何かが蠢いているのが見えてしまう。

「っ!？」

彼女らはそこで衝撃的なものを見てしまった。

「チュウウウウウウウウウウ・・・」

「んむうううううっ!？」

白き少女が三女を床へ押し倒し、柔らかそうな口で相手の唇を奪っていたのだ。

強烈な吸引の音が姉たちの方まで伝わってくる。

「プフウ・・・ペロツ」

「し、れい・・・か・・・あはっ・・・もう、こ・・・えが、きこえ・・・あはっ!？」

末っ子と同じ状態にされた三女が途切れた言葉を呟いた。

吸い終えた白き少女が左側へ顔を向ける。

離れた場所で自分を見つめる2人に気付き、彼女はゆっくりと立ち上がった。

「ひっ!？」

「エヘッ♪」

怯える2人を見つめながら白き少女が走り始める。

彼女らも反射的にその場から、宿舎の出口へと即座に走り出した。

「マッテ〜♪」

「びゃ——っ!!」

「雷、お望みの顔になったね」

「言ってる場合か——っ!？」

宿舎周りで逃げ回る2人。

それでもしつこく追い掛けてくる白き少女を振り切ることが出来なかった。  
焦る長女が右隣で並走する次女へどうするべきか聞いてみる。

「どうする!？」 どうするのよ!？」 響!？」

「・・・餌をやって時間を稼ぐしかない」

「餌!? 餌って何よ!？」 何も持って・・・」

「ていつ」

突如、駆逐の次女が姉の足を蹴り、並走していた彼女を躓かせた。

置き去りにされた時はそこで次女の言葉を理解する。

「ひ、響いいいいいいっ!! あんたって娘はあああああつ!! みぎやあああつ!？」

「ごめん、姉さん・・・後でその船体は拾ってあげるから・・・」

彼女はそう言つて、司令部のある方向へと走つていった。

このまま他の艦娘たちと合流し、大勢で酔った白き少女を捕縛する考えである。

「まずは里子に報告を．．．っ!？」

暁型の次女がそう算段する最中で、不意に彼女の左足が止まった。

彼女の意志とは関係なく止まったため、盛大に前のめりでこけてしまう。

「痛たた．．．何が．．．」

こけた少女が左足に目を向けると、そこには黒い球体の物体があった。

「えっ．．．」

「ミィヤ〜」

それは白き少女が扱う艦載機の1機だった。

白い歯がある口で次女の左足のすねに噛み付いている。

「クロ? なんで．．．」

「ミィヤ〜」

「ごめん、クロ。離れて」

「ミィヤ〜」

「お願いだから、早く離し．．．はっ!？」

彼女が噛み付いた艦載機を必死で引き剥がそうとすると、自身へ近付いてくる足音を

聞き取った。

それは長女を襲っていたはずの白き少女が歩く音である。

ゆつくりとその方向へ目を向けて、やって来る足音の主を視認した。

「ミツケ♪」

「・・・」

「チュウ〜♪」

「あはっ・・・あはは・・・」

響はそこで己のしたことを後悔するが、目の前に来た無慈悲な罰から逃れられなかった。

「ダスビダーニャ・・・んむぐっ!?!」

「あ、あ、あ、青葉、見ちゃいました・・・」

響が襲われている位置から少し離れた植え込みの草むら。

その中からある人物が飛び出してくる。

紫色の短いポニーテールをしたセーラー服の女性。

横須賀鎮守府の重巡洋艦“青葉”

「これは……とんでもないものを撮ってしまいました」  
彼女がこのトラック鎮守府に居る理由。

それは姫級である少女が着任したことで、何か凄いネタがあると予想したからだ。  
しかも本日は彼女の着任祝いということもあり、青葉は『何かが起こる』と感じ取つた。

「いやはや……響ちゃん、ご愁傷様です」

今日も重巡の彼女は愛用の一眼レフカメラを手にし、絶好のシャッターチャンス撮る。

「さて、今回は此処までにしておきましょうか」

現在、青葉は休暇届けを利用し、無断でこのトラック鎮守府に潜入していた。  
彼女自身、これ以上の深入りは危険と判断したため、逸早く撤退準備を行う。

素早い身のこなしで、草むらから近い宿舎の横へ隠れ込んだ。

「ここから近い浅瀬は……あっち……ん？」

重巡の彼女がそこから一步踏み出したとき、後ろのスカートの裾が何かに引っ張られた。

彼女はまるでロボットのようにかくかくと首を後ろへ曲げる。

「……」

「エへへ♪」

彼女のスカートを引つ張ったのは、頬を赤らめた白き少女だった。

向けられたその笑顔に、青葉は顔を引き攣らせてしまう。

「わ、ワレ、アオバ・・・」

「オイチ♪」

「はっ!・・・はおぼっ・・・はられ、まひた・・・」

僅かな時間だけで重巡はその場で轟沈される。

彼女は仰向けにだらしなく寝転がり、スカートの湿った部分から湯気が立っていた。

「フ〜ン♪ フフフ・・・ンウ?」

白き少女がその場から立ち去ろうとすると、歩き出した右足に青葉のカメラが当た  
る。

「ン〜?」

彼女がそのカメラを拾い上げ、未だに失神する重巡と交互に目を向けた。

「!」

そこで少女は何を思い付いたのか、手の持ったカメラを寝転がる青葉に向けて、連続

でシャッターを切り始める。

「ン〜♪」

特に何も考えずに撮っているらしく、カメラのボタンを押しまくった。

やがて、気付かない内にカメラのフィルムを使い切ってしまう。

「ウ〜♪」

白き少女は使い切ったカメラを地面に置き、そこから彷徨い歩くように立ち去った。

工場から少し離れた場所の倉庫

そこでは、白露型の駆逐艦たちが少女の行方を捜していた。

白露と時雨、春雨と五月雨の二手に分かれて、大きい倉庫内を見て回る。

「提督、何処に行ったのでしょうか・・・」

「近い・・・この辺りのはず・・・」

「春雨？」

「えっ？ あ、な、何でもないです！」

ポーキサイトの木箱置き場で搜索する春雨と五月雨。



木箱を退けて探す五月雨は、少し様子のおかしい春雨に声を掛けた。

「五月雨、少しあちらを見てください!」

「あつ、ちよつと、春雨!? 待つて!」

突然、走り出した春雨の行動に、五月雨が手を伸ばして止めようとする。

そんな彼女の制止を無視し、春雨はある場所へと走り向かった。

「はあ、はあ、はあ……」

彼女が辿り着いたのは、白露と時雨が搜索するもう1つの倉庫。

主に燃料入りドラム缶が保管されている場所でもある。

到着した駆逐の少女が重い鉄製の引き戸を開けた。

「ホッポちゃん、居ま……はっ!」

扉を開けた彼女の目に、信じ難い光景が入ってくる。

「き、気持ち、いいし……あつ、ついし……恥ず……かしいし……」

「ぼ、僕も……ここまで、か……うっ……」

2人の姉たちがだらしのない表情で仰向けに倒れていた。

長女は何故か両手でピースサインをし、次女は両手で胸を抑える体勢のまま震えている。

どうやら、一足遅く白き少女に襲われてしまったようだ。

「そんな・・・白露姉さん、時雨姉さんまで・・・」

彼女が驚きの声を漏らしていると、倉庫の外から五月雨の叫びが響いてくる。

「うわああん!! むぐう!!」

「五月雨!!」

春雨はすぐに振り返って、倉庫の外へ飛び出した。

叫び声のした左側を見ると、そこには五月雨に覆い被さる白き少女の姿があった。

「チュウウウウウウ・・・」

「んむおおおおおっ?!」

少女に吸い付かれた五月雨が涙を流し、身体を痙攣させながら失神する。

十分に吸い取りキスをした白き少女が立ち上がり、やって来た春雨の方へ顔を向けた。

「イタ〜♪」

「し、司令官・・・」

駆逐の少女が思わずそう呟き、向かって来る小さな少女を無防備に待ち構える。

(ま、また・・・アレを味わうなんて・・・でも、今は・・・)

彼女は足を曲げて、少女との視線の高さを合わせた。

駆逐艦たちが轟沈（キス）させられてから約10分後。

「何故だっ!! 何故見つからんっ!!!」

「そんなにお姉さんと、火遊びしたくないのおおっ!?」

「ホッポちやああああああああああああんっ!!!」

長門型戦艦である姉妹は、懲りずにトラック泊地全体を探し回っていた。

同時刻、司令部の正面玄関前。

彼女らの叫びを聞いていた山岸たちは、損傷させられた艦娘たちを保護していた。

空母組が襲われた少女たちを入渠施設へと運び込んでいく。

残った戦艦組は山岸と一緒に相談することになった。

「どうして、長門さん達はホッポちゃんに襲われないのでしょうか？」

「きつとアレね。酔っているけど、本能的に避けているのかも・・・」

「あつはつはつはつはあ！ とことん嫌われているのネー！」

「は、榛名も襲われるのでしょうか・・・」

「あんな状態で、捕まえられるのかしら・・・」

「姉さまは、私がお守ります・・・」

中々、目標が捕まえられないことに悩んでしまう一行。

そこで山岸は何かを思い付いたらしく、ある指示を戦艦たちに伝えた。

「扶桑と山城は此処から先行して搜索を。金剛と榛名には別の作戦で捕獲してもらわ  
わ」

「えっ、は、はい！」

「分かりました！」

指示を受けた扶桑姉妹が早足で真つ直ぐ進んでいく。

それを眺める山岸は悲しげな表情で見送った。

「さて、後は・・・3人共、彼女らの後を追うわよ」

「えっ？」

「What？」

「里子提督、それは一体……」

「……扶桑、山城、ごめんね」

山岸の言う通り真つ直ぐ進む戦艦の姉妹。

特に何もせず、周りを見渡して、目標の少女を搜索した。

「姉さま、大丈夫でしょうか？」

「心配ないわ、山城。戦艦の2人でなら抑えられるでしょう」

自信のある姉の後ろから付いていく戦艦の妹。

不安な表情で彼女が後ろを振り向いたとき、それは前触れもなくいきなり現れた。

「わ。ぶっ!?!」

「えっ!?!」

いきなり扶桑の右側から白い何か飛び掛かって来たのだ。

戦艦の彼女は押し倒された後、すぐにその唇が奪われてしまう。

「チュウウウウウウ……」

「んもおおおおっ!?!」

「ね、姉さまあああ!?!」

叫ぶ妹の目の前で、件の少女が姉を悶絶させた。

動かなくなった獲物を確認すると、今度は近くに居た戦艦の妹へ視線を飛ばす。

「ひっ!?!」

睨まれた彼女は逃げ出すこともせず、その場で固まってしまった。

そんな彼女に白き少女が足を曲げて、飛び掛かる体制を整える。

「ああ、やっぱり……とても不幸だわ」

「ホ、ホッポちゃん……」

「これは……凄まじいわね」

「Wow……強烈なKissネー」

「榛名は、見てられな……うっ……」

ちょうど山城が襲われている所へ、山岸と戦艦3人が追い付いた。

4人は白き少女の行動に顔を赤らめてしまう。

その内の榛名は垂れた鼻血を手で抑えていた。

山城が沈黙した直後に、少女は彼女らの存在に気付く。

「アッ……」

「[[[[[!]]]]」

白き少女は新たな獲物へ向かっていくが、俊敏さが無い千鳥足でふらふらと歩いてきた。

「大和! 出番よ!」

「えっ!?! 里子提督!?!」

「あなたが受け止めた後に、2人で抑えさせるわ! 金剛! 榛名! 頼んだわよ!」

「了解デース!」

「あつ、待つてください。鼻血を・・・」

戸惑う大和が山岸に背中を押され、歩いてくる白き少女と対面する。

意を決した彼女は、地面に両膝をついて、迎えるように両手を広げた。

「ア〜♪」

「きゃっ!?!」

白き少女が戦艦の胸元へ飛び込むように抱き付く。

彼女の全体重を預けられ、咄嗟にその身体を抱き支えた。

「ン〜♪」

「えっ」

「ン〜♪」

「その・・・」

「ン♪」

「うう・・・」

抱かれる少女がキスを強請ってくる。

大和は周りに人が居ることもあり、恥ずかしい気持ちで一杯だった。

けれども、彼女の願いを断ることもできず、その体制のままでお互いの顔を近付ける。

「ンチュ♪」

「んう・・・」

「チュウウウウウウ・・・」

「んんううううううっ!？」

白き少女の口が大和の唇に引っ付いた瞬間、彼女の強烈な吸い込みが始まった。

戦艦の身体全体にある神経に、まるで電撃を流されたような感覚が襲う。

「んっ・・・くっ・・・」

彼女はそんな快感に流されず、なんとか耐えようと試みた。

抱える腕に少し力を籠めて、今の体勢を維持しようとする。

「チュウウウウウウ・・・」

「くううううっ!？」



更なる吸引で意識が飛びそうになるが、彼女自身の根性で持ち堪えた。

「チュウウウ・・・」

「んっ、んんっ!」

「チュウ・・・」

「ん・・・?」

「・・・」

少し涙目になる大和は、此処で白き少女の吸引力が弱まっていることに気付く。

徐々に吸う力が小さくなっていき、少女が口を離すと同時に寝息が聞こえてきた。

「スウウウ・・・スウウウ・・・スウウウ・・・」

「あっ・・・」

「力尽きたみたいね」

「キュートな寝顔ネー♪」

「っ、突いてみても、いいですか?」

「どうやら、あの千鳥足の時点で燃料（気力）が僅かだったらしい。」

「白き少女は戦艦の胸元ですやすやと気持ちよく寝入ってしまう。」

「大和は眠った少女を抱えたまま立ち上がった。」

「(ぎ)迷惑おかけしました」

「いいのよ。悪いのはこちらだし．．．今日はその娘と一緒に休みなさい」  
「わかりました」

戦艦の艦娘が軽くお辞儀をした後、宿舎のある方向へ歩いて行った。

(．．．ちよつと．．．．．“燃料漏れ”しました．．．)

見送った3人は司令部へと足を進める。

「騒がしい夜になったわ」

「それでも、いいものが見られたデース！」

「榛名も、感激しました！」

「貴方たちは気楽でいいわね」

テンションの上がった金剛とティツシユで鼻血を拭き取る榛名。

2人を連れて歩く山岸の元へ、担架である人物を運ぶ蒼龍と飛龍がやって来た。

「あつ、里子提督、ちようどよかったです」

「蒼龍、どうしたの？」

「先程、宿舎近くで発見したのですが．．．」

「この人、何しに来たんだろう？」

「？」

後方に居る飛龍の眩きで、彼女らは担架に乗せられた女性を見る。

「青葉?」

「このカメラ子何しに来たデース?」

「わわっ、燃料漏れしています・・・」

山岸にとつて、面識のある横須賀の艦娘。

彼女は「何故此処に居るのか」を不思議に思い、重巡の腕の傍らに乗つかるカメラを手を取った。

「取り敢えず、入渠させて置きなさい」

一方、出撃ドック内では・・・。

「何処に居るのよおお!!」

最速の駆逐艦である島風がドック内を搜索し続けていた。

彼女は目標が見つからないことに業を煮やす。

彼女の周りに居る連装砲ちゃん達も怒りで飛び跳ねる。

「見つけたら、あの白い顔を墨で落書きしまくってやる!!」

そう意気込む島風がドックの昇降機に向かうと、誰かがその昇降機で降りてきた。それは上半身が前屈みになっている戦艦「長門」の姿である。

駆逐の少女が驚きのあまりに後ろへ飛び退いてしまう。

「おうっ!? な、長門さん? 驚かさないでよ……」

「……」

「ど、どうしたのよ?」

「……し、ま……かぜ……」

彼女の呻くようなその呼び掛けが不気味に感じられた。

ゆっくりと一歩ずつ歩いてくる戦艦。

最速の駆逐艦は身の危険を感じて、後方にあつた反対側の昇降機へ向かう。

「っ!」

彼女が慌てて走る両足を止めた。

もう一つの昇降機からも同じ戦艦である妹の姿が降りてきたからだ。

「しま、かぜ……ちゃん……」

「ちよ、ちよつと……何なのよ!」

じわじわと戦艦の姉妹に詰め寄られる駆逐の少女。

唯一の出入り口である昇降機を遮られ、海に繋がるゲートは閉じている。

ほぼ逃げ道を封じられた少女の目に薄らと涙が出てしまう。

足元に居る連装砲ちやん達も戦艦たちを恐れて互いに抱き締め合う。

「もう、この胸の熱さは止められん」

「私も爆発寸前なのよ・・・」

「だから・・・」

「・・・」

少女は冷や汗を出して、彼女たちの言葉を聞いた。

そして、不意に俯いていた彼女らが両手を拡げて襲い掛かってくる。

「島風えええっ!! 愛でさせろおおおおおっ!!」

「今日ががんばっちゃわよおおおおおっ!!」

「ひっ・・・いやああああああああああつ!!!」

「「キユウウウウウウウウウウウウウウウウつ!!!」」

ドック内から複数の壮絶な叫び声が響いた。

翌日、トラック鎮守府に朝がやってくる。

ある宿舎の部屋。

「と〜つても美味しかったわよ。天龍ちゃん♪」

「ううう・・・龍田・・・」

2つあるベッドの内、窓に近い左側ベッドに、何も身に着けず寝ている軽巡たちが居た。

大事な部分は白いシートで隠されていて、眼帯の女性は両手を顔に当てて泣いている。

その傍で横たわるセミロングの女性は、隣で涙を流す姉を眺めていた。

「なんでこんなことしたんだよ!」

「だつて、折角出来上がっちゃったんだし・・・それにセカンドキスを盗られ・・・」

「だからって、襲うことはねえだろう!?!・・・ちよつと待て、セカンド!?! ファーストは!?!」

「それは横須賀で頂いたわよ♪」

「くうう・・・それとっ!! なんなんだ ッアレ!!! ありえねえだろう!!」  
「知り合いの軽巡から貰ったものよ。改造する際に邪魔になるって・・・」  
「そんなもの貰ってんじやねえよおおっ!!!」

別の宿舎では・・・。

「実に良かったぞ、島風」

「島風ちゃん、連装砲ちゃん、可愛かったわよ」

窓の外を眺める長門と陸奥。

その姿は疲労が全く無い高揚状態で、身体の周りからキラキラと光が溢れていた。

「あっ・・・ふ・・・」

「「・・・・・・・・」」

長門の使うベッドでは、何故か赤いバニーガールの衣装を着させられた島風が白目で  
気絶していた。

もう一方のベッドには、身体中にキスマークを付けられた3体の連装砲ちゃんが倒れ  
ていた。

尚、この一件で長門と陸奥は、1カ月も駆逐艦たちから避けられるようになってしま  
う。

「アダマ、イダイ」

宿舎にある空き部屋で、布団で寝る白き少女が頭痛を訴えた。

その傍には、正座して看病する大和の姿もあり、手にしたコップの水を少女へ差し出  
す。

「本日はお休みしてください。もう一泊してから、島へ帰りましょう」  
「ソウスル・・・」

白き少女は二日酔いのため、布団から出られない状況に陥っていた。

ちなみに少女本人から聞いた話によると、昨夜の事件はあまり覚えていないらしい。

例の飲み物を飲んだ後、色んな“大和”が現れて、無意識に抱き付いていったこのこ



と。

(ちっちゃな大和に、刀持った大和、大和がもっと増えて・・・カメラ持った大和?)  
妙な記憶に困惑する少女。

後に判明したことだか、明石の検査結果によると、白き少女と接吻した艦娘の練度が若干上がったと報告された。

これにより、白き少女にキスしようすると駆逐艦たちが増えてしまう。

『ヤメテエエツ!!』

『だ、駄目です! 提督が恥ずかしがっていますから!』

大半は少女本人が過剰に拒んでしまい、大和や山岸に止められることが多かった。

あの珍事件から二日後。

ある演習場である海域にて、空母同士の演習が行われた。

熟練で練度の高い軽空母1人へ、練度の低い軽空母とその付き添いである軽空母の2人が挑む。

「……………」

「ぶふうううつ?!」

相手の姿を目視した軽空母の艦娘“飛鷹”と“隼鷹”が噴き出してしまふ。  
彼女は軽空母らしい金糸の装飾がある巫女服を身に纏っている。

しかし、事前に知らされた相手の軽空母は、何故か第六駆逐隊の白いセーラー服を身に纏っていた。唯一のトレードマークである艦首のサンバイザーだけは被っている。

「……………」

顔だけ俯いたまま、彼女らと対面する軽空母。

そんな彼女の姿を見た隼鷹が指差しをしながら笑い出した。

「ぶはっはっはっ!! どうしたんだよ!? その服!!」

「ちよつと、隼鷹。失礼よ……………」

なんとか笑いを堪える飛鷹と爆笑する隼鷹を余所に、沈黙していた軽空母の少女が眩き始める。

「……………のせいや……………」

「?」

「……隼鷹の……あんたの……全部……あんたのせいやあああつ!!!」

龍驤が自前の艤装である巻物を広げて、夥しい数の艦載機を発艦させた。

その矛先は全て飛鷹ではなく、隼鷹の方へ向けられる。

「やっべ! わ、笑い過ぎた!?! ちよ、ちよ、ちよ、ちよと待てよ!?!」

「隼鷹、あなた本当に何をしたのよ!?!」

「し、知らないよ!! あつちで祝いがあるから、秘蔵の酒を一本送ったぐら……」

「沈めやああああああああああああああああ!!!」

山岸からの罰を言い渡された龍驤は、第六駆逐隊の服を纏い、1週間ずっと演習をさせられる羽目となる。

それからしばらくの間、他方の鎮守府内で駆逐の姿をした空母の話が広まっていた。

同じ頃、横須賀鎮守府にて……。

「やっと帰れました……」

トラツク鎮守府に潜入していた青葉が横須賀の港へと帰還した。

彼女は白き少女の被害により、入渠も兼ねて一泊することになったのだ。

艦装を整備妖精へ預けた後、提督の居る司令部へと向かう。

「なんて言い訳をしましょうか……」

無断で別の鎮守府へ向かったことは、恐らく叱られるだろうと予想された。

「？」

ドツクから出てきた彼女はある違和感に気付く。

ここ横須賀では、艦娘以外にも多数の海軍兵士や憲兵といった軍関係者が在住していた。

そんな彼らが青葉を見て、小声で何かを話している。

「な、何でしょうか……？」

「青葉殿おおおつ!!」

彼女が疑問に思っていると、見覚えのある艦娘が走って来た。

陸軍のような黒い軍服の服装を纏う艦娘“あきつ丸”である。

彼女は青葉の前まで急停止し、涙目で話し掛けてきた。

「大丈夫でありますか!？」

「えっ? ちよつと、あきつ丸さん? 何が・・・」

戸惑う重巡の彼女に、揚陸艦の艦娘がある新聞を取り出す。

「これを見るであります!」

「これ?・・・え、っ!？」

青葉はその新聞に書かれていることに仰天した。

そこには、己自身のあられもない姿で倒れた写真が掲載されていたのだ。

タイトルは『青葉型重巡、襲撃される!』と書かれていた。

「青葉殿! 襲撃者の姿は確認されたのでありますか!？」

「・・・えっ!?! いや、その・・・」

襲撃者は例の北方棲姫だが、青葉自身の無断潜入も明らかとなってしまう。

それは例え口が裂けても言えないことだった。

「一瞬だったもので・・・分らなかったです」

「ふむ、相手は相応な手練れでありますな・・・」

「は、はあ・・・」

「でも、安心するであります！　我が自慢の憲兵隊が青葉殿をお守りするよう命令されたであります！」

彼女はそう言つて、未だに事態が飲み込めない重巡を連れて走り出す。

「提督からの許可もあります。これから24時間、青葉殿をお守りしております！」

「て、提督から!?　それに、24時間つて!?!?!」

「艦娘を襲う不埒な輩を処罰する。それが我が憲兵隊の使命であります!!」

「ちよ、そんな〜!!」

涙を流す重巡の彼女がまるで連行されるように連れて行かれた。

実は、昨日の内に山岸が青葉のカメラのフィルムを交換し、それを大本営に居る知り合いの大将へ送つたのだ。

それからすぐに新聞が発行され、青葉の痴態が周知されてしまう。

また、憲兵隊にも知られてしまい、彼らは艦娘を襲つた不届き者を搜索し始める。

真相を知る青葉は自身の羞恥と後悔に苛まれることとなる。

「どうしてこんなことになんか……誰か、許して……」

## No. 19 ヨビダサレタ

日本の本土にある横須賀鎮守府。

その鎮守府が遠くから視認できる海上に、2人の艦娘たちが航行していた。

先頭には、小柄で桃色のポニーテールをした駆逐艦の少女が先導するように突き進んでいる。

背部の艦装である主機から突き出たアームの先には、右側に二連装砲と左側に魚雷発射管が付いていた。

それぞれが少女の左右で動き回り、何時でも発射可能な状態を保っている。

その後方からは、長身で赤いセーラー服と焦げ茶色の長いポニーテールをした女性が追従していた。

彼女の艦装は、前方の少女より巨大な艦装で、左右と後方に大きな三連装砲が付いている。

右手には三本マストのような赤い和傘が握られていた。

「不知火さん。敵影及び、他の艦娘の反応もありません」

「了解です。進路、航行ともに異常無し。予定通り15:00（ヒトゴーマルマル）に横須賀へ入港します」

先頭の少女が辺り一帯を警戒しながら、後方から来る戦艦の艦娘とその後方にあるものへ気を配る。

よく見ると、戦艦の彼女の腰回りにロープが括り付けられていた。

さらにその後方へ垂れ下がるロープは、小振りな木造のボートを引っ張っている。

曳航されているそれには、複数の木箱や緑色のドラム缶が乗せられていた。

「もうすぐ横須賀です」

「・・・ハッ!？」

「すみません。お疲れでしたか?」

「ダ、ダイジョウブ!」

「大和さん、もうしばらく控えてください」

不知火が後方の何かへ話し掛ける女性にそう忠告した。

彼女は左手を口に当てて、もう一人との会話を中断させる。



彼女らとは別の声の主。

それは戦艦が曳航するボートに乗った1つのドラム缶から聞こえてきた。

(何もしないで隠れるのは辛いけど・・・仕方ないからね)

他よりも大きな目のドラム缶の中には、ハマグリ鎮守府の提督である北方棲姫が体育座りですごい入っていた。

少し狭い内部だが、少女の小柄な身体のおかげで窮屈な部分は余りなかった。

「友軍からの発光信号を確認・・・青葉さん？」

「なんとおっしゃっていますか？」

「このままドラム缶へ入港せよとのことですが・・・余計な信号を・・・」

「？」

不機嫌そうな不知火の呟きに、眺めていた大和が首を傾げる。

ドラム缶内では、黒い軍服の艦娘と多数の憲兵たちが整列して待っていた。

彼らは陸へと上がった2人に素早い敬礼をする。

「お待ちしていましたであります」

「では……大和さん、後は頼みます。あきつ丸さんは引き継ぎをお願いします」  
「総員、任務を開始するであります」

不知火が大和に会釈して、そこから一人で何処かへと歩き去っていった。

あきつ丸と呼ばれた少女が憲兵たちに指示を出し、ボートに乗る資材を次々と運び出す。

「そのドラム缶は私が運びます」

大和は艀装を消失させて、憲兵たちが運ぼうとした大きなドラム缶を両手で抱えた。

「会議室へご案内するであります」

「はい、お願いしますね」

横須賀鎮守府の司令部にある会議室。

室内には、10人以上の白い軍服を基本とした提督たちが集まっていた。

彼らは年齢、性別、体格、軍服などの服装の違いが多く見られる。

彼らの対面側には、如何にも上官らしい黒い軍服の中年男性が立っていた。

彼の左胸に数枚の勲章が付けられている。

その左隣には、トラツク鎮守府の提督である山岸 里子も居た。

静かに佇む彼らの耳に、室内の出入り口であるドアからノックされた音が聞こえてくる。

「入りたまえ」

黒服の男性がドアへ向かってそう言い放つと、開かれたその扉からあきつ丸とドラム缶を抱えた大和が入って来た。

「失礼するであります」

「失礼します」

軽い会釈をした2人は扉の手前辺りで立ち止まる。

彼女らの到着を確認した黒服の男性が右手で黒い軍帽を弄つてから話し始めた。

「では、全員が揃ったようなので始めるとしよう。今回は極秘の会議であり、秘匿すべき内容もある。機密保持に自信のない者は退室せよ」

彼の言葉を聞いた提督たちが互いに目配せするも、立ち去る素振りは全くしなかつた。

そんな彼らの姿を見て、黒服の男性が口元を少し緩める。

「結構・・・早速だが、先に君らへ紹介したい者がいる・・・大和！」  
「了解です」

呼ばれた大和が抱えていたドラム缶を目の前に置いた。  
提督たちは彼女のことを紹介するのかもしれないが、次に聞こえてきたある声に耳を傾けてしまう。

「ヨイシヨ！ アツ、フタガ・・・」  
「今開けます」

ドラム缶から聞こえてくる幼い声。

大和がその蓋を開けて、中に居る人物を出そうとする。

「ンシヨ！・・・ン々・・・アツ!？」

「[[[[[?!]]]]」

ドラム缶の上部にある縁のところに、白いミトン手袋を付けた両手が現れた。

そこから何かが出ようとした瞬間、バランスが崩れたせいでドラム缶本体が前のめりに倒れてしまう。

重い衝撃音とともに、その中から少女の短い悲鳴が響く。

「アイタツ!!」

「ああっ!?! ホッポちゃん!?!」

「イタタタタタツ．．．ンシヨ、ンシヨ．．．」

「「「「えっ!」」」」

中に入っていた者が痛みを堪えながら這い出てくる。

軍帽を被る真つ白な姿の少女が立ち上がり、驚き顔になる提督たちへ敬礼した。

「ハ、ハジメマシテ．．．ソノ．．．ホツポデス．．．」

白き少女は初めて目にする提督たちへ口籠った自己紹介をする。

一方の提督たちは、目の前に彼女の存在に目を丸くしていた。

望遠鏡などで遠くからしか見られなかった敵の姿。

その存在が自身の間近に居るからだ。

驚く彼らの中で、まだ若い青年の提督が黒服の男性に尋ねる。

「よ、米満大将。この少女は．．．」

「見ての通り、深海棲艦である姫級だ。それと同時に、君らと同じ提督でもある」

「姫級!．．．それに、提督とは?」

「現在はトラック鎮守府の分遣隊として、ある島の鎮守府へ着任させている。ちなみに  
その大和が彼女の秘書艦だ」

大將がそう告げたことに彼だけでなく、同じように聞いていた他の提督たちも言葉を失った。

その状況に見かねた山岸提督が書類の束を提督たちへ手渡していく。  
「まずはその資料を読んで頂戴。それから本題を話すわ」

数十分後、話を聞き終えた提督たちは冷や汗を掻いていた。

山岸や彼女の艦娘たちが体験した出来事。

その根源となった白き少女の存在。

どっちも常識では考えられないことだった。

「米満大将。私達に、どうして欲しいのでしょうか？」

肩章が付いたグレーの軍用コートを纏う女性提督が、右手で軍帽を整えながら問い掛ける。

「知っていて欲しいのだ。彼女・・・北方棲姫という存在を・・・」

「彼女を・・・ですか？」

「そうだ。そのために、信頼できる君達を集めたのだ」

「私達が・・・」

提督たちは大将が口にしたその期待に緊張してしまふ。

「さて、堅い話は此処までにしよう。今後、対象となる個体を保護するために、同じ個体

である彼女をよく見ていってくれ・・・ああ、過度な接触は許さんぞ?」

「エ、ツ?」

大将からの不意な発言に、若干意識が飛んでいた白き少女が覚醒した。すぐに数人の提督たちが少女の元へ近寄り、珍しげにまじまじと見る。

「フワツ!」

「こんな近くで深海棲艦を見るのは初めてだな」

「里子先輩、こんな可愛らしい娘を隠していたなんて・・・ズルいですわ!」

「確かに、姫級の特徴とよく似ている・・・」

若い青年提督は珍しそうに見つめ、同じく若い女性提督も羨ましそうに山岸へ話し掛けた。

そんな2人とは別に真面目そうなメガネの男性提督が白き少女を観察する。

「・・・」

「エ、エツト・・・」

「・・・頭・・・撫でていいか?」

「アツ、ハイ。ドウゾ」

「・・・うむ」

白い短髪のオールバックで強面の男性提督が真顔で少女の頭を撫で始める。

一瞬だけ委縮した少女だが、すぐに彼の要望に答えた。  
撫でられ続ける白き少女は他の提督たちの姿を見ていく。

(あ、あれって・・・前が見えるのかな?)

「ん? 私の顔に何か付いているかね?」

男性と思わしき中肉中背の提督。

しかし、彼の首から上は黄色いT型の被り物が被せられていた。

「ねえ?」

「ハイ?」

「抱いていい?」

「ヒヤツ!」

栗毛でセミロングの女性提督の問い掛けに、驚く白き少女が1歩引いてしまう。

そこへ山岸が問題発言した彼女に丸めた書類で制裁を下した。

「私が何したのよ!?!」

「大将の言葉を思い出しなさい!」

「抱き付くだけだったのよ?」

「言い方が許可できないわ!!」

2人が言い争っている間に、白き少女は少年のような提督と対面していた。



オレンジ色の短い髪の毛で幼い顔立ちをした白い提督の服を着る少年。

「えつと・・・」

「・・・シヨタ」

「えつ?」

「ナ、ナンデモナイ」

(本当に居たんだ・・・)

白き少女は幼いのに軍人として生きる少年の存在に驚いていた。

少年提督の方は何も解らずに少女の姿を見つめ続ける。

「やあ♪」

「ンウ?」

突然、白い軍帽を被るイケメンな男性提督が少女に声を掛けてきた。

彼女自身、少し不安な気持ちもあったが、初対面で怯えるのは失礼だと思って短い返事をする。

「ナ、ナニ?」

「少しいいかい?」

「?」

「とうっ!!」

「!?」

彼は掛け声とともにその場で四つん這いになった。

自身の右側を見せ付けるようにし、笑顔で白き少女へ右手の親指を立てる。

「俺に座らないか?」

「イイ、ッ!?!」

「「「「やめんかつ!!」」」」

流石にその頼みごとは、他の提督たちにも不評だったらしく、イケメンの彼は袋叩きにされた。

尚、白き少女は秘書艦の大和に、少年提督はセミロングの女性提督に目隠しをされる。

「ホッポちゃん、見ちゃ駄目です」

(遅いです・・・本物の〇ムだった・・・)

涙を流す白き少女が妙な提督との出会いに嘆いていた。

「この会合を開いて正解だったな」

「一部呼ばなくても良かったと、私は思うのだけど?」

白き少女と提督たちの触れ合いを眺める米満大将と山岸提督。

彼らがこの集会を開いた理由は、北方棲姫という存在を提督たちへ覚えさせるためである。

現状、目の前に居る彼女を保護することに成功したが、同個体である少女たちは見つかっていない。

事情を知る山岸たちだけでは手が足りず、搜索の範囲も小規模という効率が悪い状態だった。

そこで米満大将によって選抜された者たちに彼女の存在を教え、その搜索と保護である重要任務を受けてもらうことになったのだ。

「ある意味、賭け事な作戦だけど・・・」

「君や大和たちが体験した現象のことか・・・」

任務の一番の障害となる北方棲姫に関わる情報の強制消去。

しかし、大本営に残された姫級に関する書類は消されていなかった。

これにより、情報消去の対策として、彼らには北方棲姫の書類が手渡されることとなる。

「他の人間に情報が漏れるかもしれないが・・・」

「『あちら』に確保される方がもっと厄介よ」

山岸の危惧する理由は、白き少女による敵勢力の強化である。

鬼級や姫級といった最上位個体は、練度の高い艦娘でも苦戦を強いられる存在だ。

そんな彼女らが増加すれば、各鎮守府だけでなく、日本の本土ですら唯では済まなくなる。

「私としては、最前線の鎮守府で働く姪っ子が心配なのだが・・・」

「叔父さんに心配される暇なんてないわ」

大将の左腕が隣の姪っ子の頭へ伸ばされるも、彼女の素早い右腕によつて払い除けられた。

「むうう・・・撫でさせてくれないか・・・」

「私はもうそんな歳じゃないわ」

「叔父さんもこの程度は甘えたいのだよ？」

「この後のホッポちゃんのナデナデも許可しないわよ？」

「そ、それだけは勘弁してくれ・・・」

「オオーッ!!」

畳のある和室へ案内された白き少女が薄い桃色の浴衣を纏っていた。

所々に少し濃い桃色の桜の花びらが刺繍されている。

「お似合いですよ、ホッポちゃん♪」

同じように少し濃い目の桃色な浴衣を着る大和が微笑んでいた。

2人は山岸提督に連れられて、和室に待機していた女中たちに着替えさせられた。

それから彼女らは米満大将にあることを言い渡される。

「此処から少し歩いた海沿いの町で祭りが行われている」

「マツリ?」

「ど、どういうことでしょうか?」

「もう8月も終わるからね。君達にはささやかな休養だが、そこで楽しんできてもらう」

「いいのですか?」

「なあに……今回の件での特別報酬が決まらなくてね。色々と苦労して、これだけしか用意出来なかった訳だ。非常に申し訳ない」

「そ、そんな! この報酬は凄く嬉しいです!」

「タイシヨウ、フトツパラ♪」

喜ぶ2人に山岸提督が会話に加わった。

「私の方は米満大将ともう少し話し合う予定よ。あなた達だけでも楽しんできて」

「ウン！ ヤマト！ イコウ！ イコウ！」

「あつ、ちよつと！ ホツポちゃん!？」

白き少女は大和の手を引っぱり、司令部の廊下を走っていった。

砂浜が見える道路。

暗くなった道を照らすかのように、夜店の屋台がずらりと並んでいた。

「オオー！ ヨミセー！ タベモノー！」

はしやく白き少女が歓喜の声を上げる。

彼女は元の身体だった時の幼い頃に経験した祭りの記憶を思い出していた。

「キングヨスクイ♪ ワタアメ♪ ヨーヨーツリ♪」

浮かれる白き少女は小さな下駄の音を鳴らし、近い夜店へと走っていく。

大和もその姿を見失わないように、早足で追い掛け始めた。

「待って！ ホツポちゃん！」

「ワプツ!!」

「にや？」

白き少女が濃い青色の浴衣を着た女性と軽くぶつかってしまふ。

その娘は少し紫がかつた短髪で、右手にはクマの顔した綿あめを持っていた。

「びつくりしたにやー、怪我はないにや？」

「ウン。ハイ……ワタアメ!?!」

「にや？」

白き少女の目が心配してくれる女性の綿あめに釘付けとなる。

「ソレツ！ ドコデウツテル!?!」

「にや、にや？ あっただけど……」

「ワタアメー!!」

彼女は指差された方向へ走り出していった。

それを見た大和が慌てて追い掛け、残された女性は訳が分からず立ち尽くしていた。

「一体何だったにや？」

立ち並ぶ屋台の1つにやって来た2人。

白き少女が夜店の店主に元気よく注文をする。

「ワタアメ、ヒトツ、チョウダイ♪」

「しばしお待ちを・・・」

「え、っ?」

大和は店主の姿に思わず疑問の声を漏らしてしまう。

グラサンに大きなマスク、三角巾に割烹着を着るその少女らしき姿。

そして、覚えのある桃色の髪と口籠るその声。

どう見ても陽炎型のあの少女にしか見えなかった。

「エツト・・・」

「お代は要りません。どうぞ召し上がって下さい」

「エツ? イイノ? ヤッター♪」

代金を払わずに綿あめを貰った少女がご機嫌になる。

彼女が少し離れた場所で食べている間に、大和が店主である少女へ話し掛けた。

「あの・・・いいんですか?」

「代金はすでに貰っています」

「その、それは分かりましたが・・・不知火さん?」

「不知火は不知火という名ではありません」



「いえ、その・・・何故、そのような・・・」

「何か落ち度でもありましたか？」

「な、何でもありません！」

その店主の妙な威圧に臆する大和が後ずさる。

そんな彼女に右手を白き少女が左手で引つ張っていった。

「ヤマト、アツチヲ、ミテイコウ！」

「あつ、ちよつと！待って！」

「・・・」

2人を見送る店主の後方辺りから男性の呻き声が聞こえてくる。

「ピンヤリ〜♪」

「ん〜！これは頭にきます・・・」

2人は気前のいいお兄さんが販売するカキ氷を仲良く食べていた

「サービスだ！ちっちゃい嬢ちゃんには2つ目やるよ!!」

「アリガトウ〜♪」

「あの、お支払を・・・」

「お嬢ちゃん達が可愛いから、今回は全部タダにしてやるよ！」

「えっ?」

店主のお兄さんはお代も無しに、2人へカキ氷を手渡してくれたのだ。

ヨーヨーつりの店で水ヨーヨーを釣ろうとする白き少女。

赤色の水ヨーヨーの輪っかに引つ掛けるも、釣りカギの紙が水で破れて取れなくなつてしまう。

「んゝトレナイ・・・」

「しょうがない。お嬢ちゃんにどれか好きな色1つやろう」

「イイノ!? アリガトウ!」

「ありがとうございます」

白い鉢巻をした老人の店主の計らいにより、白き少女は赤色の水ヨーヨーを手に入れた。

「えっと・・・あ、あきつ丸さん?」

「じ、自分はおきつ丸などではありませぬ! 唯の金魚すくいの店主であります!」

サングラスとマスクで変装した女性の店主が慌てながら否定した。

白き少女は2人のやり取りを無視し、真剣な表情で金魚すくいを続ける。

「ムウゝ．．．フンツ！　ゴボゴボ．．．」

「!？」

いきなり自身の顔を水槽の水面へ浸す少女に、大和と店主が動揺しながら止めようとした。

2人はイカ焼きを食べた後、神社の境内へ向かう石階段で座り込んでいた。

「プフウゝオイシイモノ、イッパイタベタゝ♪」

「一杯楽しんだみたいですね」

「ウン！」

上機嫌になった白き少女が立ち上がり、舞うように踊りながら水ヨーヨーで遊び始める。

「アツ！」

「あら？」

彼女の振り回しによって、赤い水ヨーヨーが小さな手から弾き飛んで行ってしまった。

飛ばされたそれは階段の右側にある茂みの方へ入っていく。

「ホッポちゃんはその場で待っていて下さい」

「アツ、ヤマト!」

「すぐに戻ってきますから!」

それを見た大和がすぐに立ち上がった、茂みのある森へと入っていった。

彼女は暗い足元の草むらを見渡しながら少女のヨーヨーを探していく。

「う〜ん、何処でしょうか?」

なかなか見つけれず、徐々にその足は森の奥へと歩き進んでいった。

「ひよつとして・・・通り過ぎたでしょうか?」

「何かお探しで? お嬢さん」

「!」

不意に声を掛けられて、彼女は聞こえてきた前方へ目を向ける。

そこに居たのは、白いタンクトップと黄土色の長ズボンを着る坊主頭の若者3人。

彼らの服装からして、明らかに軍閥係の人間だと判断された。

「よかつたら一緒に探してあげようか?」

「それと俺らともお付き合わないかい?」

「探し物よりそつちがいいぜ?」

彼らの言葉はナンパのようなものだが、少しずつ近付く行動は如何わしく見える。

大和はゆつくりと後ずさり、彼らとの距離を取ろうとした。

「ご心配せずとも1人で見つけられます・・・連れも待たせていますので・・・」

「それならそのお連れちゃんも一緒にどう?」

「こんな美人ならもう1人も美人じゃね?」

「男はお断りだがな。はっはっはっはっはっ!」

にやけた顔で笑う3人が歩き続けると、中央に居た若者の頬に何か飛んでくる。

「ぶっ!」

それは大和が探していたはずの赤い水ヨーヨーだった。

高速で飛んできたそれは若者の顎に衝撃を与えた後、水をまき散らしながら風船の如

く割れ散った。

「ヤマトニ、チカヅクナツ!!」

「ホッポちゃん!」

大和の手に白き少女が怒った顔で若者たちを睨み付けた。

対する若者たちは不機嫌な顔で邪魔者を見つめる。

「なんだこのガキ!」

「子持ち? じゃないわな」

「取り敢えず邪魔だ。そこを退きな!」

「カエレ！ カエレ！」

「ど、どうしましょう・・・」

ファイティングポーズで素振りしながら待ち構える白き少女。

一方の大和は、怒った彼女の乱入に焦っていた。

いくら小柄に見えても少女は深海棲艦の中で姫級と言われる存在だ。

その身体能力は通常の艦娘以上と思われ、実際にその実力を何度も目撃されている。

さらに彼女は以前にあった事件で、ある男性を重症に追いやったこともあった。

此処で迂闊に人へ危害を加えれば、軍内部での大騒ぎにまで発展してしまうからだ。

彼女が白き少女を連れて逃げるしかないと思い、その小さな身体抱き上げようとした

まさにその時だった。

「熱き指導おおおおおおおっ！！」

「「う、っ！！」」

「えっ!？」

突如、凄まじい男の叫び声とともに、赤いジャージ姿の男性が若者たちの後方から飛び降りてきた。

彼は右手に持つ竹刀で瞬く間に3人の尻を弾き叩いた。

「ぎゃあっ!!!」

「ふぐうつ!!!」

「んぎやあつ!!!」

強烈な打撃を尻に受けた3人が這い蹲って、叩かれた箇所を両手で押さえた。そんな光景を見た白き少女と大和は呆気にとられる。

3人の内、右側の若者が赤ジャージの男性を見て怯えだした。

「ひい! きよ、教官!」

「嘘だろっ!」

「なっ!? 横須賀の鎮守府へ行つてたはずじゃ・・・」

「お前たちいいいいいい!!! 訓練をサボつて何をしていたあああ!」

怒りまくるジャージの男性が竹刀を乱れ振った。

その動きに怖気付く若者が必死に弁明し始める。

「こ、これには訳が・・・」

「ちよつと、気分転換に・・・」

「そ、そこのお嬢さんが困つてたら、あの子どもが何かを投げ付け・・・」

「馬鹿者おとおおおおおおおおおおおおつ!!!」

「「ひっ!」」

彼は罵倒するかのよう大声で3人を叱りつけた。

「目の前の御方は、我が軍の少佐であらせられる!! 貴様らは上官に向かって何をしようとした!?!」

「えええつ!?! しよ、少佐!?! あ、あんな子どもが・・・」

「敬礼いいいつ!!」

「は、はいいいつ!!」

若者たちは尻の痛みを堪えながら素早い動きで海軍式の敬礼を行う。

白き少女と大和も咄嗟に敬礼を返した。

「兵卒の貴様らが訓練所から抜け出したことぐらいは、まだ怒りも抑えられる・・・だが!! 上官と付き添いの艦娘に対し、如何わしい行為をしようとしたことは絶対に許さん!!!」

「げえ!?!」

「なっ!?! か、艦娘!?!」

「そ、そんな・・・」

自らの犯したことを告げられて、3人の顔が真っ青になった。

赤ジャージの男性が白き少女と大和に向かって、90度近く腰を曲げて謝罪する。

「申し訳ありませんでした! この馬鹿者どもは、教官であるこの『熱気 隼人』にお任せください!!」



「あ、はい……」

「ウン……ネツキ、ハヤト?」

2人は困惑しながら短い返事をする。

赤ジャージの男性は再び竹刀で3人の尻を叩き付けた。

「「ぎゃあああつ!!!」」

「このまま訓練所まで走り込め! その後は朝までトラックを走り続けろ!」

「朝まで!?!」

「お、鬼かよ!」

「それとロシアからある所長が訪問中だ。彼の指導も受けてもらおうぞ!!」

「「いい、嫌だあああああつ!!!」」

「喧しいつ!!! 駆け足しろおとおおつ!!!」

涙と鼻水を流す若者たちが赤ジャージの男性とともにその場から走り去っていった。

残された白き少女と大和はお互いに目を合わせる。

「ナ、ナンダツタンダロウ……」

「さあ……で、でも! 何事もなくてよかったです!」

「ウ、ウン……」

釈然としない白き少女が考え込むが、安心しきった大和がその頭を右手で撫で始め

た。

「フエツ？」

「さつきはありがとうございます。私のために庇ってくれて……これで何度目でしょうか」

白き少女はその言葉に思わず、白い顔を赤らめてしまう。

そんな彼女らの耳に聞き覚えのある音が轟いてくる。

「これは……」

「ハナビダー！」

2人が海側にある夜空を見上げると、オレンジ色の光を輝かせる大きな花火が打ち上がっていた。

白き少女が興奮しながら大和の手を掴み、石階段のある方向へと走り出す。

「ウエデ、ミヨウ！」

「ホッポちゃん、もつとゆつくり走ってください！」

石階段を登り切った辺りにある鳥居の下で、2人は夜空に咲く色取り取りの花火を堪能していた。

「キレイダナア．．．」

大和は白き少女が花火に見惚れる姿を見続ける。

身体は深海棲艦でありながら、幼い子どものような感情で動き回る。

元が人間であったことを映し出しているかのように見えた。

「助けられてばかり．．．でも、今度は私たち．．．私自身が、あなたをお守りします」

彼女は小声でそう呟き、夜空に浮かぶ花火に目を向ける。

「ひやひやしたであります．．．」

「横須賀に居た熱気教官の到着．．．思った以上に早くて助かりました」

2人を監視するかのようになり茂みへ隠れる2つの人影。

マスクとグラサンを付けたあきつ丸と不知火だった。

彼女らは秘密裏に2人の護衛のため、尾行しながら不逞な輩が近付かないよう監視していた。

「あの一兵卒どもが提督の卵ですか．．．」

「あれは腐らせる候補に乗せられるであります。ご心配無用．．．」

「当然です。不知火の司令に暴言を吐いた以上、提督になる資格などありません」  
「横須賀へ連絡した際に、米満大将の怒声が聞こえたであります。あれ程怒っているのは久々に聞いたであります」

彼女らは目標に訓練兵が接触したことで、慌てて横須賀へ無線を飛ばすことになったのだ。

結果、救援に駆け付けてくれた教官により事なきを得た。

「子煩悩な叔父らしいですから……次の作戦でも山岸提督を参加させたがらなかったそのうです」

「近々行われるアレでありますか……無理もないであります」

苦笑する2人は白き少女と大和の後ろ姿へ視線を戻す。

その時、白き少女が興奮のあまりに、石階段の辺りでバランスを崩した。

「ホッポちゃん!! 危ない!!」

「オットトト! アツ……アアアアアアア!」

「!?!」

そのまま階段の下へ転がり落ちていった白き少女を大和が急いで追い掛けていく。一部始終見ていた監視者の2人もその後を静かに追っていった。

# No. 20 アイエエエ!?

「ソノ・・・ハ、ハジメマシテ!」

初めてそれを目にした私の胸に衝撃が走った。

まるで身体中に電撃が走り、ロウソクへ火が灯されたような感覚だった。

「初めまして、トラック鎮守府の山岸 里子よ。里子と呼んでも構わないわ」

「ホ、ホツポ デス。ヨ、ヨロシク・・・」

灯された火がどんどん大きくなるかのように、私の胸に熱が籠っていく。

「本当に白くて可愛らしいわね。あなたが私の艦隊を助けてくれたのね?」

「アツ、ハイ。ソウデス・・・」

晴れた天気の子でなく、燃え上がる熱が徐々に私の体温を上げていく。

「あなたのおかげで大和も無事に保護できたわ。心より感謝します」

「私も改めて感謝しますね♪」

「イエイエ！ ドウイタシマシテ！」

砂地を踏む足が勝手に動き、目の前の可愛らしい少女の元へ向かってしまう。

「えっ？ 長門さん？」

「長門？ どうしたの？ あなた・・・」

「エッ？」

次第にその愛しい存在へ近寄り、間近でその真っ白な少女を両手で抱き上げた。

「ナ、ナニ？」

「・・・」

その瞬間、私の理性が失われ、燃え盛る何かを求めた。

「むほおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!!」

「ヒウツ!?!」

もう我慢できん! なんだこの柔らかさは!?

まるで大福のようにふんわりとした心地良さ!!

暁達のような駆逐艦とは別物だ!!

「イツ!? ヒヤ〜!!!」

私の頬に伝わるその温もりは、胸に宿る熱量を増加させる!

「ヤ、ヤメテエエエエツ!!」

「ちよつと!? 長門さん!?!」

「長門っ!! 何してるのあなた!?!」

熱い! 熱いぞ!! 熱くて身体が焦げそうだ!!!

「ヒエ〜ンツ!?!」

「止めなさいっ!! 長門!!」

止めるなんて出来ない!!

このホツポちゃんは私のものだ!!

そうに決まっている!!

「イヤアアアッ!! アツイアツイ!! ホオズリイヤアアアアッ!!」

「ああっ! もうっ!! 大和!! げんこつしていいわ!!」

「了解ですっ!!」

ホツポちゃん! ホツポちゃん! ホツポちゃん! ホツポちゃん!

ん!  
ホツポちゃん! ホツポちゃん! ホツポちゃん! ホツポちゃん!

ホツポちゃん! ホツポちゃん! ホツポちゃん! ホツポちゃん!

ん!  
ホツポちゃん! ホツポちゃん! ホツポちゃん! ホツポちゃん!

ホツポちゃん! ホツポちゃん! ホツポちゃん! ホツポちゃん!

ん!  
ホツポちゃん! ホツポちゃん! ホツポちゃん! ホツポちゃん!

ホツポちゃん! ホツポちゃん! ホツポちゃん! ホツポちゃん!

ん!  
ホツポちゃん! ホツポちゃん! ホツポちゃん! ホツポちゃん!

ホツポちゃん! ホツポちゃん! ホツポちゃん! ホツポちゃん!

ん!  
ホツポちゃん! ホツポちゃん! ホツポちゃん! ホツポちゃん!



ホッポちゃん！　ホッポちゃん！　ホッポちゃん！　ホッポちゃん！  
ホッポちゃん！　ホッポちゃん！　ホッポちゃん！　ホッポちゃん！  
ん！

ホッポちゃん！　ホッポちゃん！　ホッポちゃん！　ホッポちゃん！  
ん！・・・

「いい加減にしてくださいっ!!!」

「ふっおおおっ!!!」

ある孤島で凄まじい轟音のような打撃音が辺り一帯に響いた。

これは白き少女が山岸提督と初対面した際に起きた事件である。

後に山岸は『連れて来なければよかった』と後悔していた。

ある晴れた日のトラック島。

司令部の執務室では、机に置かれた数十枚の書類に目を通すポニーテールの女性提督が座っていた。

「里子はん、こつちのは終わったで」

「ありがたい、龍驤。少し休憩しましょうか」

山岸提督は、左隣の棚で書類整理をする軽空母の少女に視線を向ける。

そこには見慣れた赤い服ではなく、あの白き少女と同じ白いワンピースを纏った龍驤の姿があった。

「……ずつと指摘しなかったのは悪かったわ……それ、どうしたの？」

「……やつと突っ込んでくれた……」

涙を流す龍驤はその服を纏う理由を説明し始める。

以前、北方棲姫が横須賀へ訪れた際に、そこで脱いだ白い服の詳しい調査が行われた。その結果、何も分ならず仕舞いで似たような服が生産されることになる。

彼女の着替えとして扱われる予定だったが、要らない何着かが余ってしまふ。

仕方なく、それらは駆逐艦である暁たちや不知火たちの手に渡った。

そして、暁たち4姉妹のイタズラにより、龍驤の私服が全て洗濯されて、この例の服を纏うことを余儀なくされる。

しかも本日は龍驤が秘書艦を担当する日でもあった。

「あの娘たちつたら・・・いいセンスね」

「どこがや!？」

「よく似合ってるわよ♪」

「こんなお子様な服ぴつたりちやうわ!! 嫌味か!!」

激昂する龍驤は両手で提督の机を強めに叩き付ける。

怒鳴られた山岸は笑いを堪えながら視線を逸らした。

「くうくう! それになんで今日ウチが秘書艦なんや? 何時もの長門はどないしたんや?」

彼女は執務室を見回すも長門の姿は見当たらず、代わりに山岸のため息の吐く声が聞こえた。

「休暇らしいわ」

「はあ?」

「今日と明日。どうしても休みみたいと届出を出してきたのよ」

山岸がある一枚の書類を差し出し、それを受け取った龍驤も呆れ顔になる。

「休ませていいんかい・・・」

「特に問題も無いから、許可したわ」

「確かに、敵さんが見当たらないから暇やけど……秘書艦休むて……」  
「……本気で正式な秘書艦を別の娘に代えようかしら？」

戦艦専用の宿舎内。

歴戦の戦艦たちが住む宿舎の一室で、不気味に笑う女性の姿があった。

「ふっふっふっふっふっふっ……遂に……遂に手に入れたぞー！」

畳のある部屋の真ん中で正座する長門。

彼女は目の前に置かれたダンボールの荷物を両手で掴む。

躊躇なく開けたその中には、透明な袋で梱包された紫色の衣装が入っていた。

袋の外側に『夜戦グッズ 戦艦サイズ これであなとも夜戦忍者！』と書かれたシールが張られている。

「明石の持って来た裏カタログの品……これさえあれば……」

不気味に笑う彼女は自身の衣服を脱ぎ捨てて、ダンボールの衣装を手に取り始める。

同時刻、ハマグリ島内の地下にある工廠内。

白き少女と戦艦の大和が工廠の作業机の様子を観察していた。

「ミヤ〜」

そこには、黒い球体の艦載機が大口を開けて、工具を持った整備妖精たちに弄られていた。

艦載機であるタマがうっかり口を閉じたまま機銃を撃ってしまい、歯の隙間に銃弾が挟まってしまったのだ。

現在、ピンセットやペンチでそれを取る作業が行われていた。

「タマ、ダイジョウブ?」

「ミヤ〜」

「何故、その状態で撃ったのですか・・・」

呆れて理解できない大和は首を傾げる。

その時、整備妖精の1人が前のめりにこけて、持っていた小さなスパナがタマの小さな鼻の穴に入ってしまう。

異常な刺激を受けたタマが短く息を吸い始める。

「ミヤツ、ミヤツ、ミヤツ！ ブシイイイツ!!」

「！」

「フワツ!?!」

「えっ!?!」

タマの口内で作業していた整備妖精がくしゃみによつて吹き飛ばされた。

勢いよく飛んだそれは、白き少女の開いた口の中へと入つてしまう。

彼女は予想外の異物を飲み込み、顔を青白くして苦しみ始める。

「ンウゝ!!!」

「ホツポちゃん!? 大変！ だ、誰か!!」

「ミヤ、ミヤ!?!」

「何事でしょうか!?!」

「大和さん、何が・・・司令官!?!」

焦る大和が大声で助けを呼び、近くに居た不知火や朝潮が駆け付けた。

この後、他の整備妖精たちの協力により、垂らした紐で喉に引つ掛かった妖精を引つ張り上げること事なきを得た。

日が落ちたハマグリ島の外周にある波打ち際。

その砂浜に黒い物体が小さな白い二本足で歩いていった。

顔は小さな白い目と四角い口は無表情に見える。

「キュ……」

それは砂浜に流れ着いた空き缶や流木を食べていた。

「モキュ、モキュ、モキュ……キュ？」

不意にその物体が無表情な顔を海の方へ向ける。

何かに感付いたそれは急いで砂中へと潜り込んでいった。

静かだった砂浜に長身の女性が現れる。

紫色のボディスーツを纏い、肩は露出していて、紫のアームカバーという色気のある  
服装。

そんな衣装を纏う戦艦「長門」がハマグリ島へ上陸したのだ。

「ふっふっふっふっ．．．ようやく辿り着いたぞ」

彼女はそう言つて島の内部へと侵入しようとする。

「むっ!?!」

そこで何かに感付いた長門が右側へ大きく跳躍した。

彼女が先程まで居た場所には、数本の黒い魚雷が突き刺さっている。

そして、ジャングルにある一本の木の上に黒い人影が出現した。

「あら。あらあら。やはり来たのね．．．姉さん」

「くっ．．．陸奥か!?!」

それはハマグリ鎮守府の長門型2番艦「陸奥」だった。

彼女も黒色のボディスーツを着用し、肩と太ももが露出して、黄色いスカートが左右

に付いている際どい服を纏っていた。

それを見た長門が赤面しながら妹へ指を差す。

「な、なんて破廉恥な服を着ているのだ!?!」

「姉さんもでしよう!?!」

陸奥が姉の発言に思わず怒鳴ってしまう。

咳き込む彼女は同じく指を差して、あることを指摘する。



「姉さんの目的……それは私の提督でしょう？」

「そうだ！」

「あつさり言うのね……まあ、いいわ。でもっ!!」

陸奥はそう言つて、両手に黒い魚雷を一本ずつ持つて構えた。

それを見た長門も何処からか同じ魚雷を右手で取り出す。

「姉さんにあの娘は譲れないの……私だつて……」

「ん？」

「私だつて！ 満足に触れないからっ!!」

「くっ！」

魚雷を逆手に持つ長門は飛び掛かる妹を待ち構えた。

陸奥は姉の手前に着地しようとするが、そこには予想外の黒い物体が浮き出ていた。

「えっ？」

「むっ？」

「キュ？」

先程危険を感じて砂中へ潜つたはずの黒い物体がそこに現れたのだ。

飛び降りてきた陸奥は避けることが出来ず、滑らかな表面のそれを踏ん付けてしま  
う。

彼女はそのまま滑るように体勢を崩し、顔から砂の地面に激突した。

「ぎゃふっ!!」

倒れた陸奥は痙攣しながらその場で気絶する。

「すまん、陸奥。だが、私自身もこれは譲れぬ!」

長門は動けなくなった妹を置き去りにして、忍び足で島の内部へ潜入し始める。

「しかし……陸奥もアレを買ってたのか」

謎の嵐が過ぎ去った後、黒い物体が砂中から顔を出し、周囲の安全を確認した。

「キユ?」

薄暗いハマグリ鎮守府内の通路。

難なく潜入した長門は音を立てずに進んでいく。

途中でピンクのネグリジエを着た不知火が気配に気付き、彼女の鋭い眼光で見つかりそうになった。

「あんな駆逐艦が居たのか……愛でれば齒応えのありそうな駆逐艦だな♪」

壁伝いに進む彼女の目にある部屋の看板が目に入る。

「むっ……あ、あれは?」

それには『ホッポの自室』と書かれていて、その看板を見た長門の表情が歓喜で満ち溢れた。

「やった。やったぞ！ ホッポちゃんの自室！ いや！ この長門とホッポの愛の部屋！！」

音を立てないよう注意を払う長門がそのドアノブに手を掛ける。

開けたドアの先は真つ暗であったが、奥にある畳の真ん中に白い布団が見えていた。

（あの膨らみ具合・・・間違いない！ あの白く愛しいアレが居る！）

「エへへへ♪」

不気味な笑い声を漏らす長門は一步ずつ布団の方へ忍び寄る。

手の届く範囲まで近寄った彼女が掛布団に手を掛けた。

「すうくはあく・・・ふんっ！」

息を整える長門が素早く布団を捲り、寝ているそれを両手で抱き寄せる。

「ホッポちゃ・・・むっ？」

しかし、彼女は抱き締めた際の感触に違和感を覚え、すぐに両手で持つそれを確認した。

「（、、）これは？！」

長門が持つそれは愛しい白き少女ではなく、少女の服を着せたシーツの塊だった。

顔の部分は白い袋で「へのへのもへじ」が書かれている。

「変わり身の術だ?!?・・・はっ!」

驚く彼女は部屋の出入り口に人の気配を感じ取った。

ぎこちない動きで振り向くと、そこには見覚えのある戦艦の艦娘が立っている。

「お久しぶりです。長門さん」

「あっ・・・ああ・・・」

白き少女の秘書艦であり、彼女との絆が深い戦艦「大和」

彼女の周りは赤いオーラが帯び、その威圧感は離れている長門でも感じ取れた。

「山岸提督から不穏な動きがあると忠告されました」

「なっ!?!」

「あなたがこんな凶行に走るとは、思いもしませんでしたけど・・・」

「読まれていた・・・だと?」

ゆつたりと歩き寄る大和に、冷や汗を流す長門は動けなかった。

至近距離までやって来た彼女は不屈き者の艦娘を睨み付ける。

「推して参ります・・・覚悟はいいですね?」

「ひっ・・・」

一方その頃、隣の大和の部屋では……。

白き少女が畳の布団で眠っていた。

「ヤマト……ヤワラカイ……」

心地良い夢を見ているらしく、気持ち良さそうな寝言を呟く。

「ぎゃあああああああああああああああああつ!!!」

彼女の寝る部屋の隣から断末魔のような絶叫が響いた。

それでも何事も無かったかのように、白き少女はすやすやと寝続ける。

## No. 21 カエシテツ！

間もなく夜が明けて、太陽が顔を出す直前の時刻。

ハマグリ島の穏やかな浜辺に、小柄な人影が現れる。

それはゆつくりと砂浜を歩き、島内部の地下基地へと侵入した。

薄暗い通路にヒールのような足音が響く。

オレンジライトによる光がウサギのような頭部の影を通路の壁へ映し出した。歩き続けたその影があるドアの前に辿り着く。

## 『ホッポの自室』

その看板を掛けられたドアが開かれて、部屋の中に何者かが入っていく。

畳の上に敷かれた布団の中に、ぐっすりと眠る白き少女の姿があった。

彼女の頭のある方には、何時も着ている白い服と手袋が畳み置かれている。

「にひひい♪」

侵入者が少女のような笑い声を漏らし、白手袋の右手で置かれていた「何か」を掴み取った。

「スウウウ・・・スウウウ・・・」

間近で動くその存在に気付かず、白き少女は寢息を立てながら眠り続ける。

その彼女の枕元に折り畳まれた一枚の紙が置かれた。

「スウウウ・・・フワアアア・・・ンンッ！」

数分後、深い眠りについていた白き少女が両手を伸ばすように上げた。

ゆっくりと上半身を起こした彼女は、寝間着を着ずに素っ裸の状態だった。

何故、彼女が寝間着を着なかったのか。

その理由は、ある駆逐艦の差し出した品物が原因だった。

「ホッポさま。これは不知火が仕入れた寝間着です」

「し、不知火さん・・・それは・・・」

「スケスケ・・・」

真顔の不知火が見せ付けるように両手で持つ衣服。

それは全体的に黒色で、肌が容易に見える透けたネグリジエである。

子どもサイズでありながら、まるで大人のような雰囲気を漂わせる寝間着だった。

無論、白き少女にそんな色気のある衣服を着る勇氣はなかった。

「コ、コレ・・・」

「不知火のご用意した服を着れないとでも!？」

「だからって、そんな怖い目で司令官を睨んだら駄目でしょう!？」

「あらあら。我が儘ねえ・・・じゃあ、私が着せて、ア・ゲ・ル♪」

「荒潮さん!? 駄目です! それ着せちゃ駄目ですから!」

無理やり着せようとした不知火は朝潮に止められ、手伝おうとした荒潮は慌てる五月雨に止められる。

結局、強引に手渡された黒ネグリジエしか寝間着はなく、白き少女はそれを着ずに黒パンツのみで就寝した。

「ンミュ〜フク〜」

若干寝惚けた状態の彼女が手探りで、枕元の普段着を掴もうとする。

彼女はいつも通りにワンピースと手袋を身に纏い、垂れ下がった照明器具の紐を引つ張った。



「ムッ……マブシイ……」

瞬きする少女は、正面の壁に掛けられた『!対絶!メダ!い食駄無』と横に書かれた掛け軸を目にする。

山岸提督が書いたもので、隙があれば資材や食材を食べてしまう白き少女へ贈った言葉だった。

彼女自身もその食欲を抑えようと努力するが、気を抜くと身体が勝手に動くことがあるらしい。

「キョウモ、ガンバロウ!」

白き少女が意気込みながら立ち上がり、自室の外へ出ようとする。

その時、彼女はある違和感に疑問の声を漏らした。

「ン?……ンウ……アッ!?」

そこできょうやくあることに気付き、自身の首回りを両手で撫で回す。

“首輪”が無いのだ。

大好きな大和とお揃いの桜花紋章が付いた黒い首輪。

それが白き少女の首に巻かれていなかった。

「ドコツ!? ドコニイッタ!」

彼女は必死で部屋中を探し回る。

そうしている内に部屋のドアが開いて、秘書艦の大和と不知火が入って来た。

「ホツポちゃん、おはようございます．．．あらう?」

「失礼します。ホツポさま?」

彼女らが白き少女の狼狽えた姿を見て、慌てて彼女の元へ駆け寄る。

「どうしました?」

「し、不知火に何か落ち度でもありませんでしたか!」

「．．．ナイノ」

「ない?」

「クビワ、ホツポノ．．．ナクナツタ．．．」

2人は涙目になる白き少女を宥めようとした。

辺りを見回す不知火があるものを発見する。

「これは?」

彼女が見つけた物は文字が書かれた白い紙だった。

それを拾い上げた不知火がホツポと大和に内容を見せる。

「これは．．．果たし状?」

「恐らく、ホツポさま宛ての手紙かと・・・」

「ナニナニ・・・」

白き少女がその手紙に書かれた内容を読んでいく。

『白いちびっこ。あんたの大事なものを返して欲しかったら、すぐに島の外に居るこの島風と駆けっこしなさい!』

内容を見た3人が手紙を書いた存在に目を丸くした。

「島風さん?」

「ぜかまし?」

「シマカゼ?」

「あーはっはっはっはっ!!」

ハマグリ島の少し離れた海上で、高らかに笑う最速駆逐艦の姿があった。

島風は白き少女のことが気に入らなかつた。

出会つた当初は、もう少しで追い付けるはずが海中へと逃げられ、勝負を有耶無耶にされたと勘違いする。

その後、命令無視の罰で営倉入りになつたこと。

その脱走時に長門に愛の抱擁をされたこと。

見覚えのない謎の救出作戦に参加したこと。

廊下でパンツを引つ張られたこと。

早食い勝負を拒まれたこと。

長門によつて強引に可愛がられたこと。

島風は、それら全てを白き少女の仕業だと決め付けてしまふ。

不満を募らせる彼女は思い切つて、独断である作戦を実行した。

「あの大和型とお揃いねえ．．．ふくん」

島風は右手で持つ紋章が付いた黒い首輪を見つめる。

白き少女が山岸提督から貰つた大事なものである。

彼女はそれをエサにして、因縁である白き少女と勝負しようとする。

「今度こそ島風の速さを思い知らせてやる!・・・おうっ?」

島風がそう呟いていると、朝日で照らされる島の方から白い影が見えてくる。

彼女が待ち望んだ相手が遂に姿を現した。

軍帽を被り、白い靴を履いた足で滑るように高速で移動する白き少女。

ハマグリ島の提督となつた少女が頬を膨らませて、最速の駆逐艦の方へと水飛沫を上げて突き進む。

「さあ、駆けつこの始まり! 負けませんよ!」

「カエセーツ!!!」

幼き提督の姫 と つむじ風の駆逐艦。

妙な因縁の追い掛けつこが始まった。

「速きこと、島風の如し! 誰も私に追いつけないよお〜!」

「「キュウウウツ」」

奪つた首輪を自らの首に付け、万全な状態で海上を走る。

背中の魚雷発射管には、3体の連装砲ちゃんが振り落とされないよう器用に掴まっていた。

「カ〜エ〜セ〜!!」

少し半泣きの表情で追い掛ける白き少女。

彼女は、なんとか島風に追い付こうと必死で航行し続ける。

「だから——！ 島風には追いつけないって——」

更に加速した島風が白き少女との距離を伸ばし始めた。

それを見た白き少女は、左ポケットから取り出した空のドラム缶を投げ飛ばす。

「おっと!? おっそ——い——!」

「ムウ〜ッ!」

島風は投げ付けられたドラム缶を余裕で回避した。

命中しなかった苛立ちが白き少女の怒りを上昇させ、遂に自身の艦装を出現させる。

「ティツ!!」

「ちよ、ちよつと!? おうつ!?」

白き少女の右手に持つ二連装砲が轟音を鳴らし、逃げる島風の方へ砲弾を飛ばした。

撃たれた彼女はすぐに回避行動と取り、飛んできた砲弾の直撃から免れる。

白き少女の砲撃は明石の調整によって、驚異的な威力は抑えられているが、並の戦艦

でも大破しかねない危険性を持っていた。

「コノツ！ エエイツ!!」

「ひやつ!? フック!?」

続けて島風に向かっていったのは、白き少女の左側にある艀装の口から出たクレーンだった。

先端のフックが逃げる少女の身体を引っ掛けようと、長いワイヤーを伸ばし飛ばす。

「そつちがそう来るなら・・・連装砲ちゃん!」

「キュ!」

島風に付き添う連装砲ちゃんの中で、一番小さい個体が返事をした。

その子は再び飛んできたクレーンのフックに、自身の小さな手で掴まりに行く。

巻き戻されたフックとともに、小さな連装砲ちゃんが白き少女の頭へと飛び付いてきた。

「キュ〜!」

「エ、ツ!? ウブツ!?」

白き少女の顔に張り付いた連装砲ちゃんが小さい両手で、彼女の白い顔を連続で叩く。

「キュ! キュ! キュ!」

「イタイイタイ！ イタイツ！」

小さな妨害に遭う白き少女の速度が落ち、その隙にニヤけた島風が逃げ去ろうとした。

「にひひっ♪ やっぱりこの島風がいちば・・・えっ？」

彼女がそう宣言しようとした瞬間、遙か上空から先端だけ赤い砲弾が6発も降ってくる。

即座に動き回ってその砲撃を回避した後、海上に着弾した水柱で身体全体がずぶ濡れになった。

「わぶぶっ！ 今のって・・・まさか・・・」

『島風さん・・・』

「ひっ!？」

島風の通信機から聞こえた彼女の名を呼ぶ戦艦“大和”の声。

普段の優しい雰囲気とは違い、身体全体が凍り付くような呼び声だった。

追い掛けっこする彼女らの後方から、煙を立たせる三連装砲の艦装を展開した大和と、護衛である3人の駆逐艦たちがやって来た。

「速いだけの駆逐が・・・徹底的に追い詰めてやるわ」



「よくも司令官を泣かせてくれましたね！」

「うふふふ♪ 悪い子はどんどんお仕置きしちゃおうね♪」

鋭い眼光をした不知火を先頭に、怒った顔で艦装を構える朝潮と、不気味な笑みを浮かべる荒潮が追従する。

「嘘でしょ!?! おうっ!?!」

「シマカゼ〜!!」

張り付いていた連装砲ちゃんを艦載機のクロに啞えさせ、その妨害から抜け出した白き少女も砲撃とクレーン捕縛を再開した。

「あ、当たらなければどうということとは・・・」

「ソコツ!!」

「お、っ!?!」

白き少女が放ったクレーンのフックが、焦る島風のはみ出た黒パンツに引っ掛かった。

またしても黒パンツが伸ばされていき、異常な力で引っ張られたことで左側がプツリと切れてしまう。

「ああ、っ!?! パンツ切れたああああ!!」

予想外の増援に気を取られ過ぎて、下着を破かれた島風が叫んだ。

彼女は左手で切れた。パンツを抑えながら逃げ惑う。

「おいたが過ぎますよ、島風さん。次は直撃させます！」

「フフ・・・司令に手を出した己の不幸を呪うがいい！」

「早く司令官の首輪を返しなさい！」

「あらあら。可愛いお尻ね。弄り甲斐があるわあ〜♪」

冷ややかに通信でそう告げる大和は次段装填を行い、不知火・朝潮・荒潮の3人も砲雷撃を開始した。

「こ、こんなはずじゃなかったのに・・・ひっ!? やーめーてーよー!!」

泣き叫ぶ島風は『触れてはいけないもの』に触れてしまった。

泣かせてしまった白き少女を守護する艦娘たちの猛攻。

今度は自身が泣かされる立場となる。

彼女は後方を確認しながら放たれる攻撃を死に物狂いで回避し続けた。

「このまま鎮守府に・・・おぶっ!？」

突如、前を見ていなかったせいで、得体の知れない何かと衝突した。

確かめようとした島風の身体がその何かに素早く拘束される。

「ひぐっ!?!・・・ひいいいっ!!」

「いつも通りですね・・・ですが、今回は特に、頭にきました」

島風が衝突したものは、青筋を立てた正規空母の加賀だった。

彼女は山岸提督から島風の不審な行動を事前に聞かされる。

それから偵察機「彩雲」によって、島風の行動は全て加賀に監視されていた。

両手で島風を羽交い絞めにする彼女が鋭い目で睨む。

「無断外出。窃盗行為。最早、言い逃れはできません」

「おっ、おっ……」

冷や汗を掻きながら震える島風。

その背中に張り付いていた2体の連装砲ちゃんも怯えて海面に落ちてしまう。

「鎧袖一触。心配いらないわ」

「ぐっ!? お、お、お、お、う、っ!!」

島風の腰を拘束する加賀の両腕に力が入り、悲痛な叫び声が辺り一帯に響いた。

耐え切れない激痛によって、最速の駆逐艦は白目で意識を失う。

不屈き者を抱える加賀の元に、白き少女たちが集まって来た。

「カガ!」

「加賀さん、助かりました」

「ちつ、つまらな……いえ、何でもありません」

「加賀さんが何故……でも、助かりました！」

「折角、こつちで弄ろうとしたのに……仕方ないわね」

加賀は右手で島風が奪った首輪を取り上げて、それを持ち主である白き少女に返還した。

「アリガトウ」

「こちらの問題児がご迷惑おかけしました。正式な謝罪をしに、後日改めてお伺いします」

左腕で島風を抱える加賀が深くお辞儀をし、その場から静かに立ち去っていく。

白き少女は取り返して貰った首輪を付けて、安堵した表情を浮かべた。

「フウウウ……オチツク……」

翌日、ハマグリ鎮守府に多数の甘味が届けられ、白き少女と艦娘たちはそれを美味し

く頂いた。

そして、同じ頃……。

トラツク鎮守府の営倉では、一人の艦娘が腕や足をベルトで固定された白い拘束衣を身に纏っていた。

「どうして島風はこんな目に遭うのよ……」

「小娘だからよ」

「ひっ!」

急に開いた扉から加賀が入室し、彼女の声を聞いた島風が小さな悲鳴を漏らす。

「食事の時間です」

「い、嫌よ! またあんな焦げ臭いの食べたくないっ!!」

加賀が告げた食事を島風は極度に嫌がった。

先日、彼女は罰で営倉入りしただけでなく、ある特殊な“モノ”を無理やり食べさせられたのだ。

それは明石の裏カタログでも販売されている品物で、“磯の素の秋刀魚缶詰”であ

る。

中身は真つ黒な秋刀魚の蒲焼が入っているが、ちゃんと食べられるよう加工されていた。

尚、その味についての詳細が一切書かれていない。

「本日の品は、それではありません」

「えっ?・・・って、何よそれええ!?!」

加賀は隠していた左手のモノを見せ付けた。

それはお皿に盛られたご飯の上に乗るカレーのようなもの。

しかし、一般のカレーのような「茶色」ではなく、毒々しい「紫色」となっていた。

「今回は、ひえ印のレトルトカレー。赤城さん曰く、味以外はまともだそうです」

「味以外にも見た目がおかしいよ!?!」

そんな疑問の言葉を気にせず、加賀は拘束衣で動けない島風の傍へ近寄る。

彼女は右手に持つ銀色のスプーンを光らせて、一口分の紫カレーを掬い上げた。

「た、食べる・・・」

「食べなければ営倉入り1週間に、3日追加しますよ?」

異論を認めさせない加賀の言葉に、島風は泣きそうな表情で唇を噛み締める。

意を決した彼女はゆっくりと口を開けて、見るも恐ろしいその紫カレーを食べさせられた。

「んぐっ……もぐ、もぐ……うぷっ!?!……」

一瞬だけ吐きそうになったが、目を瞑ったまま堪える。

「お味は?」

「……い、いぞぐざぐで……にがいいいい……」

無表情の加賀は味の感想を聞いた後、続けて二口目の紫カレーを掬い上げる。

「ちなみにですが、明日は長門さんがキスをしにやってきました」

「なんで長門が来るのよ!? キスって何よ!?!」

「揚げにんにくをたっぷり食べてくるそうです」

「いやあああああつ!! 意味が分からない!! ふざけるなああああああつ!!!」

自身の仕出かしたことを棚に上げて、最速の駆逐艦は悲痛の叫び声を轟かせた。

## No. 22 センスイカン ハツケン!

ある晴れた日のハマグリ島。

麦わら帽子を被る白き少女が、島の外周にある砂浜を歩いていた。

彼女は右手に持つ釣竿を肩に掛けて、残る左手で大きなクーラーボックスを持ち運ぶ。

「ココニ、シヨウ!」

白き少女がある砂場にクーラーボックスを置き、その中から取り出したゴカイを釣り針に付ける。

彼女は餌の準備を整えた後、後ろへ引き倒した釣竿を勢いよく前方へ振り下ろした。

「エエエエイツ!!」

飛ばされた餌付きの釣り針が遠くの海面に沈み落ちる。

しばらく佇む白き少女がまだ見ぬ獲物を思い浮かべた。

「サンマ〜♪ マグロ〜♪ トビウオサ〜ント♪」

ご機嫌に歌う彼女の釣竿に、早速当たりらしき引きが入る。



意外に早い食い付きに喜ぶ白き少女が、すぐにリールを回しながら踏ん張った。

「オツ、オオツ!? トテモ、オツキイノ!」

彼女は高速でリールを回し続けて、食い付いた獲物を逃さないようにする。

「オオツ!? ヤツパリ、オツキイ! デカイ!」

釣り糸の先端が沈む海面に、大きな魚影らしき黒い影が見えてきた。

白き少女は最後の踏ん張りで、釣り上げようと竿を持ち上げる。

「ウ〜ン!.....ンツ?」

釣り糸を引つ張り続ける彼女があることに気付いた。

今まで釣り糸を強く引つ張っていた力がいきなり止まったのだ。

しかもその力はまだ維持したままで、釣竿もしなつた状態で動いていない。

気になった白き少女が釣り糸の先を見つめた。

「.....エツ?」

「.....」

そこには、白金色の長髪に綺麗な白肌を持つ少女が水面から顔を出していた。

彼女は白文字で「511」と書かれた水兵帽を被り、首の左側にアンテナが突き出

ている。

そのアンテナには、白き少女が投げ入れた釣り針が餌を失くした状態で引つ掛かつて

いた。

「エエ、エ、ツ!?」

「?」

同時刻、基地の入口付近では、赤い和傘を持った大和が辺りを見回していた。

「全く……こんな朝早くに何処へ行かれたのですか……」

困った顔でため息を吐く彼女の前方から、慌てて走ってくる五月雨が現れる。

「あつ、大和さん! ちようどよかった!」

彼女は息を荒げながら大和の手前で立ち止まった。

「五月雨さん、どうしたのですか?」

「じ、実は……先程、舞鶴の艦娘がおこしになりました!」

「えっ? 舞鶴の!?!」

予想外の来客に大和が驚きの声を上げる。

大本営から事前連絡も無しに艦娘が派遣されたことで、彼女は何者かの諜報が来たことと警戒していた。

少し困惑気味な大和が五月雨に尋ねる。

「その艦娘は、どちらに？　そ、それと・・・艦種は？」

「えつと・・・駆逐艦が2隻で・・・入り江の方で待っています！」

ハマグリ島の入り江にある砂浜。

大和と五月雨は、舞鶴からやって来た2人の艦娘と対面していた。

2人とも外国の水兵のような紺色の水兵帽と制服を着ている。

ワンピースのような制服で股下が見えそうなくらいスカートが短い。

艦装は腰回りに装着されていて、左右に魚雷発射管とその上部に単装砲が付いていた。

また手持ちで小銃型の単装砲を右手に持っている。

「Guten Morgen. (おはようございます) 僕の名前はレーベレヒト・マース。レーベと呼んでください」

「Guten Tag. (こんにちは) 私はマックス・シュルツよ。マックスでもいい」

レーベと名乗る灰色ショートカットの少女が、手持ちの単装砲を肩に掛けて、海軍式の敬礼をした。

マックスと名乗る赤毛ショートボブの少女も同じように敬礼する。

真面目な表情の大和と五月雨が彼女達へ敬礼し返した。

「貴方たちが・・・舞鶴の？」

「J a. (はい) 僕たちはドイツ出身の艦娘です。今は舞鶴で他の駆逐艦と一緒に訓練をしています」

「大本営のある人から、ハマグリ島へ向かうよう指示された。それと、この手紙も届けるようにと・・・」

大和はマックスが取り出した手紙を受け取り、封を開けてから中身を確認した。

そこには確かに、舞鶴所屬である艦娘たちをハマグリ島へ派遣すると書かれている。

また、許可を出した「米満 正人」の直筆である名前も記入されていた。

「米満大将・・・里子提督に知られたらどうな・・・」

彼女がそう言いかけた時に、下の欄に書かれた山岸提督の名前も発見する。

どうやら2人の提案によって、この駆逐艦たちの派遣が決まったらしい。

まるで疲れたようにため息を吐く大和が落ち着きを取り戻す。

「それでは、早速基地内を案内しますが・・・」

「あの・・・その前に・・・」

「はい？」

レーベが恐る恐る手を挙げて、隣に居たマックスがあることを話し始める。

「実はもう一人連れて来たんだけど・・・到着したら何処かに行った」

「それって、逸れたんじや・・・急いで探さないと!」

「落ち着いて、五月雨さん。此処は日向さんに・・・」

「オ〜イ! ヤマト〜!」

通信機で呼び出そうとした大和の耳に、聞き慣れた白き少女の声が入って来た。

彼女らが声のした方向へ顔を向けると、奇妙な光景がその目に映った。

「・・・」

「カムムス・・・ツレチャッタ・・・」

白き少女が持つ釣り竿から垂れている釣り糸。

その先端にある釣り針が、彼女の隣に居るスカート付きウェットスーツを纏う少女のアンテナに引つ掛けたままだった。

「Guten Tag. (こんにちは) ドイツ海軍のUボート、潜水艦U-511です。ユーとお呼びください」

執務室では、潜水艦の少女が軍帽を被る白き少女に自己紹介をした。

提督である少女がドイツの艦娘たちを興味津々に見つめていき、その左隣に居る大和

に話し掛ける。

「ヤマト、カイガイニモ、カンムス、イルノ？」

「ええ。現在、確認されているのはドイツ・イタリアの2つです。演習目的でこちらに派遣されることもあるそうですよ」

「『ドイツ』ト『イタリア』・・・」

実は白き少女は内心凄く驚いていた。

元の身体だったときに、取り入れた知識の中で海外艦の情報は一切無かった。

初めて見る外国の艦娘に驚きながら、その存在を頭の中で認識する。

秘書艦の大和は手に持った書類を見た後に、ドイツの艦娘たちと話し始めた。

「滞在期間は、1週間でしたね？」

「Ja. (はい) その期間中に僕たちと、そちらの艦隊で演習せよと・・・」

「好きに過ごしてくれと、米満大将から言われなかった？」

「・・・」

「そうですね・・・不知火さん達と、駆逐艦同士で演習をしましょう」

「駆逐艦同士での演習・・・得意じゃないけど、頑張るよ！」

「確か横須賀の『セイエイ』と言われる駆逐艦が此処に・・・やります！」

「・・・」

大和が駆逐艦の2人と会話している間に、何も言わないユーは白き少女をまじまじと見つめていた。

「えつと・・・ユーさん？」

「そういえば、僕も初めて見るのだけど・・・こここの提督って、深海棲艦、ですよね？」

「米満大將が言っていたことは本当だった・・・」

レーベとマックスも物珍しそうに白き少女の姿を見ていく。

「見たことない艦・・・」

「カ、カン？」

「ムニユ〜」

「思ったより柔らかい・・・変わってるね」

その様子を見守る3人の内、マックスもユーの左側へと近付いていく。

「ふーん・・・」

「ン？」

彼女も真顔で屈み込み、いきなり右手で白き少女のスカートを捲り上げた。

「ヒャアアアッ!?!」

「ちよつとおおおっ!?!」

「・・・?」

「黒色か・・・」

「何してるんだよ!?!」

マックスの取った行動に、白き少女と大和が大声で叫んでしまう。

レーベは自身の帽子で不埒なことをした妹の頭を叩き付ける。

すぐ傍でそれを見ていたユーは何も言わずに佇んでいた。

翌日、ハマグリ島近海で駆逐艦たちによる演習が行われる。

旗艦の不知火に護衛の朝潮と荒潮という元横須賀出身の精鋭艦隊。

「見せて貰いましょう。ドイツの艦娘の性能とやらを・・・」

「し、不知火さん?」

「私もあの娘たちのお尻が気になるわ♪」

彼女らの相手は、舞鶴から来たレーベとマックスに、潜水艦であるU-511が加わった艦隊である。

「だ、大丈夫だよ・・・ね?」



「陽炎型、朝潮型……ふーん……」

「……」

全員が自身の装備を確認した後に戦闘態勢を整えた。

「エンシユウ、カイシ!!」

彼女達から少し離れた海上で、白き少女が拡声器による合図の声を出した。

海面に立つ彼女の後方には、飛行甲板に乗せた瑞雲を弄る日向と、彼女に曳航された小型ボートに乗る大和の姿があつた。

「周囲の警戒はお願いしますね」

「任せろ。今日も瑞雲日和だ」

彼女らも駆逐艦たちの演習を遠目から眺めている。

白き少女は拡声器を下ろして、砲雷撃を始めた艦娘たちの戦いを観戦した。

「オオー……」

過去に大和や不知火たちが行った戦闘と違い、砲弾と魚雷の撃ち合いだけの控えめな戦いだった。

それでも高練度の不知火たちの攻撃は的確で、ドイツの駆逐艦たちが次々と被弾していく。

レーベとマックスはすぐに反撃するが、それらは全て華麗に回避されてしまう。「ヨウシヤナイ……ン？」

観戦していた白き少女があることに気付く。

ドイツ側の艦娘で3人の内、駆逐でない潜水艦の娘が見当たらなかったのだ。

深く潜って隠れていると思われたが、彼女からの魚雷が発射されていなかった。

「ユー、ドコイツタ？」

「ん？ あの潜水艦が見当たらないな……」

「えっ、ユーさんが？ 何処に……」

日向と大和も潜水艦が居ないことに気付き、周囲を見渡しながら探し始める。

もうすぐで演習が終わる予定時刻なのに、何もしないU-511は行方知らずであった。

「ドコイツタンダロウ……ン？」

白き少女が異様な気配を感じ取り、自身の足元である海面へ視線を飛ばす。

そこには白い肌の顔を向けたユーの姿があつた。

「マックスの言う通り……黒……」

特に何もしない彼女は真上に居る少女を眺め続ける。

「ナ、ナニシテルノ!？」

白き少女が慌てて股下を左手で押さえて、その場から1歩下がった。

その数秒後に、浮上したユーが腰の部分まで海面から姿を現す。

「そこに居たのか・・・」

「ユーさん!? まさかずっとそこに!?」

日向と大和も顔を出した潜水艦の姿に驚きの声を出した。

そんな2人に気にせず、ユーが白き少女に向かって手招きする。

「?」

呼ばれた少女はユーの手前で対面するようしやがみ込んだ。

「ナニ?」

「・・・ん」

「エツ?」

突如、ユーがしやがみ込む白き少女の顔を両手で掴み、その柔らかい唇をいとも簡単に奪ってしまう。

「・・・んちゅ」

「ンンツ!?!」

「!?!」

その行為を目撃した戦艦たちが言葉を失った。

数秒続いた「ソレ」はすぐに正気を取り戻した白き少女によって引き離された。顔を赤くした白き少女が困惑気味でユーに問い質す。

「ナツ！ ナナナナ、ナニスルノ!?!」

「キスすると練度が上がると・・・」

「チ、チガウ！ チガウ！」

「違う?・・・舌も入れなきや駄目?」

「マツテ〜! ヤメテ〜!」

尚も続けようとするユーの大胆な行動に、赤面する大和が戸惑ってしまう。

「駄目です! 日向さん! ユーさんを止めて・・・って、何してるんですか!?!」

指示を出そうとした大和が、『Handycam』のロゴが入った8ミリビデオカメラで撮影をする日向に突っ込んだ。

「何処からそんなものを・・・」

「瑞雲の格納庫から取り出した。記録を撮ってくれと頼まれてね」

「誰にですか!?! それよりもユーさんを止めて下さい!!」

一方、演習を終えた海上では・・・。

「見かけ倒しかと思ったら・・・やりますね」

演習を終えた不知火が白き少女に組み付くユ一の姿を眺めていた。

「不知火さん！ そんなことより、この人を何とかしてくださーい！」

「これが朝潮型・・・いい装備ね」

中破でパンツが丸見え状態のマックスが、抵抗する朝潮のスカートを捲ろうとする。

「ひいひいっ！ そんなに触らないで！」

「あらあら、酷いじゃない。本当に女の子か確かめているだけだよ。」

「僕は真正正銘『女の子』ですっ!!!」

怪しい笑顔の荒潮は、中破状態のレーベの身体を弄るように触っていた。

### 三日目の朝。

ハマグリ島で唯一の自家栽培している畑で、白き少女を含めた艦娘たちが作業を行  
う。

主に不知火・朝潮・荒潮・五月雨といった駆逐艦たちが水やりと収穫をしていた。

日向と陸奥も収穫された野菜を籠に入れて、基地内の方へと運んでいく。

「オオー」

「いい感じのプチトマトですね。食べてみます?」

「ハムツ・・・ンツ! オイシイ♪」

白き少女と秘書艦の大和も収穫作業を手伝っていた。

その近くではドイツの艦娘たちも同じように野菜を収穫している。

「レーベ。このGurke(きゅうり)・・・」

「凄く大きいね・・・」

「私のだと大き過ぎて入らないね。レーベは?」

「使わないよ! 食べ物で遊ぶ気!」

収穫作業するレーベが30cm近くあるきゅうりを持つマックスに怒鳴った。

「?」

白き少女と一緒にプチトマトを取っていくユーが、青いプチトマトを2つ手に取った。

彼女は特に気にもせずとその内の1つを口に入れる。

「はむっ・・・んむっ!? ペっ! ペっ!」

「ダ、ダイジョウブ?」

「ユーさん、それ熟してないから食べられないですよ……」

白き少女と大和が必死で食べた物を吐き出すユーを心配した。

「む〜!」

苦い思いをしたユーがもう1つの熟してないプチトマトを茂みの方へ投げ捨てた。

その後、彼女は白き少女の元へ行き、またもキスしようと迫っていく。

「ナンデ〜!?!」

「ちよつと、ユーさん!?!」

「口直し〜」

「キユ?!」

茂みの方で散歩していた黒い物体の頭に、ユーの投げた青いプチトマトが当たった。

それは転げ落ちた青いプチトマトを凝視し、躊躇なく丸呑みにしてしまう。

「モキユ……プキユツ!!」

しかし、食べた物が口に合わなかったらしく、口から砲弾のように弾き飛ばした。

四日目の夜。

地下基地内にある風呂部屋では、身体にタオルを巻いた白き少女が頭を洗っていた。  
「ツカレタ……」

彼女は提督としての仕事だけでなく、ドイツの艦娘との交流に忙しい日々を送っていた。

特に潜水艦のユーは、妙なアプローチで彼女の純粋な心を乱すことが多かった。

(長門より、厄介かも……)

シャワーで髪を洗い流した後、部屋の奥にある四角い浴槽へ歩き向かう。  
浴槽内には少し白く濁った湯が入っていた。

「フウウウ……ン？」

白き少女がしばらく湯に浸かっていると、右隣の異様な気配に気付いた。

そして、謎の気配があつた湯の中から気泡とともに、白金色の長髪を持つ頭部が浮かび上がる。

「フワアアアアアッ!」

そこに現れたのは、何故かスクール水着を纏ったユーの姿があつた。

「ナンデイルノ!? ソレニ、ソノミズギ、ナニ!」

「これ? これ『でっち』がくれたもの……」



「『デツチ』ツテ、ダレ〜!?」

「それよりもキスを・・・」

「イヤアアアアツ!! ヤマトツ! ヤマト、タスケテエエエエツ!!」

七日目の夜。

本日がドイツ艦たちの滞在する最終日であり、そのお別れ会を基地内の食堂で行うこととなった。

「カンパ〜イ!」

「『『かんぱ〜い!』』』」

白き少女と、大和や不知火たち、ドイツの艦娘らが唱和して、それぞれが持つジョッキを掲げた。

大きな丸テーブルには、収穫した野菜と近場で捕った魚やエビなどの天ぷら料理がず

らりと並んでいた。

飲み物は、イチゴ味やメロン味の燃料、大和のラムネを含めたジュース類以外にも、レーベたちが持参したドイツのビールも用意された。

「どれ・・・私と陸奥で味見してみるか」

「んゝ♪ 美味しそうなビールね♪」

「ワタシハ？」

「駄目です」

白き少女が試しに飲もうとして、それを真顔の大和に止められてしまう。

しょんぼりする少女を余所に、少し笑う日向と陸奥が黄金色のビールを一口だけ味わう。

「ほう・・・これは・・・切れのある喉越しだな」

「軽快な感じで辛口ね・・・美味しいわ」

「僕たちも普段飲んでるビールです♪」

「Pilsner（ピルスナー）ドイツ北部で好まれているものよ」

2人の感想を聞いたレーベとマックスがそのビールの詳細を述べた。

「むゝゝばくばく・・・」

少しふくれっ面なユーは、不恰好な握り箸でエビなどの天ぷらを食べ続けていた。

機嫌の悪そうな彼女の様子に、心配した荒潮が話し掛ける。

「あらあら。ユーちゃん、どうしたの?」

「ん? アマシオ・・・」

「荒潮よ。決して甘くないわ」

落ち着いた雰囲気です話す荒潮を見て、食事を止めたユーが話し出す。

「演習勝てない。練度も上がらない」

「私たちベテランだし・・・そんな早くは上がらないわよ?」

「此処のアドミラル、全然キスさせてくれない」

「どうしてそこまでキスに拘るのかしら?」

不思議に思った荒潮がそのことを尋ねると、ユーがある一枚の書類を取り出した。

それは日本語とドイツ語で書かれた書類であった。

「米満大將に、もっと早く練度を上げたいって言ったら・・・あの娘とキスしてみたらつて・・・」

「あの叔父さんは重要な機密を・・・もう少しお仕置きされるべきね」

「お仕置き?」

「何でもないわ♪」

そんな彼女らが話している最中に、後方から騒がしい声が聞こえ始める。

2人はお酒を飲んだ戦艦辺りが騒いでいると思い、その方向へ視線を飛ばした。  
「!?」

「チュウウウウウウウウ・・・」

「んむうううううつ!!」

そこでは、レーベに覆い被さる白き少女が彼女にキスしていた。

強烈な吸引で小柄なドイツの艦娘が痙攣し始める。

「なっ!! 日向さん! 陸奥さん! 飲ませたのですか!」

「あ、あら。あらあら?...何時の間に?」

「いや、飲まないようにビールは確保していたぞ・・・」

大和に聞かれた2人が否定し、全員がその原因の元を探し回った。

「うわああん! また私いいいっ!! むぐっ!!」

「チュウウウウウウ・・・」

「んむおおおおお!!」

五月雨が襲われている間に、その近く居た朝潮がある空のボトルを発見する。

「大和さん! これが原因だと思われます!」

「それは?」

「あつ、それ・・・私が持ってきた Schnaps (シュナップス)」

ビールを飲んでいたマックスがそのボトルの中身を説明し始めた。

「ジャガイモから作られた蒸留酒。度数は40度もある」

「何でそんなものを持ってきたのですか!？」

「食後に飲もうと思って・・・」

呑気な彼女が大和へそう答えていると、白き少女がボトルを持つ朝潮に飛び掛かった。

「司令官!?! やだつ、まつ・・・むつ!?!」

「チュウウウウウウ・・・」

「むんうううううう!?!」

涙目で目の焦点が合わない顔になる朝潮。

抵抗できずに沈黙する彼女を見て、大和が呆然としていた不知火へ指示を出す。

「不知火さん! 例の物を!! 早くっ!!」

「りよ、了解っ!!」

指示された少女が急いで食堂のドアから退室していった。

彼女を見送った大和は、次の指示を飛ばそうと考えて、戦艦の2人が居る方向へ目を向ける。

「日向さん、陸奥さん、あの娘が戻るまでにホップちゃんを・・・って、またですか!?!」

そこに居た日向がビデオカメラで、暴走する白き少女の姿を撮影していた。その左隣に居た陸奥も興味深そうに覗いている。

「お子様には見せられない記録になりそうだ・・・」

「そうね。それじゃあ、お姉さんも♪」

「陸奥が入ると『検閲』に引つ掛かるから駄目だ」

「どうしてよ!？」

日向は空いている左腕だけで陸奥の首輪を掴み捕らえ、ビデオカメラを持つ右腕の姿勢を維持した。

失神した朝潮から離れる白き少女が、次の獲物を探しに立ち上がる。

彼女の蕩けた赤い瞳が天ぷらを食べ続けるユ一の姿を捕らえた。

「ア~~~~♪」

「!」

白き少女は警戒もせず ゆっくりと歩き寄る。

対するユ一は持っていた箸を落とし、歩いて来る少女の雰囲気の後退りした。

しかし、落とした箸の一本を踏み付けて、その場で尻餅をついてしまう。

「あらあら。大丈夫?」

「いけない! ユ一さん、逃げてっ!!」

近くに居た荒潮は笑顔で尋ねながらその光景を見物している。

焦る大和が倒れた彼女へそこから逃げ出すよう呼び掛けた。

それでも座り倒れた潜水艦の娘は立ち上がることもせず、近付いてくる白き少女の姿に釘付けとなる。

「・・・んっ♪」

彼女は待ち望んだキスがされると期待し、両手を大きく広げて待ち構えた。

素早く覆い被さった白き少女がユ一の唇を奪う。

「ンチュ♪」

「んむっ」

「チュウウウウウウ・・・」

「んみゅううううっ!? んんっ!? んうううううっ!!」

その後、不知火が持つて来た麻酔薬によつて、酔つた白き少女の暴走は無事に止められた。

翌日、舞鶴へ帰還予定のレーベとユーが大破していたため、ドイツの艦娘たちの帰還が1日遅れることとなった。

帰還当日の島の入り江では、ハマグリ鎮守府の全員に見送られる3人のドイツ艦が出港しようとして砂浜に立っていた。

「此処に来てよかった。レーベの惚けた顔も撮れたし……」

「えっ？ マックス!? さっきなんて言ったの!？」

「キス……凄かった……」

「アウツ……」

ユーの発言で白き少女が赤くなった顔を両手で覆い隠す。

秘書艦の大和も頬を赤くし、右手を口に当てて咳き込んでしまう。

「Auf Wiedersehen (さようなら)」

「Tsch・ss (じゃあね)」



「・・・Bis bald (またね)」

「バイバイ!」

白き少女は出港する3人に右手を振り続けた。

(次に会う時は、日本のお淑やかな女性を学んできて欲しいなあ・・・)

そう願う少女だったが、この時の彼女はまだ知らなかった。

日本の潜水艦たちによって、"U-511"が信じ難い改装をされる運命を・・・。